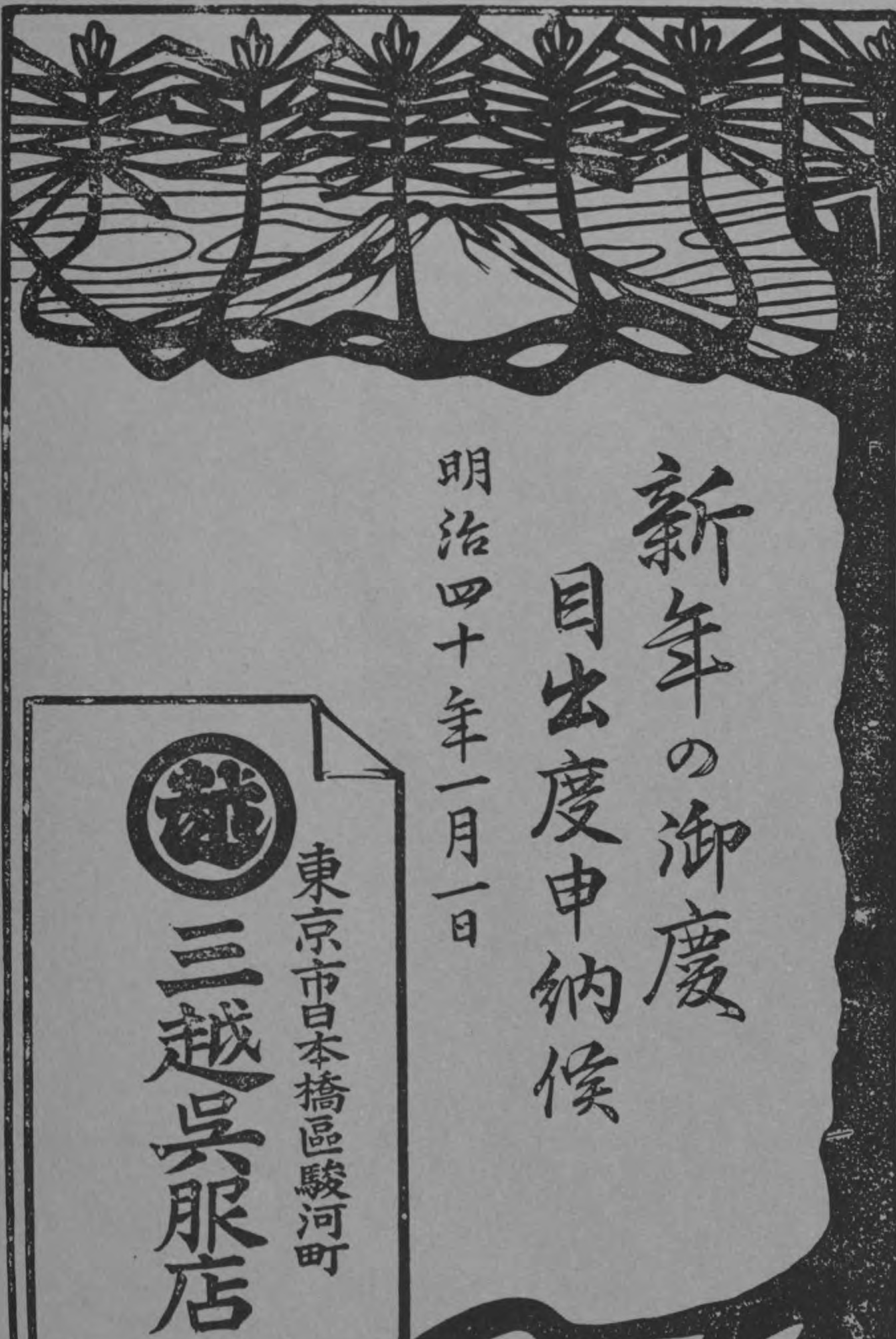
女鑑

第拾七年第壱號



治二十五年三月十二日第三種郵便物認可


新年の御慶
目出度申納候
明治四十年一月一日
東京市日本橋區駿河町
三越呉服店

禁庭鶴　　富子

千代よはふをつる
たつく
きこゆなる大内山の
松のこすゑに



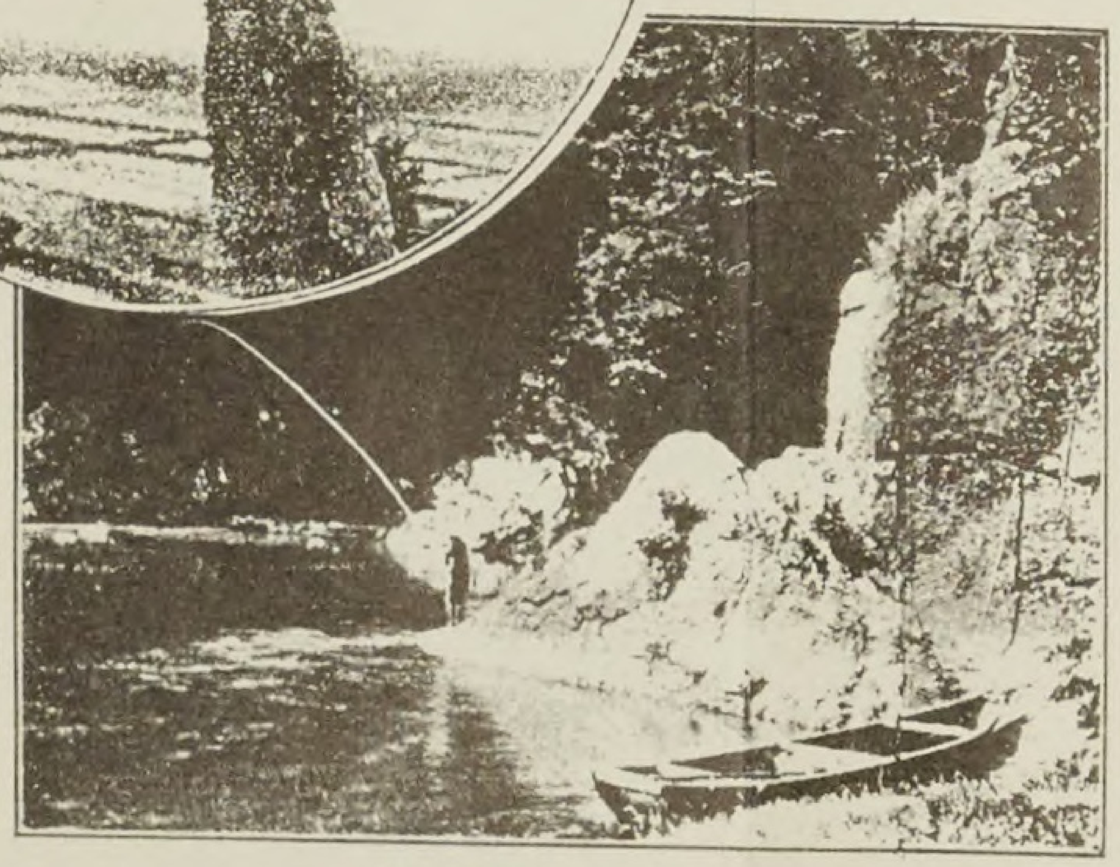
日本十二勝

下總手賀沼



井伊直方君撮

甲州桂川



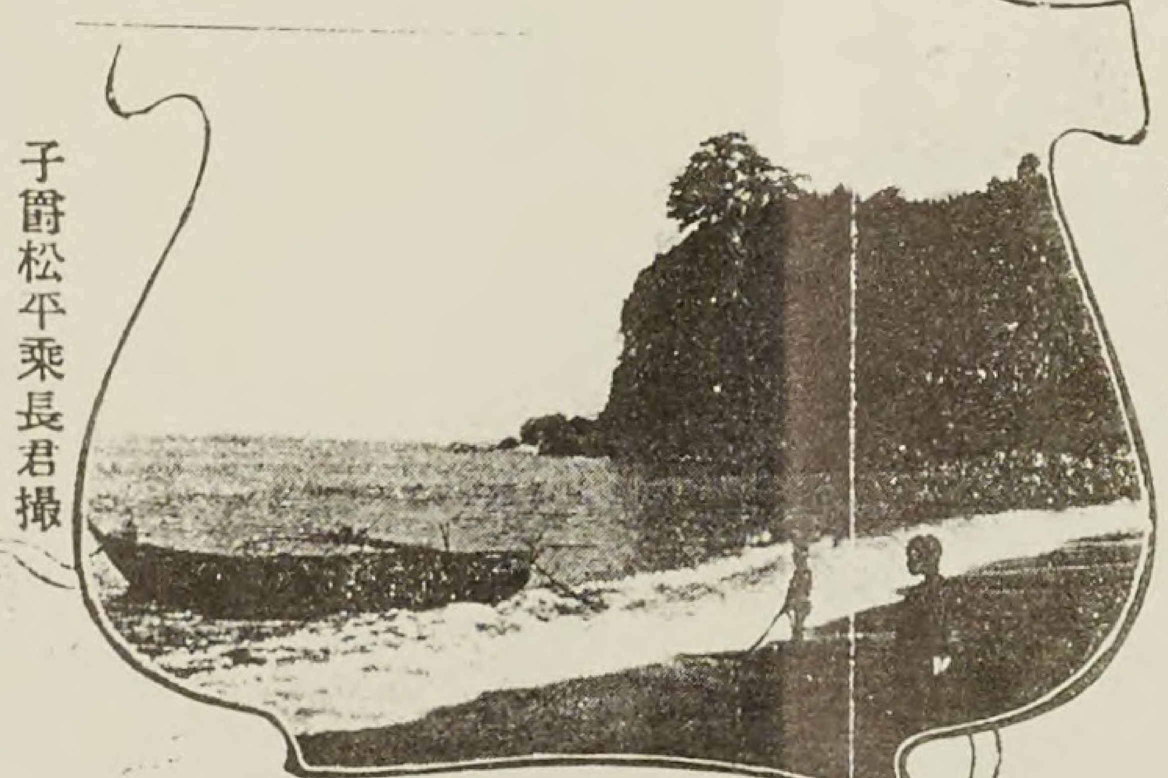
井伊直方君撮

田子の浦



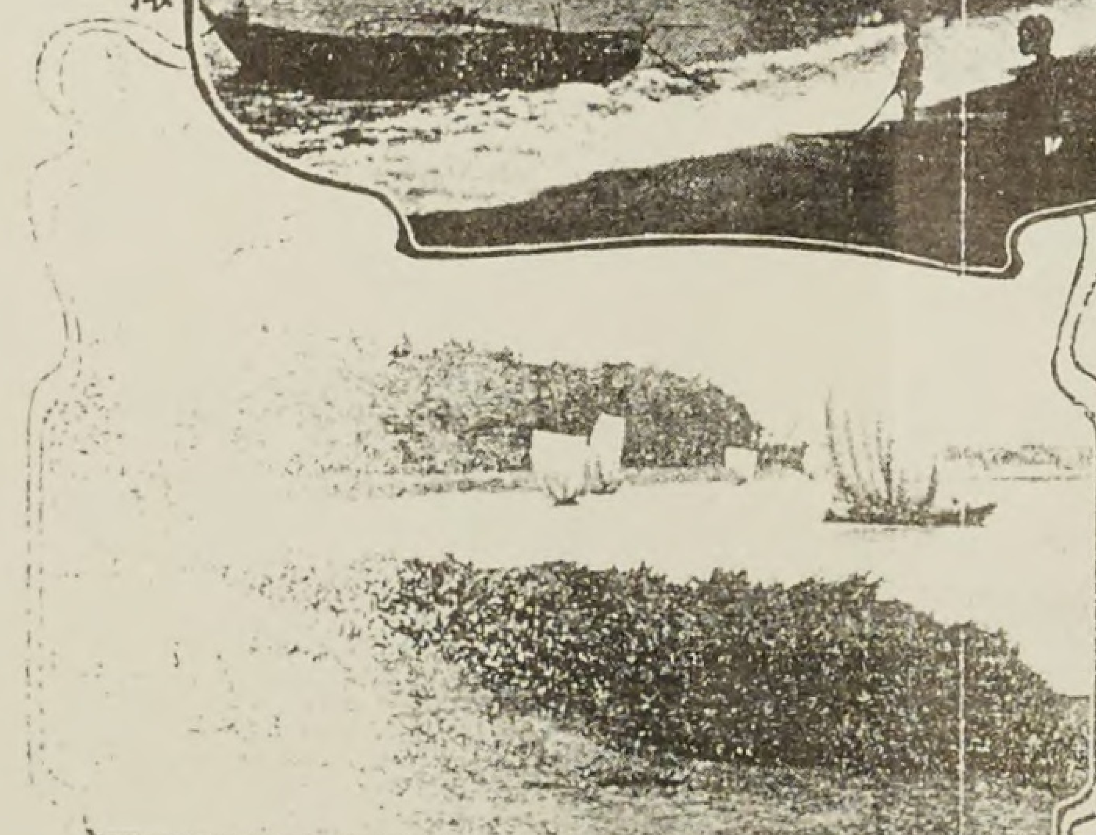
正親町伯爵撮

江の島



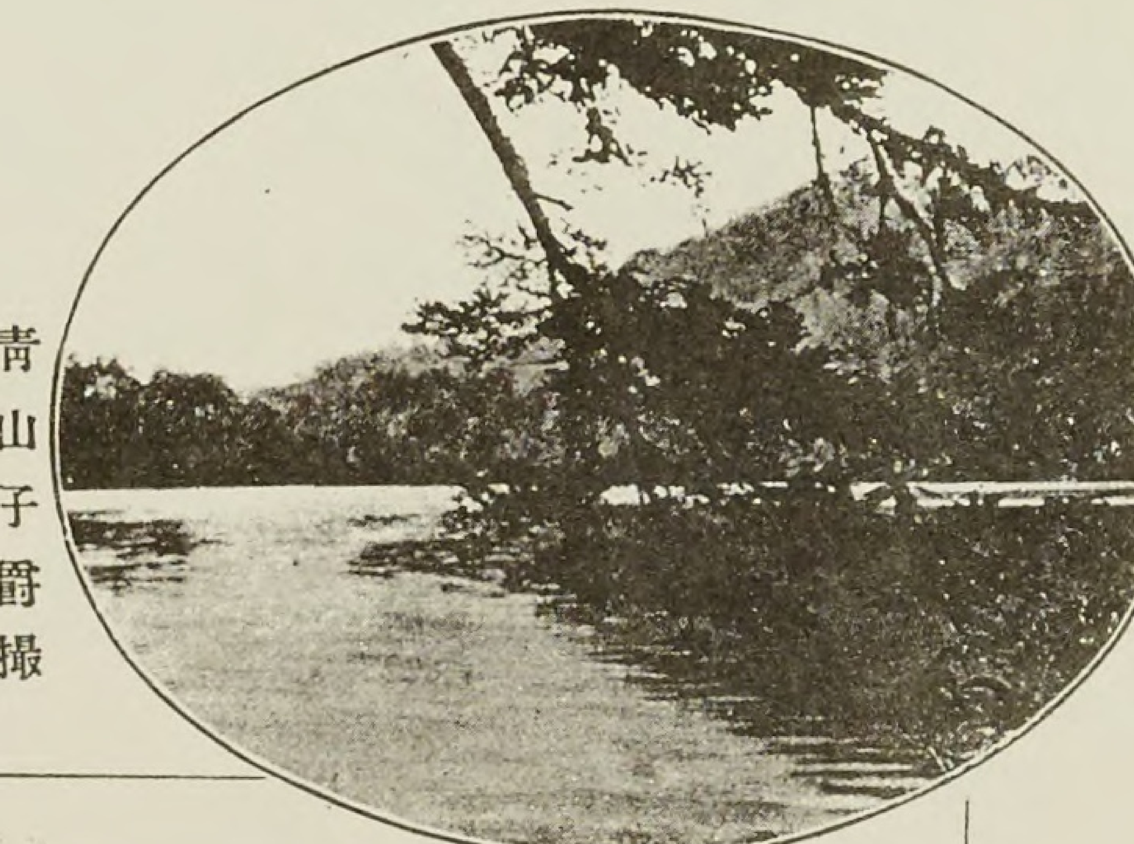
子爵松平乘長君撮

市川の歸帆



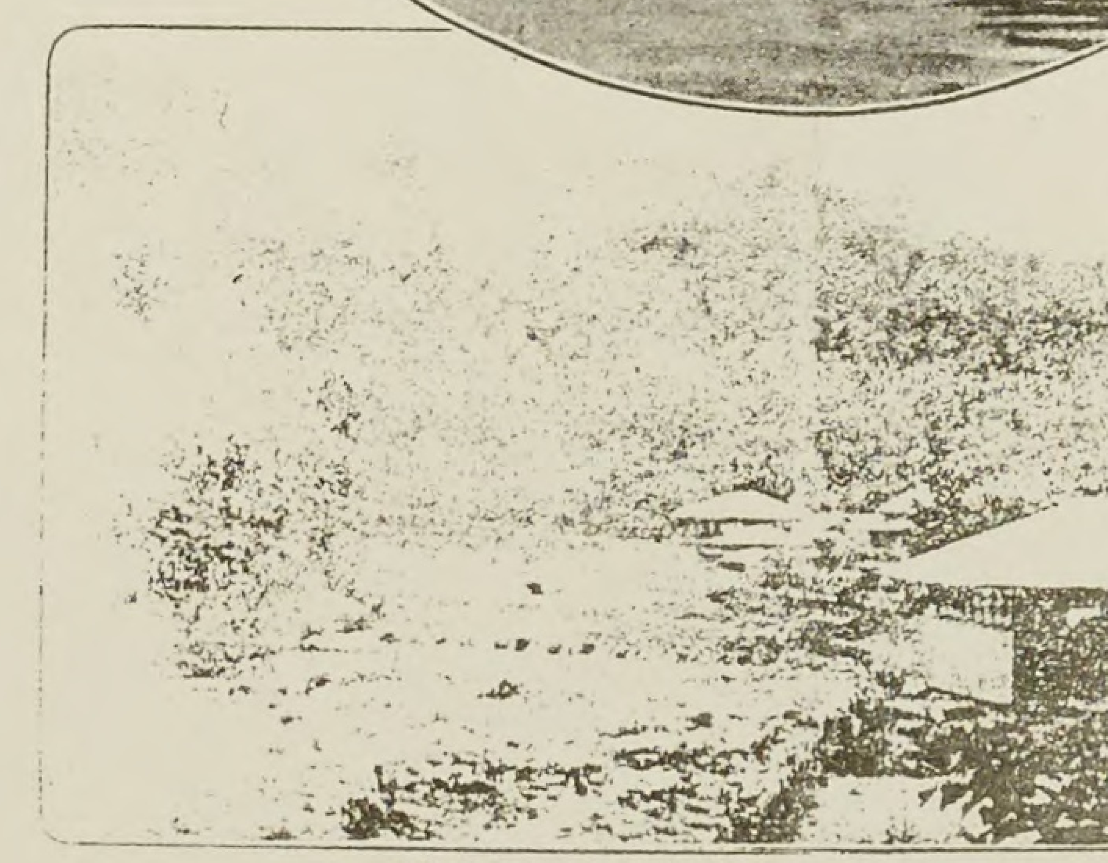
井伊直方君撮

日光湯本瀧



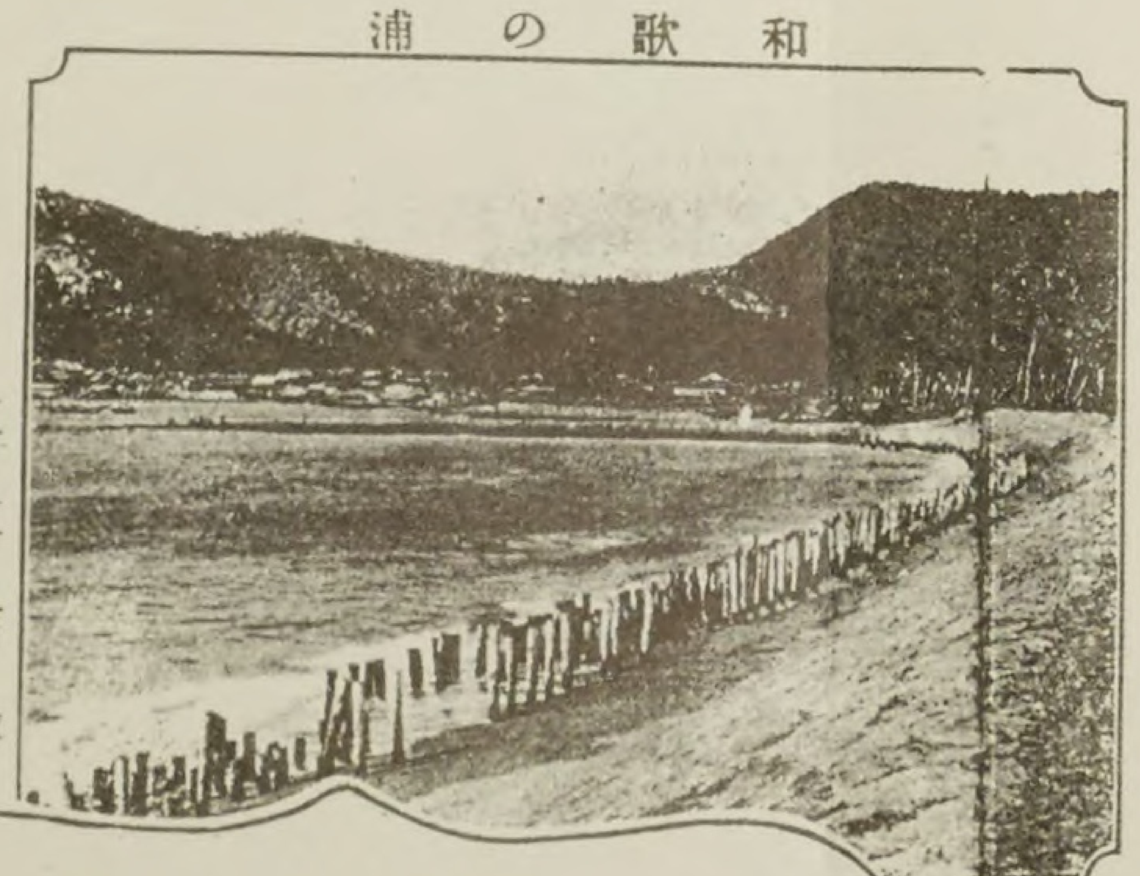
青山子爵撮

伊香保



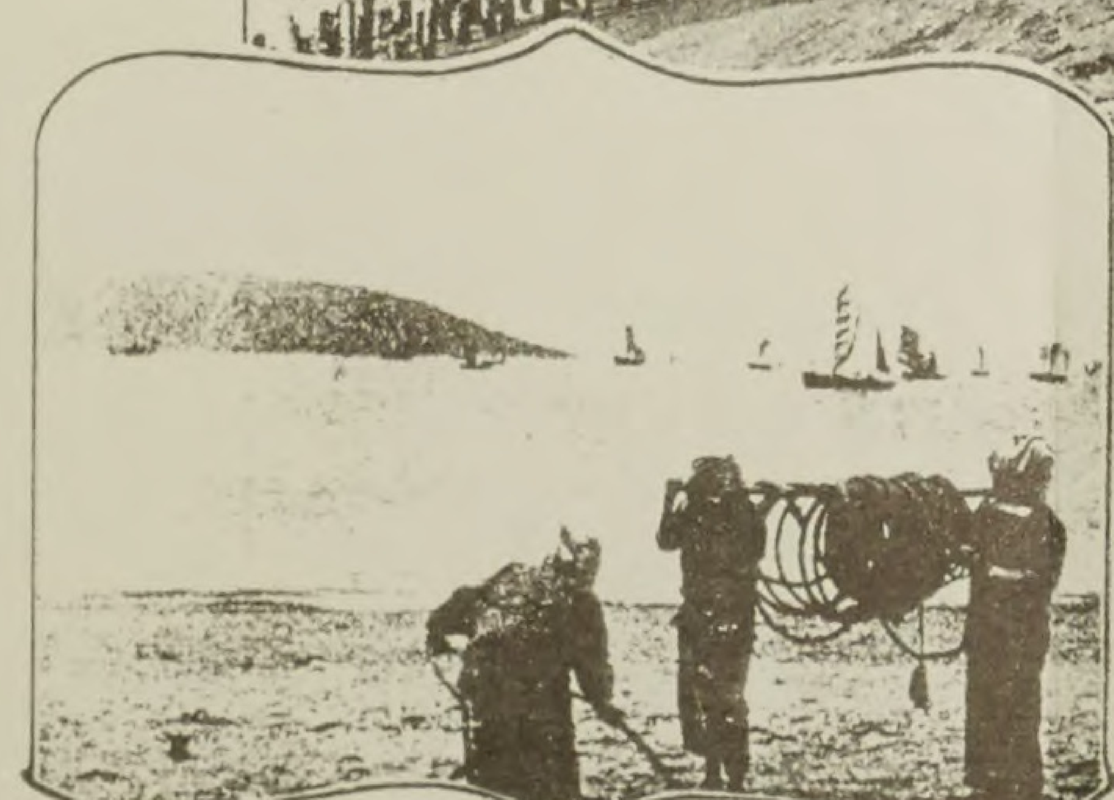
正親町伯爵撮

和歌の浦



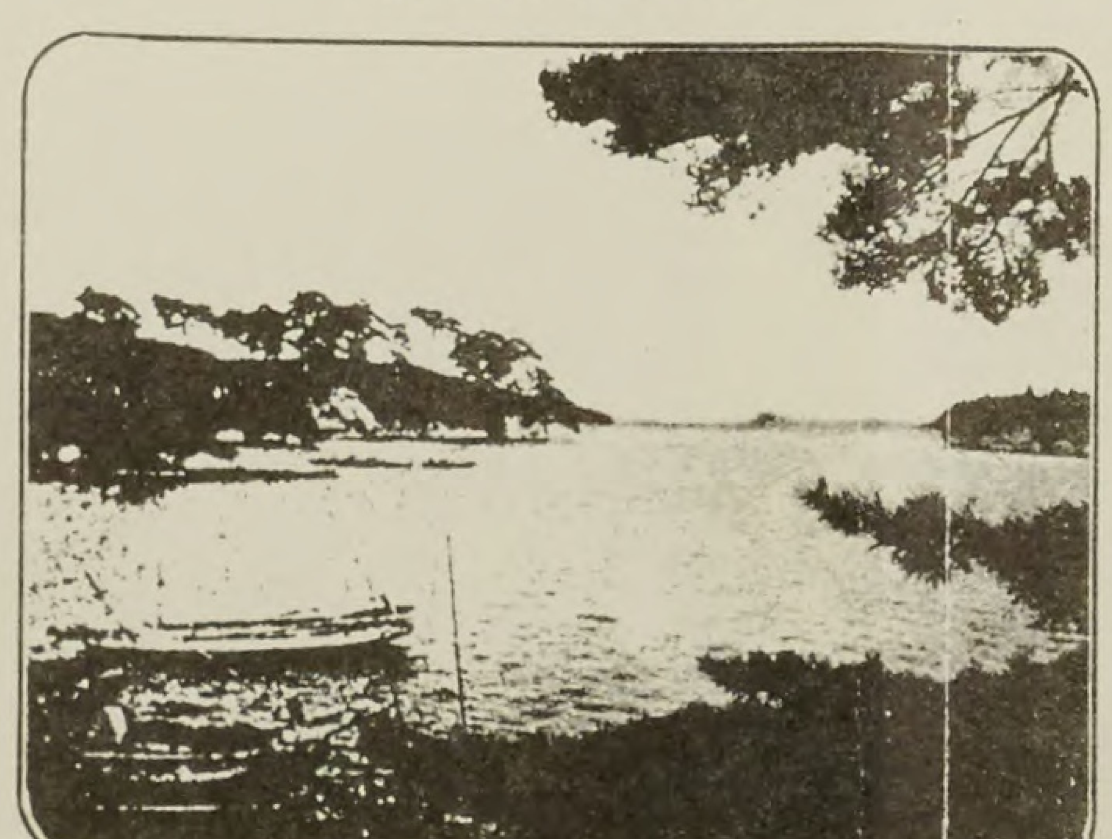
KK君撮

舞子の濱



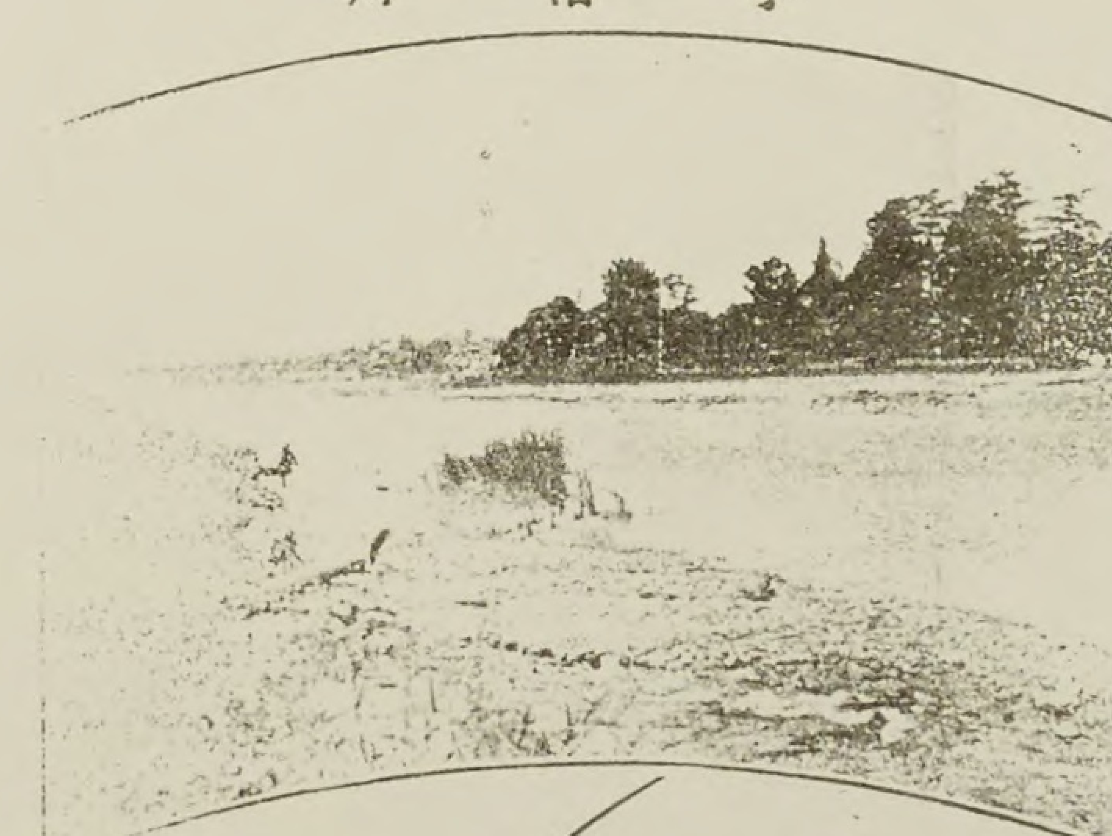
井伊直方君撮

松島



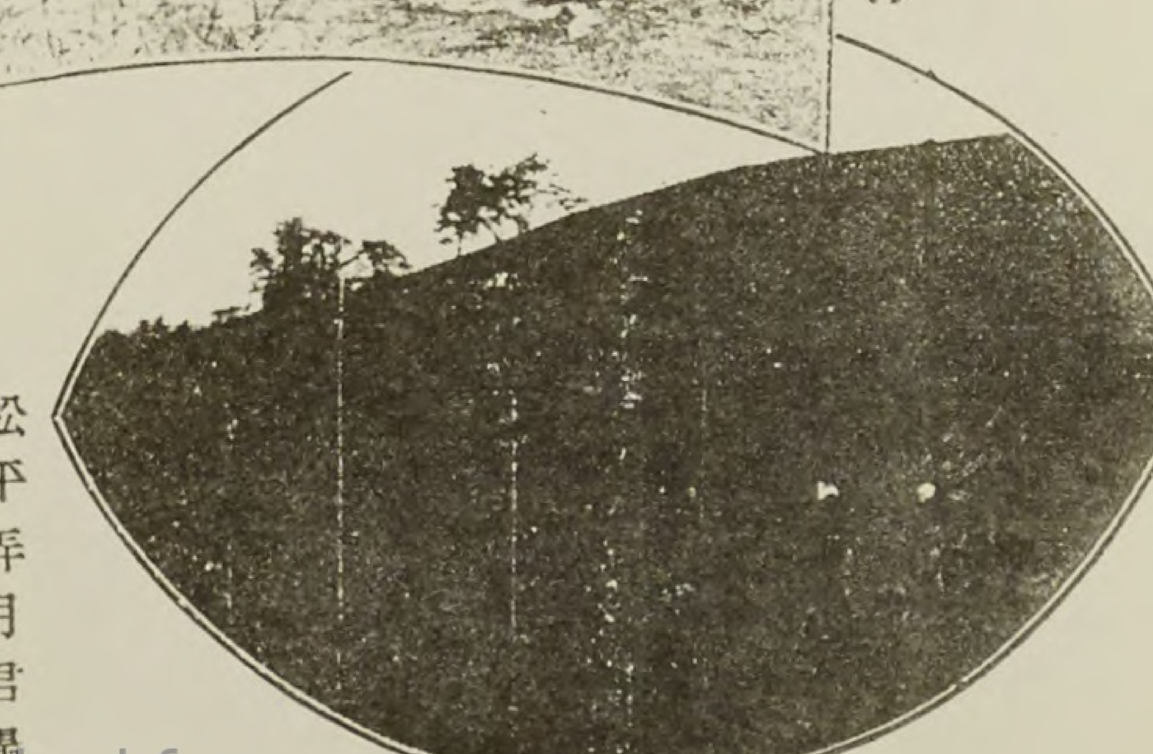
正親町伯爵撮

宇治川



松平弄月君撮

三笠山



松平弄月君撮

謹賀新年

女鑑

第拾七年第一號目次

論說

家事

社會



文藝

雜錄

誌友

裝畫

東伏見宮



東伏見宮依仁親王殿下

東伏見宮妃周子殿下

伏見宮



伏見宮貞愛親王殿下

伏見宮妃利子殿下

梨本宮

梨本宮守正王殿下

梨本宮妃伊都子殿下

方子女王



華頂宮と伏見若宮



伏見宮博恭王殿下

同妃經子殿下

右ヨリ 博義王 博信王 恭子女王

華頂宮博忠王殿下

新年松



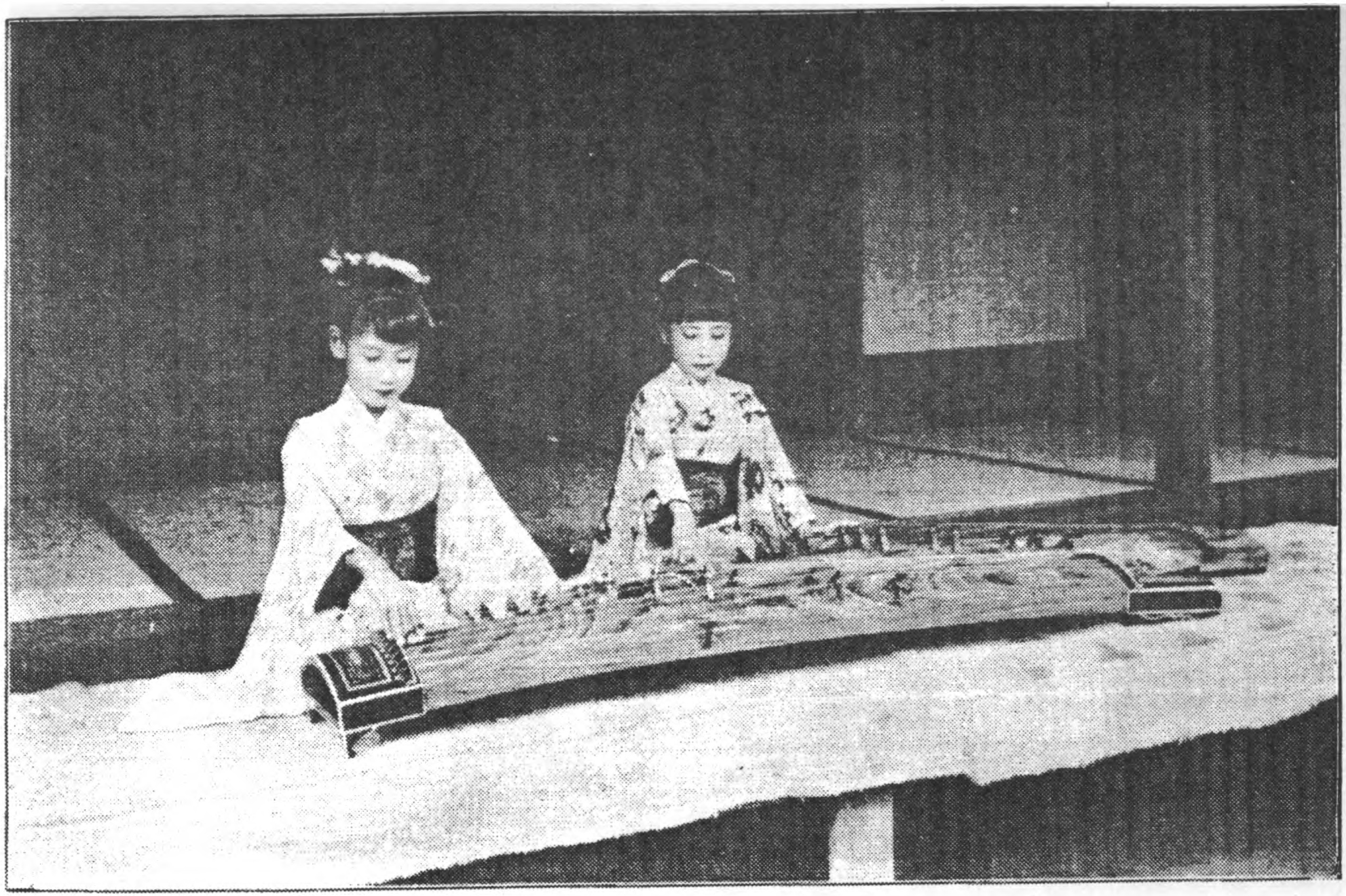
松　男爵 徳川厚君撮影

美人　子爵 松平乘長君撮影

伯爵夫人　酒井夏子君と其筆蹟



琴のしらべ



徳川公令嬢

新年の遊戯

幼兒百態（八）



井伊直方君撮影

自活の友

婦人の仕事

操志堅固なる日本婦人の好伴侶

毎月一回一日發行

第一巻第一號

明治四十年一月一日發行

定價金拾錢●郵税壹錢●參ヶ月●三拾三錢
六ヶ月前金六拾錢●壹ヶ年前金壹圓貳拾錢

記事

口繪

△婦人の仕事……
△新任女子判任官……
△行商婦人の成功者……
△女子計算員養成所卒業生……

△發刊の辭
△婦人の仕事發刊を祝す　文學博士谷本富
△婦人の仕事發刊を祝す　文學博士村上專精
△婦人の仕事發刊を祝す　東京市長尾崎行雄

龜鑑

△新交換手……
△行商婦人の成功者……
△感ずべき女の髮結……
△原禎子夫人……

案內

△內職としての編物……紫滄生
△婦人立身の早道……
△女子計算員の收入……
△交換局の女子採用法……
△五二共進會の女貢子成績……
△女子音樂隊の現況……
△貯金管理所には如何なる女子か成功するか……前田生

修養

△日本の女性……佐藤善治郎
△實業と品性……文學士三輪田元道
△婦人と修養……文學士尾上八郎
△婦女時言……溪韻生

詞藻

△婦人の仕事と文藝　戸川殘花
△鼠の言葉　岩野泡鳴
△古瓶の子　川戸溪韻
△新年の松　けいゐん

◉雜報は婦人に關する諸種の動靜並びに重要なる出來事を細大洩さず掲げ以て現代の婦人界の有樣を明ならしむべく

◉應答は世に立たんとして適當の職業を得ず職を得ても之れを如何に處すべきかに苦しめる諸姉の爲めに答へて親切丁寧を極むべく

◉彙報は婦人に關する諸種の動靜を細大洩さず掲げ以て現代の婦人界の狀況を明ならしむ

△內容の豐富文章の平易全誌之れ同情の文字

職を求め自活の苦と闘はんとする婦人の好指南車

東京市本郷區本郷一丁目七番地
（電話下谷二四一四）
青成會發行

☞家庭新報を讀まざる婦人ありや☜

新年號

家庭新報

元日發行

△竹貫育兒園……大寫眞版
△春の裝ひ……英朋畫
△婦人の年禮は奈何にす可きか
△山家鳥蟲歌……大學講師 池邊藤園
△家庭の春……柳川春葉
△○◎○◎……山岸荷葉
△冬籠の記……磯萍水
△吾家の元旦……新田靜灣
△元日……文學士 沼波瓊音
△軍艦のお正月……音羽艦 矢澤吟月
△新春の衛生……女醫 大八木幸
△小兒病……ドクトル 澤木伊重
△趣味ある家庭……池田脩子
△新化粧法……芙蓉生
△家計整理法……杉本とき
△新夫人……池田錦水
△妻君十戒……(懸賞一等當選)
△讀者文藝其他材料豐富

東京小石川久堅町五一 家庭社

文士の妻君 精巧寫眞版

◎沼波瓊音夫人◎鰭崎英朋夫人◎柳川春葉夫人◎山岸荷葉夫人

文士の筆蹟 精巧木版

◎露伴◎水蔭◎醒雪◎瓊音◎停春◎風葉◎春葉◎秋聲◎柳浪◎鏡花◎霞亭◎幽方◎鶴伴◎湖山◎北星◎竹風◎麗水◎其他諸家

每月二回發行 定價金四錢 半年分前金四十錢 地方送料六錢

新刊

化粧の手引

全一冊(四六版百卅五頁)寫眞版入頗美本價十五錢

文明の進むにつれて、貴紳淑女はともに必ず化粧の心得がなくてはなりません、處で我國從來の化粧法は鉛毒のある恐しい白粉やら、總ての仕方が不完全です、とは云へ假令化粧法は進んで居ても肌合の異ふ、生毛一ぱいの西洋人の用ふる化粧品を日本人が其儘に使へば、却つて肌を見苦しくします、依て本書は我國と歐米との長所をとり日本人の肌に最も適當の化粧品の撰び方と化粧の方法とを委く解り易く說明したものです

◎婦人の福音◎

歐米の化粧術を我邦の化粧法に應用し日本人の皮膚に適應せる濃化粧、薄化粧。かくし化粧等の模範化粧法

家庭新報編輯部編纂

發兌元 東京小石川久堅町五一 家庭社

特約販賣所 東京堂 東海堂 良明堂 北隆館

◎郵便切手(五厘に限る)にて十五錢御送付あれば無郵便送料にて直に御送本いたすべし

◎全國各地書店に販賣いたしをれど若し最寄りの書店に品切の際は直に本社へ御注文ありたし

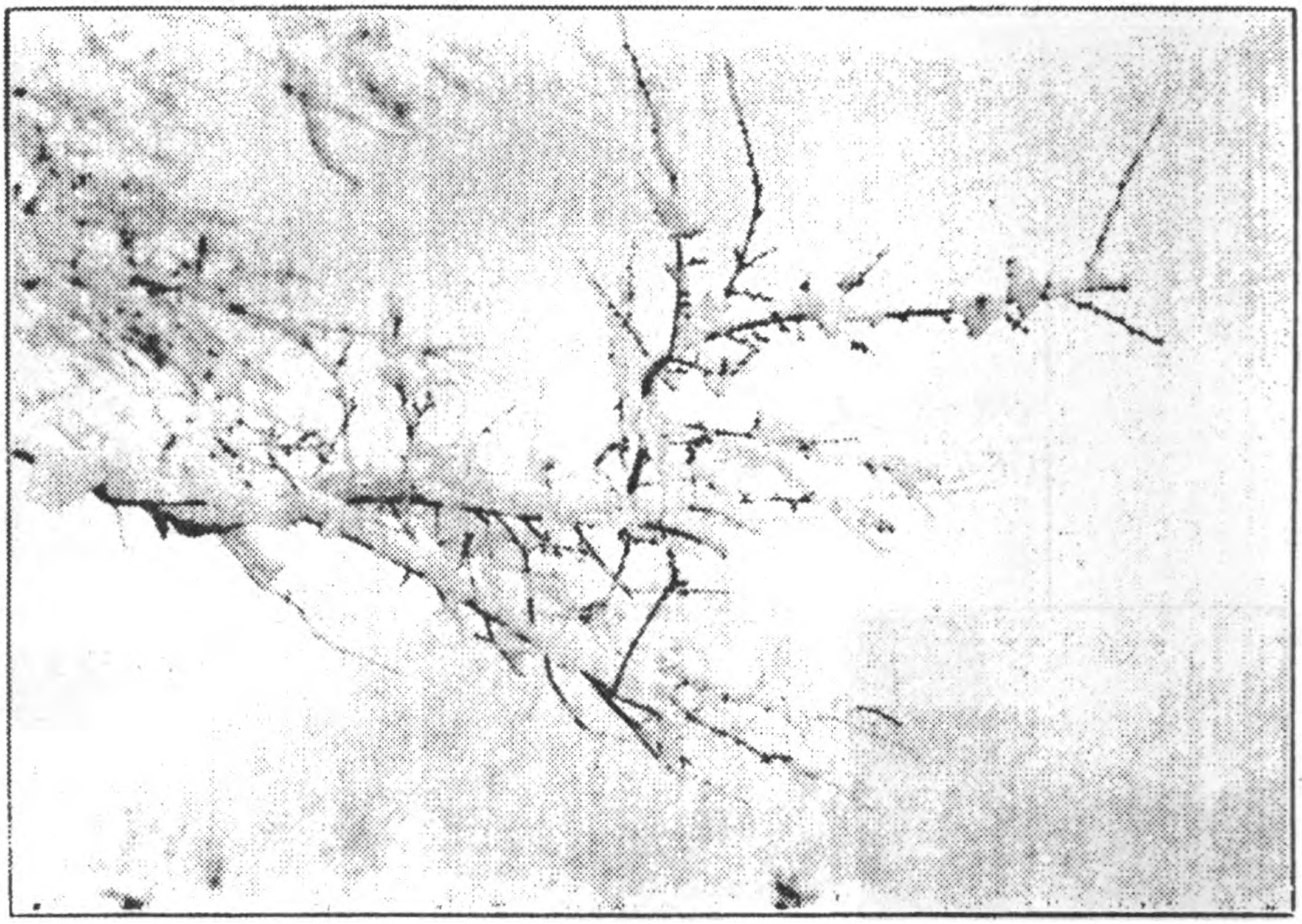
紙鳶と羽子

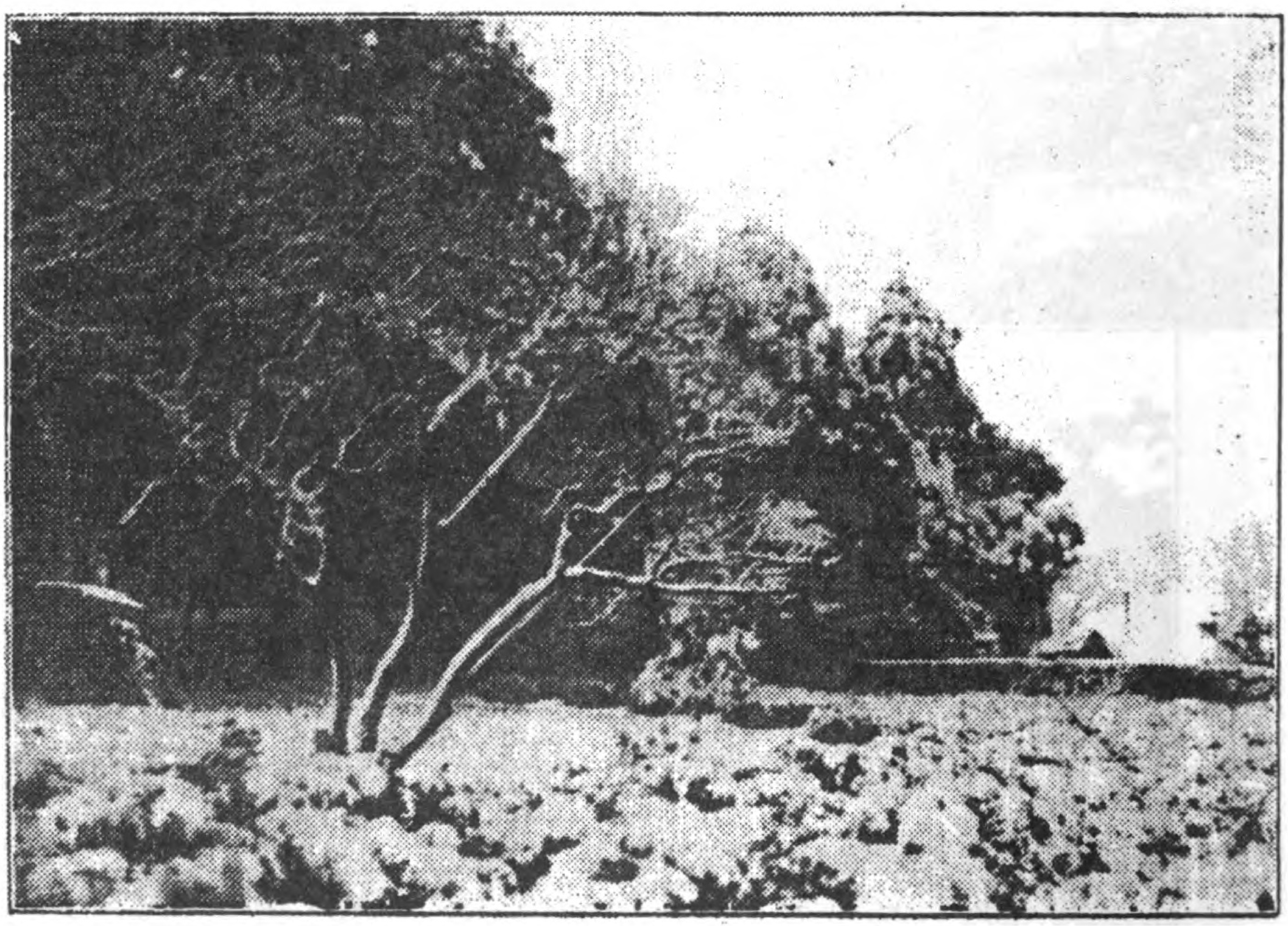




徳川男爵撮影

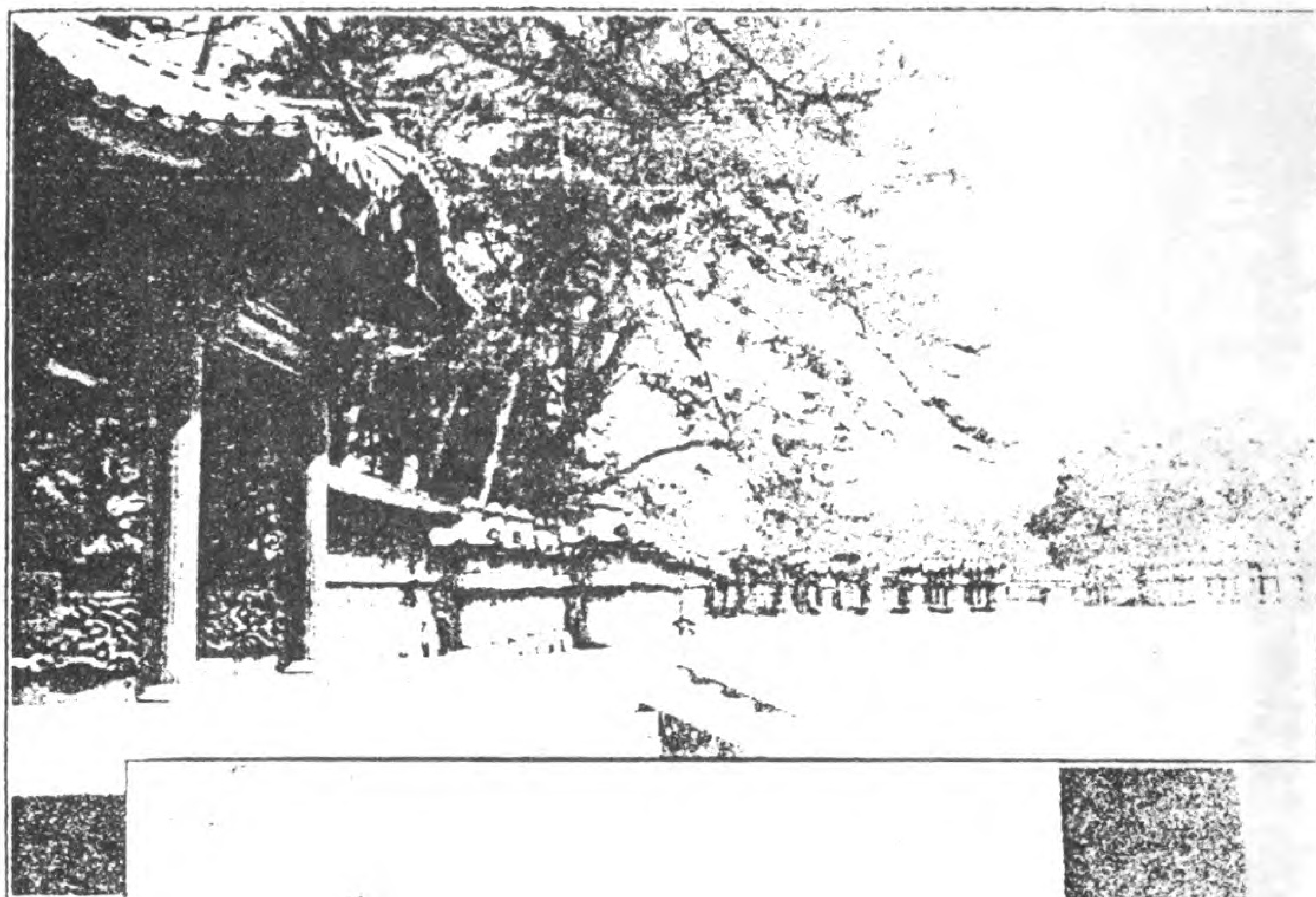
雪中梅



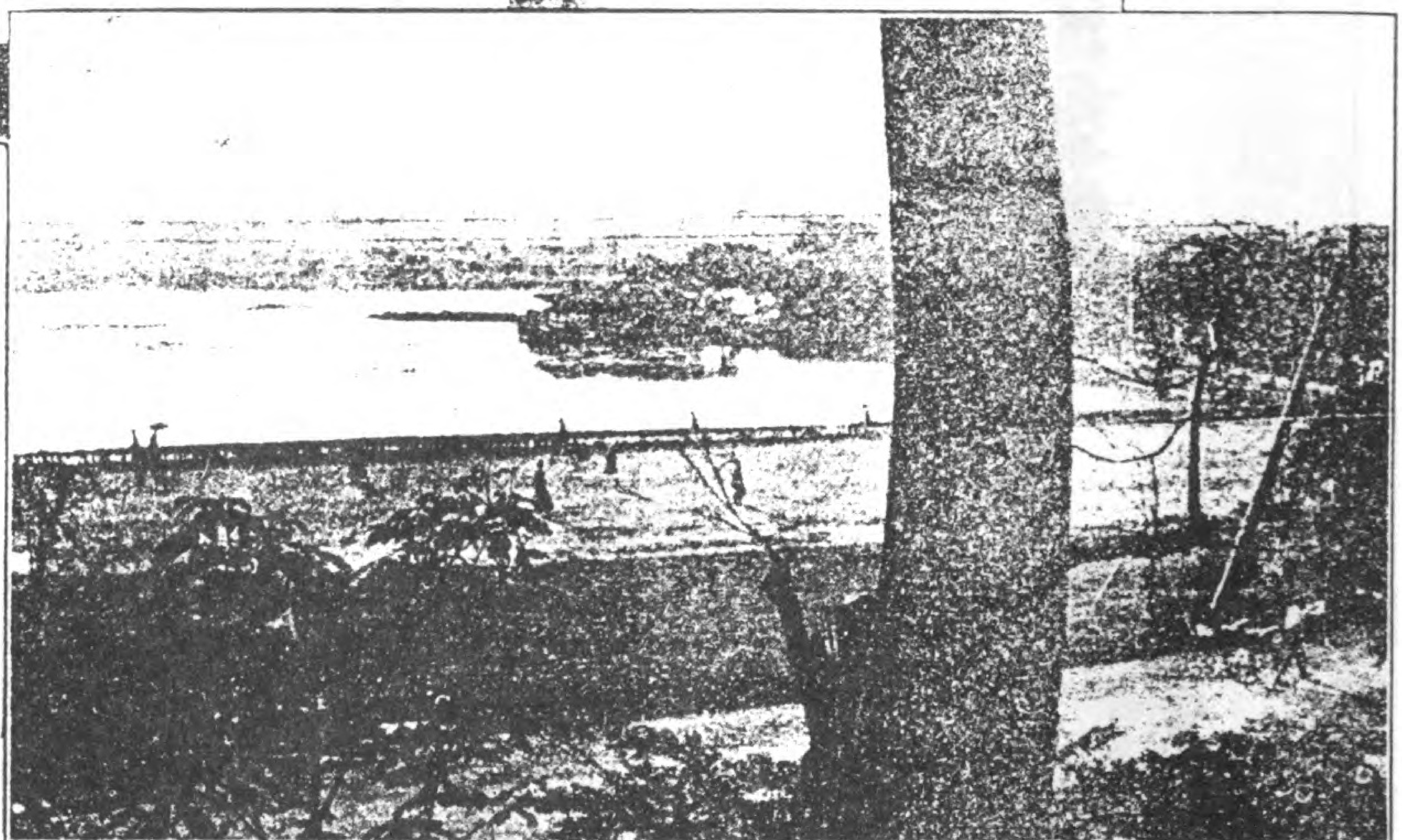


徳川男爵撮影

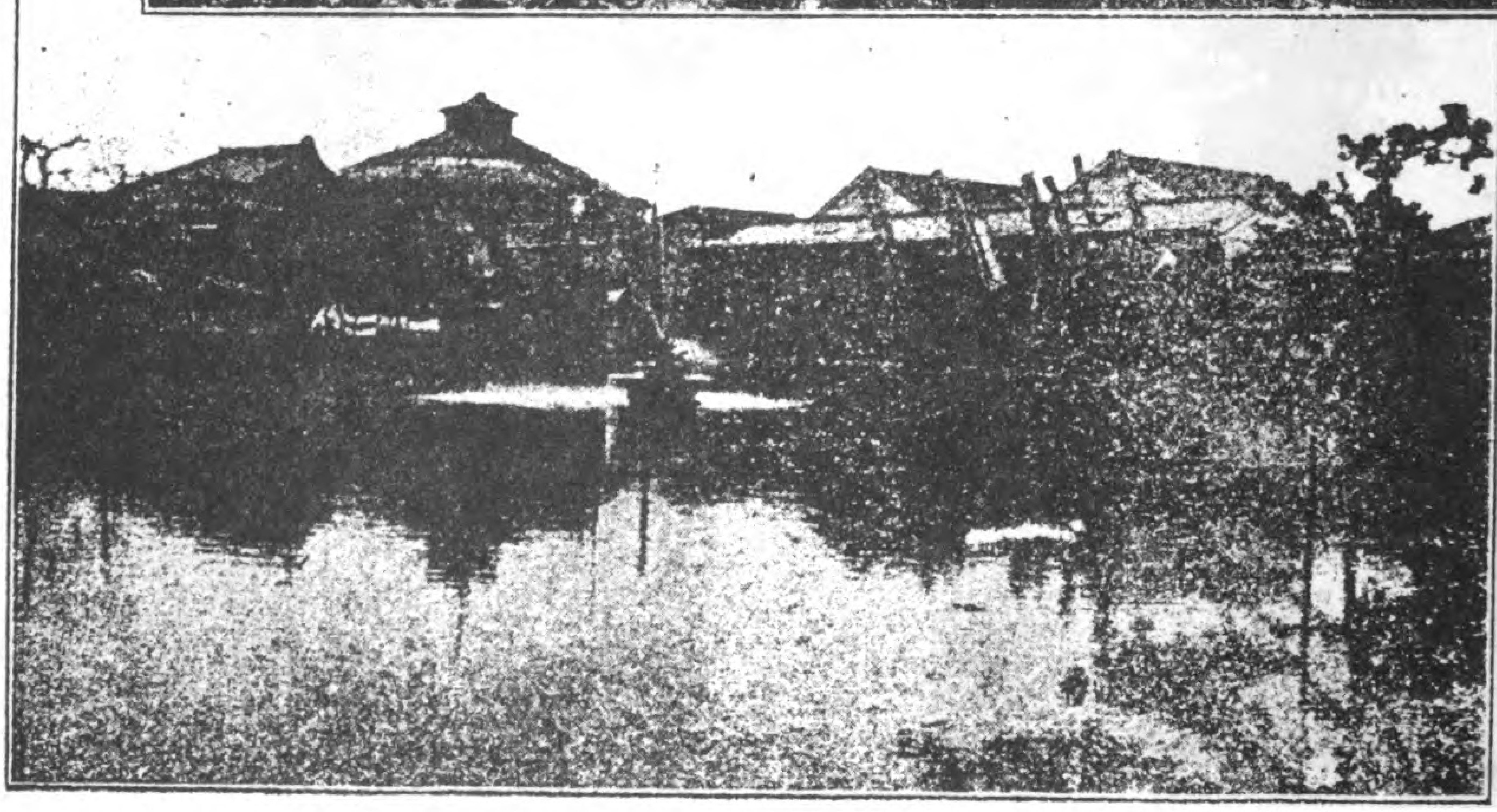
東京三公園



芝公園



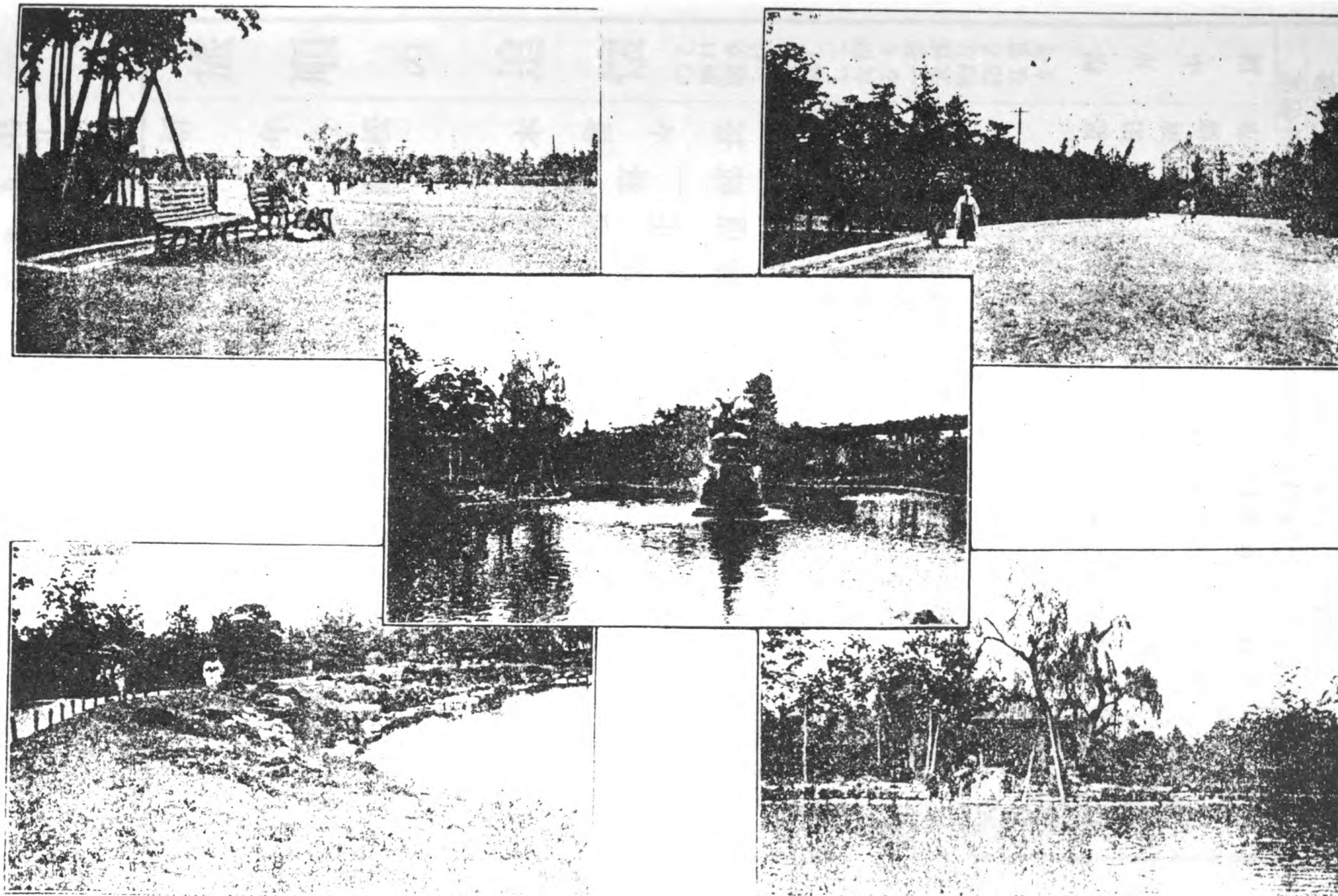
上野公園



淺草公園

德川男爵撮影

日比谷公園



德川男爵撮影

第九年 第一號

日本婦人

旅順の追懷

（これ痛快にして併も悲慘なる當年の旅順を活寫したる一大物語なり）　櫻井中尉

新年松　本會々長

羊の話　安藤喜一郎

羽衣の傳說　關根正直

勅題料理　石井泰次郎

日本の女性　下田歌子

女子の道德　井上博士

近世に於ける婦人優待　增田講師

英國に於ける女子教育　宮川教授

塙保己一　井上賴圀

人體の美　後藤ドクトル

心育と作文　青木文造

ピアノの價値　東儀鐵笛

懸賞文募集!!

（口繪）
ピアノ　黒田清輝筆
國府津の松　中村不折筆
羊　ムリロー筆

竹柏園歌話　佐々木信綱

玉藻集評釋　高濱虚子

書道小言　小野鵞堂

茶道　松平子爵

衛生顧問　三島博士

樂隊　小山内八千代

夜馬車　瀬沼夏葉

星と百合　高橋靈華

ほとゝぎす　中島孤島

雪の夜話　菅竹浦

誕生日　岩佐日潮

青き花　小原無弦

短歌、鍋島侯爵夫人、蜂須賀侯爵夫人、柳原典侍、國分操子、佐々木雪子、遠山稻子等

附錄　新春の風趣（木版極彩色）　櫻井中尉左手筆

定價廿錢　郵税貳錢　半年郵税共壹圓參拾錢　壹年貳圓五拾五錢

發行所　東京市麹町區飯田町六ノ廿四　帝國婦人協會出版部

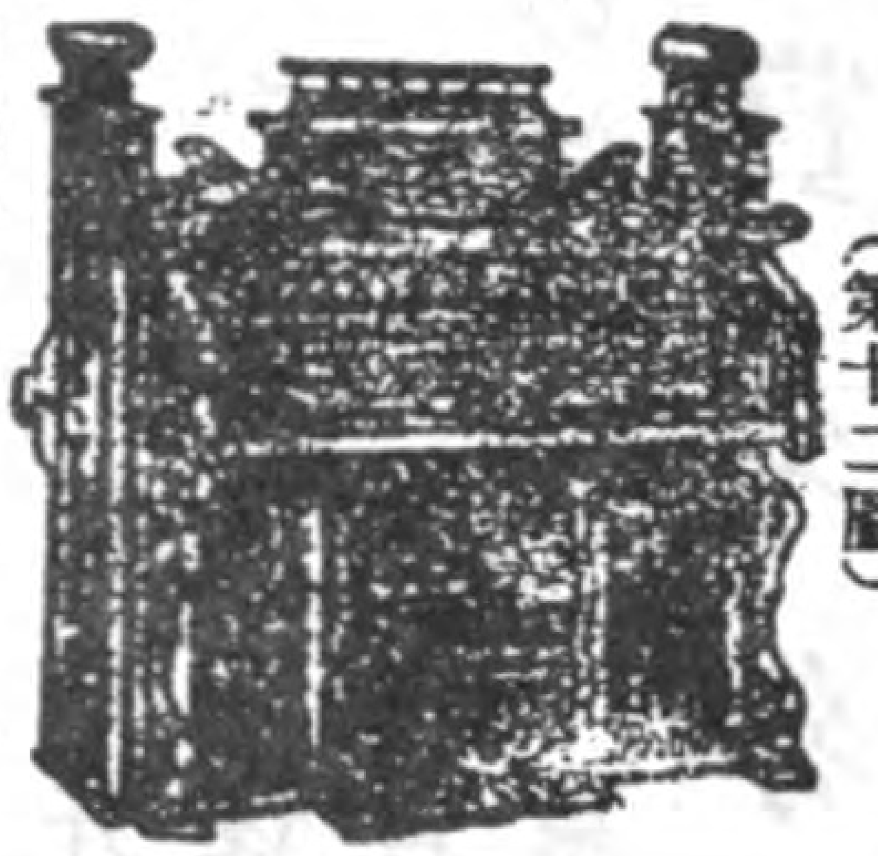
發賣所　東京市神田區表神保町　振替口座一四〇一五　電話本局一六一八　彩雲閣

會員たらんとせば會費半年以上（半年壹圓貳拾錢一年貳圓四十錢）納付べし

東洋社風琴

	デスク形	普通形
一	二〇円	一七円
二	三〇	二七
三	三三	三三
四	四五	四八
五	四五	四六
六	五三	五六
七	六三	六七
八	七五	七〇
九	八五	九〇
十	一〇〇	一〇〇
十一		一二〇
十二		一五〇
十三		一八〇
十四		二〇〇

製作堅牢　音律正確
裝飾優美　價格低廉
（第十二圖）



洋琴、ヴワイオリン
手風琴、樂隊樂器

（樂器目錄郵券貳錢にて進呈）

增訂 ヴァイオリン初歩教則本
定價五拾錢●郵稅六錢

オルガン初步教則本
定價四拾五錢●郵稅四錢

增訂 オルガン進行曲教則本
定價三拾五錢●郵稅四錢

●オルガン使用法及修理法
定價二拾五錢●郵稅貳錢

合資會社 東洋社

東京市神田區南乘物町十二番地（今川橋交番東へ入り左側）

圖書 器械 標本
樂器 總目錄 郵券四錢にて進呈

電話本局二七二一●電信略號トオヨ●振替貯金五一一四一

●森田、阪、鹽井、尾上、諸大家選評
明治才媛文集
自第一集至第十二集各定價廿五錢●郵稅四錢 普通文消息文言文一致文に分ちて各種各樣の文題を網羅し無上の一大寶典!!!

●大町、久保田、田口、諸大家選評
女子習文

明治秀才文集
第六集迄既刊 各集卅錢郵稅六錢

●長崎縣高等女學校長溝口鹿次郎先生編
訂正 女學校用
美術教科書
上中下三冊 文部省檢定指示中

●馬場、尾上、戸川諸大家選評
明治新體詩集
第一二集既刊 各集廿錢郵稅貳錢

●近藤正一先生著
家政寶典
上下合全一冊●定價七拾錢●郵稅八錢

時事新報評 主婦任務の要旨を始めとし婚禮接遇訪問座作進退の作法室内裝飾挿花點茶の心得に至るまで叮嚀に叙述したるものなり、

國民新聞評 禮法儀式、日本室內裝飾、點茶、挿花に分ち遥を以て詳說せり特に室内裝飾の章は至極面白く說かれたれば有益なる好參考たらん和裝菊判、

(第一號三十九年十一月三日發行)

最新式

婦人技藝講義

會員募集

▲常宮周宮内親王殿下毎號御覽を賜ふ▼

●本會は時勢の要求に應じて起つたのです

●本會は女子に技藝と品性の修養に必要なる學科とを獨修せしめ且習得の技藝を實地に應用せしむる事を目的とします

●本會は機關として毎月二回技藝講義を發行します

●講義科目は刺繍、造花、袋物、編物、割烹、圖畫、の諸技藝を主として加ふるに修身、家政、國語、英語、習字、法制、音樂、禮法、茶道、挿花、園藝等女子普通教育上必須の學科を講じます

●講義は各斯道の大家にして女子美術學校女子職業學校青山手藝學校高等師範學校女子大學跡見女學校三輪田女學校の諸先生

●講義方法は平易明晰なる文章を以てし且繪畫若しくは寫眞を應用し叮嚀懇切に講じます

●本會の販賣部は會員の製作品の委託販賣を爲し又製作上必要の材料を極めて安價に供給します

●實地練習所は實地に練習せんとするものゝ爲に設け研究會は毎月一回開設して大家の講話を乞ふ

●名譽顧問は大隈伯、高野子爵、秋元子爵、辻信次君、佐藤進君等

●賛助員は内外朝野の紳士、淑女數十名に及ぶ

●一ヶ年卒業▲入會金貳拾錢▲月謝五拾錢●●●

●新年祝賀の意を表する爲め本月十五日迄に入會申込者には入會金を免除す

●見本入用の向は貳拾七錢(切手代用一割増にて一錢切手に限る)

●會則入用の方は往復ハガキにて申込み下さい

東京京橋區銀座一丁目六番地(振替貯金口座番號一七〇二)
帝國婦人技藝協會



女鑑

第拾七年第壹號

新年の松

とつ國々にためしなき　わが大御代にあひ生の
松によそへて門ごとに　立つるや女夫の松飾り。
きのふは峰の雲をそめ　ふもとの琴の音に通ふ
しらべを茲に引かへて　來しと女松の囁やけば。
われは海邊にあし鶴と　千歳かはらぬ月かげを
宿せしものを今こゝに　來しと夫松は語らひぬ。
昔ゆかしきそのふりに　みどりの色も一しほに
さすや初日の影たかき　みさをゝ吾は友と見む。

（中川愛氷作）

論說

女子の心得

大藏大臣
法學博士　阪谷芳郎

我國では、婦人教育といふことについては、議論が色々に岐れて居つて、或は多く外に出づるやうに教育せねばい可ないとか、或は從來のやうにあまり多く外に出ぬやうにした方がよいと云ふものもある、併しながら到底日本の婦人の教育は、從來の儘では可かぬ、どうしても世間に出て、廣く交つて、今少し男子の領分を婦人の方から扶くるやうにせねばならぬ、これ迄は牝鷄の晨するは惟れ家の災といつて、男が時を作つてさへ居ればよいに、婦人が時を作るやうなことがあると、時が二ケ所から出るやうになつて、間違を來すから、女は默つて居る方がよいと極めたものである、それであるから、世の中の事は男子のすべき事が多くなつて居る、ところで封建時代であれば、それでもよかつたであらうが、今日のやうに廣く知識を世界に求めて、世の文明を進めて往きたいと云ふ世の中には、適當せぬに相違ない、人間の一部分たる婦人を社會から遠けるやうな仕方は、自然の道理に悖つて居る故に、今日は如何やうの議論があらうとも、歸着する所は、婦人が今少し外に出るやうな教育を享けねばならぬ、廣く交際社會に出でゝ、これ迄男子の爲して居つた、仕事の一部分を助けて往くやうにしなければならぬ、明治十九年であつたと思ふ婦人と云ふものゝ、これまで、すべて内輪に育てゝ居つたのを、世間に出るやうにしたいといふ考から、歐

羅巴、亞米利加から歸朝した人たちが、當局の外務大臣等と申合せて、日本の婦人を交際社會に出して、人間の職務を今日以上盡して貰ふやうに導かうと云ふので、遽に舞踏會などを設け、鍋島侯なども非常に盡力せられ、從つて夜會宴會なども盛に行はれて、さう云ふ場所に多くの婦人が出るやうになり、女子教育奬勵會等も出來た、併し其計畫はどうも時世に早かつたので、いろ〳〵反對の説が起つた、それは『男女七歳にして席を同うせず』と云ふやうな思想を持つて居る人故、婦人が外に出て交際するを不道德であるやうに考へたのである、而も五千萬の國民の中には、何うしても文明の教育をうけた人は少く、婦人を交際社會に導くのはよくないとしてゐるといふ説を唱ふ人が多數である、それ迄はよいが種々の空説を附加へて惡しざまに罵り騷ぐので、大に婦人の教育を進め、婦人を社會に出して働かしむることの頓挫を來して、それが爲に、當路の大臣中にも迷惑を蒙り、又華族の中にも迷惑を蒙つた者があるやうな次第で、甚だ遺憾に思つた、併ながらこれも物の盛衰といふものであつて、何事によらず世の中の事のいふものは、一度思ひ立つた事が、すら〳〵と行くものではない、やはり人間が生れて老年に至る迄、無事に經るといふことはむつかしい、その間に病氣に罹ることも、幾多艱難に出遇ふこともある、又嚴格なる教育をして置いても、不心得の爲に、一時身を過るやうな事が出來て、なか〳〵小兒が段々成長し、一家を起し、父母妻子を養ふに至るのには容易の事ではない、それと同じに、世の中で計畫する事業も、すら〳〵運ぶことはむつかしい、いろ〳〵頓挫を來し、屢々蹉躓を生ずるは免れがたい事である、併しその時かぎり倒れて了うても可けない、轉んだれば土を掴つて立ち、又轉んだら又土を掴つて立つやうに、人が何と云はうとも、反對の論が如何に强からうとも、目的さへ善く、又文明の主義に適したる事と着眼したことは、どこまでも推して進む方が利益である、そこで婦人が社會へ出て働くといふことについては、もとより程度

問題で、それが爲に家事に影響を來すやうでは可かぬ、又絕對的にこの餘裕のないものもあらうから、一概に婦人が外へ出て働くものと極めてしまふのはよくない、現時に於ける婦人の行狀程度ではまんざら外へ出て弊害の起らぬとも云へないから、それから婦人としては、その標準とすべきは、何う云ふ人かといふに、並の生活を經過する婦人にて、並の生活を經過する婦人とは何ういふ婦人かと云ふに、先づ生れて相當の年齡に達すれば人に嫁し、子女を育て、一生を終る、これを婦人の標準として置かなければならぬと云ふものは、婦人の中には一生嫁入をせぬといふやうな說を持つて居る人もある、さういふ人は一般婦人の標準とはならない、これ迄亞米利加邊にはさう云ふ說を唱へる人があつて、婚禮を避けることを正理としては居らぬが、非常に得意として居るやうな人もある、何うもさういふ婦人は天理に悖つたものとしなければならない、それで學問的に婦人の結婚せぬと云ふ原因を求むると、それには數多ある、

第一に病身といふことが一原因である、身體が弱い、或は神經病といふことが原因である、

第二配偶者のないといふことが原因でそれについても天刑病の系統に屬するとか、或は不身持が原因となつて、配偶者を得ることが出來ない事がある、ソレから罪を犯し、監禁の爲に婚姻が出來ぬと云ふことが有る、是等の原因は自ら婚姻を好まぬのではない、實に止むを得ざる處の原因であると思ふ、

第三、家が貧困にして、自分が他に嫁すると、代つて家を支へる人が無いと云ふが爲に婚姻せざる人が有る、即ち自分が一家の生產者で、其家の收入を生ずると云ふやうな場合には、其人の他に嫁する事が出來ないのである、

第四、父母に孝養・主人に忠を盡す爲に、一生婚姻せぬ人が有る、

第五・情實の爲に婚姻せぬ人が有る、其例は種々あるが、先づ配偶せざる中に許嫁の夫が亡くなると、

か云ふやうな場合に、義理を立てると云ふ様な事である。
第六、生活の煩累を厭ふて婚禮しない、政治の思想、哲學の思想、宗教の思想等より來る原因である、

斯くの如く結婚を避くる原因が種々あるが、其中で、生活の煩累を厭ふと云ふのが一番惡い原因であつて是は亞米利加、歐羅巴の婦人中に爾う云ふ說を取つて一生獨立する者がある、是は何うしても天理に悖つたことに相違ない、故に私の申す標準となるべき婦人は、是等の原因以外の人を以てしなければならない

序でに申して置くのが婦人の再緣と云ふことに就ては、支那では是を不道德と認めて居るが、併し之を不道德とする說は支那が一番强いやうで、外の國では再緣を不道德と認めて居らぬやうである、又日本の今日の學者の普通の議論から云ふても、再緣を不道德とするのは根據がない、夫に別れて再嫁するのは天理に悖ることではない、但し子供が有るとか、老年の舅姑が有るとか云ふ場合には再嫁と云ふことは實際むづかしい事であるが、學問上から論じて不道德と云ふ議論は、今日の日本の學者の中には無い、之を不道德とするのは古い學者の說になつて居る、再嫁の議論は姑く措て、先づ婦人が生るれば、一定の年齡に達して他に嫁し、子女を養育し、天年を終ると云ふが、婦人一生の標準と考へなければならぬ、其標準に堪へられぬ人は、前述の如く數多の原因がある、其の原因の中で、哲學宗敎政治の觀念から獨身を徹すのを道理と考へ、或は德義と考ふるのは天理に悖つた行ひとしなければならぬ、

而してこの結婚によつて家庭が出來る、その家庭の基は婦人であるから、家庭の改良をするには婦人の力を借ねばならぬ、由來人間は漸次に進んで行くものであつて、舊は汚い小屋掛に住んだ者も、電氣燈を點す家に住む樣になり、舊は裸體の人間も漸次進んで衣服を製へることを知つて、今日の如く美麗なる衣服を着る樣になる、斯の如く人間は進んで行く智惠を持つて居る、即ち自分等が能く文明開化といふが、

是は世の中が立派になつて行くといふ事で、家屋や衣服の進んで立派になるも文明開化であるが、それに伴ふ人の心得の進むのが眞の文明開化で、いかに家屋や衣服が美麗になつても、人の心が汚なければ眞の文明開化ではない、故に上流社會の人は下等人民よりも心を磨く事に注意せねばならぬ、何となれば足を一歩戸外へ出せば、自然眼につくであらうが、或は青ざめた男が息を切つて車を曳くのもあれば、襤褸を身に纏うた婦人が、小兒を負うて夫の荷車の後推をするのもある、その他哀れなる風體の人間が澤山往來して居る、それに引替へ貴夫人の中には、立派な家に住ひ、美麗なる衣服を着て、傘もさゝずに歩く樣なものゝ多き世の中に、二人曳の車、二頭立の馬車に乘り、或は金の鎖を掛け、珊瑚の飾りを着け、鼈甲の櫛、金の簪、金剛石の指輪と、實に此社會に於て非常に贅澤をして居る人が多い、して見ればそれ等の贅澤と共に、その心も下等人民よりは優つた所がなければならぬ、即ち下等社會の標準となるべき義務を持つて居る、もし上たるものにして、下々に劣る行ひがあれば、社會に對して甚だ相濟まざる義と思ふ、風俗に關係したこと、人心に關係したことは、どうしても男子のみでは出來ぬ、婦人も盡して行かねばならぬ、それ故に改良々々といふが、その改良に就ては、從來婦人の力を借ることが少いから、充分に目的を達することが出來ぬ、どうも支那や日本の風として、婦人の力を借る事を恥ぢ、婦人が政治の事に喙を容るれば、國が滅びるとか、或は家の事に喙を容るれば、家が治まらぬとか云つて、文明開化を進める相談の中に婦人を入れないやうにして居つたが、それでは到底不可能の事で、就中家庭の改良に至つては、婦人の力を借りねばならない事である。

抑々家庭の改良とは、家の中の風俗を改良することで、親子兄弟夫婦といふ者が、共に住つて居つて、最も人間に取つて大切にして、亦最も愉快なる場所である、それ故に家庭の善良なると否らざるとは、人

間一生の幸不幸の岐るゝ所で、家庭にして父子兄弟相親しみ、夫婦相睦しうして居れば、その家庭は實に愉快なるものである、西洋人も家庭は極樂であると云うて居る、然るに日本の家庭の有樣は果して斯くあるかと尋ね見ると、どうもさうであるとは謂はれない、それは夫婦の關係がよくないからである、而して家庭を組織して居るものは父母夫婦兄弟と大層あるが、家庭の中心となり、原素となるものは夫婦に違ひない、然るに此夫婦の關係が宜しきを得ざる時は、決して良結果を得て、極樂といふべき家庭となることはむつかしい、そこで私の知る所の日本の多くは家庭を見れば、どうしても婦人の働きが家庭の上に缺けて居る、婦人の働きが家庭の中心とならねばならぬのに、何時でも男子ばかりが中心となつて居るやうである、それでは到底家庭を極樂にして行くことは出來ぬ、人を訪問しても、家庭の元素たる夫婦が共に出て居て、話をして吳れると、大層心持がよい、御亭主ばかりて出て、茶のつぎやうがわるいとか、何とか小言ばかり云うて居ると、居たゝまれぬからすぐ歸つてしまうやうになる、然ういふ家は、家庭がよく出來て居らぬからで、甚取締りが惡い譯である、何でも婦人は家庭の調和者となり、家庭の中心となつて働くやうにせねばならぬ。（談話筆記、文責記者にあり）

廿世紀の婦人

黃離女史

古より女子の天職は家を齊へ内を治むるにありとして、其他の外事に拘はるを要なき者の如く退けたりき、されど進み行く今の世には、强ちに此の舊訓を墨守すべきにもあらず、若し女子が其分を轉倒して、太平の御代に家を忘れ、内を捨てゝ、只管外事にのみ奔走する者あらんには、固より常理に戾るものとして責むべしと雖、さあらずして、善く家を齊へ、内を治め其餘力を外に及ぼすはこれ天職を全うして、更に公益を致すものなり、人或は曰はん、上流者は家富み事足りて、内顧の憂なければ、外事にたづさはるを暇ある身のすさびともなすらん、されど、品下

るものは事從ひて多ければ、いかで內外派れ行ふいとまあらん、外事は男子に任して足れりと、一二此說を稱ふるものあれば、百口相和して、皆高眠を貪らんとはずるなり、これ我が國中流以下の婦人の勢力なき所にして、其勇進の氣象に乏しきこと、豈嘆ずべきに非ずや、其內にはまこと稚子多く、家事煩はしくて、暇なきものあるべく、才智缺にして、事の內外の區別をだに知らざる者もあるべけれど、十中六七は通常の才と暇とありながら、之を有益なる事に用ゐずして、要なき品評雜談の間に時を費し、或は遊山觀劇等に耽りて、家政を捨つる者も少からじ、かくても猶言をさま〴〵に飾りて、婦人が處るべき適切なる外事をいとまなしとて顧みざるは何ぞや、苟も二十世紀の盛大に遭ひて、一通の敎育より高等なる、種々の學術までも修むべき今後の日本婦人は、斯くの如き淺薄なる思慮を捨てゝ、大に社會的觀念を養ひ、何事も躬行實踐を旨とすることを忘るべからず、これ國家公衆を益すると共に、更に家を治め、子を敎ふる實用の新智識をはること大なれば、彼も我も其得る所の利益少なからざるなり、

然るにつら〳〵世の傾向を觀へば、弱きを助け、隱れたるを現はし、年若き者を擧げて、共に世の進運を計り、總ての內政に力ある婦人の才能を自由に發達せしめ、亦其權勢を相當に保たしめんと企つるものは有らずして、何處にも上なる人、名ある人は自覺の廉となり、己れを崇拜する者のみを近けて、其羽翼と爲し之に因りて只管其位置を堅うせん事を計り、弱き者、媚びざる者が才を抱きて空しく埋るゝを憐まざる弊風は、日を追ひて益を甚だしく、遂に後進のともがらをして、むしろ財を擲ちても、強者のしりべに隨ひて僥倖を得んこと冀はしめ、否らざれば、此弊風を嘆きて勇進の氣象を失ひ、自棄自窮に陷らしむること往々にして之あり、何ぞその害毒の甚だしき、斯の如くんば假令ある方面には、孤兒、勞働者、病者の如き人目に觸れ易き者に對する慈善事業は婦人の助力に依りて益々行はるといへども、何ぞ其志を稱するに足らん、況んや敎育者間に於てすら收賄の聲高く、後進者の幸不幸は、實に此秘密手段の巧拙に因る者なりなど聞きては、啞然として云ふ所を知らざるなり、願くば先覺として勢力ある婦人は自ら省みる所ありて、人を擧ぐるに吝ならざるべし、後進者を助けて、其才能をのぶる餘地あらしむべし、貧富貴賤の懸隔を去りて、人類同愛主義を實行すべし、又中流以下の婦人、或は今より世に立たんとする妙齡の女子等は、必ず勢力ある者に媚びて吾が位置を得んとする卑劣なる心を去り、二十世紀時代に於て、社會の弊風を一新せんとの決心を以て立つべし、獨立獨步の精神を養ひて、上流者と先覺者との助力を仰がざらんやう勉むべし、かくて上下志を等しくし、年長けたるも若きも、力を合せて世の惡習を改め、公行を益せんことを計らば、躬行實踐の功、果していかばかりなるかを知らず、

さるにても猶顧みうすき者は、今より大に奮ふべき妙齡女子、所謂女學生の無氣力無精神なり、敎育と云ふことは、悉く學校に關

するものなりと誤解せられしより以來、學術技藝の一端を修めても、猶且つ教育ある者の如く信ずるに至り、今や東西南北より、都下に集まる學生は兀々として書を讀み、區々として技を磨くといへども、其意は只復日一藝を以て身を立てん事を望めるに過ぎず、畢竟心を身の役となす者なり、然るにこれすら猶什の三四に過ぎざるなり、其六七に至りては、奢侈、怠惰、淫に靡流れて、何故に學び、何故に益深く究むべきをも思はざる者なり、況んや其他の問題をや、無氣力無精神に非ずして何ぞ、他日國家の裏面に活動して、其進運を助くべき婦人の精神は、豈かくの如き者あらんや、されどこれ強ちに學生のみを排すべからず、若し其父兄教師等、殊に女流の先覺者等が、誠に自ら率先して躬行實踐の則を示し、精神の教育と人物の養成とを最も大なる目的として、平常趣味せまき學理の說明の外に、研究すべき問題を、活動せる世の實例に取りて、之に對する意見所說を抱かしめ、或時は已れ保護者となり、獎勵者となりて、公益慈善に關する美擧を行はしめて、人間の快樂は、眞に公益慈善を計るにありとの觀念を、年若き頃より深く其心裏に養はしめなば、自ら奢侈、怠惰の風は改まり、精勵篤厚、博愛の人と化せん、將來國家に有益なる婦人を多く生ぜしめんとには、實に女學生時代より其精神を堅固ならしめざる可からず、智識ひろく、感情鋭く、敢爲忍耐の氣象を養はしめざる可からず、又直接に社會の事物に接して伎倆を著す事に慣れしめざる可からず、かゝる良習慣の中に成長せし女子が、他日人の保護を脱して、最も自由に、最も活潑に其意志を貫きて、躬行實踐の功を擧ぐるを得ば、然る後にこそ社會の改良は遂げられ眞の國家の進運も計り得らるゝなれ、されど無意見無精神なる女學生の間には、未だ曾てかゝる美擧ありしことを聞かず、冷淡姑息なる父兄教師の間には、未だ曾て其子女弟子を獎勵保護して、かゝる實益を行はしめしことあるを聞かず、却りて稀に年若き者がかゝる事いひ出づれば、或は時猶早しく戒め、或は生意氣なりと叱して、制肘拘束するは、其意を得ざるなり、冀くは今後の日本婦人、殊に母たる人、必ずかゝる舊思想を脱して、吾が子女弟子の先導となり、保護者となりて、婦人に適功なる社會の事業に預ることを辭せざるやうあるべし、又年若き女子、殊に女學生等は必ず無意見無精神にして、自ら教育ある者と誇ること勿れ、學窓にのみ呻吟して、實用に疎き讀書家となること勿れ、學校と社會とは決して別天地に非ざるなり、靜に考ふれば社會には、吾が修むる學理智識の實例となる者極めて多ければ、此二つは必離れざる者と知りて、出來得べき限りは、學業の暇を以て、其身と其年齢とに適ひたる世の益を計らんことを企つべし、期くの如くにして進み、斯くの如くにして婦人の價値を顯し、以て我が國の勢力を隱然として保たずんば、學理的の進步も、物質的の進步も到底望を属すべからざるなり、

女學用問題

近時女學生の風紀に關し世論頗る喧しく、警視廳に於ては女學生の不良なるものに就き、頻に之が取締の法を講じ或は着々檢擧し、制裁を加ふるに至るべしと云ふ。惟ふに府下各女學校の當事者概ね在學生徒の取締に關し、注意を怠らざるもの丶如く、在京女學生の大多數に在りては更に世間の指摘を受くべきの行爲なき疑ふべからず。偶々或は事情の爲めに一部の自暴自棄に陷るものあり不良の群に投じ醜聞を發つに至る、若し之を全體と比較せば極めて少數たるべきも、女學生の風紀問題は其弊徒に大なるを致し竟に多數女學生をして間接に不名譽を負ふの不幸を見るに至らしむるもの丶如し。凡所謂不良女學生中に就ても、若し仔細に觀察すれば情狀の酌量すべきもの或は容易に改悛の望あるものもあるべく、吾曹は警察官の風紀取締上之に臨むに當り出來得る限り穩便の手段を取り女子として拭ふべからざる汚辱を受けしめずして之を救ふの道に出でんことを希望せずんばあらず、

今や我邦の風俗慣習は方さに過渡の時期に在りて、男女の干繫に關する弊竇多く起る丶も新たなる禮法未だ立たず、質朴なる地方を去り志を抱き帝都に入る幾千の女子をして、設備取締の完美せる女學校若しくは寄宿舍に入り又は親戚知人の家に寄宿するもの丶外は、普通一般の下宿屋に投じ乍ち危險の境遇中に身を置くに至らしむ。各學校をして其在學生の爲めに更に十分なる寄宿舍の設備を爲さしめ又は責任ある人の經營に依れる寄宿舍の創立を待て、多數の女學生をして普通下宿屋に入るの危險を避けしむるの道を拓くは朝野有志家の當に大に考慮すべき問題に非ずや。更に一歩を進めて之を論ぜんに、女子をして高等教育を受けしむべき學校の不足なるが爲め、多くの入學試驗に落第するものを出し失意に陷らしむるは即ち外界の危險と相待ちて不良女學生を出すに至れる一原因と云ふべきが如し。若しも或る論者の希望するが如く全國の女學生をして高等女學校卒業を以て滿足し、更に高等の教育を要求するなからしめば、乍ち今日の惡た根本より救ふを得べきも、是れ言ふ易くして行ふべからざるの事たり。天下の勢は一二論者の左右し得べき限に非ざればなり。最近の統計に由れば全國に於ける高等女學校に在學するもの總數は約二萬五千人にして、男子の中學及實業學校に在學する十九萬人と比較せば七分一に相當す、今後女子教育の進歩に伴ひ全く男女同數に達せざるも、試みに全國高等女學校の在學者をして中學及實業學校在學者の三分一に達すと假定せば、高等女學校の卒業生中更に高等の教育を希望するもの今日に倍するに至らんこと知るべきなり。即ち今日に於て既に高等教育を授くる如きの設備甚だ缺如たるものありて、間接に在京女學生をして或は身を誤らしむる一機因を爲せり、此より三五年以後の狀態を思ふに於て吾曹眞に寒心に堪へざるものなくんばあらず。

要するに唯今世間に喧しき女學生の風紀問題は稍誇大に失するの嫌あるも、現時の狀態は幾多の在京女學生に取り危險甚だしきものたるは否むべからず。之を救ふの道寄宿舍の設備を十分にし、更に高等教育機關を擴張し、以て綽々として多々益々多きの女學生を收容し遺憾なからしむるは殆ど唯一の救濟策と謂ふべきが如し。同時に地方に於ても高等教育の設備を爲し一に東京に集るの弊を除く亦一策ならずとせず。吾曹は文部の當局及一般教育家の能く時勢に鑑みる所ありて積極的救濟の方法を講ずるに努めんことを希望するや切なり。

（東京日々）

女子と國家

法學博士　高田早苗

世の中の開けない時分即ち野蠻曚昧の時代に於ては、何處の國でも、女子を尊ばなかつた、啻に尊ばなかつたのみならず或は男子の財產であるかの如く見做し甚だしきに至つては、殆ど奴隷扱ひをした事は、東西共に未開の世に於ては、何處も同じ有樣である、所が漸々世の中が進むに從つて、女子を尊敬すると云ふ事を知つてくる、從つて其の權利を認むると云ふ事になつて參つたのでありますが、偖て其の女子の私權を認むると云ふ事は、餘程古い時から行はれてをるが、女子の公權を認めると云ふ事は、今日に至つてもまだ充分でないと云ふ有樣である、漸々調べて見ると、初めて女子に公權を認めなければならん、女子も矢張男子と同じく、國民の一部分であるから、例へば選擧權利の如き參政權を女子に與へるが宜しい又どうか之を與へて貰ひたいと云ひ出して、夫れが一つの問題となつたのは、佛蘭西の革命の時である、佛蘭西の革命の時に、當時の議會に向つて、始めて其請願を出たから、漸々議論としても其問題が喧しくなつてきまして、一方に於ては女子の公權を認めて、選擧權其他を與へなければならぬと云ふ議論があり否夫れには及ばないと云ふ議論であつて、今日に至るまで學者や實際家の意見が、二つに分れてまだ定まらずに居る、どう云ふ議論があるかと云へば、英吉利の學者で頗る女贔負で、女子にも權利を認めねばならぬと云ふ事を、主張したのは、ゼーエスミルと云ふ大學者である、其論點は、女子と云ふ者は男子と同じく支配さる可き權利がある、さうすれば女でも代表者を出すの權利がなければならぬ筈のものである、また次の理由としては私法と公法との間に撞着してをる、既に私法に於ては婦人の權利を認めてをる、所

が公法の方では認めないのが不當である、女子と雖も男子と同じく、納税の義務があるではないか、既に納税の義務があれば、參政の權利を認るのは、相當ではないかと云ふ事を云ふてある、又女子の政治上の權利を認めないと云ふが、國によつては、女子を王樣や天子樣に戴いてをるのはをかしいではないか、女子を天子樣として戴く事が出來るなれば、夫れより低い地位の役人に女子をしやうとも、又代議士にしやうとも、敢て差支はない筈である、況や選擧權の附與位は元よりではないか、君主に婦人を戴きながら、同じく婦人に參政權を與へるの與へないのと云ふ事は、迚も問題にはならないではないか、又女子に參政權を與へると云ふ事になると、國家の柱石である最も國家に取て大切のものであるところの家長の權利が增してくるわけである、これは國家に取て結構な話である、何せさう云ふ事を申したと云ふに、一家の妻君と云ふものは、必ず良人と同じ樣な政治上の意見を持つであらう、一家の娘と云ふものは父と同じ樣な意見を持つであらう、さうすると家長の政治上の權力が增して來る譯であるから、夫れは國家に取つて非常に利益な話である、夫れから女子に政治上の權利を表立つて與へないと、却つて害がある、なぜなれば女子と雖も或は政治思想を持つものだから、若し表面權利がないと、其權利を隱れて遣ふ事になる、隱れて遣ふと無責任になつて、其結果婦人が政治に關係する爲めに種々の害毒が流れる事になるから、寧ろ表立つて政治の事に預からしむる方が宜しい、斯う云ふ樣な風に、議論が種々ある、所が之は女贔負の議論で、一方に贔負をする者があれば、一方に反對する者があるのは世の中の常である、隨分立派な學者で、此意見に反對をして居る者が澤山ある、其說はどう云ふ事であるかと云ふに、先づ婦人は男子も同じく支配される權利があるから、代表者を出す權利があるではないかと云ふのは、抑も間違ひである、支配されると云ふのは消極の事で、代表者を出すなどは、之は積極の事である、代議士を選ぶ樣になつて來るには

選ぶだけの眼がなければならぬから、夫れだけの智識を女子が持つて居らねばならぬだから其智識が進まない以上は、此權利を與へるのは反對であると云ふ説がある、夫から私權を認めて公權を認めない、財産所有の權利は認めながら、政治の事に關係する權利を認めない、一方にあつて納税の義務を負ふて居ながら、其租税の事に關係する事が出來ないと云ふのは不都合だと云ふ論であるが、之も亦間違つてをる、詰り此私權を許してあれど、公權を許して宜からうと云ふのは、所謂五十歩百歩論で、五十歩と百歩との差を知らない議論である、五十歩百歩と一口に云ふが、五十歩と百歩とは自ら其間に五十歩の違ひがあるので、私權は許しても公權を許すには、未だ五十歩かなければならんと云ふ事を知らない、即ち租税は國民として拂ふ可き義務があるから拂ふので、其お釣りに權利を貰ふと云ふ事が必ずしも附帶して居る事柄でないと云ふ説がある、夫から女子を天子様に戴く國はありながら、女子を政治上の事に關係させないのは撞着の樣であるが、之も能く考へて見れば、決してさうでない、況や女子を天子或は君主に戴く事は、世界何處も彼處もさうかと云ふに、決してさうでない、英吉利、露西亞などは、女子の天子を往々戴くけれども、羅馬法を土臺として居る國、若しくはサリツク法に依る所では、女子を天子様に戴かせる事はないのである、何方かと云ふと、世界に於て女子を天子に戴く所は少い、日本の如きも、憲法が施かれて以來、男統の男子皇位を繼承すると云ふ事に定つて、將來女帝はない事になつた、之も歴史を調べて見ると昔は日本にも數多女帝が在したけれども、憲法に依つて女帝はないことにどうしてなつたかと云ふに、蓋し其の理由を推測して見れば、古から女帝が御即位になつた場合は、何か事情があつて、變則の場合の方が多いのである、例へば皇太子が未だ幼沖に在すとか、或は又さうでないにしても、外戚の關係からして女帝が御即位になると云ふ事が多くつて、普通の場合に御婦人が皇位を相續されたと云ふ事は先づ少ない

と云はなければならん、さう云ふ所から、詰り憲法が出來て今後は、男統の男子が皇位を嗣ぐことになつたのである、何故婦人が皇位を嗣ぐ事が外國あたりに例があるかと云ふに、夫は一家と云ふものと、一國と云ふものとを混雜した所から起つた事で、即ち親のものは子に傳へると云ふ一家の相續觀念が其處に至らしめた原因で、實は本當の遣り方でないと云ふので、前の議論に反對して居る、又一の論は、女子が政治の事に關係すると、女子と云ふ者は元來感情的の者であるから、政治上の事が總て感情的になつて不可ぬと云ふ論もある、又其次の論は一體婦人の本領と云ふものは、家庭にあつて、若し其家庭を出でゝ政治上の事に關係すると、所謂婦人は自分の本領を沒して仕舞ふ事になると、かう云ふ論もある、其他種々の論があるが、凡そ先づ左樣な事で、一方に於ては婦人を國民として認め、何處までも政治上のこと、何事でも男子と女子との間に、所謂男女同權で差別を附ないと云ふ、一方には此差別を附けた方が宜しいと云ふ二つの議論がある、其處で今日私の御話をする要領は、この二の議論を比較して、何方かに軍配を上げると云ふのが目的ではない、容易に其議論の判斷はつくものではないから、爾う云ふことを企てるではない、唯凡そ婦人と云ふ者は直接には公の事に關係しないとして見ても、亦或はさせない方が好いと一歩讓つて假定して見ても、間接にはどうしても、此關係は逃れられないものであるから、婦人たる者は何人に拘らず矢張公に對する思想を始終持つて居らなければならぬ、

前の如く權利の方から云ふと、婦人には直接の權利がないと否定する反對論者が出て來るかも知れないが、併ながら斯くの如き反對論者も男子を經て、間接に婦人が國家に權利がないと云ふ事は云はない、兎角直接には權利を認めない方が宜からうと云ふ論者は澤山ある、又之を言語を換へて義務と云ふ方から云ふと、婦人も男子と同じ樣に、國家の保護を受けて居る者に相違ない、男子と同じく保護を受ける者とす

れば、矢張男子と同じく國家に對する義務があると云ふことは、何人も爾うでないと云ふ事は云はれないだらうと思ふ、故に是れは義務と云ふ方から說いた方が早いので、國家があつて、其保護を受けて居ればこそ各々が今日安穩に世を送つて往くのである、是れに對する義務のあるのは男子許りではない、婦人も夫れ相當の義務がなければならん、或ひは其義務を盡し方が男子の如く直接でなくつて宜しいかも知れない、旣に權利が直接でないと云ふことであるなれば、義務許り直接でなければならんと云ふことはないかも知れんが、確に間接に義務を盡さなければならん譯であらうと思ふ、そこで婦人が國家に對する義務は、どう云ふ方法を以て盡したら宜しからうと云ふに、又盡すべきが當然であらうかと云ふに、先づ種々遣方も有らう、隨分其婦人に依つては、三寸不爛の舌、或ひは一枚の筆を取つて、國の爲めに盡した婦人はいくらも有る、殊に筆の上で國家に大なる力を盡した實例は、文明諸國には澤山に有る



例へば佛蘭西のマダムステールは、其筆力を以て、ナポレオンに抗抵して居つたが、ナポレオンは實に此人を恐れて居つた、又ハリエット、イー、ビー、ストー、夫人はUncle Tom'sと云ふ小説を書いて奴隷廢止論を主張して大に亞米利加の輿論を喚起した、南北戰爭に因て奴隷廢止の實を擧げたのは、大統領リンコルンの力もあるが、ストー夫人の筆力與つて大なりと認めて居る、私も其書物を見たが、私が色々西洋の書物を讀んだ中で、此書物を讀んだ時程感動したことはない、眞に其書物を讀んで見れば、人間の自由の味と云ふものはどの位のものか、自由を失つた者の苦しみはどの位のものかと云ふことが解かる、そんな樣な働きをして國に盡した婦人もある、けれどもそれは十人が十人に望まる可き事柄でない、國に盡す手段としては、十人が十人ながらに誰にでも望まるべき方法でなければならんと思ふ、先づ一般婦人が國に對して盡すべき方法として、最も穩便なり、最も健全なる、最も大切なる仕方と云ふのは外ではない、詰り其の國民養成と云ふ事であらうと思ふ、未來の國民を養成すると云ふ其の責任は、婦人の側に擔ふて貰はなければならぬ事であらう、何れの學校でも、個人を敎育すると云ふ外に、國民を敎育すると云ふの意で、敎育を施してをるのであるが、決して此學校敎育のみで完全な人間の出來上らう筈がない、家庭と云ふ者の力が、與かつて殊に大なる事を、何事についても今日は認められて居る事柄であるが、此の家庭敎育の一分として、即ち家庭の主宰者たる婦人が、將來の國民たる所の今日の小兒に國民的敎育を與へよ、即ち未來の日本國民を負ふて立つ人間を養成する此責任は、婦人たる者は、國家の保護に預つて、安穩に生活し幸福を受けて居る報酬として、是非共しなければならん所の事柄であらうと思ふ、之れ丈は何人も異論のなかる可き筈であつて、殊に又此點に付て力を盡して貰ふと云ふ事が、外の總の事よりも尤も効力のある事であるのは、論を待たぬ、夫で國に盡す方法として未來の國民を養成すると云ふ事は尤も婦人の望む可きこ

とゝして、此義務を盡すには盡すだけの平生の素養がなければならん、例へば國に報い君に忠を盡す、所謂盡忠報國と云ふ樣な大體論に至つては、何人も異論のない事で、さう云ふ方針で小供を育てるにも、將來國に盡さんければならん、君に忠を盡さんければならんと云ふ方針で、家庭敎育を遣つて行けば宜いと論ずれば、誠に簡單で有るが、如何にして國に盡す可きものであらうか、どう云ふ方針で遣らなければならんかといふことになると、問題が大分六ケしいことになる例へば、天子に忠を盡すのは大切であるとしても、今日の二十世紀になつて、湊川で討死をするばかりが必ずしも忠義と思はれては困る、時と場合とに依ては、楠の方法で、忠義を盡すのも宜かつたが、今日國の爲め君の爲めに盡すは、二十世紀の、此時世に適合した方法で國と君とに盡す義務を取らなければならない譯であると云ふ事だけは、よく平生より承知して居らなければならん事である、さうすると、一歩進んで今日以後の國民と云ふ者は、どう云ふ働きをするのが一番國の爲めになるかと云ふ事を御婦人の側でも、大體の事だけは、常に腦の中に入れて置いて貰はないと自分の子供を育てる時に見當が判然と立たない、方針が漠然として居ると、將來國の御役に立ち君の御爲になる人間が出來上らんと云ふ心配があるので從つて今日の時世に於ては男は勿論の話であるが、女も亦世の大體に通ずると云ふ事は最も肝腎で、一體日本と云ふ國を盛にするのはどう云ふ方針で行くべき筈のものであるかと云ふ位の極く大體の事だけは腦の中に這入て居らんと、子供の敎育は出來ませぬ、子供も立派な國民になれぬ、其方針、一體今日の國民は誰でも彼れでも今日以後の國で取らなければならんと云ふことで即ち日本國を盛にする方法手段と云ふ事に付て述べて見やうと思ふ、即ち家庭敎育に多少の參考ともなれば此の上もない事で有る、之は誰も異論のないことであらうと私は思ふが、今日から先の日本人がしなければならん事が二つある、どう云ふ事かと云ふに、世界的の活動と云ふ事、之はどうも

今日以後の日本人が是非しなければならん、モウ一つは少し話が六ケしいが、即ち憲法の維持、憲法政治の維持と云ふ此二は身分の上下に係はらず、男女の區別に係はらず、誰も彼も皆國民として取らなければならん方針であると私は平生から深く思ふて居る、第一の事は世界の大勢を話せば譯もなく解る、今日の世界はどう云ふ有樣であるかといふに、皆分捕主義の時代、斯う云ふ有樣である、今日は西洋各國は非常に強いものとしてあるが、今からして百年若しくは五十年以前の有樣を云つて見れば、國の內が纏らなかつた、國內の整理に忙しくつてまごついて居つたが、今日では其整理が充分について國の外に手を出す餘地を生じ所謂帝國主義を實行して、世界中に手を出して、人の土地を奪ふべきものがあれば之を奪はふではないか、商賈の取る可きものがあれば、之を取らうではないかと云ふ考へで、世界に向つて手を出すことになつた、さうして同じ手を出すなれば割の好いところに手を出すがよいと、段々調べて見れば、支那と云ふ所が一番割が好いと云ふことが、算盤の上から分かつて來た、何故支那が一番割がよいかと云ふに、天然の富が支那程充分な所は世界中廣しと雖もあまりない、獨逸の鑛山學者が調べた所に依ると、淸國十八省の一なる某省の地の下に、埋沒して居る石炭の噸數は、此れより以降二千年間、世界で遣つて尙ほ遣ひ切れん程のものがある、尤も地の下で埋沒して居る物で、しかとわからぬと云へばそれまでゞあるが、併し是れは素人の話ではない、專門の鑛山學者が、本國への報告であつて彼の調べは掛直であると見積つても、世界中で千年近く遣つても餘りある石炭が支那の十八省の一だけの所にある、之程支那は天然の富のある所、併し天然の富があつても、勞力が之に伴はなければならんのである、夫れには誂へ向で、支那も其勞力は四億萬五億萬と云ふ人民の、其長所を云へば、口惜がらぬと云ふのが彼の長所である、支那も上流の人は、さうではないが、下等の勞働者になると、多くは爾う云ふ考を持て居る者が澤山あるから、

此勢力を遣うて石炭なり、金なり、銀なりを堀出せば、之程えらい商賣はないと、歐羅巴諸國は皆涎を流して、支那に向つて來た宣教師が殺された、さア膠洲灣をよこせ、旅順口を取る、威海衛をよこせ、段々氣が大きくなつて、長江一體は我勢力範圍だとか、滿州全體は姑く借用すると云ひ出した、貸ても好いが、是は返さないと極つて居る、所謂之は貸し下されであるといふことは明かである、先爾う云ふ樣な大勢で何處にか手を出したい、帝國主義を實行したい、爲らうなれば割が好い所を、支那が一番好いと定めて、多くの人々が背向河岸の支那に目をつけ、分捕に係つて居る時勢なのだから、之から先の日本人は此列國に對して何とか思慮をしなければならんと云ふことになつた、即ち指を咬へて引込んで見て居る事は、どの道出來ないと云ふ事になつた、出來ないのみならず、どうかさう云ふ事は廢めて貰ひたいのである、次に段々調べて見ると、此日本と云ふ國の人間が追々多くなつて、遂には居る所がなくなる程の有樣である、何でも日本の人口は、年に四十萬から五十萬增加して行く、此割合で增加すると、今日では四千萬同胞と云ふが、百年の後には少く共一億萬同胞と云ふ位に增加するのが明かである、今日でも文明諸國の中で、日本程人口の餘計な所は尠ない、一平方キロメートルに百二十人の人が居るのは、日本と英吉利である、併しながら英吉利の本國は日本よりも山が少ない、日本では土地が狹い上に、三分の二は山や谷で、其の三分の一丈の所に四千萬同胞が住んで居るので、今日さへ人口稠密であるのに、四千萬が一億萬二億萬と云ふ樣になつた日には、人間の遣り場がなくなつて來るのみならず、食物が缺乏して來るから、どうしても終には坐つて居ては食へなくなることが算盤の上に明かに分かつて居る、坐つて居ては食へないのみならずお加けに向河岸の支那まで歐羅巴の諸國がやつて來て、分捕を始めると云ふのであるから、グツ〳〵引込んで居ると、遂には手も足も出せない樣になつて仕舞ふ、かるが故に日露戰爭も起つたのであるがこの

上は平和的に、世界の眞中央に乘出し、交るべきは交り、親むべきは親み、爭ふべきは爭うて、出來るだけ多くの權利、多くの利益を占めて行くと云ふ方針を取つて遣るより外に遣り方はないのであるから、能く世界に出て働き、能く世界的の事業をなし得る樣にし、內にばかり引込んで指を咬へて居る樣な意久地なしではない人間を養成することを考へなければならぬ、此事が成就するとしないと、此方針が立つと立たないとは、即ち日本國の興ると亡びると、盛なると衰へるとが分かれる所であるから、之程大切なことはないので、どうしても、男子も女子も總係りになつて、敎育家は勿論、家庭を預る者も未來の國民を仕立てるのに其方針を取つて育てなければならぬ、さう云ふ風にやつて行けば、畢竟婦人が日本國と云ふ國家に對する義務が盡せる譯である、啻に空然と君に忠を盡し、國の爲に殉ずると云うた所でどうか云ふ見當をつけて好いか分からないで、今更楠の眞似をしても仕方がない、夫は外に對する方法であるが、外に對する見當が附いても、夫れのみで決して國は盛になるものではない、外に目が呉れて內を忘れて仕舞ふと、今度は內に騷動が起つて、とう〱外には手も足も出せないことになるのは、歷史上いくらも例證のあることであるから、此方針の外にモウ一の方針が必要である、夫はどう云ふことかと云ふに、前述の立憲政體の維持と云ふ事である、此政體の最も大切なる事は云ふまでもなく、明治二十二年の紀元節に聖天子が勅語を賜はつて憲法を發布し給ひし其折の詔勅を拜讀して見ると解かる。

朕及び朕の子孫は、長く此憲法の定規に依て誤なき事を契ふ、汝國民及び國民の子孫は憲法の負はしむる負擔に堪ふることは朕が信じて疑はざる所なり

と云ふ勅語がある、そこで憲法と云ふものが、結構なものであればこそ、聖天子より詔勅を賜つて、今日行はれて居るのであるから、夫をどこまでも維持するより外に內の平和を維持する方法はない、所が

立憲政治と稱するものは、一人二人では何しても行はれない、多數の人が一致しなければ遣つて往けないものである、機械で例をとると、例へば糸繰機械、昔から日本にある所の其れ等の機械は、田舍の婆さんが使うても間に合して行ける、別段夫に付て技師に敎へて貰はなくつても出來る、所が今日佛蘭西から渡來した機械になると、素人が使はうと思うても使うことが出來ない、いくらか研究し技師に付て習はなければ出來ないと云ふことである一體一國の政體、政治の機關は詰り機械であるから、昔の專制政體と云ふ、君主が國民を奴隷の如く取扱つて居れば好いと云ふことであれば、誰にも出來るが、立憲政體になると、少し機械が進歩して居るから、研究し修業しなければうまく使つて行くことは出來ない、敎育を授けるものは、學校でも、家庭でも、憲法政治の下に立つて差支ない處の國民を仕立てると云ふ心掛がなければならん、此點に付いては、國民敎育と云ふものが充分でないと往けない、總て今日の世中は選擧と云ふことが行はれて居る時代であるから、選擧をするにも、選擧するだけの頭がない爲、惡い者を選擧すると云ふ樣な事が出來る、さうすると、國會にしても、府會にしても、市會にしても惡い者を選擧すれば勝手放題な惡いことが出來る、爾う云ふ風な弊害が起つて來ると、遂には國家の滅亡の原因たる一になる、善い人間を擇ぶ腦があつて、國民が選擧を大切にする樣になれば、丁度前と反對に國民の代表者として、出て往つた者が、政治の事に携つて、國家は益々盛になる、さう云ふ樣にさせる爲に、天子樣が憲法を下し給はつたのである、汝臣民及び臣民の子孫が此負擔に堪へることは疑がないと思召したる上に憲法と云ふものは制定せられたのである、併ながら一人二人が何を考へ何を思つても到底憲法は立派に行はれて行けるものではない、大勢が一致して往かなければ、負擔に堪へる譯には往かんのである、聖天子は國民が此負擔に堪へる腦力があると信じられて、此政體を與へられ憲法を施くことを仰せ出された

のであるから、其聖意に悖らない樣に敎育の上からも國民の腦を拵へていかなければならぬ、選擧をよくやると、惡くやるとは國が盛になると亡びるとの境であります、夫れ故に家庭では子供に對して、人は誰れでも大人になれば大なり小なり選擧を行なはなければならぬ、選擧權利と云ふけれども實は選擧義務と云ふもので、天子樣に對し國家に對して、國民の義務を盡すのである、其權利は權利と云つても私權ではない、公權であつて、私の權利なれば私の目的に使つても好いが、私の權利は公の目的にして使つてはならんから、何でもお前達大きくなつて、男子たるべきものは權利を行うのであるから、若し之を六ケ敷云へば齋戒沐浴して折角憲法を下し給つた思召に違はん樣に大切に選擧を行はなければならんものぞ、之が立憲政治の尊き處であるぞと云ふことは、之はモウお母樣たる者が子供の腦の中に、小さい時から入れて置なければならんものである、又爾うしなければ立派な國民が出來上らない、立憲政治の基礎が强固であつて、內に國家の平和を維持し、外に出ては、世界の眞中央に乘出し、彼も人なり我も人なりと云ふ意氣を以て、日本國民が大なり小なりの仕事をして行く人間となる樣に仕上げなければならんのである、對外の活動と、憲法の維持とは車の兩輪鳥の双翼で、此二の事を敎へて國民を養成し國家を盛にすることを考へなければならぬ、此國民養成、家庭に於て國民を養成すると云ふことは、何人の義務であるぞ、即ち婦人の義務である、婦人と云ふ者は、權利の點から云ふてはどう云ふ者か知らぬが、義務と云ふ點から觀察して見れば、矢張國家の保護を受けて居る以上は國家に對する、義務がある、自から活動して働らかなければならんと云ふ直接の義務迄は負ふべき者であるか、負ふべからざる者かは、一問題であるが、恐らく國民養成、敎育と云ふ方で間接に國家に盡すべき義務のあることだけは誤りないとすれば、其等の方針に付ても考へて置かねばならぬ、之を要するに今後も婦人が家庭の主宰者たることに付ては、異論は

ないが、昔の如く家の事ばかりして居れば宜しいと云ふことは出來ない、兎に角家の中に引込んで居ても、思想だけは世中の大體に通ずることにならなければならん、即ち世間の種々のことを承知しないと、小供の教育が出來ない、さうすると個人としての小供は出來上がつても、國民たる小供が出來上がらない國民として立派な人間が出來上がらんと云ふことになると、是は知らず識らず國家に對して不忠に陷る、即ち人の母たる者が、責任を盡すには世間の事は女だから知らなくつても好いと云つて從來は濟んだが、之からは種々の事柄も研究して、其方の智識を養成する事が必要であらう、例へば新聞紙を讀んでも、小說や三面記事ばかりを讀んで居る樣なことでは決して婦人が母たるの義務を盡す譯にはならない、論說政治雜報欄までも一應讀んで、國の政治がどうなつて居るか、外交はどうなつて居るか位の大體の智識を養ふて置かないと即ち婦人の天職を全うすることが、或は六ケ敷からうと考へる、

家庭と演劇

伯爵　柳原義光

家庭と演劇と云ふことを述ぶる前に、先づ演劇に就て世間の誤解を明らかにせねばならぬ、演劇と云へば、その地位が歷史上、その生じたる德川時代に於ては、庶民の娛樂とし、士太夫の觀るべからざる者と成つてゐた、故に俳優も河原者として、世間から擯斥せられたのである、それであるから自然に俳優の人格も卑く、下層の客の歡心を買ふべく、其脚本の如きも、或は慘酷なるものあり、或は淫猥なるものあります〳〵中以上の人に齒せられぬやうになつた、されど中には觀て差支なきのみならず、一顧に價すべきものがないでもなかつた、たとへば人口に膾炙する忠臣藏、菅原、太閤記、先代萩の如きは、武士道を皷

吹し、仁義、忠孝の道を奬勵し、暗々裡に世道人心を益したのである、去ながらその中にも時代が時代故不都合な文句も少くない、忠臣藏七段目に、お輕が勘平の死をば『と丶さんは非業の死でも御年の上、勘平さんは云々』とあるなどは、普通の倫理から考へてもよろしくない、また太閤記に、不義の榮華を誡める例を引くに『天子將軍になつたとて云々』とあるなどは、例を引くにも事を缺いだ不遜千萬な臺詞があつて、國體の上から云つても實に不都合の至りである、此の如き取り除けはあるがたしかに此等の藝によつて、士以下のものは、仁義忠孝の道を敎育されたことは疑を容るべからざるものである、然らばその當時上流の人の娛樂はといへば、將軍家に於ては能を以て式樂と定めた、故に能は高尙なものであつて、演劇即ち芝居は劣等のものであるといふことに、歷史の關係がさせたのである、

乍然藝術の眼から見れば、演劇は美術上最も優等なものである、如何となれば、演劇には三つの要素が完備せねばならぬ、第一繪畵（書割、衣裝、道具建等）第二音樂（鳴物）第三文學（脚本）の三者に依て成立し、その產出物を舞臺面に活動せしむるのであるから、演劇が藝術上高き地位にあるべきことは、具眼者のひとしく認識する所である、

然るに演劇は前述の如く、過去の歷史がよくなかつた爲に、行がゝり上の關係を一洗して、相當の學識ある人が作つたる好個の脚本を、人格の賤しからざる俳優によつて演ずるやうにせねば、到底演劇の地位を高めることは出來ぬ、

能は高尙なる者といへど、足利時代の僧侶が佛法の因果應報の理を人事によせて作つたものであるから、その脚色は殆んど千篇一律、文字の上からも、藝術の上からも、全く趣味を感せぬものでもないが、さりとて餘り面白いものとも思はれない、はじめ讀經の節が、平家琵琶に傳はり、またそれから轉じて謠

曲が生れた者で、不自然な、頓狂な聲を出し、舞を助けて居る、之は演劇と月鼈もたゞならぬ差である、現時の劇界は恰も名優團菊死後一區域を劃せられ、新時代の要求に應し得べき相當の人格もあり、技藝ある俳優がなければならぬ、在來の俳優は在來の芝居を演ずるには適するのであらうが、所謂時代の思潮に適した、新脚本を演ずるには往々適當せぬ場合がある、そこで近頃文士劇など云ふものが勃興し、追々革新の氣運に向つたが、これもまだ成効の域には遠いのである、中原の鹿は誰の手に落つるであらうか、今日の所ではわからない、

從來の行がゝり上、能を演ずれば人品がよく見え、芝居を演ずれば人格を下等視せられるのである、併しながら、足利時代、桃山時代に於て、演劇の出來るまでは、能も其の當時に於ける一種の演劇として娯樂に供してゐたに違ひない、たゞ出產の時期の遲かつたために、下品といふことであれば、演劇よりは能樂、それよりは平家、平家よりは更に催馬樂、朗詠等が高尙なものといはねばならぬ、然しながら決して古物が高尙とは定まつて居らぬ、文學史上和歌は古いもので、俳諧は近世のものであるから、俳諧は卑調なものとは決していへないのと同じ道理である、皆それ〲本領があつて、その品格の高下を比較すべきものではない、要するに能の如きは今日では殆んど藝術上に於ける骨董品で、あまり奬勵すべき程のものではない、只前代の遺物として保存すれば足るのである、

さてこれより論旨に入るが、家庭に於て共通の娯樂は何であるかといへば、演劇に如くものはない、かく云へば偏屈な道德論者は驚かるゝ向もあらうが、それは從來の行がゝり上、演劇の如きものはと排斥する愚論なのである、

單に趣味又は娯樂と云へば、文學詩歌、小說等がよいかもしれぬ、併しそれを娯樂として味ふには相當

の頭腦を要する、また繪畫彫刻も娛樂として良いのであるが、それには矢張相當の眼識がなければならぬ、單に鳴り物もよいがこれには相當に聞わける耳を要する、然るに演劇は、頭、眼、耳の三方面に訴へて快感を覺ゆるもので、その範圍も廣ければ、種々の趣味がある、しかも老幼男女貴賤一般に通じて早解りのする者であるから、之を家庭の樂みにすることに力むるは、策の得たるものであると考へる、

各種の藝術を悉く道德の鑄形に入れやうとするは、少く無理な注文であるが、從來警察に於て取締つて居る方法の如きは大贊成で、警察が見て許して置くものは、家庭で見ても差支ない所まで行かねばならぬ、併し普通の芝居は複雜なる人世の事態を演ずるのであるから頭の發達せぬ小供には別にお伽芝居の如きものを見せるやうにしたい、

又一般の家庭に於て演劇を演ずるのも面白い事と考へる、芝居と云へば直に目をむいだり口をゆがめたり、妙な身振りをする者と早合點してはならぬ、父母兄弟親子の間に於て演じて差支なき脚色は澤山ある、芝居とか演劇とかいふ名が惡いのならば、一種の表情話術として演ずればよい、故に名も強ち演劇とせずとも表情對話としても、差支ない、

幼兒が唱歌を謠ふにしても譬へば『桃から生れた桃太郎』『むかしむかし浦島は』といふ唱歌の如きそれに單純なる手眞似かあるが、その手眞似が一種の表情法となつて、幼兒をして愉快を感せしむるのである

私は先年亞米利加で精神病院創立紀念の假裝行列があつたのを見たが、病の輕い患者は喜んで之を演じた、此の如き催のあつたのちは、患者の病が必ず何分かは、快方になるとの事を病院の醫者がいつた、つまりこれで考へて見ても表情遊戲は、いかに精神に娛樂を與へるかゞ解る、

日本でも外國公使館員などは、時々演劇即ち表情對話を演ずるが、仲々趣味のあるものである、演ずる

表情對話即ち芝居の筋がよきものであれば、家庭の樂として採用して毫も不都合はない、目白の女子大學校で表情對話を演じたのを見物したが、此の如き催は至極面白く有益であると考へる、要するに演劇は家庭の唯一の娯樂として適當な者と信ずる、勿論娯樂には程度があるから、その程度を越えてはならぬのはいふ迄もないのである、

新春を迎ふ

學習院教授 女學部長 下田歌子

門外には、飾る千歳の松竹、室內には、列ぶる延年屠蘇酒の盃、初日むかふる鶴龜の金蒔繪、富貴の蹤は、其富の光を輝すべき好期と打ちさうぞき、貧賤の民だに、其れ相應の準備して、珍らしく、折目つきたる木綿布子の更衣、兎にも角にも、新玉の年は待ち着け了ぬ、斯くの如く、都鄙上下に歡迎せられつゝ還り來たる年は、たゞ譯も無く、お愛たう、お愛たうの聲に送られながら、はや松の內も、瞬間に過ぎて、役人は官衙に登り、學生は學校に通ひ、商人も職人も、男も女も、みな銘々の業に復せり、嗚呼、光陰の過ぐること速かなる、今更に驚くに耐へたり、去年も斯くして終りつ、今年も斯くして過ぎ、來年も亦將、斯くしつゝ、恰かも、環の糸の繰り返さるゝが如く、たゞ過ぎに過ぎもて行くなるべし、さて、斯く繰り返さるゝ環の糸も、遂には盡きて、紅顏の少年も、忽ち白頭の翁に變じ、無邪氣の少女亦、早く老耄の嫗と化す、惟へば、人生は、是れ一場の夢ぞと、悟り得たる、聖人賢者も亦、均しく北邙一邊の煙と消えて、殘るは、古墳靑苔の色のみならん、然るに、宇宙は宏遠なり、歲月は永久なり、即ち、絶えざる線の如き、この歲月は、幾千萬回々轉しつゝ、太陽の影となり日向となるを、人號けて、夜といひ晝とい

ふも、必竟、是れ、何等の區別あるにあらざるなり、而して、人事上に種々の出來事あり、種々の區別あればこそ、昨日とも云ひ今日とも云ふにはありけれ、この地球の回轉する度數、三百六十五回、太陽を一周し終る、是れを一年と畫りはするもの丶、若し、人事に變遷なくば、更に、去年今年と、區別するの要無きに似たり、さるを、人は、舊年を送り、新年を迎ふとて、くさ〴〵の準備、さまざまの苦心をなしつ丶、まづは年越も事無く濟みて、めでたし悦ばしと云ふ、其大小輕重こそあれ、孰れの國も、亦この社會的儀式を廢すること無き、思へば是れも、小兒の嬉戲に似たるかな、何故に人生は斯くの如く痴なるか、多くは、習慣によりて然るならめど、この習慣は、抑何の爲に造り出だされたるならん、つく〴〵これを惟るに、凡そ、人類は、すべて、進歩を好むものなり、華美を好むものなり、秩序を好むものなり、故に、省て、其己れを視る時、苟くも、欠點ありと悟り、醜惡なりと認るものあれば、直ちに其缺點を補ひ其醜惡を去りて、速かに完備圓滿なる區域に移らんと欲するなりけり、詳言すれば、其學を勉むる者は學べば學ぶ程、彌々其深奥を探らんと欲し、金を集むる者は、集むれば集むる程、益々其多からんことを欲するは云ふ迄も無く、彼れ、盜人の、他の物を掠めて、一つを得れば、尚其二三四五を得んと欲し、譎者の人を謀るも、一人を謀るを得れば、尚數人を謀らんと欲するも、其撰ぶ所、善惡、邪正の區別こそあれ其己れが志ざす方にむかひて、小より大を求め、低所より高所に進まんとするの意あるが爲なり、然れども、人間意志の薄弱なる、往々行は心と相反して、とかくに、其實踐を怠り、恰も、塞の河原に積む小石の、崩れては、また重なり〳〵てはまた崩る丶ことのもどかしさに、自ら其現在が、己を滿足せしむるに足らざるを以て、其舊を送り新を迎ふる、何の區別を置くべき必要も無きに似たるを、其新舊の區域を機に、今年こそはと、各自の心を勵まし、身を働さんと欲するに外ならざるなり、古人句あり曰く、

來年は〳〵といふとしのくれ、

立つ年の初日迎ふるこゝろもて此一年も過してし哉

即ち、この新年拂曉に起きて、汲む若水に手洗ひ口そゝぎ、とよさか登る旭日の影迎ふる程は、殆ど身を變へたる如く覺えて、あらたまりたる心に、改善の實を擧げんとするは大いによし、げに、一年のはかりごとは元旦にあり、とは能く云はれたることなりかし、

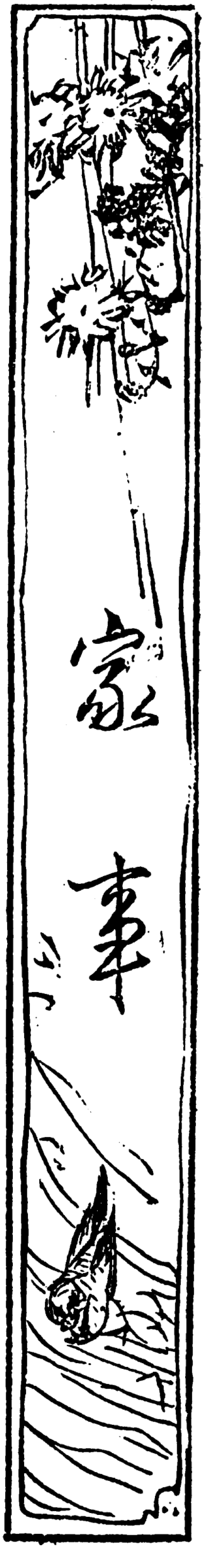
故に、若し、人眞に、年とゝもに改まるの心を以て、能く改善の道に勇進するを得、智者はます〳〵智を磨き、德者はいよ〳〵德を積み、學者は學を勵み、富者は財を殖くせん事を、彌々益々勉めんには、智者は智の力を進め、德者は德の光を增し、學者は尙學識を高め、富者は尙富裕を極め、瘦土も忽ちに沃土と化し、寂寥の里も、須臾にして、繁華の市となるべし、斯くしつゝ年とゝもに新たに進みて止まざらんか、新年てふ者は、實に進步の母にして、改善の動機なり、豈喜ぶべく、樂しむべきにあらずや、さるを、新舊の境域に立てられたる、門松も、旣に撤せられて、また、舊の狀態に復し、はや、新年てふ觀念は失せて、平常の年てふ觀念に移るとやがて其進步を希ふの意氣、又頓に消磨し去り、本年も、去年と變ることなくして、毫も改善の實を擧ぐること能はざらん乎、人間意志の薄弱なる、不善を去りて善に移ることの難きを、深く慨歎せずんばあらず、

我邦、維新の大業成りてより此方、玆に年を閱すること四十年、つとに、歐米の文物を輸入して、事々物々みな革新をはかり、政治は改良せられ、法律は確定せられ、軍隊は整備せられ、學校は創立せられ、國家の基礎やうやく立ちて、凡て、形式的の事は、日に月に、其體面を具ふるに至れりと雖も、是れみな男子の働くべき部分として、女子が領分たる、家庭に對する腦力は如何、社交に對する活動は如何、慈善

及び子女教育の事業は如何、體力の增進は如何、精神の修養は如何、智識の實行は如何、そも亦多少の進歩はこれありしが如くなりと雖ども、其結果をとらへて、これが善惡可不可を論ぜば、蓋し、昔日の日本婦人に遜色無きか、余は、爰に至りて、轉た、慚愧に堪へざるなり、就中、我れら同胞が、人權問題に至りて、若し、これを、詳かに論述し來りたらんには、寧ろ、七百餘年前、王權隆盛時代よりも、今猶遙に低壓せられたりと云ふに憚らざるなり、但し、余は、決して徒らに、外形的、女權の擴張を主張するものにあらず、寧ろ、其質を先にして、其名を後にせん事を希ふものなれども、其、餘りに、われら同胞が、猶、奴隸的位置に沈澱して、其進歩の、遲々逡巡するを悲しむものなり、然るに、今年も、亦、去年の如くしつ過ぎ、明年も亦今年の如くして過ぎ去らん乎、到底我れら、同胞が、進歩改善の實を擧げ、社會の半面を提けて立つの、壯圖を見るの日無かるべきかを歎ぜざるを得ず、

若し、今四十年も依然として、往年の狀態を繰り返すに止まらんか、眞成なる富國の實を擧ぐる難しといふべし

前述の如く、社會の進歩は、其半ばを過ぎず、女子の進歩如何によること、今更言を俟たず、然るを若し、女子の進歩如何に留意せずして、單に、社會の進歩を計らんとするは、恰かも、流砂の上に、家屋を建築するが如く、基礎固からざるの家屋は、よし、其外面の裝飾、いか程、美麗なりとするも、到底、其久しきを保ちて、好果を永遠に見ること能はざる知るべきのみ、西哲云へることあり曰く、女子の程度如何を見ざれば、其國の程度如何を知ること能はず、と、我が國女子が程度の增進を計る、實に刻下の一大急務と云ふべし、故に、余は、號を重ねて、試みに、其方法手段を述べ、以て、識者の高教を仰がんとす、茲に、新年の祝辭に代へて、いさゝか所感を述ぶること爾り



耳の衛生

醫學博士　岡田和一郎

耳の攝生と云ふことは前號記述したる音の衛生に比ぶれば頗る複雜である、而して耳の衛生と云ふことに就て述ぶるに先つて、大體耳の解剖上の事、即ち耳と云ふものは、何う云ふものであるかと云ふことを述べて、それから攝生のことに移るのが順序であらうと思ふから、その說明を致さう、

扨て耳と云ふものは、どういふものであるかといふと、是は、單に頭の兩側に附いて居るところの穴である、さうして其穴は音曲を聞き談話を聞き・外に少々ばかり違つた感應があるけれども、主として音を聞くと云ふ感能の有る部分である、さうして其穴が如何に造られて居るかと云ふと、鼓膜と云ふもので內外の界が出來て居る、其鼓膜はどう云ふものであるかといふと、耳は外から覗くと、穴の突當りに薄い膜がある、吉野紙のやうなもので、少々凹陷して居るけれども、大體は太鼓の皮のやうに張つたものであつて、外界と堺を立て〻居る、ソレならば此の鼓膜と堺して居る所までを耳と名づくるかと云へば、さうではないので、吾々專門學者は此外部の所謂耳翼の所から、鼓膜のある所までの間を外耳と云ひ、此の鼓膜の內方を內耳と稱し、極小なる空處があつて、其內に小さな骨がある、そこを我々が中耳と云ふ、ソレから此の中耳の內壁の骨に、二つの小さな孔がある、此の孔は通常薄き膜で塞つて居るが、これに由つて其內方にあるところの所謂內耳即

ち音響を聞く神經の分布して居る場所（聽神經）と相接して居る、その上細かい所まで說明しても、所詮煩雜に亘るのみであるから、それは止めとして、外耳、中耳、內耳、此の三の部分から成立つて居るもの、ソレを吾々は耳と稱して、外面にある耳翼ばかりを耳と云ふのでない、

以上の三部分から成立つて居る所の耳であるから此の部分に起つて來る病氣と云ふものは、實に非常な多數なものであつて、殆ど枚擧に遑なき位であるさうして是等の部分に起つて來る病氣は、どう云ふ者であるかといふと、ソレは色々あるが、先づ耳の働を惡くする、即ち音響を聞く力を減じ、耳を遠くするのである、若しも以上三ケ所の中に、病氣が起つたならば、多少耳を遠くすると云ふことは免れないのである、若し此の症候が起つて來た時は、即ち耳が遠くなつたと云ふことが起つた時には、折角世の中に音樂と云ふ美術的の學問が發達して、精神を樂ましめるのであるが、之を聞いて樂しむと云ふことが出來ない、ソレから又吾々が相互に言語と云ふものが、天然自然にあつて、是に依つて意思を交換して交際する、併ながら此の耳が病氣によつて働きを失つた時には交際界から遠ざかつて、神授の恩澤に浴することが出來ない、であるから、病氣の種類は措いて、何の病氣でも總べての部分に起る病氣は、皆耳を遠くすると云ふことが伴なつて來る以上は、ソレが爲に天然の幸福を全うすることが出來ないのである、ソレからモウ一つ耳を遠くすると云ふ外に非常に複雜な症候が起つて來る、即ち俗にいふ耳鳴是は耳が絕えず鳴る、世の中は大變に平穩で靜かであつても、已一人は常に暴風怒濤が起つてをるやうに耳が騷いで居る、或は世の中は極靜かであるのに已れの頭の中は、鐘でも打つて火事でもあるかのやうに、二六時中鳴つて居ると云ふやうなことのあるのは、是は病氣が起つたのである、ソレから又眩暈が起つたり、或は胸が惡くなつて食物を吐いたりする症候も、亦此の耳の病氣から來るものである、若

し斯くの如き症候が起たならば其耳を病む人の不幸と云ふものは甚だしいものである、或人は『斯の如く耳鳴になつて苦しむ位ならば、生きた甲斐がないから』と云つて自殺したと云ふ例もある、若しも此の様な病を受けた人は、實に不幸と云はなければならぬ、ソレから耳の病氣は前述の症候の起るばかりでなく、最も危險なものである、

耳と云ふものは、誰も知る如く頭蓋の下側で、腦髓に極く接近した所のものである、頭蓋腔或は腦髓と云ふものと、僅か障子一枚を界として居るものであるから、鼓膜の内に膿が出て、烈しい病氣が起つたならば 其病氣は腦髓の中に這入つて行つて、世にも恐るべき腦膜炎の如き病氣が起つて來て救ふべからざる症候が起るのである、これは私の専門學であるからさう云ふのでない、醫學全體の上から見て、人間の身體中にて、頭の先から、足の裏まで、種々の病氣がある中で、一番耳の病氣は危險である、ソレであるから、此の恐るべ



き病氣に罹らぬやうにしなければならぬと云ふ必要が起る、ソレで私は今後以前の如き恐しい病氣を豫防する方法を企てたいと熱望する次第である、私は勿論専門學者であるから、其病氣が起つたならば、ソレを癒すと云ふことも知つて居る、併し私は病氣を癒して人の悦ぶ顏を見るよりは、寧ろ世間の人が斯かる病氣に罹らぬで悦ぶのを見て悦ばんと欲するものである、

耳の攝生法、前述の如き病氣に罹らぬやうにする方法、其方法は即ち耳の病を防ぐ策であるが、此の耳の病氣は如何に攝生法を良くした所が、此の病氣を全く豫防すると云ふことは出來ない、攝生法で絶對的に總ての耳の病を豫防し得るものではない、世の中の一般の衛生法が非常に進んで、滿足なる域に達した曉はいざ知らず、現今の所では此の病を全く無くすると云ふことは出來ない、何故かといふに、世の中には傳染病と云ふものが澤山ある、如何に耳の攝生法が良くなつた所が、世の中に流行性感冒實扶的里の如き、或は痲疹、猩紅熱等の如き傳染病が無くならぬ間は、仕方がない、衛生學者は其豫防策を講じて、傳染病を無くしたいと云ふことに盡力して居るが、まだ〳〵ソレは遠いことである、此傳染病が跋扈する間は、耳の病を無くすることは出來ない、其間に生活して居る人間であるから、私は如何に耳の攝生法に務めた所が決して悉くの耳の病氣を豫防するとは云へない、併ながら此の攝生法をやつたならば、病氣の幾分を防ぐことが出來る、今日よりも減ずることが出來る、と云ふことは信じて疑はぬのである、

ソコで私の云ふ攝生法はどうであるか、即ち耳の病氣の原因を遠ざけると云ふことである、人爲で遠ざけることの出來る原因を、自分の身體から遠ざけると云ふことに過ぎないのである、

扨て人の力に依つて防ぐことの出來る原因と云ふのは、どう云ふのであるかと云へば、先づ七通ある

第一は　遺傳との關係

第二は　感冒との關係
第三は　外傷との關係
第四は　生活法との關係
第五は　傳染病との關係
第六は　中毒との關係
第七は　他部疾患との關係

此の七つに就いて、いさゝか述べたいと思ふ、

遺傳の關係是は最も注意しなければならぬ、耳の病氣は遺傳によつて起るのが澤山ある、是は多くの學者の證明して居る所である、一つの例をいへばトロルチユ氏と云ふ人は、耳の病氣に罹つて居る四人の中の一人は、遺傳であると云ふことを云つた、即ち四分の一は遺傳に依つて起るのである、ソレからモースと云ふ人は、中耳炎の病者を集めて、百人中三十七人、百分の三十七は遺傳であると云ふことを云つた、即ち三分の一强である、其他澤山の學者の實驗は皆三分の一位の平均である、であるからして、耳の惡い母なり父なりがあるならば、其人の子供は多少の病氣になると云ふことを考へなければならぬ併し此の遺傳があるから、其子供は是非病に罹らなければならぬと云ふことはない。罹らぬ人も澤山あるから、其樣に恐れることはないが、彼の聾啞や、又聾と爲す中耳軟化症など丶云ふ風のものは、最も遺傳しやすいものであるから、是からさき良き母となり、良き子供を拵へやうと云ふ希望の人は、成るたけさういふやうな病氣を傳へぬやうにするのが、必要であらうと思ふ、併し是は既に遺傳病であると云ふことを承知されたならば、將來人爲にて、ソレを避けることは容易に出來るだらうと思ふ、

感冒との關係

此の感冒と云ふことが耳の病氣に大關係を有つて居る、即ち耳の患者が、私の極く表面的の觀察からでも、半分以上は感冒から來るのである、一つは直接的の、即ち感冒が直接に耳に及ぼすのと、もう一つは間接的の影響である、ソレで先づ直接的の方からいへば、その影響は色々にあるが、先づ第一に暖か

い部屋で汗をかいて仕事をして、さうして突然戸外の冷たい風の吹く所へ出て行く、さうすると耳が風を引く、急性の中耳加答兒などを引起す、或は又非常に暖かい部屋の中で、澤山着物を着て、汗の出るやうな暖かいものを食つて突然冷たい部屋の中、或は氷室などへ行くと、他の部分も風を引くが、第一に耳が風を引く、さうして鼓膜炎中耳炎等の病氣を起す、或は戸外に散歩でもした時に、非常な高い山に登る時に、登る中は非常に骨を折つて行くものであるから汗をかく、息がきれると云ふやうなことをして、絶頂へ行つて冷たい風に當る、其風に當つた時には直に風を引く、耳には當らずとも、全身ドコカに風が當る、ソレがため耳が風を引いて病氣になる、即ち暖かい所になれた人が、急に空氣の激變に會つて、突然身體の一部の急變のためにやつて來るのが、直接的の影響である、ソレからモウ一つは、極く激い直接の影響ですが、東京あたりでは少ないことであるが、北海道、越後、信州あたりのやうな極く寒い所では、耳が非常に冷たい風に當つて、耳の外が腐れて死んで仕舞ふと云ふことがある、

以上は皆直接の影響、身體の外の部分へ寒氣が當つて、耳へは當らうが當るまいが構はぬ、直接に身體の一部が風に當つて、寒いと云ふことが直ちに耳の病氣を起すのである、ソレから又間接の影響、是は暖かい部屋から冷たい部屋に行つて、急に冷たい風に當ると云ふことをすると、耳には幸に病氣を起さずとも、所謂感冒と云ふ病氣の爲に、鼻加答兒、氣管支加答兒と云ふやうな病氣が起る、其鼻加答兒ソレで濟んで仕舞へば宜いが、なか〳〵さうは行かぬ、そこで人間の身體全體のためにも、風を引かぬのが宜いが、耳の攝生をすると云ふ上に付ては特に必要である、然らば風を引かぬ工夫はどう云ふ風にやるかと云ふ問題が起つて來る、今此の問題に向つて私が自分の考だけを皆さんに一ツ二ツ御答致します

先づ第一寒さに堪えるやうに身體を鍛へると云ふ

ことが必要である、ソレで人間の身體と云ふものは多少アンパッスレグ即ち臨機應變の性質があるであるから日本の兵隊が遼東半島へ行つて、さうして遼東の風と云つたら肌も裂くが如き寒さである、而かも戰と云ふ仕事をして、病氣にも罹らなかつたと云ふのは、どう云ふ譯であるか、兵隊の身體が寒さに堪へるやうに鍛へてあるからである、即ち日本の兵隊の皮膚の強いと云ふことを證據立たのである、乞食或はもつと下等の社會が暮して居る有樣を見ると別に着物も着ず、外にばかり暮して居ると云ふ、それが總て壯健である、病氣になつても醫者にかゝると云ふことは決してない、即ち斯くの如き者の皮膚は、外の荒い風に當つても差支ないやうに鍛へてある、デあるから風を引かぬやうにするには、皮膚を鍛へて強くするのが必要である、此の方法はナカナカ婦人方には容易に出來ないことであるが、前述の如く病氣に罹れば恐ろしいと云ふことを考へたならば、或は出來ない事もなからうと思ふ、ソレで第一其皮膚を強くすると云ふことを務めなければならぬが、是は冷水摩擦即ち冷たい水に濡したる手拭で、身體を摩擦するのである、湯ではいけない、夏でも冬でも朝起きて、全身を水で摩擦し、さうして皮膚を強める、ソレからなる丈薄着をする、例へて云へば、子供を育てるに風を引いてはいかぬとか、何とか氣を注けて、着物を澤山着せて育てられた小兒に限つて壯健なものはない、却て自由に戶外に出て、着物やなにかに構はず、運動して居る者は風を引かぬやうになる、是は荒い風に堪へると云ふ習慣を作るからである、併し寒くて風を引く程に薄着しろと云ふのではない、外の荒い風と云ふものは、直ぐと身體に當るものではない、衣服から透通つて身體に當る風は、極く暖かであるから成だけ薄着をする、丁度日本の兵士が遼東へ行つて、凍えぬと云ふ位の耐寒の習慣を養ふ、大人でも小供でも是は同じことである、ソレから第三には部屋を餘り暖くしては行かぬ、冬は皆火を焚いて室を暖くすると云ふの習慣

があるが、是は餘り度が過ぎると極く宜しくない、同じ温度の部屋にばかり生活して居るものならばよろしいが、戸外へ出なければならぬことが度々あるデあるから常に暖かい部屋にばかり生活して居ると若し戸外へ出た時に風を引くと云ふことがある、それで朝空氣を入れて其部屋を密閉して、一度暖めさへすれば、ソレ程寒いものではない、一度空氣を通して、其部屋を閉めて置けば、其一日は暖くなつて居る、さうして婦人方には少いが、男子は酒を飲む酒を飲んで汗が出たとか、或は婦人方であれば、舞踏會などで舞踏をして、汗を流して運動した時とか直ぐ夜半戸外に出る、スルと身體の熱して居るところへ、外の寒ひ風に當るから、平生は風を引かぬ人でも皮膚の弱い人は勿論感冒にかゝるのである、ソレであるから、酒を呑んだ人は、酒の醒める迄稍や冷えたる部屋で休み、熱がさめた時分に戸外に出ると云ふやうにするが宜しい、ソレから其次には、人間の身體の中で、非常に感冒し易き局部、風を引き易き部分、頭から手の先足の先、其部分を旨く包んで置くと云ふことが必要である、婦人方は勿論男子に比ぶれば、寒氣に堪へ難い、感じが強いと云ふことは、生理上極つて居る、婦人は寒い時分に外へ出る時は、足袋を離してはならぬ、手袋を着けるが宜しい、又冷めたい時には、耳を包むも宜しい、男子は帽子で頭を包んで居るが、西洋人は途中どんなことがあつても、帽子を長く取つて居ることがない日本人は途中で學校の先生や、何かに會ふと帽子を脱つて禮をする、西洋人などに會つて禮をすると、〔お前は帽子を取るに及ばぬ、構はず被つて居つた方がよかろう、風を引くと能くないから〕と云つて心配して呉れる、却つて先では心配して居るのであるから、西洋人は途中で人に會つても、長く帽子を取つて居ると云ふことはない、是は帽子を取れば、風を引くからである、婦人は之に反して、厚く髮を結つて、皮膚を包んで居るから、男子とは頭の冷える事も輕く風をひく事が少ないと思ふが、併し日本

のお高祖頭巾は、非常に宜いと思ふ、歐羅巴の婦人も、日本の頭巾は寒の甚だしい時分に、頰或は耳など包んで、都合のよいものである、歐羅巴でも斯う云ふ品を流行させたいと云ふことを云つた人があつた、併ながら又一方から見ると、丁度世を忍ぶ者でも、顔を包んで歩くやうだと云つて笑ふ人もある、ソレは彼是云ふ限りではない、以上の方法によつて注意して行けば、無論風を引くことを減ずると同時に耳の病氣も自然減することであらうと思ふ(未完)

齒の衞生

醫學博士　弘田長

肉食の關係

消化作用に大關係ある咀嚼を充分にするには、健全な齒牙を保たねばならぬ事は勿論であるが、近頃は至つて齒の弱い人が多く老人抔に笑はれる事は屡屡聞く處である、之は食物上の關係が昔とは異なる故止むを得ぬ事で、肉食の盛んになつたのは、齒牙を損ずる重なる原因と認める、昔は同じ肉食でも魚類が多かつたが今は、咀嚼に困難な牛豚の肉を常食にし爲めに齒の勞力を要するは多大なもので、昔の人より早く齒の缺損を來すは自然の勢だ、殊に昔は、今より菜食多く嚙碎きには左程の困難を感じないのであるから、矢鱈に齒の弱いのを笑ふは些し酷ではないかと思ふ、夫れ故牛豚雞肉を食するには、料理法の改良を必要とし齒に多大な勞力を負せずに之れ等の肉類を食し得る法を講じたら齒の弱い人も追々少くなるであらう

小兒の齒

齒の保護は小兒の時より充分母親が注意しなければならぬ、小兒に齲齒や、味噌齒の多いのは齒の保護が行屆かぬ證據で之れを豫防するには必ず食後に齒の掃除をして嗽ひをさせる事を食事に附屬するものと云ふ習慣を付けなければならぬ之は少し面倒な仕事だが之れ丈の注意をして將來子供に健康な齒を

作らせると云ふ事は母親の職分だと思ふ、又子供も生歯の頃より斯る習慣を付くれば食後には必ず歯を掃除する事と規定て居る、之れはお勧めした方は實行して居られるが子供に齲歯や、味噌歯はないと言つて喜ばれて居る砂糖分の多い菓子を禁ずるより食後に必ず歯を掃除する事を是非守つて貰ひたい、

室内の温暖法

寒冷なる冬期に於て、人工的に温を作りて、體温の平均を保つの必要ある事はいふを俟たざる所なれども、其温暖法にして宜しきを得ざれば、遂に燃焼により發生する有毒瓦斯によつて、身體を害することあり、されば或る場所に於て温を作り、傳導によりて、室内を温暖ならしむる空氣温暖法、蒸氣温暖法、熱水温暖法、温水暖温法等所謂中央温暖法によらば、室内を汚さず一樣に温暖を感覺せしめて、申分なきことなれども、夫には特別の器械と、多額の費用を要して、一般の家庭には用をなさず、而して尚簡單なるものを求めは乃ち局處温暖法にして、火鉢にても、爐にても、其目的は達し得らるべきも、有毒瓦斯を多く發して室内を汚すを以て、暖室爐を利用するを最もよしとす、該品は近来三四圓の廉價を以て、之を購ふを得るに至りたれば、冬期は之を用ゐるを可とす、然して其程度は居室病

室は攝氏十七度乃至二十度、小兒室は十八度乃至廿一度、遊戯室は十二度乃至十六度、工場は十七度乃至十九度位になし、其他は生活の異なるに從ふべく温暖法を行ふに際しては還氣換氣法を行ふを忘る可らず

大草流の剝物料理

剝物料理に、生間、大草の二流あるが、今大草流が四十年間の苦心を重ねて、稍や成功するに至りたる次第を聞くに、維新後府下豊島郡瀧野川村に紅葉亭と稱する料理店あり、主人は鮨一筋の家柄に生れたる者にて、名を大草政光と云ひ、此政光の養子半三郎は、幼少の頃より此家に養はれ、前記の料理店を開業するに及びて、料理番となりしが、太く繪畫を嗜み、暇さへあれば丹青を弄び居たるに、不圖思付たるは、前記の剝物料理にて、爾來大根、薩摩芋等にて、種々の剝物を拵えたるも、初めの程は其出來榮自己の思へる半ばにも達せざるのみならず、折角美事に剝きたる料理も、人々の殆んど顧みるものなきに落膽し、幾たびか斷念せんかとも思ひたれど、性來の嗜好に引込まれて、全く斷念するの勇氣なく、苦心に苦心を重ね、遂に今日に及びたる折柄、剝物料理の端なく世上に紹介せらるゝに至りたれば、愈々忽諸に附すべからざるを自覺し、夫よりは八ツ頭を以て鶴を造り、大根又は薩摩芋にて兎を製し、其眼球には小豆、之に添ふる太閤には葱を用ふる等、種々の趣向せる剝物を調製し、世に問ふ所あらんとせる由

新年の衞生

醫學士　山根正次

元來餅と云ふものは、目出たい事に多く用ひられて居つて、正月に必ず雜煮を喰ふことは、昔からの習慣で、此外にも餅と云ふものは總て祝の席に用ひられて居る、殊に長崎の如きは、禮式の時に、必ず雜煮を喰はせる習慣がある、夫を喰つてからでなければ外のものは戴かんと云ふ樣な風に成つて居る、

此餅と云ふものは昔から『カチン』と云ふが、其の譯はどう云ふ事であるかと云ふと、これは搗飯と書いて昔は『かちいひ』と云つたのが段々變化して『カチン』と云ふ樣になつたのであると云ふ說もある、これを總ての祝に用ふるのは、どう云ふ譯からであるかと云ふと、餅を搗くには非常に手數が懸るからして、つまり其手數の懸るものであると云ふ所から鄭重なる意味で、これを祝の時に用ふる樣に成つたと云ふことである、又一ッには、干飯と書くのもある、つまり干栗と書いてカチグリと云ふ樣な譯からして、餅は、干した飯では無いけれども、蒸して搗いたものであるから、干飯と同じ樣な意義で爾う云ひ來つたのであると云ふ事である、モウ一ッは歌賃と書いて、これは私が話を聞いて居るに、西行法師がある所で、婆さんに歌を賴まれて書いてやつた所が、其婆さんが大變悅んで、夫では何か貴僧に御禮を致したいけれ共、今何も無いから、私が餅を搗いて御馳走を致しませうと云つて、餅を搗いて食べさせた、夫から歌の賃に餅を搗いてから歌賃と云ふのであるさうな、

此お歌賃と云ふものは御承知の通りに、米の中の一種の糯と云ふ即ち、餅にする米がある、之は粘り氣の強い物であつて、夫を蒸して搗いて捏ねるのである、而うすると一ッ塊まつた物が出來る即ち、米の粒を搗き潰したものが出來る、

この物が祝儀に用ひられると云ふ事は差支は無いのであるけれ共、私がお話しやうとするものは、之

れを能く喰ふ事に就ての注意である、
餅と云ふものは旅又は山越えを爲し、或は寒中凍えんとした時には、隨分辨當の代りに用ひられ、雪中行軍なぞにも能く此餅を持つて行くと云ふ事であるが、是は畢竟餅を喰つて居ると、腹が空ないと云ふからである、夫は何の結果から、而う云ふ事であらうかと云ふに、餅と云ふものは、外のものより消化が惡い證據で、永く胃腑の中に溜まつて居るからである、然るに此餅を、歲首に於て喰ふ譯であるがこれは喰ひ過るとよくない、何故かと云ふと、此元日には、重ね喰と云つて元日から三ケ日迄の間には段々重ねて喰い上げて行つて、殊に若いものなんぞは、餘計に喰ふことを自慢にして今日は幾つ喰つたなぞゝ云つて誇つて居る、而うして其結果正月には此餅の爲に、大變胃を惡くして醫者にかゝるものが澤山ある、それ故餘計に喰はない方が宜しからうと思ふ、而うして殊に惡い習慣は、餅の喰競を行る何の某がいくつ重ねて喰つたと云ふ樣な事を致すが而う云ふ樣な事は、どうぞ無いやうにしたい、身體が大切と云ふ事を考へたなら餅の樣な不消化の物を喰ひ競するは面白く無いから、若い人達は、是を餘計食はん樣に爲なければ成らぬ、前申した通り、餅を餘計喰へば、胃病の原因となるから、歲首に於ては殊更注意せんければならん。歲首は、人間の愼むべき時、一年の計は元旦に在りと云ふ言葉もあるからして、猶更一月よりは、健康でなければならぬ、
何故塊まつた物は消化が惡るいかと云ふと、總べての食物は胃液と混じて、始めて消化するのであるから、塊まつた物は充分胃液が混らぬから、從つて消化も困難しいのである、又この餅を丸呑にすると云ふ樣な事があるが、斯樣な事は一層危險である、凡て物を食べるには、咀嚼して嚥下しなければ成らぬ、善く咀嚼で呑むと云ふと、夫れが胃の中で各自順序を立てゝ消化をして行くのである、餅の樣な不消化なものは、猶々能く噛まぬと、腹の中で大きな塊まりが出來て其物が一日胃の中を環行て、周圍か

ら消化して行くのであるから、永く腹の中に滯つて居るのである、

夫れでどうか一月の初に於て、餅を喰ふ事に就ては、相互に注意して、餘り澤山喰はんやうにしておく事が、新年最初の衞生上必要であらうと思ふ、

次に新年の攝生に就て申せば、新年の燗酒である何家へ行つても先づ新年お目出度うと云ふと直ぐ燗酒を出す習慣で、何れの家でも、酒を飲ませると云ふ風であるが、今日は凡て未成年者に對しては、酒を飲ません法律でも出したい世の中であるのにも拘はらず、一月早々から其樣に酒を澤山勸めるのは面白くない事であると思ふ、若年者は其れを飲み廻るのを、樂みとして居つて、中毒の害あるのを知らない輩が澤山あるが、隨分これは見苦しい者である、

一月お目出度と云つて、年禮に廻り、酒に醉うて犯罪者となる者が隨分多くあるのは、皆其お燗酒の加減が原因と成るので、殊に道德上から見ても、一月の年禮に、斯樣な事は誠に忍びない事と思ふ、

夫ゆゑ一月のお燗酒は成る丈け進めると云ふ事のない樣に爲たいと思ふ、又年禮に廻る者も、彼家でも、此家でも飲むと云ふ樣な事は廢す方が好い、これは單り若年のものばかりでは無い、年老つたものも同じ事である、一月の衞生と云ふ事に就ては、餅とお燗酒と云ふものが大變に身體の工合を惡くするものと思ふから、之に就ては諸君が充分御注意に成つたらば宜からうと思ふ、身體の惡く成ると云ふ事は、國家に取つて大變に損害を與へる事で、身體が丈夫で働けば其年中は、樂に暮す事が出來やうと思ふ、

能く民間で稅を納める事がえらいとか何とか苦情を云ふものがあるが、國民は、身體を丈夫にして働けば、如何樣にも出來る事で、稅を出すにも苦しむやうな事は無からうと思ふ、

雪中梅　村田久子

初雪に香ゆかしき梅のはな
ながめにさして我ともにせん

家庭に電氣の應用

家庭に電氣を應用することは、目下米國にては最も普通の事にして、舊式の石炭、煖爐乃至瓦斯を家庭より驅逐するの日も遠からざるやの形勢なり、現今一大電氣工場が、各種電氣の機械器具裝置を施して、極めて愉快に、極めて經濟的に、家政を按排し行く有樣は、鑑かに學理的にして、新式たるを失はざるなり、

請ふ試に米國に於ては如何に家庭に、電氣を應用せるかを見せしめよ、各室共に電氣仕掛を以て、適宜に裝置せられたり、殊に裁縫機械の動力の如き、頗る賞す可きものなり、其價は約十二弗にして、一時間の運轉費用は、僅に一錢の上を出でず、如何樣にも恰好を感じ得べく、如何なる人にても、數分の後には容易に是に習熟することを得べし、浴室に於ける洗盤にも、亦電氣の動力ありて、燭臺等に容易に附け得べく、把手を以て何人にても自由に是を使用し得て、然かも其價は又極めて廉なり浴室内なる小さき湯沸しは、毎朝顔洗の爲に用ゐらるゝものにて、底に小許の水あり、顔を剃らんとする間に、直ちに湯沸き來るべく、更に盤上の壁に釦を裝置して、電流を加減する樣成り居るなり、此顔洗湯は、一切裝置を合せて大小形狀によりて、三弗半より、五弗までにて購買し得らるべし、食堂には電氣仕掛の珈琲爐器と皿とあり、食卓の後部には、二線ありて釦を裝置し、床板に電流を通じて、物を温むるを得べし、要するに家庭に於ては、燃料としては瓦斯、石炭等より便利なるのみならず、沐浴、洗濯、火熨斗、割烹等有ゆる方面に使用するを得べく、殊に其火熨斗の如き炎暑の時に、最も手早く最も愉快に爲し得て、然も其費用は、僅に十二錢に足るなり、彼洗濯用電流の如きも三弗七十五仙を要するのみ

就中最も新式にして、便宜なるは電力による洗濯機なり、舊式にて午前中を費すべきもの、僅に四十分内外にて是を完了し得べく、而して費用は五錢の上を出でざるなり、臺所机は大概長さ三呎半、巾二呎高さ二三呎位の小卓子にて充分なり、卓上には凡ての料理道具を置き、下には竈を備へ、壁上の釦を押すときは、電流は直ちに竈中に通じ、熱度を加へ、卓上のものは、適宜に調理醱酵せられ、肉も燒かるべく、疏菜も煮らるべく、麵麭も焙らるべし、加ふるに若し一切の道具をアルミニューム製たらしめば、其輕便、淸潔、安全なるは如何許りならん、竈の如き其大さこそ、舊式の煖爐或は瓦斯竈と大差なけれ、電氣を應用すれば、戸を開閉するの手數を省き、蓋のまゝ隨意に熱度を加減し得べく、若し中に白熱電燈を裝置すれば、一層の便益を加ふべし、

費用の點に就て、瓦斯及び石炭との比較を見るに、精細なる計算は得難けれども、二年來の平均によれば、電力の費用は一ヶ月大概六弗六二なるに對し、瓦斯は千立方尺を一弗三十仙として、一ヶ月三弗五十仙を要し、又石炭は一噸六弗五十仙として一ヶ月半噸を要せざるべきを以て、二弗五十仙と見做せば、瓦斯及び石炭の使用割合々計六弗となるべく、其結果電刀に比して約一割方低廉なるが如しと雖も、是のみにては精確なる比較とはなし難し、先づ使用者の注意によりて、電力の消費を節約し得べき餘地あるは勿論、其設備器具の低廉なる事、乃至保管の輕易なる丈にても、優に競爭し得べく、特には一條の細線凡てを辨ずるの家屋設備が、所々煤烟せる鐵管の突出する室内に比し、外觀上遙かに瀟洒として、體裁よく、便益にして安全なるは、何人も首肯する所なるべし、

牛乳の話

醫學士　久保杏林

牛乳は、種々の効用があるが、先づ乳用即ち乳として飲むのと、食用即ち他の食物と一緒に料理して食ふのと二つとしてよからう、牛乳を料理に用ふるに就ては面白い事が澤山あるが、それは後廻しにするとして第一育兒用の事から話すとしよう、

母の乳と牛の乳

嬰兒には母の乳に越したことはないが、肉體が健康で精神も爽快して居ないと自然良い乳が出ない、病氣で身體が弱るとか精神が鬱ぐとかすると、直ぐと乳に及んで來てそれを飲ませる爲め嬰兒が嘔吐たり下痢することになる、乳母とてもその通で、たゞ乳が能く出ると云ふばかりでは出來ない、其の者の身體に梅毒があるとか、又は怒りッぽいとかしてはならない、つまり生母なり乳母なりが、無病で健康で精神も爽快としてさへ居るなら其乳を飲ますが一番好いのである、若し生母の身體に故障があるとか、一家の生計向で乳母が置けない場合に、何で人の乳の代りをさせるかと云ふことになると、種々の理由からして牛乳となつて來る、其れは牛乳には人間の身體に滋養になる重な物が含有て居るばかりでなく其性質も飲ますに都合能く出來て居るからである、併し此等の點は牛乳に限つた譯でなく、驢乳も馬乳も山羊乳も綿羊乳も多少の差こそあれ大體は同樣で又乳の成分からして何が人の乳に近いかとすると、寧ろ驢馬の乳が第一で、次は馬、次は山羊、牛、綿羊となるのである、現に韃靼、キルギース、高加索地方に行くと其所の土人は馬乳を飲み。又それで馬乳酒を釀造て飲んで居る、併しながら廣く一般に驢乳や馬乳を用ひることが出來ないから多量出ると云ふ便利の上から、牛乳が行はれるやうに成つたのである、

水砂糖を割る譯

嬰兒に飲ませる牛乳は脂肪分の多い濃いのが好い

が、それをその儘飲ませると毒になるから、水と砂糖を好い加減の分量に割つて飲せねといけない（分量は醫師の指圖に從ふ可し）一體鹽類と云ふものは人に限らず、牛に限らず、凡ての生物に必要な成分であるが、人の乳にはこの内の燐酸鹽と云ふが、極微かにしか含まれて居ないが、牛乳には、其が澤山である、つまり牛乳は成分が強過ぎるから、水と砂糖を割つて人の乳と同じ成分に適合さする、併し脂肪の少いのに水を割ると滋養分が無くなるから、そこで脂肪の多い濃いのでなくては出來ないとかうなる、獨逸で小兒用として販賣して居るキンデルメルヒ（小兒用乳）は通常三、五乃至四プロセント若しくは其れ以上の脂肪分を含くんで居る、日本にある乳中でもゼルシ、ガルンジー、アシヲなど云ふ種類は乳の濃い方である、人間は十八歳で一人前になるとしてゐるが、牛は一年で一匹前になるから、從て乳の成分もそれ丈け早く成長させる樣に強くなつて居る、同じ藥にしろ大人と小兒は分量が違つて居るではないか、一年で一匹前になる牛の乳其の儘を十八年かゝつて一人前になる嬰兒に飲ませて好い譯は無い濃くないと効能が無いなど云つて水も砂糖も割らない牛乳を飲ますは以ての外の間違ひである、

水飴の話

農學士　牧　忍

水飴の成分は、大抵化學上で云ふ麥芽糖から出來てをりますが、それを製造する原理を述べますれば糯米や、麥芽（俗にモヤシと云つて大麥を發芽させたものです）の中の澱粉（凡て米麥の中には澱粉か七〇「パーセント」許含まれてゐます）を麥芽の中に有る「リヤスターゼ」と云ふ酵素の作用に因て麥芽糖に變化せしめたものであります。

今水飴製法を簡短に述べますれば、精白した糯米（糯米の澱粉でも又糯粟を用ひてもよろしい）一升をよく洗つて凡そ一晝夜水に浸漬して後蒸してまだ冷

えない内に桶に入れて、それに攝氏六〇度（華氏一四〇度）位の湯一升を注ぎ加へてよく攪拌し其中へ麥芽粉五合を加へてよく混合攪拌し其溫熱の發散しない様にするために蓋をし且桶の周圍に薦又は、菰を巻きて一日位放置すれば、糯米や、麥芽粉の中の澱粉は凡て麥芽糖に變化して柔くなり、甘味が強くなります、是に於て糖化した液を先づ笊にて濾し次に木綿袋にて濾して其濾液を鍋に入れ攪拌しつゝ緩火にて除々に煮詰めて液を濃厚ならしめて表面の泡を取り



去つたものは、即ち水飴です、

前に申した通り水飴は大抵麥芽糖から出來てをりまして其麥芽糖は、最も消化し易いものですから、從て水飴は營養上有効なものです、吾々が日常食する食物中の澱粉は口中に入りて、唾液腺の分泌する「プチヤリン」（或は唾ヤスターゼとも云ふ）と云ふ酵素の作用に因て糖化せられて麥芽糖及葡萄糖となりて胃の粘膜を通りて血液中に吸收されます、之れ即ち消化せらるゝので

ありまず、御飯を永く口中で嚙んでゐますと、だん／＼甘くなるのは、米麥等の中の澱粉が糖化するからです、然らば澱粉は何故糖化作用を受けなければ消化されないと云ふに元來澱粉の分子式は($C_6H_{10}O_5$)ですから其分子が大いが上に水に溶けませぬから胃の粘膜を通過することが出來ないのであります、之れに反して麥芽糖の分子式は $C_{12}H_{22}O_{11}$ 又葡萄糖の分子式は、$C_6H_{12}O_6$。ですから何れも澱粉の分子より遙に小いが上に水に溶けるから胃の粘膜を通過することが出來ますから、所謂消化されるのです、それで糯米と麥芽とで水飴を作るのは丁度體内で行はる可き消化作用を人工的に體外でした樣なものですから、其水飴の消化し易いことは、明です、

女學生の好下宿

神田今川小路二丁目十五番地御嶽講社の裏手に、何々女學校生徒と附記を附け加へたる、女子止宿人名のみズラリと九枚掲げあるは、時節柄珍しき下宿屋なりと訝かる人もあれど、抑も此家の主人小林嘉吉(五十九)と云へるは、素と上州館林の生れにて、大工を業として重に神田連雀町の料理店金清樓の仕事のみを引受け、明治十四年來二十五年の間今の處に永住して、家屋も自分のもの妻のお銀(六十二)と唯夫婦にて、極く暢氣の身にはあれど、不幸と云ふは、是れまで一人の子供もなく、老先の心淋しきまゝに、女學生に限りて座敷貸をなし、老人等の話相手を需めたるは、今より數年前の事なり、夫より今日に至る間、婦人專門の所謂素人下宿屋を以て押通し居たるに、適々男女學生風紀問題の喧しき際に當り、神田署より頻りに下宿屋の營業免許を受く可く内命ありたるにぞ、其筋の認可の下に營業看板を掲ぐるに至りたる次第なるが、素より監督寄宿舍ならぬ下宿屋の事とて、止宿者の一擧一動に就ては、深くし注意せざれど、朝夕の出入訪問客の性格、さては信書の發著等に向て、監視の勞を採り、老人等の事とて、苟且にも良からぬ事あれば、ピシ／＼意見を加ふる程なり、ツイ此程も一女學生の許へ、淸國留學生の訪問者ありたりとて、直ちに其止宿を斷り、又一年半も止宿し居る女學生の許へ、公然許嫁の間柄なる男生の訪問したるを、他の女學生に對して面白からざる感情を惹起さしむべしとて、亦た斷りたる程の頑固にて、昨今は共立女子職業學校に通學中の姉妹二人、和洋裁縫女學校生徒四人、東京裁縫學校生徒三人の外、是れも矢張止宿者の一人なる横濱フェリス女學校の卒業生にして、陸軍將校の未亡人竹鶴くら子(三十六)と云へるが、當分用のなきまゝ、老人夫妻を助けて、夫れとなく女學生の世話やら、移轉の届書やら、面倒な見つゝあり、其中には既に滿足に卒業して、良家の夫人となりしもの少からず、何れも此老夫婦を德として、喜びつゝありとぞ、珍らしき下宿屋主人なるかな。

女子の交際法

橘 総子

今の女子は學業技術の著しく發達せるにも拘らず何ぞ交際の法に暗く、何ぞ圓滿なる智識をこれに注ぐことの忽なる、彼等の多くは對話に拙なく、容儀とゝのはず、總ての注意おろそかにして、未だいかなる法を以てかよく人に交り、よく人を喜ばせ、よく來客をもてなさんと心せざるが如し、これ交際を重んせざる過なり、社會が煩劇なる境界に進むと共に、交際の道は確に研究の價あれば、今より生ひたつべき靑年女子は、必ず深く思はざるべかなず、已れ極めて交際に拙なきものなるに、敢て之をいふは其足らざるを認むること深ければなり。

交際は實に社會を圓滑ならしむる最要機關にして殊に女子のこれに當ることいと多きものあり。さまで親しからぬ家に、さしたることなくて行きたるに男子のみ居たらんは、いと淋しく、野分のあとの景色みたらんやうなるを、女子の愛々しうまめやかにとりなしくれたるは、いと心安く、春の日和にあひたる心地もぞする、さばかり女子は其天性に交際の手腕を備へたれば、益々之を研きて、其光彩を發すべきなり。いかでこの一つのみ他の業におとりてあるべきやは。

見よ、交際のたくみなる人は、いかなる人をも決して飽かしめず、厭はしめず、不滿を抱かしめざるなり。言に潤色あれども、いはゆる世辭追從にあらずして、誠に眞心よりあふれいでたらんやうにも見ゆるあたゝかき親愛同情の聲なり。されば單純なる寒暖の挨拶すら、無意味にはいはで、老いたるが上をおもひ、幼きをいたはり、よろづ打向ふ人に實にと思はるゝやうにぞ云ふめる、また其安否を問ふにも、持病宿痾ある人には、先づこを尋ねて、あはれげに思ひやり、健なる人には其幸福をわが事の樣に喜ひ、其人より其家、其家より相知れるが上に移し老いたる人、幼き子女、學あるもの、能なきもの、

貴賤貧富のけぢめに從ひて、すべて、其人が旨と深く思ふこと、たくみなる業、たしめる道、いひいでられんと願ふやふなること、其家その親戚に、近うありたりし出來事、吉凶禍福のすべてを記憶して、語りいで、とひ慰め、室内庭前の眼の前にあるものより、四季の景物、地理山川の上につきても、皆其の人々に適はせ、座に幾何のまらうどありとするも更る〳〵、言をかはし快よくもてなしたるは、いと賑はしく、心地のどやかにて、いつまでも打ち向はまほしく思ふらんを。

此の道に拙きものは、いふべきことの後先を知らず、其人に縁遠く、興味うすきことを心なくいひ、わが友ならぬ際は煩はしとみゆる樣をし、口おもく愛嬌をくれ、人あまたある中に片よりたる振まひをし、禮容缺け、注意足らざるからに、自ら知らずして人を怒らしむること多かり。これ思慮あさく、才短き人に往々みる所の過なり。

また少し才がり、誇りがにする人は、われこそはとおもひあがれる樣を面にあらはして、人のいふなることは皆そら耳して、いとはしげに遮り、たゞわが知れることのみをいひさゞめき、ともすれば人の是非曲直をあげつらひ、容色衣服の善あしをいとはしたなくいふは、その輕薄なる心一見して蔽ふべからず。これ才長けて思慮淺きものゝ常なり。

世辭追從にたくみなるを交際に長けたるものと思ひ誤ること勿れ。かくの如きは、たゞ一時の交にして、決して永續すべきものに非ず。誠の交際は、篤實にして浮薄ならざるにあり。禮讓恭敬にして、人を蔑にせざるにあり。よく他人の艱難を顧みて、わが安佚を貪らぬにあり。言行一致し、終始一貫して其主義を改めざるにあり。賞むべきを賞め、諫むべきを諫め、温平として堅固なるにあり。若しかくの如くせんには、來りて交を修むるものは、たゞ其温情に飽くのみならずして、得る所の利更に多かるべし。これ眞の交際なり。

而して、何故今の女學生が交際に拙く注意おろそ

かなるかと考ふれば、これ單に修養の足らざるに因るなり。未だ深く重きを置かなるに因るなり。此の弊、寄宿舎生活のものに甚しく、彼等の多くは其平生來客に接すること少きより、學生間の通用語にのみ慣れて、普通一般の對話に熟せず。長者に對する鄭重尊敬の言語應接等は其最も厭ふ所なり。これ女學生上りの女子が他の女子に比べて應接對話に拙き原因たるべし。これらは猶恕すべき所あれど、其最も惡むべきは、行爲放恣にして只意のまゝにふるまひ、長者を敬はず、卑幼を慈しまず憚なく人を惱まし、放言惡口度なきもあり、或は媚びへつらひて虚飾多く、そら言そら涙にて人をあざむきたばかる抔、學生間にてすら、いみじう忌みきらはるゝものなるを、習性となりたる彼等は、いかにして圓滑圓滿なる交際を修むるに任へんや。故に交際は宜しく學生時代より其端緒を開かしめざるべからず。即常にその言語を擇び、きゝ苦しく不敬なるは、友人間と雖も、きびしく之を戒め、わが來客又他人の來客に對する相當の禮法應接に慣れしめ、之に對する挨拶對話一通りの順序より、他にまかりし折の注意、途上人に會いたる折の心得等、皆習熟せしめざる可からず。退きては友に交りて懇切周到なるべく、偏頗不正のふるまひなく、僞言をいはず、諂諛をいはず、誹謗讒言を避け、苟にも他人の名譽に關る事は決して口開くまじきことなど、しば〳〵敎へさとし置かば、心形にあらはれて、學生間に反目嫉視の爭なく、師を敬ひ、人に篤く、いつしか圓滿なる交を修むるを得て、何人よりも忌みきらはるゝことなきに至らん。これやがて社會に於ける交際法の階梯なり。心して此の階梯をふむ者は學業技術の發達と共に、始めて和しき交際を修むるを得べく、斯くの如くにして始めて眞箇文明の女子たるに耻ぢずといふべきなり

新年の海　　大月はつ子

海士人のすなどる舟もみえぬかな
としたつけふを祝ふなるらん

上杉伯の家庭

世は次第に奢侈輕佻の風に侵されて、質朴着實の良性は、また夢にだも見能はぬ都の空にも、尙ほ泚して萬人の箴となすべき家庭あり、上杉伯の家庭も、實に其の一なんめり今、順を追ふて、記さんに

▲家柄は　人も知る上杉謙信輝虎の子、會津庄内百二十萬石の領主たりし上杉景勝の後裔にて、維新前までは米澤十五萬石の外樣大名たりしなり、

▲家憲　同家には上杉家中興の祖鷹山公が傳賦、并に其素志は、傳へて同家無二の憲法たり『心さへ錦ならば云々』一首に籠れる深重の意と、相俟て細々との遺訓は、實に其當時より今日に至るまで、動かすべからざる家憲として遵守し來れり、

▲家庭　當主茂憲伯(六十二)は明治初年英國に留學し、歸來宮內省御用掛を勤め、沖繩縣令、元老院議官、貴族院議員たりしが、今は錦鷄間祗候仰付られ、多く郷國の本邸に住し、夫人は舊藩臣伊達清久氏女兼子(四十七)とて、若く茂憲伯に仕へ、三男七女を擧げられしが、嗣子憲章氏(三十一)は嚮に學習院、外國語學校を經て、三十七年英國ケンブリッヂ大學史學科に入り古俗に就て研究中にて、明年は歸朝の筈、子爵上杉勝憲氏(二十一)は、次男にて、米澤中學を卒へ、學習院に學び、末弟朝憲氏(十二)は郷里の小學に在り、總て男子は幼少の頃に郷里において體育を充分にして後、始めて上京を許さるゝなりと、又令嬢中二女鶴子(二十九)は、池田勝吉男に、三女正子(二十八)は東宮侍從職高辻男嗣子宜麿氏に、四女琉子(二十四)は松平子爵嗣子直幹氏に嫁せるが、其前は何れもお茶の水高等女學校を卒業後、渡邊裁縫女學校に裁縫を學びつゝ、伯爵家の令嬢としては、餘りに平民的なりとの取沙汰も聞えし程なりし、四女久子(十九)は本年優等にて、學習院女學部を卒へ、引き續き專科に留り、別に國文を下田歌子に、琴曲を萩岡宗匠に、挿花を上杉園岡に修め、六女直子(十四)は米澤高等女學校を卒へて、本年上京、學習院に入り、七女文子(十才)はお茶の水附屬小學校に通學し、學籍頗る好く、目下本郷元町一丁目七番地の別邸に、姉妹三人監督者も無けれど、決して奢侈の風に流れず、常に綿服を纏ひ、暴風大雨と雖も、徒歩にて通學し、路傍其人を見るも、風姿の餘りに質朴なるに、伯爵家の令嬢とは、如何にしても見受けられぬ程なりとぞ、

新年の料理

霞袖女史

一月用菱餅

常の白餅を薄く四寸四方に切り、此中へ味噌あんを入れ、菱形に折り、之を西洋竈にて蒸燒にす、又略せば金あみにて燒くも可なり、此菱餅は京都の上流の人、東京の雑煮の如くに行れたるものを今少し折衷したるなり、

御婦人方は松の内より後れて年始の禮にいらせらるれば、此菱餅を一ッ奉書紙を折するにして、其上に載せ、膳の上にすゑ、箸をつけて外に重づめの肴を取り添へて出すべし、珍らしくて興味あるなり、

味噌あんの拵へ方は、白いんぎん豆を柔らかに煮て、裏ごしにし、白味噌をよく擂りて、之を裏ごしにし味噌一斤に豆一合位の割によく擂り交せ、白砂糖を入れ甘くなしたるものなり、餅を當分柔らかに貯るには、壺か又は飯びつ杯に入れ布巾を水にてよくしぼり上にかぶせて蓋をなし置けば當分柔らかに貯へらるゝなり其つど／＼味噌あんを入れて燒くべし、

芋かん

薩摩芋二百目、干藻二本、白砂糖半斤の割合にて始め干藻を水にて洗ひ、小さくちぎり、水五合位鍋に入れてよくとけるまで煮て、篩にてこし、芋を蒸して篩にてうらごしになし、干藻の煮汁にてつぶ／＼の出來ぬ樣に、だん／＼とゆるめ、砂糖を加へ香味には山葵か生姜の卸し汁のみしぼり込て、とろ火にて煮つめ、火よりおろしたる時、食紅少しとかし入れ、而して重箱か切りだめのやうなるぬり物にて、一寸位深きものに流し込み、朝に作れば、夕には、固まるなり、器より出す時は、庖丁にて器の廻りを切りはなし、盆の上にさかし之にかへせば、芋かんは形のまゝ出るなり、之を拍子木形りに切りて口取物盛合の他の付合によし一月の重づめものにもよろし、

かずのこの味噌和

鰊の鯑を水にて洗ひ、五分位に切りわけ、鹽と醤油にてよく／＼もみ、而して篩に上げて汁をしぼり白味噌をよくすり、唐からしの粉を味噌の中へ擂り込みて、鰊の鯑をあへて器に入れ、ゆで玉子の黄味ばかりを荒目に毛篩にてこして、あへものゝ上にかけて出すべし、

鹽鮭の豚のハムもどき

鹽鮭をさし身庖丁にて、薄く大きく、さしみの如くそぎ、牛酪（脂肪又胡麻の油にてもよろし）を塗りつけ、金網にて炙り（ぱり／＼なる様に焼くべし）皿に三切位盛り、あしらへには三ツ葉又は芹、ちさの類少々添へソース、又は橙酢をかけて出すべし

貝のはしらの吸もの

はしらを洗ひて水を切り、椀に入れ（大匙に一ぱい位）て、清汁の煮え立ちたるを掛けるなり、あしらひには三ツ葉か、淺草のり、但し三ツ葉は生にて一寸位に切るべし、

鹽鱈の膾

鹽鱈を鹽出し厚く作り身にしゆでゝ皿に盛り、獨活のせん切を暫時水に浸し置き、之をあしらひになし、芥子酢掛けて出すべし

婦人向のたぬき汁

さつま芋の皮をむぎ、大根おろしにおろし少し許りをしぼり、横長く丸め、胡麻の油にて揚るなり、味噌汁に（あま味噌よろし）焼豆腐竪横にきり、さゝかし午蒡にちぎりこんにやくなど入れるなり、

大根の三輪漬

大根の皮をむぎ、二三寸位の長さに輪切にし、庖丁を竪目に入れて、櫻、梅、菊の花又は半月形、等に切り小口より薄く切り、半日ばかり極淡鹽に漬け重石を載せ置き、しかして後柚子の皮のみを薄く一寸位の長さに切り、赤唐からしをも二分位に切り、別の鉢に前に鹽漬したる大根の水をよくしたし、鉢か壺の中に入れ、一皮ごとに柚子と唐芥子をふりかけ、さらに其上から三杯酢をかけるなり、三杯酢の

拵へ方は、酢に白砂糖と鹽少し加へ、加減してかけるなり、半日過ぎれば食せらる、又何日にても貯へおかるれども、五六日間の後に度々に拵らへる方味ひよろし、客に出す時は、小鉢に大根の合ひ〳〵に柚子と唐芥子を色どりに添へて出すべし

白魚と獨活と淺草海苔の清汁

白魚は其まゝ獨活は皮の筋をよくむぎ、短冊にきり、淺草のりは炙りて、汁を椀に入れてから揉み込むなり、

折爽鹽鮭の玉子酢

鮭の皮をむぎ取り、細く切身にし、うどの皮をむぎ、短冊に薄く切る、暫時水に浸し、ざるに上げてしため、鮭の切身を混合鉢に盛り、玉子酢かけて食す、玉子酢の作り方は、一個の玉子をゆで黄身を鉢に入れ、よく練り、砂糖を少し加へ、酢をそろ〳〵入れてすりまぜるなり、白身も薄くきりてあしらひにするもよし、

鰤と蕪の餡かけ

鰤の身をよき程に切り、少し鹽をふりかけ置き蕪も蒸すなり、(略にては湯でゝもよし)、而して之を椀に盛合せて、餡をかけ、香料には山葵か生姜をおろして載すべし、

寄慈姑の餡かけ

慈姑の皮をむぎ、生のまゝおろし、之に葛の粉と砂糖とを少し入れ、よく混和して、如何やうになりとも、形を作りて、之を蒸すなり、勿論椀に入れて餡をかけて、山葵か生姜をおろしてのせる、むし方は、釜の中に水を少し入れ、其上に篩をふせて、又其上にざるを引き、其中へ切身と蕪を別々に蒸すなり、さすれば最も早く手がるにむせるなり、

▽餡の拵方は、鰹のだし汁に醬油味淋砂糖を入れ常の清汁よりもあまがらく加減をし、葛粉を水にてとかし汁の中へそろ〳〵流し込み、ぶつ〳〵の出來ぬやうかき廻しながら煮るなり、あまり汁の沸立たる時、一度に葛を入るれば、ぶつ〳〵の出來やすきものなれば、もしかたまりの出來たる時は、之を毛

篩にて濾して用ゆべし、

蛤蜊と分葱の芥子あへ

蛤蜊をゆがき、分葱もざつと茹で（つよくしぼるべからず）六七分位に切り芥子味噌とあへるなり、味噌の拵方は、初め味噌をよくすり芥子を適宜に絞り交せ、砂糖を加へ、而して蛤蜊と、分葱を入れて交せるなり、

▽芥子の拵方は、粉芥子をふかき茶碗に入れ、水にてねり交せ、よくならし、其上に紙を二重にしておしかぶせ、其中へ水を少し入れ、炭火の小さき方を幾度も入るれば、チユー、チユーと水は沸立ちて、炭火に吸ひ込まるゝなり、湯のなくなりし時を度として、茶碗をふせるなり、暫時して紙を取りのけて芥子を用ゆれば、鼻をつく如くに氣の立つものなり

蕗の薹の田樂

蕗のとうの開かぬものを、串にさし、唐がらし味噌を付けて焼くべし、味噌はすり鉢にてよく摺り、砂糖にて味付け、唐がらしの粉少し摺り交るなり、之はすゐたる人の好むのものなり、

蕗のとうの味噌焼

蕗のとうを細かくきざみ（之は開き置きたるものにてもよし）味噌に交合せ（味噌はざつと摺鉢にて摺れば尚さらよし、又其儘にてもかまひなし）團子の如く丸く平たくして、之を網にかけて焼くべし、

牡蠣と牛乳のスープ

牛乳一合を一人前として、牡蠣の大なるは三ッ、中は五ッ六ッ、小なれば十位のつもりにてよろし、始め牛乳を鍋に入れ、一合にバタ一さじ、鹽砂糖少し入れて、加減をし、煮立たる時、牡蠣を入れて今一度沸立たる時鍋をおろして冷ぬうちに食すべし、

但し胡椒少し入るもよし、

バタを好まざる時は入れずともよし、

鶏肉のフライ

牛の油を焼鍋に入れ、沸立たるとき、三四人前位の肉なれば、一ッの鶏卵を破り、よくかき交せ夫を鶏肉に付けて、パン粉を充分にまぶしつけ、鍋に入

れて揚げるなり、魚のフライも之に同じ、

他の仕方は

一羽の鶏を骨ともに程よく切り、麦の粉をよく附けて、鍋の油の煮立たる時、すべての鶏肉を入れて（油の分量は中鶏一羽なれば、牛の製油一斤を四分の一位を入るべし）鹽をふりかけ片かはのよく揚がるまで蓋をなし、既に片かはの揚りたる時、蓋をとり、上下に肉を返し、餘り强からぬ火にて、とろとろ燒付かぬやう、骨までよく揚げるべし、しかして牛乳一合程鍋の中へ入れ、又麦粉を一さじ水にて溶し、之をも鍋の中へ入れ、よく交せ、胡椒をふりかけ、鉢に盛りて、食膳に出すべし、汁氣有りて、通常のフライよりも味ひよろし、

豚の切肉の煮方

豚の肉の脂肪をとりさりて、之を細かく切り、四五分位に刻みたる珠葱に、適宜にバタを加へ、肉と共に鍋に入れ、その葱の薄鳶色になるまで煎り付け麦粉、胡椒鹽等をケレイにて溶き、よくかき交せて少しばかりの湯を注し、之を鍋に投じ、とろ火にて煮ること、三十分乃至四十分間を用ふべし、

鮃の酢味噌

鮃を切身にして、ちよつと鹽をふりかけ、湯で丶皿に盛り、わけぎを（細かに葱の類なり）之もざつと湯で丶、三四本づ丶揃へて結びて、兩はしを切り捨て、盛合にし、木の芽を摺り交ぜたる酢味噌をかけて出す、あつさりとして、春季には尤もよし、味噌の作り法は前と同じ、

ジャガ芋と牛乳とスープ

始めジャガ芋を湯で丶皮をむぎ、よく摺り、而して牛乳を鍋にて沸立て、摺りたるジャガ芋をとろとろになる程の加減に入れ、よくかき廻し、鹽にて味つけ、溫き時に食すれば、牛乳の香もなく、洋食を好まぬ者にても、是は氣に入る事妙なり、

搗肉　團子燒

牛の搗肉（是は器械にて搗出したる肉なり、此器械は大方の店に備へ付けあるべければ購ふべし）右

し搗肉の間に合はざる時には、肉を極めて細かく刻み、之を擂鉢に入れてよく擂り、一斤の肉なればバン半斤の皮を去り、柔らかき部を手のひらにてもみくづして、肉とよく捏交せ、玉子二個を入れ、適宜の胡椒と鹽を和して、味噌を付け、更によく混和して、團子の如く丸め、饂飩粉を振りかけ、金串にさし、文火にて燒くべし、之は隨分味ひ良きものにして、強ち洋食に限らず、日本料理の際に用ゆるもよし、

やき蛤

燒蛤は下手にやく時は、あたら潮を覆して、且つ身に灰を附しむるなり、今之を全く燒くの法は、先その蛤の芽を庖丁にて切り取り、而して之を火の上に直に載せて燒けば工合よく燒けるなり、其切り取る芽とは、貝の合せ目を鎖す錠前の如き者なり、そら豆などにある芽に似たり、

婦人の髪飾

婦人の髪飾と云へば櫛、笄、釵、根掛、手絡、リボンなどだが、其中にも昔から流行廢りのないものは、牛京形無地鼈甲の櫛笄で、儀式禮典の際には必らず之れでなくてはならぬ。處が其無地鼈甲の櫛笄は、品の最良なるものを擇ぶとなると、非常に高價なもので、二百金或ひは三百金も要る。一寸した品でも三十圓位する。次に略式のものとなると、黑鼈甲の蒔繪物で、之れは其形に流行と不流行とがある最近十年間流行の變遷を見るに、達磨形と云ひ、お初形と云ふ兩耳の圓い形が一時非常の流行であつたが、日清戰爭の前頃から、普流行した政子形と稱する稍角張つた形の櫛が再び現はれて、之れが一般に持囃された。併し其流行は僅か三四年間であつて、夫から新月形或ひは月稜形など、稱する耳の圓い形が又々流行となり、近年に至つて遠州形或ひは撥形と稱する牛京類似の角張つたものが流行となつて、之れが今も一般に持囃されて居るが、近頃新橋形及び都形と稱する新流行形が現はれた。前者は撥形或ひは遠州形と稱する櫛よりもムネが稍狹くして、所謂意氣な形に出來て居る。後者も亦意氣向だが、之れは耳を圓く作つて、小形に出來て居るから、四十歲以上の婦人向で、流行の範圍は極めて狹少である。次に釵は例の平打が相變らずの流行であるが、片切彫、牛肉彫、透かし彫此三種の中で最も多く行はれて居るのは、透かし彫であるさうだ。根掛は例の珊瑚珠、金地又は銀地の彫刻物が相變らずである。其他手絡と云ひ、掛物と云ひ、何れも大した變りはないが、近年著しく變つたのは花簪で、以前は春は梅、櫻、夏は菖蒲、藤、秋は菊など、四季夫々の花を簪としたものだが、近年は夫が廢れて、薔薇其他名も知れぬ西洋式の花物ばかりとなつて、以前の花簪の中で、其儘を今も止めて居るのは、陽春櫻花の時節、淺草觀音の仲店や、墨堤などで賣る安物の櫻と、今頃團子坂で賣る菊の安簪ぐらゐなものであらう。

洋式茶道

有樂庵　田畑夏子

洋式茶道と申しても、外國より參りたる、否外國の禮式で、茶道いたすのではありません、最も日本古來の立禮の法式で、來賓は椅子に列せしめ、主人は卓上にて點茶なし、文明的に主客ともに快活にうちくつろぎて、談しつゝ點茶の風味を賞し、且つ樂しむ、優美なる法式であります、

室內裝飾

先づ洋風の室で、點茶いたすのが當然で、下座の中央に卓を置き、來賓は左右兩翼の椅子に列せしむ而し日本室でも差支はありません、又庭のあづまや等も一寸おもしろうございませう、裝飾は上中下、千差萬別でよろしい、

あらばあり無くばなきをばそのまゝに
する茶の湯こそすなほなりけれ

の古歌の如く椅子がなければ只の腰掛でも取合せ卓がなければつゝらでもおもしろしいのであります

洋式點茶

さて來賓一同茶席に通り、椅子に掛れる前、主人より先づ挨拶をなす、一同答禮、而して正客より一人々々に挨拶終り、主人は『お樂に椅子により給へ丁度御湯も煮立たれば、平手前にて御薄茶參らす』など挨拶をなし、水屋に退く（此の水屋は其の室の都合により、置水屋、即ち當有樂庵好みの三角形の置水屋を、室の隅に飾附置けばよろしい、次に菓子を運ぶ、菓子は廣盃に客の人數丈盛りて、一人づゝ配りて後、主人の席にて『甚粗菓で恐入ますが、召あがり下さいませ』と云つて、行の禮、客一同も答禮、次には水指を運び、卓上に飾附く、次に兩器、即ち茶碗茶入を運ぶ、即ち右手に茶入左手に茶碗を持ち、目八分にして水指の正面に三ッ星に飾附く、次に建水を運ぶ、即ち建水の中に蓋置を入れて、柄杓を横に上に組合せて、左手に持ち運び出づ、次には卓の中央に直立なし、先づ建水を卓の左の手前の

角に置き、柄杓を右手に移し、左手にて蓋おきを出し、其上に柄杓を音のせぬ様に靜に置き、位置を正して目禮なす客同じく目禮、茶碗を右の手にて二つ、取になし、茶入は右手に取り、兩手にて下に置き、第一の帛紗さばきして茶入を淸め、茶入は水指の正面の眞飾、或は亂飾と申して、水指を外して飾るもよし、次に第二の帛紗さばきして、茶杓を淸め、茶入の上に飾り、帛紗は一度腰に附く、次に右手にて茶筌を取り、茶入の右脇少々手前に飾附、左手に柄杓を取り、右手にて第三帛沙さばきをなし釜の蓋を取り、蓋置の上に飾附け、帛紗は元に納め、手にて茶巾を釜の蓋の上に出し、次に柄杓を右手に持替へて、湯を汲み、茶碗を移し、柄杓を釜の上に置き、右手にて茶筌を取り、左手にて茶碗にあしらひ、茶筌湯治をいたし、例の如く始めに三度音して輕くすすぎ出して、茶筌は右手にて元におき、右手にて茶碗を取り、左手にあしらひて湯を廻し、左手にて建水にこぼし、右手にて茶巾を取り、茶碗を淸める事

例の如し、茶巾は元におき、茶碗も下に置き、右手にて茶杓を取り、左手にて茶入を取り、右手の茶杓をにぎり、茶入の蓋を取り、茶碗の右脇の少し手前にうつぶしておき、さて二さじ茶碗に移す、而して茶杓を横にしてかるく一つ茶碗のふちにて、はたき拂ふ、茶杓を持ちたるまゝ、茶入の蓋を右手にてなし、茶入を左手にて元の處に置き、茶杓も右手にて茶入の上に元の通りおく、次に右手にて柄杓を取り湯を汲み、三口半ほどを茶碗に移し、殘りは釜にもどし、柄杓は釜の上におき、右手にて茶筌を取り左手は茶碗にあしらひて、ふりたつるも座禮に同じ、而して出來れば、茶筌は元におき、右手に茶碗を取り上て、左手にあしらひ、茶碗の向きを正し、卓の中央の前方につゝしみて、右手にて差出しおく、正客進出で、茶碗を受取り、元の席につき、三口半にのみ終れば、常の如く、出でゝ返す、主人は前の通り客の人數丈、若しくは正客よりお仕舞の御挨拶無くば、幾ふくにても點茶すべき事は座禮に同じ、

正客よりお仕舞の挨拶ある時は、例の如く答禮なし、湯を汲みて仕舞の茶筌湯治をなし、元の樣に仕舞ひ、而して建水を左手に柄杓と蓋置を右手に持ち例の通り、水屋に引退る、次には兩器次には水指、引終りて、音樂繪書等の書類來賓の好み給ふ樣の物を撰み、卓に運び出で、來賓に供して、樂しく決して來賓に窮屈若しくは、不快の思ひをさせぬやうにせねばなりませぬ（平手前終）

同じく客心得



一、洋式平手前にても、凡て茶席に通りたる時は、主人の挨拶ありて初めて腰掛るべし

二、菓子は主人より配りても、挨拶ありて後食すべし、而して殘り分は左の袖又は左のかくしに納めおくべし、

三、主人より點茶碗卓の上に出れば、正客次客に目禮なし、進み出で主人に目禮して、茶碗を受取り、元の席につきて、戴き、終りたれば常の如くのみ、口を清めて

向を正し、進み出で、主人に返す、又二客は正客と次客とに挨拶して進み出で、主人に目禮して、茶碗を受取り、他は皆正客に同じ、點茶中といへど、差支無きことは談話するも差支なし但し通常の音聲にてすべし、高聲も、また余りに小聲も惡し、

（未完）

剃刀の遣ひ方

篠 豊 次 郎

先年女鑑の餘白を拜借して、御自分で顏を剃る仕方を述べましたが、今度は他の方の顏を剃る仕方をこれを營業とする人の參考になるまで、詳しくしたゝめて見ませう、

先づ人の顏を剃らうとするには、第一爪をよく取つておくこと、第二手をよく洗つて置くこと、第三鬚は左の手で剃るといふ心持になること、第四口中をよく洗ひおき、相手の顏に息をふきかけぬやうに氣をつけること、第五剃刀の先を能くまはして置いて、一分位先を使はぬやうにすること、第六剃刀はしつとりと落着いて、浮さぬやうにすること、第七襟元へ湯水剃毛を入れぬやうにすること、第八化粧剃刀、俗に申す淸剃の時は、他が見ても手際よく見えるやうに、剃らるゝ相手もよい心持になるやう注意すること、第九剃刀は餘り寢かさず、また立て過ぎぬやう、而して地肌へあたりよくして、小走つかはぬこと、等を先づ心得て置いて、それから仕事に取かゝるのであります、

其の一　左の顏

椅子に枕のつくやうにし、それへ相手に腰を淺くかけて貰ひ、その枕は後襟と同じ高さにし、しづかに後襟をそれにつけ、顏は右に向け、自分の身體を椅子の後の少し左に置き、人差指、中指、藥指の三本にて、湯水を襟元などへ流し込まぬやうに注意し、寒い時分なれば充分暖まるやう、また暑い時候なれば水にてよくしめし、左の三本の指を添えて、

頰の下より高頰まで、刻むやうに引剃刀で剃り上げることと三四回で、もみあげの際をきめ、それからすぐ小鬢の下を剃付け、體をすぐ左へかはして、耳根のずッと下より耳根の際までそり上げるのでありま す、その時は左の親指を蝮形にこゝませて、人差、中指の二本にて右側の腮へかけ、親指は充分向ふへ引ッり、引剃刀にて、體はくの字形にこゝんで剃るのであります、

それから體をもとの眞後へもどし、左側の耳の下を襟元へかけて、ヅッと左の中指にて押へ、二三回引剃刀にて剃り上げ、體をすぐ右へ廻はす、右の足は椅子の右の前後の間に入れ置き、左の足は、少し爪立つて居る位になり、さて體を前へ乘出すやうにし、三本の指にて引ッぱり、此時も引剃刀にて、襟へヅッと下より腮の際まで剃上げるのであります、

再び體は元の眞後にもどり、兩方の手でやんわりと眞直に顏を直し、それから體を前へ乘出して、喉佛の下より刻みながら三四回そり上げ、腮まで來たら、少し右側の腮の際の骨の上へ、皮を引張る、この引張るのは、人差指と中指で、人差指の橫腹へ充分氣を入れて引張るのであります、それより腮のまん中、左より左へと順に剃終り、體はすぐ右側へ來て、左の三本の指で、皮のたるまぬやうに引張り、引剃刀で刻みながら落着いて剃るのであります、

次は體をそのまゝにし、鼻の下左寄の下の方を引剃刀でそり上ぐ、その時は親指と中指の二本で、當り強く引張るのであります、それから體はすぐ眞後へ廻り、高頰まで引剃刀で剃り上げ、また體を右へ廻はし、目の下を中指の橫腹で充分引張り、引剃刀で刻みながら落着いて剃るのであります、

終に左の鼻の頭へ親指をかけて、引剃刀でそり、すぐ二本の指で、小鼻の際をつまんで細かにそる、體はまた眞後にもどり、二三回押剃刀で剃下げ、唇をつまみ、上下唇境界を剃りおろす、

これより化粧剃刀になり、體は左に廻り、椅子の左前足の際へ、左の足を入れて、充分腰を引いて、

ゝもく毛の殘らぬやうに見て、左の親指の腹で左の眉尻を引張り上げ、引剃刀で剃り、體はそのまゝにして、よく耳根の際を持ち、上へあげて、腰を十分に引いて、二三回極落着いて、剃刀の先をつかはぬやうにして、襟へヅッと引剃下でそり下げ、腮の際より順に右左のまん中まで剃下げ、下の方も細かに刻みながら剃下げ、體を與うしろにもどし、左の指で引張り、押剃刀で高頬は上より下の方へ剃下げ、その時下唇をつまみ、押剃刀で剃下げるのであります、

それよりすぐ左の眉尻をちよッと剃付けて、下へ左眉の上を二三回剃り、鼻の頭を極輕く、眉頭より下へ剃おろし、また小鼻の上とその通り小鼻へ剃下げ、耳根をつまみ、耳根の際より頤の骨の上を輕くそり下ぐ、これで左側のもくげ顔は一段落であります、

さて右に記しました、體といひ腰といへるは、剃らるゝ人でなく、剃る方の人であります、

珍らしき女世帶

一は京都丸山派に名を知られたる畫家の娘青木成子(二十三)は肖像畫家中丸精十郎氏(先代)の門下生たりし人の妻佐山緑子(三十五)意氣相投じて女同志の一世帶を神田區三崎町三丁目に持ちさゝやかながら寫眞業を營みつゝあり今其の來歷を尋ぬるに京都美術界に丸山派の青木隣橋(五十六)と呼ぶ畫家あり妻を水灝女史と云ひ是れも閨秀畫家として曾ては御所の女官に繪畫の道を敎へしことありとぞ夫婦の間に四女あり長を千鶴子(三十五)次を勝子(三十三)次は即ち成子にして末を米子(二十)と云ひ今より八年程以前一家擧て上京し下谷區中根岸に居を構へて專念丹青の技に耽り居りしが恰も成子が十七歳の春母は腦貧血症にて此世を去り其後は隣橋氏の手一つにて四女を養ひ居る内良緣ありて千鶴子はドクトル灰田勝五郎と結婚し現に布哇ホノルヽに住し勝子は横濱市貿易商足立眞彌氏に嫁したれば殘る成子と米子にて一人の父に孝養を盡す程に成子は近頃寫眞術の趣味を解し何卒其奥義を極めて一廉の寫眞師とならんとの望み抱き横濱なる姉婿足立氏が一時も早く家庭を造れと勸むるのをは斥けて遂に同地の寫眞師鈴木一眞氏の門に入りぬ又爰に緑子は三崎町三丁目に住せる佐山比佐氏の妻にて彼の九段遊就館備へ付けの戰死將校の肖像畫を揮毫せし中丸精十郎氏の門弟なり左れば肖像畫を巧みにせんには最も多く寫眞に接するが捷徑なりとて氏自から寫眞術を研究し頗る得る所ありし甲斐なく肺の病に罹りて朝夕枕に親しむことゝなりしかば緑子は生計上覺束なくも寫眞術にて夫の藥料を得んものと志し不幸にして身罷りし後も其業を續けて三崎座の女俳優をば唯一の華客と賴み辛くも其日を送る中同業いつしか親しみて成子と相知るに至り女同志の同じ業、さらば是より一家に住みて互に助け互に勵み兩人一體となりて此業に進まんとて遂に前記の地に一家を借受け朝夕の睦じさは宛然姉妹の如しとぞ世にも珍らしき世帶にこそ

目白臺の婦人ホーム

小石川區高田老松町五十番地に八百五十五坪の地積を有し、建坪數七十五坪洋風總三階建の婦人ホームあり、名をブラックマーホームといひ、米國イリノイス州生れのアーッパン女史(四十七)の創設に係れり、女史が初め同區小日向臺町一丁目四番地に居る頃、たまく某家の海老原福子(二十二)と云へる、家政上止むを得ずして藝妓屋に奉公せんとするを見て、氣の毒に思ひ、同人を救ひたるを手始めに、地方より上京せし年少の婦人にして、學資窮乏の爲め、下女奉公などに半生を托せんとするを見て、同情の念禁ずる能はず、二三の困窮者を收容して訓育せしが、此ホームの起源なり、▲其後女史は奈何にかして、是れを大なるホームになさんものと、鄕國イリノイズ州の有志家に謀りたるに、同地の一農夫ブラックマー(九十四)といへる、非常に日本贔屓の男ホームの創設に要する金圓は悉く寄附す可しと申來り、爰に始めて具體的に其の設立を見るに至りたり、▲ブラックマー敢て富めることにはあられど、九十四歳の老體を以て親ら鋤鍬を把りつゝ、農業に身を投じ、已に如上のホーム設立費として、一萬餘圓を投じたるは、有難き志なるを以て之を紀念せんが爲めホームの名をブラックマー、ホームと稱せるなり、▲同處は他の女學生監督寄宿舍とは、全然其趣を異にし、其內規とも云ふ可きものを摘記すれば左の如し。

一、當ホームには、自費生と給費生との二種を收容す、自費生は當分一ヶ月十圓にて、食料其他一切を給す。

二、給費生部は一家の情實其他止む事を得ざる事項の下に、學資金を得能はざる者のみの爲に設く。

三、給費生は二名以上の保證人を要し、學業中途にして決して退舍するを許さず。

四、給費生にして中途退舍するが如き事あらば、時に入舍以來の費用を支辨せしむることもある可し。

五、給費上にして目的の女學校を卒業せし上は向ふ二ヶ年間一種の義務年限に歸す可く、應分の月俸は素より支給すべし、

以上の規約の下に、社會に信用あり、且つ名望ある紳士淑女の紹介の下に入舍を許すも、給費生の如きは、飽まで其の嚴密なる身許を調査し、年齡の奈何に拘はらず入舍を許し居れりと現に在舍中のものは自費生十二名保姆志願者給費生二人、女子大學通學中の給費生五人、他學校中の給費生二人、總計二十一名あり▲右の中下谷萬年町小學校長坂本龍之助氏の紹介にて來りし小山松子(十三)の如きは、將來敎育者たる可く本人の望むまゝに自費生として入舍を許せしものにて、藝妓屋に身を沈めんとして危くも救はれたる上記海老原福子の如きは、既に先ごろ一人前の保姆となりて、淺草なる某小學校に出勤しつゝあり又女子學院卒業生竹中まつ子(三十六)はアーッパン孃の指導の下に、幾多の在舍生を監督しつゝあり、ア孃もまつ子も共にユニバアサリスト派の信者なれども在舍生に對しては、更に宗教染みたる說敎をするでもなしとの事なり。

紋章の話

田部井竹香

（一）紋章の研究が如何に必要なるか

吾人が平生着用する所の衣服の紋章が、只その模様たり、裝飾たるに於ては、吾人別に之を論議し、之を研究するの必要とてもなきことなるが、苟も之が女子禮服の一條件として、規定せられし以上は、吾人は宜しく十分の論議を發し、十分の研究を要すべきは、又止むを得ざる次第である、

抑も、我が邦、今日女子の禮服として多くの場合に於て規定せられつゝある所は頗る曖昧にして、單に「白襟黑紋付」といふに過ぎぬ、さればにや、或る田舍の老婆は、滑稽にも其の意味を誤解して、曾て愛國婦人會場へ、黑の紋付の衣服の上に白の半襟をかけて出て來たことがあつたとのことだ、こは一應無理ならぬことにて、此の文にては、如何に立派に解釋する人にても、黑の紋付の衣服に、白の襦袢の半襟をかけたる事とは解し難い、余は寧ろ田舍老婆の解釋を至當とするのである、

黑紋付といふも、亦決して黑の衣服に白の紋付けたるものとは、容易に解し得ぬ、通常は茶色の衣服に黑の紋章を付けたものゝ様に讀まるゝのである。

併しながらそは只規定せられたる文章の不完全なるのみの事であつて、已に紋章其物が、女子の禮服の一條件として規定せられたるは、系統を重んずる我が國性と、美術を好愛する我人心との上に於て最も喜ぶべき事に屬するから、余は聊か左に其の由來と將來に對する希望等を述べやうと思ふ、

（二）我邦の紋章は如何にして起りしか

抑も國家若くは或る團體が、一定の徽章を有するは、西洋各國に於ても、其の例少なくないが、然し各家に於て各紋章を有し、衣服調度を始め、其他の諸物に之を付するの多きは、本邦を以て第一とするのである、蓋し是一は本邦人が其國情に於て最も其の系統を重んずる美德あると、一はその人心の自然

に美術を好愛し、隨て其の意匠考案に巧なることによるであらう、今其の起源を尋ぬるに、畏くも我皇室に於て用ひさせ給へる桐の御紋章は、嵯峨天皇の頃より、その御袍に桐竹鳳凰の御模樣を用ひさせられしに始まり、菊の御紋章は、古くより太上天皇の御袍には菊文ありしが、特に龜山上皇が頗る菊を御鍾愛遊ばせられ、其の御袍に菊の御模樣を附せさせ給ひし等より起りしとのことである、國旗に日章を用ふるに至つたのは餘り古くはない、勿論日章は月章と共に古來我が錦の御旗の印として用ひられたのは云ふまでもないが、單に日章のみとしたのは織田豐臣時代外交の頻繁であつたとき、海洋を航行する船に多く之を用ひた、その後德川氏の初めに之を以て船舶の徽號としたこともあつたが、德川氏の鎖國主義は大船禁止の命となり遂に之を廢するに至つた、其後幕末開港の當時各藩の徽號區々として、統一せぬゆゑ薩藩主の島津齋彬公は、古來我が國民の最も尊崇する日章を以て國旗としやうと思ひ立ち雛形を作り幕府に上書したのが、幸ひその採用する所となり、幕府は安政元年七月一日を以て大船には必ず白地の赤の日の丸の幟を揭ぐべしと命じたのが始めである、

夫から一般人民の佩用する紋章は如何にして起りしかと云ふに、そは中古武門武士なるものが、其の戰陣の幕、若くは旗、指物などに遠方より見易き徽章を附し、敵味方の區別を明にしたるに始まり、夫より兜、鎧、太刀などの武器にも用ひたが、終には平常の衣服、調度の類に至るまで悉く之を附するに至りたのである、その始めは前九後三の役の頃でもあらうか、夫より源氏の笹龍膽、平家は蝶、北條は三鱗、新田は丸に一つ引、足利は丸に二つ引など、各家次第にそれ〳〵の紋章を選み用ひたのである、

(三)紋章は如何に變遷せしか、

紋章の起りし當時には必ずしも親子、兄弟、相傳へて同じ紋章を付することもなく、各その感ずる處をとつて之を定めたものである、又幕の紋にちらし

づけわり、旗の印になかれ模様などもあつて、模様と紋章とは劃然たる區別もなかつたのであるが、鎌倉時代、彼の最明寺時頼公が『家の紋正しきは筋目もさこそとおもはれける』といはれてから、自ら僭國に胡亂の家紋を用ふるもの少なく、家紋は子孫相傳ふるを法例とするに至り、足利氏の天文年間に至つて、更に『諸家紋牒』といふものも出來て、各家の紋章一定し、家系の如何も一見明瞭となるに至つたのである、

然るに徳川氏の中世に至りて、紋章は多く實用よりも寧ろ裝飾となつて、堅き男の紋章を女のつけんこと野暮なりなどゝて終に之をくづし替ふること始まり、或は筆數少なきを多くし、或はひなたを日陰とし、又は些々たる嘉例吉瑞より更に二種の紋を製し、之を裏紋又は替紋とし、本紋と並び用ふるものもあつた、又崩し紋の一種にやつし紋とも本紋に洒落た意匠を加へて崩したのもあつた、又元祿の頃に至つては文字を以て紋章とすることなども流行し、

＊　＊

愈々出て愈々濫に、其の意匠考案に於ては大に賞すべきものあるも、其の各家系統を重んじて、之を表章するの美旨に於ては、頗る沒却せられて仕舞つた特に倚り筆數を加へ或は意匠を凝らしたる爲に、一見し如何なる紋章だか明瞭ならざるものゝ如きは、紋章從來の本旨に背くものといつてもよろしい、

（四）衣服の紋章は如何なるものを可とすべきか

紋章は無論其の家系を明瞭ならしむるものであるから、古來其家々にて佩用するものを襲用すべきは至當の事であるが、然し或る場合に新に之を選擇するとか、又は新に選擇せぬ迄も多少變更を要するときなどには餘程改良すべき點が少なくない、左れば余は紋章に就て左の意見を有す、曰く、

一　紋章は成べく一見して明瞭のものとしたい、

二　紋章は同姓同氏は成るべく同形若くは類似の形としたい、

三　禮服の紋章は、其の大さと着くる場所と其の

類とを一定したい、今その第一項の紋章が成べく一見して明瞭のものとしたいといふは、言ふ迄もなく、紋章は單に模様でなくして一の徽章たる以上は明瞭を欠いでは、其の用を爲さぬのである、讀者は已に熟知せらるゝならん彼の徳川時代に於て紋章の類似によりて殿中に於て人違ひにて背後より切り付けられ、不慮の災難を被つた人のあつたのを、夫れから第二項の同姓同氏は成べく同形若くは類似の形としたいといふのは、彼の元來が藤原であるなら、遠藤も、近藤も、伊藤も、齋藤も共に藤の花にして稍少しの差異のみにしたいのである、



第三項の大さと場所と數とを一定したいといふのは同じ衣服の紋章でも非常な大きな紋を付つるものがあれば又非常に小さいのをつける人もある、付け場所と數とも只一つ背に附るものがあれば、背と袖と合せて三つ若くは五つ付つるものもあつて、何れも一定しないのは面白くないて

と丶思ふ、特に禮服とする以上は一定する必要がある、

＊　＊

(五)婦人の紋章は生家と婚家といづれのものによるか、

婦人の衣服に着ける紋章は、其の未婚のものは無論生家の紋章を用ふべきであるが、一旦結婚してからは生家婚家いづれのものによるべきかは、是は問題である、而し余は斷じて結婚後は嫁入先の紋章を佩用するを至當とする、何となれば從來は女子が人に嫁して後も猶生家の姓をさへ名乘りしほどなれば紋章も自然生家のものを用ふるを至當とするけれども、今日は女子が他家へ嫁して後は、直に婚家の姓を名乘るべきことゝなつた以上は、紋章も亦之と同じく夫の家の紋章を用ふべきである、之で人に嫁した、本義に適ふ譯である、

梅かほり霧なきてはるの野は
風のとがにもなりにける哉　　近衛忠熙

新聞遊戲 七響考

富田寛

昔は十種の香を聞きわけて樂むと云ふ、上品な遊びがあつたが、香を集めてそれをかぎ分けると云ふことは、大分鼻の敎育が出來て居らねばならぬ、それから思ひついたのは、耳に訴へて樂む遊戲で、仕方は十種香の聞分けと同じことである、

先づ同じ箱を十個拵へるのであるが、香箱であれば申分はない、而しそれを作るのは面倒であれば、何でも小さな箱でさへあれば、マッチの空箱でもよい、併し同じことなれば、紙で奇麗に貼つた方が、體裁がよいのみならず、心持がよい、

その箱のうち三つを、白菊、初梅、歸雁、呉竹、千鳥、老松、紅梅と云ふやうに、適宜に名をつけて甲の箱を老松とし、乙の箱を呉竹とし、丙の箱を紅梅とすれば、主人は客の知らぬやうに、粒の揃うた大豆を、數を違へて入れ、客の前に出す、客はこれ

をふつて見て、これは老松の音、これは紅梅の音、これは呉竹の音といふことを記憶する、

そこで殘り七つの箱は、二つ宛同じ大豆の數を入れ、猶一つあるのへは、老松、紅梅、呉竹の外なる數を入れる、假に之れを歸雁としてもよい、即ち老松の箱が合計三つ、呉竹のが三つ、紅梅のが三つ、歸雁のが一つといふ事になる、それが面倒であれば一の箱、二の箱、三の箱、四の箱と覺えてもよい、たゞ此遊びを優美にする爲に、假にかゝる名を付したのである、

客一同三つの箱の音を記憶し終れば、件の十個の箱を、混合して、どれが何の箱であるかゞ解らぬやうにしてしまふ、

そして、各自の袋の中へ、小さな札に、老松と書いのが三枚、呉竹と書いたのが三枚、紅梅と書いたのが三枚、歸雁と書いたのが一枚入れてあるのを持つて居る、

そこで別の紙に此遊戲に入れる人の姓を書き『これも假に箱の名を自分の代名詞として書いてもよい』その下へ箱の名を記入する空地を置く、

さて甲より順次に、箱の音を聞分けて、自分の思ふ箱の名札を順にふせ、それを十たび操返して積重ね、箱も十個順序を崩さず積重ねて置く、

さて名札の方を順に、前に拵へ置きたる客の名の下に記入し、それを終れば、順に名札と箱の中の數とを引合せ、當不當を見分け、多く當りたるものを勝とするのである、

初めより呉竹には二個、老松には三個、紅梅には五個入れある等明し置いてもよい、その數の外らしいのが出れば歸雁であると思へばよい、

そこでその數を振つて當てるのは容易のやうではあるが、十以下でも一粒位ではわかり難い、試にやつて見給へ、なか／＼趣味のあるものである、

春の野は霞こめたりいつくより
梅が香おくる風は吹くらん　　正風

男女交際に就て

末松男爵談

我が國の婦人は動もすると、彼の歐米婦人に倣はうとして居る傾向が見えるから、少しく彼の國等の婦人と、我國の婦人との或點について一言したい、西洋で先づ一番に婦人の頭の高いのは、米國で、其の甚しいのになると、男子は婦のために働き、さうして其得た所の金錢は婦人に捧げ、婦人はそれを自由に使用すべきものであると言ふ論さへ唱へられる、併し此論などについては、西洋の他國から非難の聲が起つたのみならず、米國婦人自身の中でさい非難者もあつたぐらゐ、誰しも此論に贊成するものは無からうし、又確く歐米各國が婦人に自由を與へて居る譯ではない、彼の國等の婦人が社會に向つて自由を絶叫するのは、多くは感情の上から起つたものらしく、其自由の善惡と云ふ事は、一の問題となつて居るので、自由を與へるが善いのだとのみ我が婦人が思つてはならんけれども、強き者が弱きものを扶ける、即ち男子が婦人を庇うといふ事は我國以上に行はれて居るが、我國にも今少しく男子が女子を大切にし庇つたら善からうと思ふ

概して日本婦人は、彼の地の婦人に比して、教育の程度が低く、從て自信力が薄い、此自信力といふものは、どうしても教育なり素養なりがあつてそして後に出來るものである、此自信力や又判斷力がない爲に、我が國の婦人は往々間違を生じ、危險に瀕することがある、その間違を生じ危險に瀕するについて思ひ出すが、彼の國では未婚の婦人即ち處女などが堂々と一人で公園などを散步するやうなことは決してない、必らず一人の後見者が後に附いて居る

然るに日本の文士などは此事實を知らずして、彼の國は男女交際が頻繁である、婦人の地位が高いなど、思ひ込み、日本の良家の處女が一人公園に散步して居ることなどを小說に描いて、そして其を危險とも言はず、恰も普通の事實の如く書いて居る、是などが婦人の風致を害するものだらうと思ふ、彼の國等に在つては比較的教育あり素養ありて、自信力の有る處女にすら、監督は右に述べた通りである、まして目今の女子をしてかゝる行爲をなさしめるのは實に危險である、彼の國婦人は男子に對しての交際振りも、日本の婦人よりか遙かに上手である、けれどもこれは從前からの遺風で、母は先づ其娘を連れて夜會などに出る、其娘は自然、その母の所爲を學ぶと云ふ風であるから、上手なのも當然である、然るに日本では母親は家庭を踏み出した事もないのに、其娘をば夜會へ出さねばならぬやうに成つたのである、故に其交際振の拙いのも仕方はない、併し日本婦人に窈窕嫻雅といふ一大美點の存するとは、西洋各國の者も認めて非常に稱讃して居るのであるから、此美點を損してはならぬ、此美點を損せず、交際に巧みになる樣、一段の工夫を凝らされればなるまい

新年の儀式

阿井飛洋

昨年の吉例により、公卿華族一家、大名華族一家の、新年の儀式に就て、その聞く所を紹介しやう、

岩倉公爵家

贈太政大臣家として、東伏見宮妃殿下の御生家として、家門のほまれ高く、公爵は侍從職幹事として爵位局長として、又令夫人は愛國婦人會の會長として、ともに令名高き岩倉家の、いかにして新年を迎へらるゝかを、同家三好家令によつて聞くを得たれば、こゝにその概略を記さう、

門松と注連飾は無論、前年の暮廿八日頃迄にとゝのへ、元旦神棚または御靈前に鏡餅神酒を供へ燈明をさゝげる、神棚は天照皇大神宮を、御靈殿は御總靈及故大臣公を祭らるゝのである、午前七時公爵はじめ家族一同御神拜あり、同七時三十分御祝餅あり、同八時公爵へ家族一統、次に、家令始め表方一同、老女々中より、新年御めでたき旨を申上げる、すると公爵は御口祝を下さるゝ事になつて居る、その次第は、同家には床の間は云ふまでもなく、新年に因める、めでたき掛物をかけ、その前に祝餅と口祝物を四つ三寶に乘せて飾る、いづれもその下に根引松に裏白、及小殿原を敷き、一方はその上に餅を置きその上に熨斗、昆布、橙を置く、又一方は昆布を一寸巾に三四寸位に切りたるもの、熨斗も同じく一寸巾に三寸位に切りたるものと、勝栗との三品を盛つてある、この三寶をまづ老女より公爵の前にさし出す、公爵は新年の挨拶をなしたる一同へ、悉く手づから、以上の三品を箸にて執つて與へられる、それが六七十人といふ多數である、それから公爵は參朝せられ續いて東宮御所へ參賀せらる、正午に御祝飯あり、午後五時一同へ祝酒を下される、その祝酒は即ち雉子酒で、雉子の薄鹽にしたるを二切ばかり茶碗へ入れたるに、酒の熱燗したるを入れたるので、なか／＼芳味なものである、

二日三日ともに朝は元日の通りで、晝と夕は平素に變りはない、四日に晝御鏡開きといふのがある、これは鴨の雜煮で、大名の家で七日に具足開きをすると同じことである、七日に七種粥を祝ひ、十五日に小豆粥を祝はるゝのである、

元旦の御祝食は女中仲居まで同じことで、鹽小鯛の向に、雜煮は、小餅、頭芋、小芋、大根、昆布、花がつをといふ取合せで、頭芋といふのは大きなまゝのを入れるのであるから、それ一つで椀の八分を占領するとのことである、その他の献立をも聞くを得たのであるが、一々それを記することを略して、その材料を云へは、斯んなものである、

鯛、鹽小鯛、鮭、蛤、めし鰹、たら、ぼうだら、鹽鰯、玉子、かま鉾、白豆腐、椎茸、すだれ麩、蓮、生姜、大根ごまめ、午蒡、ほうれん草、數の子、ごまめ栗等である、

秋元子爵家

記者は秋元子爵に面會し、同家にての新年の儀式を尋ねた、子爵は微笑しながら、そのやうな質問を時々受けることであるが、さてお話し申す程のものはない、併し折角の事故古例を一つ二つお話し申さう、

私の家では蜜雜煮といふのを祝ふ、その仕方は一升の味淋を五合に煮つめ、それに砂糖一合を加へて煮たものを拵へて置き、燒いた餅の上にのせて出すのであるから、わる甘くて食はれたものではない、それは一同閉口したと云ふことである

それだけでは話があまり短か過ぎるから、少し其理由、否理由は云ひ傳へても書き傳へてもないから解らぬ、たゞ推測を云へば斯うである、徳川家に仕へた三代目の泰朝といふ人は、日光の奉行をし、甲州の矢村に居たが、その時桂の宮が或る事情によりて、此矢村の秋元家へお預けになつた、所がその桂の宮はなか〳〵活潑で何でも出來る方であつた、京都で天盃拜領の時に醴酒を下さるゝのが、その時分

甲州でその樣な氣の利いたものが出來ぬから、例の蜜雜煮といふものが考へられたのが、秋元家の例になつたものではあるまいかと思はれる、

　それから七日には七種粥といふ何の家でもお定まりの雜煮がある、當家ではその七草をたゝかないで大きな俎板と新らしい三尺位の擂木を持出し、臺所方が上下を着て、それから馬鹿げてお話にならんがその擂木をさし上げて、居合拔のこし付をして『殿樣の御事は洪大なること』『お前樣の御前は大いなること』また隱居があれば大殿樣、子息があれば若殿樣云々とやつて、跡でホホーと云ふ、實に滑稽も念が入つて居る、それが濟むと下役に云付けて七草をさく〳〵切つて擂鉢に入れ、例の擂木ですり、雜煮につかふのである、

年賀をうけるのはゝ國に居れば本丸、東京では書院といふことになつて居つたのであるが、今ではすべて應接所で年賀をうけ、元日と二日三日は屠蘇に雜煮位を出す、四日を過ぎても國許から態々來たとか東京では特別に交際して居るといふのは別である、普通面會は宅にさへ居れば何時でも逢ふ事にして居る、

　近來はすべて東京風といふことで、別に變つた獻立もないが、新年らしくはやつて居る、或は新年の儀式を虛禮などゝ云ふて全廢して居る人もある、昔の人の考へたやうに大切ではないが、禮といふものが何れだけが虛禮でないかと云ふと、中々むつかしい問題で、その境界が立つものではない、經濟の上から音信贈答はいけないと云ふなれば、それも非常な見得や、つまらぬ事をしてはよくいが、さうまで經濟呼ばはりをするには及ばぬ、その位な不經濟は外に幾らもして居るのであるから、それが爲に慣習を破るにも及ばぬことである、

　新年の遊戲に就いては當家にては近來これといふ事をして居らぬ、それは先々代の人は不幸にして二囘妻を迎へ、いづれも早世したので、大名の奥なるものがなく、先代は明治十六年に歿したのであるが

安政大地震後家督を相續し、明治の初年からは世の中がむつかしくなり、内亂もあつて、大名が藩主になりその藩か廢せられるといふ有様で、遊戯めいたことは云はゞ嚴禁せられたのである、寛政文化頃には隨分遊戯めいた事をしたやうであるが、それはその時代に限られて、近頃百人一首の聲を偶に聞く位なものである、

下女廢止と家庭

家政經營難と、女子の職業増加の結果、中等及び其以下の家庭に於いて、下婢等の雇人を置く事が、次第に困難になつて來まして『雇人なしに家政を處理する良法なきや』の問題が、起つて來ます。依て下婢を廢止せる二三家庭の經驗を基礎として、其方法を記るしませう。

(第一)は成るべく輕便な家具を用ゐる事であります。譬へば米磨きは一般に磨米の如く寒中も手を冷水に浸して やつて居ますが、之は衞生の上にも、時間の上にも少からぬ不便があります。然るに近時手を浸さずして容易によく磨ける輕易な器械が出來て居ますから、是等を購入するか、主婦自らか工夫するなどのヿであります。

(第二)は市内にありふれて居る様な、坐して働く流しを廢して高流しとし、其他も之に準じ、立て居ながら食事の準備をなすヿです。

(第三)は成るべく食器を多く要せぬ様に心掛るヿです。此はさ迄と思ふ人もありませうが、日々三度々々のヿですから、一年につもると其手數は中々のものです。嘗て某家の下婢にして、夜々拙宅に勉學に來た者は申しました、食事に皿を一枚餘計使用すると否とで、時間の上にも勞働の上にも影響がありますと、當時私は之に左程注意しませんでしたが、近頃になつて大に味ひある言葉であると思ひました。

(第四)は家長が室内の整理やランプの掃除抔を擔當し、小兒あらば朝食事迄に其世話をするヿです。此には食前の運動、親子の愛情抔云ふ間接的利益が御座いますし、又妻に對する同情も愈々濃かになる抔、下婢の居る時代に比し家庭の圓滿を來す効果は著しい様です。

(第五)は子女にも適當な用務を申付け、且つ自身の身廻りは可成自身でさせる様にするのです。實行者の經驗を聞きますと、幼兒少年には或る意味に於ける獨立心を冥々裏に與へ、年頃の娘には學校で習ふたヿを實地に練習せしむるなど、意外なる間接的効果だあつたと申して居ります。

併し下婢が居なくなつて困難するのは、訪問者の應接、或は外出のヿで、殊に舅姑などの居ぬ單純な家庭に於て最も然りと云ふヿですが、三ヶ年來の經驗者の談によれば、所謂「窮すれば通す」で、強ち困難でないと申して居ます。これはこうと云ふヿは出來ません、其主婦其家庭の工合で、之を異にしますから、實際やつて而して後之を發見し得られませう。

(松山生)

第二十二回年度報告

○貸借對照表

借方

負債に屬する分

一 株金	一、〇〇〇、〇〇〇●〇〇〇
一 諸積立金	二三三、一八四●九〇〇
一 預り金及保信金	二八、八五九●七二六
一 支拂手形及未拂金	七九三、五七五●二六〇
一 非常特別税金	一一八、一一五●二〇〇
一 前季繰越金	二一、八〇〇●八五〇
一 當半季利益金	一八三、七一六●九三二
合計	二、三七九、二五二●八六八

貸方

資産に屬する分

一 不動産器械及什器	一、一七二、七一四●八七三
一 當用品及備品在高	三八、〇八七●五六八
一 原料、仕掛物及屑物在高	八〇四、五八七●七一二
一 製品及製品送荷在高	七五、三三二●一六〇
一 約定濟製品在高	七五、一九二●一六〇
一 得意先、未收入金及假拂金	一八八、八七三●一一〇
一 職工貸金	一二、五九九●二八〇
一 銀行當座預金及現金	一一、八六六●〇〇五
合計	二、三七九、二五二●八六八

○利益金處分

一 金十八萬三千七百十六圓九十三錢二厘　當半季利益金

一 金二萬一千八百圓八十五錢也　前季繰越利益金

計金二十萬五千五百十七圓七十八錢二厘

內

金五萬圓也　機械及建物代消却

金一萬圓也　法定準備金

金一萬圓也　役員賞與金

金六萬圓也（一株に付金三圓 即年一割二分）　株主配當金

金五萬圓也（一株に付金二圓五十錢 即年一割）　株主特別配當金

金二萬五千五百十七圓七十八錢二厘　次季へ繰越金

右之通り候也

明治三十九年十二月

東京モスリン紡織株式會社

取締役會長　杉村甚兵衛

專務取締役　端　善次郎

取締役　山崎作次郎

右檢査候處相違無之候也

監査役　坂本金之助

監査役　人見　新助

監査役　金子　良吉

監査役任期滿了に付改選の結果坂本金之助人見新助金子良吉の三氏再選重任す

日本一の奥樣髷屋

日本橋區蠣殼町二の十五寺澤正明(六十)の妻お政(四十五)は性來が神經家丈に、まだ嫁入て間もなき當時から、兎角頭髮を氣にし、まだ束髮の流行せぬ頃の事なれば、唯一つ頭髮を結ひ上るにも彼店のは惡い此店のは善ないと焦れ切た末が市中のあらゆる小間物屋より、各種の丸髷を買ひ來り、口善惡なき下女が『奥樣の髷狂ひ』など影言するも耳へは入らず、疳癪の有丈けを盡して毎日結ひ直し居る内、犬も歩けば棒とやら、漸く氣に入つた髷の出來るやうになりしかば、お政も其頃は未だ若氣の一寸と障つて見た心持よさに、いそ／＼微笑する事も少からねば、況て嫉妬深き同僚の妻君抔は、自作と聞いて盛偽！ウフヽンと笑ひ居たれど、中には土産に買いて歸るもあり、其調製を頼みに來るもあり、旁たお政も不思議な事から花が咲くものと、漸く自惚れ始めし處へ、さる小間物商の老母ありてお政の髷十六個計を受け行たるに、僅二時間で賣盡したりと聞き、其頃は未だ夫正明も宮内省の測量師を勤め居たれば、官吏の奥樣に內職は附物ですといふ人の勸言に任せ、早速間に合せの道具一式取揃へつゝ、紙を縮むるには煙管のラオを以てし、自分の姪に當る池田お松の名前で、見本三つと看板を出し置きたるは、今より二十年前銀座三丁目の裏通に住み居たる頃の事なり、斯くて此髷を雲井形と名附け、幸にも時流に投ずる事を得たりしかば。來るは／＼數多のお華主引も切らぬ內に、之れは岐阜縣令の令夫人、お政の髷ならでは用ひ給はぬを、玆に端なくも名古屋市本町五丁目小間物屋伊藤庄八と云ふが眼を附け、其商標を貰受けて上京したるが、素より本舖は裏通に小やかなる素人屋の事なれば、一寸と見附かりやうはなし、八方苦心の末横山町江川屋に就きて探し當て、初めて注文したる數は僅に五百個なりし、されどお政はまだ手馴れぬ事とて膽を冷やし、一生懸命になつて四個月の後漸く發送したるが、是ぞお政が開運の初めにて、以來は同家の仕事を一手に引受け工女を雇ひ、遂に明治二十六年春今の住所に移轉したるなり、されば良人も官を辭して女房の跡押をし、同僚の妻君も取囃すやらにて、間口は次第に廣がりたれば、夫は三年以前既に恩給に浴する老衰の身となりたれ共、奥樣髷屋の名は更に衰へず、お客は店先から『奥樣この髷は何錢です』『奥樣三番はどれです』と相變らずの奥樣扱かひに、お政も其の氣になつて看板には『あだな日本一奥樣髷屋』と書いたるを懸け、日夜三人の女工を指揮して、紙の切り方綿の入れ方絲の使ひ方等、一々事細に注意する上、一般髷屋の製法は豫め型を作りて腸を押入れ居るを、此方は腸を入れたる後型に苦心を凝らせば、一日の仕上高は漸く八九個に過ぎず、唯々油が浸み透らず、全く破れる迄は髷の型が整然としてゐるといふが大評判にて、閑院宮家を始め、德川家有馬家等迄、一々御用を受け居れりといふ



女子の風俗に就て

法學博士　寺尾亨

近来地方より上京する女學生が非常に多くなり、遠く父母の膝下を距れて、家庭としては殆んど無監督なる下宿屋生活、またそれに類似せる家に寄宿するものが多い、故に女學生に墮落の聲を聞かさるゝは、不思議な事でも何でもない、

私は佛蘭西に長く居つたが、佛蘭西あたりでは、婦人の獨歩きをするものは、正式の結婚をすることが出來ぬ、といふ風で、妙齢の女子が下宿屋住居をするといふやうなことはない、そこで風俗は驕奢な餘りよろしくない所で、たま／＼妻君などの醜聲を聞くことはあつても、良家の令孃に間違は少いやうである、

亞米利加の令孃たちは、お轉婆であつて、歐羅巴ではあまり賞讃せぬ方であるが、その代り常に男子と伍して居ても氣位が高いものであるから、品行に間違の生ずることは少ないといふことである、併し實際内部に立入つて見ると、さうでもないことが社會の秘密となつて居るさうである、

品性の高い亞米利加婦人でも、監督を怠ると悉く無事にとは行かぬ、然るを亞米利加婦人ほどの品格を保つことのむつかしい、我國の令孃たちを、確な監督者のない家に寄宿さして置くは、恰も石の上に卵を置くやうなもので、實に危險此上もなき話である、この危險を冒してまで都會に遊學させる必要があらうか、高等師範學校に學ぶ少數の人や、容貌の

美しからぬ爲に、相當の結婚を得られぬより、高等敎育を受くるもの、また意志の極めて鞏固なもので篤學なる婦人は例外として、その他はその土地丈の敎育で澤山で、危險と釣替に遊學させるには及ばぬ話である、

佛蘭西では、學校時代の娘は、裾なども高くからげて、成るたけ無邪氣に、小兒らしく裝はせ、嫁入前となれば、他の目につくやうな扮裝をもさせる、さうなると、決して獨歩きをするやうな自由は得られぬのである、

それから近來女學校で、活人畫であるとか、自轉車乘であるとか、大分遊ぶことが繁昌するやうである、佛蘭西では、活人畫は見せ物の一つで、東京ならば淺草の奥山に出すべき藝であつて、醜業婦がそれを演ずることになつて居る、それを岡目で見て、眞面目な令孃がたの演ずるものであると思ふのは、大に間違つた話である、

また自轉車に乘るといふことも、貴夫人にはないことで、子供といふ範圍を離れた女子で、自轉車に乘つて居るものは、多少あやしい者と見て差支はない、それであるから、たま／＼自轉車に乘つて見たいといふお轉婆があつても、身分を考へて、自分の邸園内に他に見られぬやうに乘るとか、田舍の誰も見ない所を乘り廻はす位のことである、

然るに我國では一足飛に、學校で、而も公衆の前で、令孃ともいはるゝものが、自轉車を乘廻はし、尋常では面白くないと云ふので、薙刀を振つたり、種々な手つきをして、大に得意がつて居る、それ迄の修業は實に容易ならぬことで、さて自轉車蹈をして何にすることであらう、遊ぶ事に何になるといふ質問もあるまいが、少々桁外れで、詮じて見ると、それが學校の廣告に供せられて居るのであるから、子女に危險を冒して、見せ物の眞似をして、學校の廣告をやらせに、己が膝下を離さねばならぬといふ父母も實に災難な話である、（談片筆記）

▽次號には、家庭敎育に就て、寺尾博士の有益なる高話を掲載すべし、

英國婦人觀

宮川壽美子女史談

⦿英國婦人と日本婦人　英國で女子教育の必要を感じた後、三四十年以來の教育方針は、總て男子と同じ樣で、今に至る迄變りがないので、今日では女の博士が出來れば、學士も出來る、博識な社交の上手な、立派な婦人は澤山に養成されて居りますが、日本では女に學問をさせれば、家政を忘はせぬかと、第一に懸念されるのに、英國では其家政を蔑にして、學事ばかりに猛進させた結果、裁縫や料理は全然他人委せで、中には多少夫れ等の事が出來る婦人もありますが、一般に自から手を下す抔と云ふ事は、餘りないと云ふても可い程であるので、日本では裁縫杯は、殆んど全く女の手で支配して、唯女の手に及ばぬ、染色模樣杯のみを商賣人に委せるので、從つて流行も其邊から生じて來る樣でありますが、英國婦人は自分の着物は勿論、主人のものから、子供のもの迄、殘らず仕立屋委せなので、三四ヶ月目毎には、仕立屋の手から流行形が造り出されて、中流以上の婦人は、其度毎に夫を造るべく餘儀なくされますし、料理をさせるのには、コックが雇つてありますので、經濟上から云つて、不利益なのは、申す迄もなく、生活程度も高まつて行きますばかりか、婦人が一般に社交的で、主人が外で交際すると同樣に、一家の夫人も外出する場合が多いので、假りに主人の月收が三百圓あるとすれば、其中の百五十圓は、夫人の交際費や衣服料に費されます、そこで自然中流の男子は、持參金のある妻を求める傾きとなり、從つて中流以上の婦人で、父の附けて吳れた持參金があつて、一生自分の衣服には困らぬ抔と云ふ向が、結婚の口も早いので、一般には未婚の婦人が頗る多く、斯う云ふ婦人を結婚させたならば、如何な立派な妻となり、母となるのであらうと思はれる、婦人が澤山未婚で暮す始末で、所謂チールドミツスにチールドメードなどゝ申す者であります、其故英國の社交界で、ミツセス即ち何々夫人と申しますれば中々勢力のあるものです、

さりとて英國婦人は、日本婦人に多く見得られない博識で、社交的で、規律正しいと云ふ美點を持つて居りますが、私も日本の女子高等教育の目的は、良妻賢母の養成にあると申しましたら、或英國婦人は、それは能い事ではあるが、英國の樣に女の多い國では、云ふべくして直ちに行ふ事の出來ない理想に過ぎないと申されましたが、夫も理由のない事ではなく、一般に生活程度が高い結果、中流の男子は多く、海外に職を求めて、婦人は取殘される姿なので、自然男子より婦人は多く、夫等の婦人は大抵社會の諸階級に向て就職して、獨立自營して居りますので、未婚者も多い譯であります、又中流以上の婦人に向て、家政の必要を說きますれば、それはプーアガール（貧女）に必要な事で、自分等はメードやコツクを使ふ事を心得て居ればよいと申されます、されば實際家政學校の設備があつても

入學者に上中流の人は少ないのでありますが、併し其學校の教授の方法や、設備抔の行届いた事は、充分に摸範とするに足りますので

妾の研究致したのも、重に其方面であります、

更に英國の下層の婦人は奈何であるかと申しまするに、十四歳位迄は義務教育を受け其後は多く職業に就きますが、其職業はあらゆる商店の賣子から、紡績會社其他の諸工塲の工女、中には鐵物工塲迄にも雇はれて行きますので、激しい勞働の爲めに、一日の勞を慰し悶を遣るべく、コップ酒を煽る抔と云ふものも出來ますし、惡漢の手に罹つて墮落するものも少なくないので、工塲のある諸所の巷には、有志者の手で夫等を匡濟する爲めに、ウチツキンケギヤールス倶樂部といふのが設けられて、廉價にコーヒー抔を與へ、或は舞踏体操裁縫料理抔を教へ　知名の人を招聘して有益な演說を聞かせたりして、互に收容者の多いのを誇る有樣なので、近頃は如上の弊風も大分匡正されたさうです、妾も招待されて此種の倶樂部に、凡そ八軒程參りましたが、日本でも工業の勃興しつゝある今日、此種の設備及工塲令等は追々必要であらうと思はれます、

◎婦人衛生檢査役　英國には各國に衛生部の設けがあつて、ドクトルが其主宰となり、其下には多くの衛生吏員があつて、其中には二名位宛の婦人も交つて居りますが、妾は家政學を研究した後、英國の社會狀態を研究しやうと思ひまして、一年間女子大學の公衆衛生の科目を履修しまして、學友と共に度々實地視察にも出掛けましたが、此衛生吏員即ち檢査役は、男女共に衛生物理化學衛生に關する法令抔の各學科を修めたもので、多く大學の公衆衛生科を卒業したものから採用されますので　其仕事は區の一般衛生に關する育兒の方法、汚穢物の取締、肺病患者を出したる家庭の衛生、女子内職工塲の衛生其他に注意致しますので例へば、病兒のある家に就ては、其育て方に注意し、肺病其他の傳染病にかゝつたもののあつた家に就ては、出入した學校や町の圖書館から書籍を借出した事の有無を取調べ、牛乳バタを檢する爲めには之を購つて歸る下女の手から讓り受けて檢査する、下水塵箱は勿論煙突から黑煙を出すのにも注意を致します、之は倫敦と云ふ所は煙突の數が多く、且つ霧が多いので、諸所の煙突から盛んに黑煙を吹出しては、之が霧と混じて空氣は一面に黄色となり、衛生上頗る有害な爲めで、朝の焚附始めの五分間は黑煙を出すのも温差の出來ぬためと許して置きますが其以上は石炭が惡いか、竈が不完全なのであるとか、注意を與へます檢査役は、絕へず町の工塲學校公會塲等の煙突を見廻つて居るのですが、この黑煙を出す事が大分訴訟沙汰となつた例も少なくありません、そして此檢査役は、多くは男が採用されて居りますが家庭を訪問するの抔は、女の方が都合のよい事もあるので、女も採用されて居るのであります、比役員は最初は九十圓か百圓の月給であります、

社會

米國婦人の働き振

共立女子職業學校幹事　淀三樹太郎

米國人の獨立といふことは、日本人が普通に考へて居る獨立といふのとは違うて居る、而してこの獨立心の基くところは二つある、申す迄もなく、米國は歴史上、國その物が獨立して、將來にます〳〵發達して居る所へ、宗教が之を助けて行くといふことは掩ふ可からざる事實である、實に米國は國が獨立といふ歴史を持つて居るから、祖先の遺風により、殆んど一人々々獨立心を有つて居らぬものはない、それは大人も小兒も少しの變りもない、併し獨立心といふものも、兎角外部の刺戟によりて破壞され易いものであるから、宗教の力によるといふ大きな觀念をもつて、已が信ずる神に頼つて、その獨立心を全うすることに力めて居る、即ち米國人の持つてをる獨立心は、建國の歴史により、遺傳的なる上に、宗教を以て固めて居るのである、

一例を擧ぐれば、家庭に於て子供を育てるにも、我國の如きは、親の膝の上に、愛情一點張で、室も同じうすれば、寢床も同じやうにする、恰も親鳥が子鳥を愛する如き有様である、その愛情といふは、實に結構なことで、親子の間はその愛情で經緯せねばならぬ、併し愛情に偏して、その子の將來を過つてはならぬといふので、小供とは食事などは同じやうであるが、室も寢床も別々で、外出する時などには、子供を置いて出掛ける、たま〳〵子供をつれて出掛ける事があつても子供の手をとるといふやうなことはなく、却つて夫婦手を携へて、子供はお供の如き觀がある、大抵は小供か外に出づれば親達は留守居をし、親だちが出れば、小供は家に殘つて自由自在に遊びもし勉强して居ると云ふ風で、それは親でなければ引立てものがないと云ふ觀念を去らしむる道で、電車に乘つても、汽車に乘つても、皆銘々に金を拂ひ、無益なもの丶外は干渉はせぬのである、一人前何程と小遣が定められてあるものであるか

ら、其の範圍内で勝手に使つて、細かい事には決して相談を要せぬ、人間と生れた以上は人に頼つてはならぬといふことを、造次にも顚沛にも忘れしめぬ様にしてをる

　であるから婦人でも米國婦人は、種々の困難に遭遇しても、種々の誘拐を受けても、それを平氣で切抜けて行く、それは前述の如く祖先の遺風により、宗敎の感化を受け、文明的理想と進歩的頭腦を有して居るからである、何でも自分ですべき仕事は自分がせねばならぬ、それを他にして貰ふのは弱點であつて、自分の品格を失ふ事になる、されば婢僕を使へる家の幼兒でも、朝起きて、湯を取つてもらひ着物を着させ靴を出させるなど云ふ様なことはなく、自分で髪を結ひ衣服も着け履もみがき食事から其他萬端、何うにか斯うにか自分で出來る事でありさへすれば、朝の時間は勉强に大切であるから、少しでも餘暇あれば讀書をする食後學校に行く時間が來れば、自分でパンを切り、肉を挿む等、それ〳〵辨當の用意をして時計と相談



して出掛ける、あとから下女が風呂敷包を持つて行く圖などは、兎ても亞米利加では、見られぬ事である

次に婦人が家庭に於て活動の狀態を見るに勞働は神聖なりといふ諺の如く、斯く迄に働かねば、此家は立行かぬのであらうかと想ふ位で、日本でよく働くといふ男の目から見ても、兎ても及ばぬといふ有樣である、それは上等の身分の人でも同じ事で、決して何もせずに火鉢により掛つて居るなどゝいふやうなことはない、家內に於ける働きは、婦人が全權を握つて、男子はそれに啄を容れぬ、來客の應接、子供の敎育、すべて婦人に於て引受けるのである、なか〳〵婦人の用事が多端で、子供を學校へやるにしても、ドシ〳〵學校をしらべて、此學校は校風がよいとか、學風がよいとか、それ〳〵撰擇して、入學其他の手續一切を自分がして、さて入學さしたからと云うて、決して學校ばかりを當にせず、家庭に於て人間を仕上げるといふ考を以て敎育にはなか〳〵骨を折つてをる、

次に會計の事は、百萬圓あらうとも、其金は婦人が預つて、銀行の出入れから臺所の小遣まで婦人が管理して行く、それをやるには、その金を働かす丈の知識を要するから、なか〳〵婢僕を腮で使ひ、火鉢の前に坐つたなりの婦人では出來ぬ相談である、

人は働かねばならぬものである、働いてこそ人格も擧るものであると云ふ觀念があつて、掃除から裁縫、出來得る丈の事は自分でするから、婢僕の二三人も置くと云ふのは餘程の大家である、それを置くのが自分の勞を省く爲でなく、自分で間に合はぬ所を補はせるのであるから、掃除でも、料理でも、自分が先に立つて、かうせねばならぬ、あアせねばならぬと手本を示し、成る程この調子でなければ旨く行かぬものであるかといふことを、婢僕に自覺せしめる樣にする、

それから食物の調理に就ても、相當に思慮を費やし、鹽加減から、滋養の度合、經濟の點に至るまで注意し、たゞに食物ばかりではなく、床でも玄關で

も、ペンキなどの剝げた場合には、そのペンキの塗替の如きも、大した事でない限りは、自分でそれを塗り、婢僕にやらせる時には、ムラの出來ぬやうによく教へる、それから敷物の繕ひ、椅子の壞れたのや、窓掛けの破れたのまで、自分で手入をして、決して破れたり壞れたりした儘で打棄つて置くなどといふ様な事はない、

それから家庭に於ける定まつた仕事は、課程をこしらへて、食前には何をする、食後にはなにをする又臨時の仕事は前日より準備して、裁縫をするとか編物をするとか、時間をうまく利用するものであるから、仕事がドシ〳〵片付いて行くのである、

私が寄宿して居た實業學校の校長の家には、裏に庭があつて、林檎、桃、葡萄などの果物がある、然るにその時候が來ると、何時の間にか、枝ばかりになつてをる、どうするのかと想ふと、ジャムや味淋漬などにして、桃の實のない時に桃を賞美するという風に、私もそれを時々膳頭で味ひながら、いつの間に斯う丹精せられたかといふことに氣付かなんだのである、

大統領の婦人でも、臺所の事から、すべて家庭の婦人にして働かねばならぬ事は、他の人と少しも變ることはなく、婢僕も五六人に過ぎないのである、然らば米國婦人は勞働一方で、他に趣味を有せぬかと云へば、時間の許す限りは讀書を學校時代より繼續して勞働に對する智識の進歩を計つて居る、その讀書する點についても、なか〳〵根氣を續かせてたい〳〵敬服の外はないのである、すべて時世に後れて、自分が不進歩的であれば、社會の進歩をも妨げると云ふので、大抵の家庭には、それ〳〵必要の新刊雜誌又書籍を備へ、それのない家では圖書館へ行く日本の圖書館では、婦人の入場者が毎日數ふるを要せぬほどの少數であるが、彼地では殆んど市中に圖書館が目を突くほどあつて、いづれも婦人の入場者で滿されてをる、

それから米國は女子の實業教育が盛んで、タイプ

ライターを數へる學校のみでも、セントルイス市に幾百あるか知れない位で、その卒業者が優に活動し得られる餘地があるので、その他多數の職業を推察する事が出來る、

▽次號には淀氏の、米國の食物及衣服談を掲載すべし、

獨逸の一習俗

ドクトル　宇良田唯子

はじめ獨逸に參つたときは、珍らしい物が隨分多い筈でありますが、だん〳〵馴れた故でありますかさて獨逸にかう云ふ變つた事がありますと、お話し申上げるほどの事もありません、それに獨逸人が日本の習俗を書いたものを見ましたが、記者が餘程適評と思うてをるらしき事も、大に違つてをりますから、私が見た獨逸觀などは、甚だ覺束ないものであります、

それでたゞ通常起臥に於ける間の事を、少しばかり申上げます、私は二度下宿をかへましたが、どちらも大學教授をして居る人の家庭に居つたのであります、大學教授が學生の宿をしてくれるといふ事がまづ珍らしい事に感じました、

子供は七時頃になれば學校が始まるので、六時半頃にセッセと出て行く、その後から兩親が起きるなど云ふ事も珍らしくない事で、他へ出ても子供を家に置いて、構はず兩親が出て行きますから、私が偶に、そんな慘酷なことをしてはと云ひますと、笑つて一向取り上げません、さうして小供が親に構はれず、獨歩きの出來ると云ふのはへい事かもしれず、決して愛惜がなくてさうするのではあるまいと想ひますが、私どもにはどうも忍びられぬやうな感じがします、

獻立は、私どもの居りましたところでは、朝は牛乳・晝はスープが必ずついて二品ばかりの御馳走があります、たとへばビフテーキ又馬鈴薯の取ませた

のであるとか、スピーナといふ柔かな野菜に卵子、スープを取つた跡の肉に、油濃きソースをかけたもの、又は肉をたゝいて團子にし、それをあぶつて葱などをつけたもの、たゝいた肉を薄き肉に包んでしつこく煮たもの、その外色々ありますが、右の樣なもので、酒を飲む人は飲み、小兒などは重に水を飲んで茶を口にしませぬ、それから、スープは肉の時と豆の時とがあります、晩は燒卵子に馬鈴薯を油であげたものが盛に用ひられまして、この夕食の時に限つてパンを食します、魚類は少いので、自然價も廉くありませんから、一週に一度位用ひます、

そこで私ども日本人は、矢張り日本式の料理の方が結構でありますから、一週間に一度位、日本料理を食べに參つたことがございます、公使館に十三年も勤めたといふ女中が、日本倶樂部と云ふものをこしらへて、重に日本人を客にしてをりますが、そこへ行きますと、さしみでもすしでもその外先づお好み次第であります、併し私は學生生活を永くして、不自由に慣れてをりますから、食物に於ても不自由を感じた事はございません、たゞ偶に日本料理を食べに參りますのは、外國に居りますと幾分は、日本が何となく懷かしいやうに想ふからでもあります、服裝は學校へ參るときは洋服でございますが、寄宿へ歸つてこれから外へ出ぬといふ時には、和服に着かへ、それで食堂に參りますが、別に何と云はれた事もなく、家人同樣に面白く騷いだのであります、

湯は日本のやうに、混浴をしませぬから、毎日入浴するといふ贅澤は出來ません、湯は一等二等三等とあつて、湯槽の大小によつて違つて居ります、總體寢風呂で、座つて首まで湯がかゝる位であります、それが一人一室になつて、內から鍵をかけて、他人に裸體を見らるゝやうな事はありません、湯代は一等三十七八錢で、手拭やシャボンで五十錢ばかりかゝります、手拭やシャボンに十二三錢かゝれば持つて行つた方がよいやうでありますが、それは世間に不體裁なといふことになつて居りますから、

大抵借りで遣ふことになつてをります、その代り、タヽオルなどは身體が包まる位なのが用意してあつて、湯と水と勝手に出せるのでありますから、入浴したやうな心地はいたします、右の有様でありますから、流しと云ふ事は、土耳其風呂といふのにはついてあるさうでありますが、それとても、男に限つて女にはないのであります、

何處も同じて、女中などに心附をやると云ふ事は、お定まりのやうになつて居りますが、獨逸には酒手と稱して、それが劇しく、一寸湯に入つても、五錢位はいきなり、湯錢にやらねばならぬと云ふ有様であります、

髪結としての十年

戸根愛子

多寡が髪を結ふと云ふ單純な職業でありますから十年間致して居つても、お話になるやうなことは一

つもありません、また私はお話になるやうな事があつては、あまり結構なことでないと思ひます、

私は九ッのとき三河の國から、京橋彌左衛門町に居ります伯父を便つて參りまして、小供心にどうか自分の手一つで世の中が渡れるやうになりたいものでありますが、それには先達つものはお金、何でもお金を儲けねばならぬと思ひました、小ましやくれたとお笑ひ下さいますな、お金儲けをするには裁縫が一番よからうと思ひまして、伯父の隣が裁縫の師匠でありましたから、半日は伯父の家、半日はお隣りの小用事を達して、無月謝で裁縫を稽古いたしました、それがまだ〳〵上達どころではない、やう〳〵糸道がついた位の時に、裁縫するより、髪結をする方がお金儲になると思ひましたのが、この職業に身を投れる始めでありました、そのうち伯父のうちに女氣がないやうになりましたから、十四の時迄伯父の家に居りました、

さア髪結にならうと極へたものでありますから、

いつまでも斯うしては居られぬ、どうぞよい師匠を見付けたい、兎ても師匠にするのなれば、仕事が上手で、お金儲の多い人がよいと思ひまして、口入屋に其事を申して賴みますと、幸に新橋のお鈴と云ふ髮結に梳手が入るといふことでありますから、兼て新橋一番の名人と聞いたお鈴と云ふ人を師匠にするといふのは、此上もないことゝ喜んで、目見得を約束した時間に口入屋に參りますと、口入屋は大變に忙しい所でありましたから、二三時間待たされて居ります間に、先方へ參りますと、一足違ひて梳手が出來たといふので斷はられました、さうなりますとどうしても今日中に髮結の家に這入りたいと思ひまして待たされた爲によい師匠を取逃して殘念な事をしたどうぞ外の師匠を見付けて下さい、それも新橋でなければならぬとせがみました、すると氣の毒に思うてくれまして、口入屋から新橋中の髮結へ渡つてくれました、漸くその日の夕方に、お鈴の弟子の糟谷お和歌といふ、これも達者な髮結に梳手が入るといふことでそれへ參りまして、師匠は生憎留守でございましたから、今度こそ取逃しては大變と思ひまして、その歸りを待つてをりました、その中歸つて參りまして、この子ならば目つきがうつとりして居ないからよい、それに手も大分堅さうなから、使つて見やうといふ事になりました、そこで大願成就、どうぞこの家で一人前の髮結になりたいものと思ひまして、かやうな事を申すは何ですが、師匠の母親と云ふのは、新橋の丹波ほうづきと綽名のついたむづかし屋でございましたが、暇があれば洗濯の手つだひから、按摩までいたしまして、成るべく機嫌のよいやうにと心掛けましたから、却つて可愛がつてくれるやうに成りました、

朝は三時半頃から起きて、夜は十二時をいつでも過すのでありますから、寢る間といふのは少しの時間しかございません、併し始めから決心したことでございまして、どうしても人並以上の事をするには人並以上に働かねばならぬ、之れが苦勞と申すほど

ならはじめから思付かねがよろしいと極めて居りますから、今日は一日つらかつたといふやうなことはございません、時をり母などがお前は随分苦勞したなど申すことでございますが、私には苦勞したなどゝは更に思ひません、

藝はすべて面白いやうでなければ旨く上達するものでないと申しますが、髮を結ひましても、それそれ顔や頭の恰好によつて、成るべくよく見えるやうに結はねばなりませんから、また習うて習へぬといふ呼吸もありますが、それは髮結の第一に工夫せねばならぬことでありまして、次に髮を結ふに長い時間をつぶすといふことは、勿體ないことでありますから、成るべく早く結はねばなりませぬ、つまり早く奇麗にと申すので、むづかしいやうでありますが、早く出來るやうでなければ、手際よく結上るものではありません、それに骨を折りまして、髮の形で苦情を云はれた事は一度もございません、また髮を結ひます時間も、長くて十五分、早いのは七分間でも出來ます、

それで髮結を厭な職業と思ふた事があるかと、折々尋ねられることもありますが、私は職業に高下はなく、その人にあるものと思ひまして、同業者との附合は少しもしませんから、外の髮結の事は知りませんが、随分品行のよくないのもあると申す事でございます、

さて師匠の家に三年居りまして、卒業といふ事になり、始めて家を持ち、すゝめてくれる人がありまして間もなく、夫を持ちました、髮結はしても眞面目な夫は持てるものであるといふことにしたい爲に夫に法律學校に入學して貰ふことにしまして、學資なども、夫はお前から貢がれるのは困るからと申しましたが、强いて受けて貰ふことにし、その代り卒業迄は、互に往復もしないで、一生懸命に勉强しようと申すことで、二年ばかり仕送りましたが、夫も私の心を酌んでくれまして、三年目に學校を卒業しすぐ辯護士の試驗を受けましたが運よく及第いたし

ました、私の方の稼業はもう物に成りましたが、夫の事業はこれからが始まり、事務所も拵へねばならぬ、出張所もほしいと云ふので、それも何うにか斯うにか出來ぼつ〳〵事件の依頼者も出來まして、ヤレ嬉しやと思ひますと、二人の子供を遺して、一昨年夫は亡き人の數に入りましたもう泣いても悲しんでも追付かぬことになりましたから、これからは二人の子供を夫の紀念と思ひ、どうぞ立派に敎育したいと物と、それに勵まされて、また〳〵これ迄以上働く氣



が出まして、ます〳〵職業の有難いことがわかりました、この十年夫の事業に、夢と消えた費用は一萬圓を越して居りますが、これが腕一本で殘せば殘るものであつたと思ひますと、殘つて居ると同じく、また嬉しいやうな氣がいたします、とても外の事をして、私どもに月に百圓以上を稼ぎ出すといふやうな事は出來ません、仕事は身體の働きがよくなければなりませぬから成丈け薄着をいたします、冬は雪のふる日でも、羽

二重の筒袖の單襦袢に、その上は木綿の袖なし、その上に筒袖の單衣を羽織つて、都合單衣三枚、これで風邪一つ引いた事はありません、その扮裝で、樺山さんへでも、柳原さんへでも、又牧野、高平、板垣、河村など仰せらるゝ歴々のお邸へも構はず參ります、これが先さまの車でありますからよいやうなものゝ、かやうな扮裝でこちらから乘付けたら、御門番ですぐお小言をいたゞくことでございませう、失禮と申せばどちらも同じこと、それでなければ仕事が捗取れませんから、大目に見ていたゞいて居ります、

髮の種類は、島田が結綿・文金、中高、藝子、つぶし、それから丸髷、稚兒髷、天神髷、桃われ、銀杏がへし等でありまして、近來庇髮が相變らず流行し、元祿風は立消えの姿であります、結ひ振は髮の恰好を上髮に出し、髩は長くして髩尻へ櫛を入れるやうになりました、先づ十年間のお話と申して、これより外には何もございません、

夫が辯護士になりました當時、その事業を發展するやうにしたいものと、夫が朝夕の世話を他人に頼み、益々自分は自分の業務を勵みました爲に、夫に取のこされた子供の教育にも差支へませぬのは、全く職業のお蔭で、これで當初の目的は屆いたものと、不幸中にも幸福と思うて居ります、

家柄について

春野菫子

現時日本の社會では、家柄と云ふことに就ての考へが、明に二つに分れて居ると思はれます、即ち一方は家柄と云ふ者を、あまり重く見すぎる方で、一方は其れに反對で、全く之を無視するのであります、夫れで、家柄をあまり八釜しく云ふ側は、何もかも家柄と云ふ點から割り出して、たとへば嫁にやるのでも、妻君を貰ふのでも、其人の性質はあまり問はないで以て、あの家は藤原何某何代目の末だとか、

清和源氏何代の子孫だとか、又はあの家は何某氏の嫡流で、此の界隈一番古い家格の正しい家柄だとか云つて、まづ其の家柄に目星をつけて、家柄さへ善ければ、少し位は馬鹿でも關はない、そして全く家柄の惡いとは限りませぬが、其祖先が明瞭でない家の人々は、いくら才智が有つても丸で人間でないかの如く思つてをる者があります、又他方では、王侯將相何ぞ種あらんやの連中で、人間は家柄なんか、とやかう曰つては、一文の價もない、家柄と云ふ者が、何の仕事をする者か、論より證據、維新の元勳を見よ、西鄉さんでも、木戸さんでも、但しは只今の伊藤さんでも、山縣侯でも、あの人達はどんな家柄だ、悉皆匹夫から起つたではないか、今の世は全く實力にありさ、家柄なんて云ふ者は、天保以前の思想だから、吾々明治ツ兒は關せず焉だと云ふ方で有ります、この二說は、私の考では、共に極端に走つて居ると思ひます、夫ですから前者則ち家柄を重んずる方が極端に走ると、所謂大名馬鹿と云ふ者になつて、腕もきかず、魂もない癖に、自分の家柄を、鼻にかけて、無暗に威張る方であります、夫から他方の家柄を無視する側になると、之が極端に走れば、所謂成り上り物となつて、日常の實力は有るが、しかしどうも土臭い鼻持のならぬ所があつて、全くの無骨漢で、禮讓の德は缺げ、品性は無論皆無趣味は劣等、全く士君子の之と交はるを恥とする所となります、只今の日本の社會は、實力と云ふ者は、大方成り上り者が、勢力を占めて居りますが、しかし頑固に家柄を過重視する人もまだ、名殘を止めて居る樣な全く過度の時代ですから、此等兩極端者が互に入り交つて、其等が流す害毒と云ふ者も測り知られぬ者が有ると信じます、

私が家柄と云ふ者に對する考は、前二者の何れでもありませぬ、今私の考の好適例として、二つの河にたとへたならば、こゝに等しき分量で、等しく田地に灌漑すると致しまして、其一つは十里も二十里も、谷のはざま、原野の眞中を流れて來るとし、今

一つは、只砂つ原から、湧き出で丶、流れも短かくて、すぐ田地に灌ぐと致したら如何でせう、私は前の小河に對しては丁度次にある樣な詩と同じ考を起します、次の詩と云ふのは、英國十九世紀の大詩人「テニスン」卿の作で、國分寺新作氏の譯であります、

鷺やくひなの住家より、にはかに流れ走り出で、
しだの葉隠れ光りゆく、谷間をさして急ぎつ丶。
百の小川のそばをすぎ、あるは岩角うちかすり、
千々の村里そひ行けば、いく橋々かくゞるらん。
眞砂地越てさま〳〵に、語りさ丶やき聲たて丶、
入江に泡をふかせつ丶、さ丶れの上に謳くなり。
畑にそ丶ぎ田に入りつ、茨やす丶きの茂りたる、
堤のもとをうちめぐり、うねり〳〵て流れゆく。
行道すがらさわ〳〵と、大河さしてす丶むなり、
人は往もし來もすれど、河水は行のみ何時迄も。
右やひだりに廻るうち、のせゆく花の麗はしさ、
いと健かにあちこちと、遊ぶやまめも見ゆる也。
こがねのさゞれ打越て、立つ小波にしろがねの、
泡をそこ丶粧ほひて、おのが旅路を重ねゆく、
小柴や蘆を打ちおほふ、榛の木隠れくゞり出で、
『われ忘るな』と咲花を、打なびかする時もあり。
群る丶燕のそのなかを、かけつ走りつ行く程に、
おのが淺瀬に沈む日の、光りおどらす折もある。
月星しろきまよなかに、野にさ丶やくは我獨り、
江堰のもとに立どまり、草の周圍にたゆたひて。
ふたゝびで丶を立出で、大河さしてながるなり、
人は行もし來もすれど、河水は往のみ何時迄も、

箇樣に詩的に種々の連想を起さすると同時に、一方の何の風情もない砂つ原から湧き出で丶、すぐ田に灌ぐ河はどうでせう、私はこの川が、前と同じく田に灌ぐと云ふ事より外に、どんな考へも起しませぬ、前に比べると殺風景であります、沒趣味であります、それで、同じ分量に灌漑するならば、私は前の川の方を、ゆかしくなつかしく、思ひます。

私は家柄の宜い方は恰かも前の川の如く其れのない方は後の川の樣だと思ひます、其れでこ丶に二人

の人が有つて、一人は家柄で、他は左樣でないとして、共に等しく、精神上、物質上に、貢獻する人がありとすれば、前者には、何となく物なつかしい、殆と云ふに云はれぬ感情と連想とを引き起す事が、恰かも小川の詩の樣であると同時に、他方の人には比較的左程でない樣に思はれます、
勿論右の比較は兩者を、全く同じ人だと見て、そして其等に對する私の感情の優劣を述べたのですが、こゝに考ふべきは、實力は主で、家柄とか云ふ者は、全く從であると云ふのです、夫で吾々のゆかしい、なつかしい感情と云ふのは實力が充分備はつた上の事であつて、家柄さへよければ、少しは馬鹿でも、そんな感情を起すと云ふのではない否吾々はこんな徒には、むしろ可哀相に思ふのであります。其と同じ樣に、家柄がなければ、其人の實力が下ると云ふ事は決してない、云はゞ、家柄と云ふ者は、美を益々美には致しますが、醜を美にする程の力もなく、又之なければ、とて本來の美を害する程の力もなく、たとへば、女の白粉の樣な者でありませう、顏立の立派な處女が、白粉を宜い程にぬると、實にゆかしい、一種神々しい感じが致しまして、益々美に見えますが、之に反して、色のあくまで黑い、みにくき女が、いくら塗つた所で少しも、高尙な美くしい感じを起す事がなく、返つて可笑しく思はれます、乃はち人の眞正の價値と云ふ者は、川で云へば、其灌漑する區域の廣狹にあるのであります、
國で申しますと、英國は永い歷史を有して、文學の如きは早く十四世紀に一大詩人を出し、十六世紀には、非常な盛な勢力となつて、今日までつゞいて、歐洲中の强國で長い歷史を持て居ますが、獨逸は比較的、新開の國であります、夫れですから英國では何かゞ、上品で奧ゆかしい感情を起すけれども、獨逸に行くと、其人情風俗が、どうも下品で、比較的高尙な感想が起らぬと云ふ、ある歸朝家のまじめな話でありましたが、之も英國の長い歷史的に發達した文物が、云はゞ、英國と云ふ立派な國に、白粉を

したのでありませう、其から吾々が米國人などを見ると多くは下品で、何となく見下げたい樣な感じが他の外國人などに比ぶると、より多く起る樣ですが、之等は所謂「成上り物」の好適例ではありますまいか、其から又『大名馬鹿』と云ふ例は之を對岸、則ち今外交上の八釜ましい、東洋の大問題となつてる支那に求めます、支那は御承知の通り、諸外國から勝手次第にふみ込まれて、自由にされて居ますが、其人民は中々威張つた者で、常に中華々々と自國を、うぬぼれて、稱へてをる、吾人はむしろ少し野卑な所のある新開國合衆國の民を學ぶ所はあるが、四千年の歷史を持つて居ても、今の支那老大帝國の民を歐歌する事は出來ませぬ、

人は自分の修養一つでは、全く家柄以外に超然とした、大なる性格となる事が出來ると云ふ事でります、例を引いて、申せば、世界三聖人の二人則ち釋迦と「キリスト」とは丁度よい對照であります、云ふ迄もなく、釋迦は印度の皇太子で、キリストは名もない人の子であります、しかし其兩者の家柄の善惡を云々して、二人の教理、二人の人格を、是非する人は一人もないでは、有りませぬか。

獨逸婦人の理想

過般獨逸マンハイムに開かれたる社會黨大會に於ては、婦人の特別集會も催されたり、席上婦人の試みたる演說、並に朗讀は餘りに抽象的、學者風にて事實に觸れざる感ありとて、非難する人多かりしも、兎に角獨逸婦人界の一傾向を察すべき者無しとせず、エリザベート、ゴットハイ子ル女史の婦人運動に就て語る所恐くは、最も溫健なる代表的言論と認む可き乎、その主張の一つは、女子も男子も等しく高等教育を受くる自由無かる可からずと云ふに在り從つて女子に對しても男子に對すると同樣學校の設備を要する次第となり且つ男子に對する學校を女子の爲めにも開放する事を要す、此問題は日本に於ても今後充分の講究を要する事項ならむ。他の主張の一つは、男女の分業問題にして、ゴットハイ子ル女史は特に學問上の分業を說けり、男子は概括的能力に富み、女子は部分的研究に長ずる故に、此長短を補足して學問の進步に貢す可しとは女史の獎說する所なり、其他一般の職業に就ても、其性質の差異に從ひ、分業を行ふこそ社會の幸福なれとは、獨逸婦人界近來の思潮なる如し、是れ女子をして男子と其職業を爭はしめむとする傾向ありし從來の婦人運動に比して、一段の進境と認むべし、兎に角近來面白きもの、一つは歐米の婦人運動也。

文藝

國學者の一任務

文學博士　芳賀矢一

維新以降百般の制度文物、大抵模範を西洋に採りしが故に、我國人にして彼の語學、文學、歴史、法制、其他實科の學問を研究するもの日一日より多く、往々にして西洋人と角逐して其上に駕するものあるに至れり、然るに自國の學術文藝に至りては、かへりて之を顧るものなく、會々之を研究するものあれば嗤りて迂濶にして時世に適せずとなせり、これ彼を識らんとするに急にして、殆んど我を忘れたるものと云ふべし、

かゝる間に、西洋人にして我國の事物を研究せるものは、比較的に多し、制度文物より、風俗習慣にいたるまで、我國の事物が、これら日本學者の手によりて西洋に知れ渡りたることは、實に意想の外にいづ、今其最も著名なるものを擧げんか、歴史に關しては、ケンペルの日本紀事を初として、アストン氏アダム氏あり、チャンバレンの古事紀英譯、フロレンツの日本紀獨譯等、其苦勞大に見るべきものあり、文學に關しては、チャンバレンの日本古歌集、サトウの祝詞、アストンの土佐日記、同氏の枕草紙一部、チッキンス及びランゲの竹取物語、トレンチニーの平家物語一部、ランゲの古今和歌集春の部、トループの御文章、イビーの徒然草、チャンバレンの和莊兵衛、及び謠曲、狂言、フロレンツの和歌集等の如き、或は一二章の飜譯に過ぎざるものあれども、西洋人は之によりて我文學に就きて何程かの觀

察を得たるに相違なし、アストンの英文文學史、フロレンツの獨文文學史の如きは近年の著述にして、我國文學の全體を通せるものとす、語學に關しては、ロドリゲ、コロラド等三百年以前、已に研究の端緒を開き、爾後シーボルド、ホフマン、アストン、ヘブシ、チャンバレン、ランゲ等各文典、字書等の著述あり、地理に就きてはラインの日本、其他サトウ、チャンバレン、オイツトチー等各著述あり、日本紀行等は枚擧に暇あらざるべし、其他法律制度より生產興業は勿論、圍棊將棋等の細技にいたるまで、皆多少研究せられざるはなく、英人の創立せるものと、獨人の興立せるものと、二箇の亞細亞協會ありて、其報告は常に有要なる研究の結果を滿載して刊行せらるゝなり、

西洋人の研究は學術上の興味よりするものと、單に物數奇的詮索よりするとの二つあるべしといへども、いづれにもせよ其結果は見るべきもの尠からず、顧ふに今日は、最早彼を識る時代の頂點を經過して自覺的時代となれりとせば、我國の文物に關する研究の如き、從來の如く固陋自ら許し、狹少なる眼界を以て滿足すべからず、已に彼を識りし眼を以て我と比較し、東西を咀嚼融合して以て其長短を相補はざるべからず、かれ西洋人の研究の如き、亦必ず參酌の用に供せざるべからざるなり、

西洋人の著書は凡そ左の三項より研究の價値あらん、第一學術的なること、第二比較的なること、第三誤謬多きことこれなり、我國從來の考證の如きは幾多の事實を列擧するも、其間統紀なく頗る錯雜に失せり、事物彌々繁多なる今日においては、羅列的考證のみを以てせば到底其煩冗に堪へざるべし、可成丈け概括的に、秩序的に研究の順序を立てざるべからず、第二には比較的攻究に非ざれば公平なる斷論を得べからず、固陋狹隘なる井蛙的眼光を以て、事物を論證せんは危險の極なり、出來得る限り、參酌對照せんことを要す、第三に西洋人の著書は概して事實上に誤謬多し、何が故に之をして研究の價値

ありと云ふ、蓋し歐米各國の賴りて以て我國の事情を知るものは、これ等西洋人の著書あるのみ、然るに誤謬其中に滿載しあらんか、我國人はいかでか之を馬耳東風に附し去るを得ん、必ず誤謬を指摘し、以て誤り傳へらるゝを辨駁し去らざるべからず、一二ヶ月間の旅行に我國を觀察し去りたるもの、往々無稽の說を構へて我國を誣ふるが如き殆んど常事に屬せり、而して未だ何人も其誤謬を匡正し、失體を救はんとしたるものあるを聞かず、方今萬國交通の頻繁なる時世にありて我國人たるもの何ぞかく自家の評に冷談なるや、

之を要するに、外人の我國に關する著書は價値よりするも、缺點よりするも、ともに我國人の一顧すべきものなり、一方においては、他山の石以て我が玉を攻ぎ、一方においては、其誤傳を正して眞相を宇內に明にせざるべからず、これ豈に明治時代の國學者の任務にあらずや、

歌學について

文學博士　萩野由之

余は詩歌においては、何の研究する所もなく、何の得る所もなし、全く門外漢なり、然れども、國史學研究の順序としては、おのづから歌詩の調査にも從事せし事あれば、歌學の上につきて、一二の私見を記し試むとす、

凡文學界に未墾の土地の甚多くして、拓殖に着手せられざるもの〻多きは、其の道の人々の遺憾とするところなるが、歌の世界においても、この種の遺憾は甚多きこととなり、歌文の方面は、他の方面よりは、割合にその道にわけ入る人々多ければ、よく手の屆きたる所もあれど、或方面には一向に鍬を入るることなく、すべて片落なる傾ありて、一局部に偏したるやうに見ゆ、明に言はゞ、歌よむ人は多けれども、歌の學問する人の乏しきなり、

詩有別才といへるやうに、歌よむには學問なくと

もと云ふ人多くして、一向に古今の作例を諳んじおきて、達者に口敏く讀むを勝れたることゝするが故に、別に博く學問するにも及ばずとし、若し學べば伊勢源氏の物語の類と、和歌の半學として、その補助の爲に學ぶのみなれば、普く古今の思想の變化、風調の變遷、形態の沿革などまでを考へ渡すことに、心を用ひたる人は甚だ少きなり。

とかく事物は專門ならねば、進歩の効薄かるべければ、歌といへる世界の中にても種々の專門に分ちて研究する事必要なるべし、されば歌は別才として、一向に歌を讀み出づるのみを主とするも一派ながら又歌道を學問の上より研究せらるべき人の、多く出でむことをも希望するなり、學問の上より研究するといふにも樣々あるべし、聲調の上より調査するも、形態の上より調査するも、或は歌人の傳記につきて、そは各の欲するまゝながら、とにもかくにも歌詠みと云ふ事の外に他の方面よりも歌學の進歩に力を與へらるべき人の輩出せむことを希望するなり。

契沖阿闍梨、眞淵翁などが、歌の復古を唱へられしより、天下靡然として風に偃す草の如し、その勢力の大なる、又その効力の著きは、甚貴ぶべきことなり、今に於ては、かの今體派といはれし二條冷泉などの堂上風を崇拜するものは又なかるべきなり、されど彼流派が數百年兵馬倥偬の中にも、上下流離の間にも、歌道の命脈を維持し來れる功績は、また史家が等閑に視るべき所にあらず、歌學者もこれに向つて感謝すべき事の頗多かるを忘るべからず、

然るに古體の歌風が、天下を風靡せしより、人々之を口にするさへ恥かしきやうに思ひて、今は之を顧るものさへなき有樣なるは、亦あまりに片落なる見解といふべく、畢竟この古學者の派と堂上方の派との盛衰は、在朝黨の腐敗より、在野黨が取りて代れる有樣なるは、數百年間在朝黨の新體派が、歌界を獨占せし反動力の致す所にて已むことを得ざる勢にはあれども、其の間おのづから施設の見るべきものもあり、又其の研究としても、多少の進歩を發見

すべきものあるをや、

かの今古傳授の如き、今より見れば迂愚の事のやうにはあれども、授受の鄭重嚴密なるを思ふに、道を重んずるの點に於ては、この道に熱心なりしこと、敬服に堪へざるものあり、天使のはる〲田邊城に下りて、細川玄旨の圍を解かしめたる事の如き、亦其一端ならずや、

又かの槐記その他に見えたる後水尾天皇の歌道についての御議論、又中院通茂公の説を記せる聞書、冷泉爲村卿の説を記せる義正聞書、武者小路實陰卿の説を記せる似雲聞書の類などを讀み見るに、かゝる諸公はさすがに其の道の大家なるだけに、頗發明の卓見なども見えて、古學者と稱する、中の、生學匠が鼻うごめかしてものせる歌論の類には勝れるもの多し、

世の歌學者が、眞淵景樹等の諸家を研究する固より善し、愈進みて第二流第三流の輩をも研究することも亦善し、されど此等と同時に、この二條家冷泉流の方面をも研究する歌學者の出でむこと、これ余が大に翼望する所、又大に慫慂する所なり、

一書籍に解題の必要なることは、今更にも言はじ、されど書籍の夥しき、各種の書籍を悉く解題せむこと、容易の業にあらず、近古以來書籍の解題とも云ふべき書、刊本寫本を併せて十數部はあるべし、されども皆完全のものならず、十數部を集めて大成すとも、尚全數の幾分といふほどなるべし、これ必然の事あり、清朝の初に天下の力を以て編輯せし四庫全書提要すら、尚遺漏あるをや、一私人が私著はもとよりの事とすべし、

さればとて到底完全の解題書なくてよかるべきにあらざれば、遂には完成せしめざるべからずとすれば、これを成さん方法について、便法を講究せざるべからず、即各種の學者がその從事の學科につきてなさんに若くものあるべからず、此に於て往々有識の士は、その專攻の學科につきて解題をものするものもありと聞けり、歌書の解題の如きも、歌學者自

身にて擔任せんこと固適當の業なり、

たとへば、鰒玉集は何時代の歌集なるか、何人の撰なるか、紅塵集は如何、鴨川集は如何と問はんには先づ歌人といはるゝ程の人は、即答すること容易なるべし、されど新歌さゞれ石は如何、和歌鳥迹集は如何と問はんには、答ふる人も多からざるべし、而して此等の集は、元祿の盛時を皷吹せしもの、今は世の賞翫に漏れたりといへども、歌學の時運を尋ねんものは、必渉獵せざるべからざるものたり、而して其の著者時代卷冊の數など得て見るべきの書あることなし、これ甚しき不便の事ならずや、ましてこれより遠き世のものに至りては尙更なり、砂玉集玄玉集の類、拾遺集と抄との誤も、往往ある習にあらずや、

歌書の解題をものすとて、固より急に完成せしめん事は難なり、たゞ歌書を繙く人々は、おのがじゝ見るに從がひて、書名、卷數、刊本か、寫本かのこと、及その跋語、著者の名、序者の名、類題集ならば重なる作家の名を記し集めなば、大方は足りなん、一々の批評は容易ならねば、先づ上に列擧せるほどの項目にて、見るに從ひて書き留めおかば、多の人の功を積まん後は、百千萬部にも上りなん、さて後に類別すとも、年次を追ふとも、合せて整頓せん人は出で來るべし、かくて歌書の解題は草創の功を奏すれば、討論潤色は更に又その人あるべきなり、これらは歌學者の務むべき義務ならずや、その勢は少なくして、道の爲には大なる功果を收むるものといふべし、これ又余が歌學者に望む處の一つなり、

寫眞に就て

子爵　松平乘長

唐突であるから、別に纏まつた御話も出來かねるが、折角の御希望であるから、從來自分が蹈み來つた、經驗の一端と、寫眞に對して平素懷抱せる希望

及び注意の二三を、極めて簡單に述べて見ようと思ふ、
固より冒頭にも御斷りしてある通り、腹案とてもないので、言はゞ漫然想ひ浮ぶ有の儘を言ふに過ぎないから、前後重複する箇所もあらうし、讀者にとつても不必要と感ぜらるゝ點もあるであらう、それは豫め御斷りして置く、
處で是から所謂經歷談に入るのであるが、元來自分は、當初寫眞を寫眞として學んだのではないので、實は豫て日本畫を修得して、其の寫生を爲す際に、其の寫生の目的を全たからしめんが爲、又其材料たらしめんが爲に、一の方便として、寫眞を遣つたのである、然し中頃より變じて、寫眞そのものがなかなか趣味もあり、興味もあり、研究する價値があると認めたから、其の方を主とするに至つたが、兎に角初めは斯うであつた、それで此時期には、單に實景が明瞭に畫面に寫れば、それを以て滿足して、それ以上何等望む處はなかつたが、それすらも容易に好結果を得なかつた、或は夏季高温の爲に、乾板の護謨が溶解したり、或は現像の場合に圖が現はれると同時に、定着液に浸すものであるから、宛然硝子板と見まがふ計りの薄い原板を作つたり、隨分滑稽なる失敗も、屢々繰り返した、而したゞ此の時分に、常に怠らなかつた一事は、先輩の示教を緻密に實驗した事である、少くとも一面は必ず實驗して見る樣にしたが爲に、事實に於て自分の得た所は、甚だ少なくなかつた、要するに寫眞に於ても、理論と實驗とは離るべからざる事で、ことに是の後者に至つては、最も緊要なる事であらうと思ふ、此の外寫眞の會合並に繪畫展覽會の如きには、可成出席して、意匠及び技術の點に付て研究する樣にした、
此の幼稚時代とも言ふべき間が、概略半年で、それからは多少見られ得る原板、印畫を作り出す事が出來る樣になつて來た、而して此の時に自分に最も幸した事がある、熱心なる一寫眞家を師とする事が出來た事で、此の人は寫眞と言ふ事に付ては、非

常に宏博なる智識をもつて居て、あらゆる方面より科學的に研究して居られたから、此の人に就て以來は確に少なからざる進歩をなした事と信ずる。

斯の如にして、三年餘を經過したが、此の三年間は純粋の研究時代で、或は鏡玉の種類、並に其の得失とか、或は乾板の可否、及びこれに對する現像液の撰擇とか、或は過度の露出に向つて、現像の注意等、夥多の問題を考究したが、結局寫眞の一般的思想は、此の間に形成せられたと言ふてよからう、此時期に至つて、漸く自らパブリックにして、世の批評を仰ぎ得ると思はるゝ程度の印畫をちらほら作り得る樣になつて來た、近來に至つて、其の趣味を解する事、稍々深きに及ぶと共に、撮影現像燒付等、各點に於て益々種々なる困難に遭遇する、これはつまり進化の大原則は、寫眞界に於ても、免る能はざる處で、時勢の變移と共に、常に着想技術の上に進歩をなしてゆくと同時に、自分の理想が一歩一歩向上してゆくからであらう、歐米の寫眞雜誌及び老練家の示敎等によつて、得たる處を基礎として、之に從來知り得たる實驗上の結果を應用して、飽く迄も其の成功の域に達せん事を期して居る、自分の過去に付ては、以上述べた通り、これと言ふてとりたてて言ふべき程の材料を有して居らぬことは、甚だ御耻しい事であるが、言はゞ自分の如きは、未だ寫眞界のユースに過ぎないのであるから、寧將來に向て期する所が多いのである、果して成功するや否やは問題であるが、少なくとも自分の決心は、斯の如きであると言ひ得ると思ふ、

それから寫眞に對する技術者の態度に付て一言したいが、自分の信ずる所では、秀拔なる印畫を得て、眞に寫眞術の大成を期せんと思ふならば、勢ひ單純なる娯樂のみ目的とする事をやめて、須く是に向て、研究的態度を取る必要があると思ふ、此の事は往々世人に比較的輕視せらるゝ事であるが、豫想以外の結果を來したる場合等に於て、其の原因を發見するは、隨分苦辛を慰する事であつて、單に娯樂的に

寫眞を弄ぶ人は、是れ以上に進む事を敢てなし得ないものである、如何なる勞力をも辭さないと云ふ覺悟は、他の業に於けると等しく、寫眞に於ても、痛切に必要とする處であつて、而も是をなし得たる曉に於ける快感は、苦心のともなはざる快樂と、殆んど同日に語るべからざるものである、簡單なる例を以て之を具體的に言て見れば、自分が嘗て印畫の陰影部の現はれざるものは、印畫としての價値なきものなりと云ふ思想の變化を來し、その時に如何にもして此の目的に適する原板を得んとして、あらゆる方法を講じて見た、或は露出時間に付て、或は現像液の種類に付て、或は現像の方法に付て、幾多の實驗を試みたる後、漸くにして此目的を達する事を得たが、是らも或は例として不適當かも知れぬが、つまり同一の意味であると思ふ、



撮影に付て

景色撮影の場合に、殊さら遠隔の地に旅行して、短時日に多くの場處を經行するは、策の得たるもの

と言ふを得ない、場所と時との一致なき圖は、雅致なきものであつて、其の一致を見出すには、多少の時日を要するから、前途の如き方法による時は、殆んど其の餘裕もない事になる、寧ろ一定の地に逗留して、微細に、其の附近の寫眞的風物を踏査する方が、勞少なくして功多きを致す事になるであらう、これに付て失敗をやつた話があるが、嘗て甲州の桂川附近へ、撮影に出掛けたが、其時は非常な雨で、路々多大の困難を感じたけれども、思ひ切て鳥澤から猿橋、大月邊を跋渉した、而して一枚にても多く撮れば、其多數の中には、良原板も多く得らるゝであらうと云ふ考で、無暗にうつした、然し歸つて、さて現像して見ると、眞に良いと思はれるものは、實に少なかつたのには、落膽せざるを得なかつた、これらは勞多くして功少なき良い藥であつた、

景色撮影の位置に付ては、單純に說明し得べきものではないが、要するに技術者の審美的思想の有無に關係するものである、一般に印畫には遠景、中景、

近景の三部に區分するが尤も必要である、又畫像以上の意味を印畫に含ましむる事は忘るべからざる事であらう、亦主たる目的物には、特に人の注意を喚起すべきものを撰び、其數單一なるをよしとし、數の多きを致す時は、人の注心點を散漫ならしむる恐れがある、主景に焦點を合せ、近景をも明瞭ならしめ、遠景は可成汗漫ならしむる事を要す、然らざれば遠近の差が確然として無い缺點が出來る、

撮影に當つては、天候の晴不晴、寫度の長短及時間等はなるべく之を摘錄して、後の現像の參考とするがよからう、一見輕々しき事の樣に見えるが、僅少なる勞力を以て、而も實際に於て、多大の利益を供給するものである、

現像に付て

乾板の種類に由て現像液の處方も異なるものであるが、自分はシード、エブラール乾板を用ひ、之に對しては好んでメトルハイドロキノン現像液を使用してをる、此の液の特色は、印畫を漸々に現出せし

め、極めて柔き原板を作るにある、而して現像に際しては、濃薄の度に從て、此の液を三種に分ち用ふ、例へば原液五十に對し、水七十五位の割合である、中液は此の比例による、定着には酸性を用ひ、夏季はホルマリンにて膜を硬くして、溶解を防ぐ、後で速に乾かす事が必要であるから、三十分間位、アルコールに浸し種板をして塵埃を防ぐ爲である、何となれば早く乾くからである、

印畫に付て

ｐｏｐ印畫は、一般に紫色を呈するを好むけれども、耐久性を有せしむるが爲、赤色を帶ばしむるが、良策である、此の仕上液に於ては、種々あるけれども、專ら混合鍍金液及び硫靑酸鍍金の二種、ブロマイト印畫現像はメトルハイドロを現像液にする、燒付は西洋ローソクを用ひて、距離は三尺を程度とし、原板の濃きものは、五寸及至一尺位にて、短時間にて燒付をなし、薄きものは三尺以上で、長く燒き付をなす、此の外種々の印畫紙に、種々の藥方があるけれども、長談になるから此の位にして置く、是より印畫の仕上、ブロマイトの仕上、定着液其の凡ての藥液を紹介しよう、

第一液
- 水 五〇〇、センチ
- メトール 七、グラム
- 亞硫酸曹達 七〇、グラム

第二液
- 水 五〇〇、センチ
- 亞硫酸曹達 五〇、グラム
- ハイドロキノン 八、グラム五

第三液
- 水 五〇〇、センチ
- 炭酸曹達 七、グラム五

第四液
- 水 五〇〇、センチ
- 炭酸加里 七、グラム五

夏季は第一液（二〇瓦）第二液（二〇瓦）第三液（一〇瓦）に水を等分に加へて用ふ、冬季は第一二四を前の第一二三の分量と同じくして用ふるので、此の液にて現液したる乾板を左の定着液に入るればよろしい、

異性重亞硫酸加里

水六五〇センチ、ハイポー一六〇グラム、異性重亞硫酸加里二〇瓦、明礬三（夏）二（冬）

ブロマイト現像液

水一〇〇〇センチ、メートル六瓦、亞硫酸曹達七

五瓦、ハイドロキノン四瓦、炭酸加里二五瓦、臭素加里一瓦五。

注意普通焼付の時は、原液のまゝ用ひ、引伸しの時は、等分の水を加へて用ふるがよろしい、

混合鍍金液

水一〇〇〇センチ、ハイポー二〇〇瓦、硝酸鉛一〇瓦、鹽化金液五〇瓦。

甘豆色調鍍渡金液

水一六オンス、硫青酸アムモニヤ二分二厘、無水亞硫酸曹達一割液入滴、鹽化金液一分液—

新年の松

小川直子

世にあたらしきことよみ打開き見るあしたの心ばかり、こゝちよく樂しき物はあらじかし、されば幼き子らはいふもさらなれど、おのれがごとき老の身の草の庵に住めるさへ、そゞろに嬉しくて、先づかけ

まくもかしこけれど、あふぐも高き高輪の宮にまうのぼりて、御ふた所の宮の、いとも／＼うるはしう愛敬づきて、生ひたゝせ給へるみけしきをあふぎ奉りて、御酒賜はりつゝ、いとねもごろなる御言葉ども賜はるにそこらおましあたりのきら／＼しさなど、たとしへなうこそあふがるれ、それよりまかりまをして、余所の御方々へも、年のほぎ言聞えあげむとて、小車めぐらしてありくほど、家々の門には、松たて渡し、みしめ繩引はへたるさまの、すが／＼しさに、心のうちも清うなる程、千代田の宮の玉がきに、生ひたてる老松ともの皆さへむしたるが、深みどりのいよゝ榮ゆる影どもを、み堀の水の澄わたれるにうつして、うるはしう並みたてるを見て、これなん今年の始の御題なる、新年の松にこそあれと打ながめつゝ、つら／＼に思へばそも／＼松のめでたき事、今更いふもさらなれど、猶年若き人だちのうひ／＼しきは、ひとわたりいひ聞かせむもあしき事にはあらざめればと、思ふまに／＼、いさゝいは

ひとす、先づ實生ひの松の、いまだ二葉なるを見れば、さゝやかなるわらはの烏帽子かうふりたるが、をどりわりくさまにもおもひよそへられて、千代のこもれるめでたさ、いはむ方なし、はたゆほびかなる岡邊の苔なめらかなるに、生ひ立てる姫小松は、らうたき少女らが打つどひて、睦びあひつゝ遊べるに似て、愛嬌あれば、見る人の目を樂しましめ、あるは果しなく廣らかなる大海原の沖つ洲にむらだちたる、老木若木の松が枝に、朝日のさしのぼりて、かゞやき渡るもいと面白し、こなたの濱には、汐風に吹さらされたるが、からびたれど、からきうき世をことゝもせで、女木男木枝をまじへて、相生を樂しめるは、海士がいもせの中らひ、睦まじげなるに似て、いと賴母しう見ゆ、また音に聞く蓬が島なる松の枝葉、四方にひろごりつゝ、下蔭には呉竹のすく〳〵しきも、薫りみちたる梅が枝をも、友として、たてらんは、心廣く見えてぞ、うるはしかるべき、さるからに雲井の鶴も、甲斐ある宿りと賴みつゝ、巣こもりて、あまたの子らをはぐゝみつべく、そが根ざせる巖は、大きやかに動きなく、賴母しげに見ゆれば、萬代契る龜どもゝ、長き尾を引はへて、ゆるゝかに遊ぶなるべし、されば祝ふべき日などには、此蓬が島のかたを造りて、床飾りともしつゝめづるぞかし、猶此外にもたゝへまほしき事こそ多けれ、奥山のこゞ敷岩がねに、年經たる老松の、底ひもしらぬ谷川の早瀬にのぞみて、雄々しくたてるを見れば、いさましき增荒男にもよそへつべうみゆ、いかにとなれば、夕べの露あしたの霜の、置そふにも、能く堪へ忍び、ある時は村時雨のしぐれ〳〵て、染めむとすれど、萬の樹々は色にいづるも、此松のみは操正しく、露ばかりもそまる事なく、猶玉あられのつぶねをうてども事ともせず、夜半のしら雪幾重ともなくつもれども、たはみもやらず雄々しくたちて、かはらぬ色を見することめでたけれ、さればいにしへ人も、松柏のしぼむにおくるゝをたゝへて、忠臣君子にたとへ、また秦の始皇帝は、太夫の位を

授けて、萬の樹々には増れりとめで給ひぬとかや、うべな〳〵、年の始の御題に、此ものをえらばせ給ひける御心しらびの深さは、いとかしこしとも尊しとも、聞えむ方こそなかりけれ、あはれ何にもあれ、物はこまやかに心をとゞめて見るべきなり、しかせば皆我身の鏡となるべし、すべて見るものきくものごとに、よきことあらば、鏡として、世に頼母敷人とならまほしき事になむ

折にふれて

佐々木信綱

あか星のひかりあふぎて神の子の
　われいでましゝ其夜をぞ思ふ

船はてぬこゝやいづこの浦ならん
　くらき波間にほしぞきらめく

あし鶴をともなひつれて山の上に
　髯しろきおきな星を仰ぎ見る

恐しきかせのひゞきよすざましき
　波のあらびよわが夫やいかに

よめいりの爲にと思ひし桐老いて
　子ははかなくもなりにける哉

花にいね花にあかさんひとの世の
　春のさかりは幾ばくもあらじ

恐しきゆめよりさめて見まはせば
　ともし火白くあめのおとする

こし方はかすみにきえてゆく末も
　猶たど〳〵し野べのほそみち

世のためになす事なくて言の葉の
　花をつむ〳〵身は老いにけり

乘合のひとはおほかた夢に入りて
　夜船さびしきともし火のかげ

雨さびし廣野のはらのゆふぐれを
　われたゞ一人たどりゆくかな

くらうなく燈火けしていまよみし
　書のこゝろをたどる夜半かな

新春對山

法學博士　江木冷灰

靜かにも、世は治まりて歎びの〳〵、盃あげん時ぞ今、千代に八千代に動きなき、我大君の春なれや、仰げば高き富士の空、寶に半嶺は佳氣を通じ、中峰は瑞煙を繞らすとかや、四千餘萬の國民の、祝ふ萬歳々々の、聲や雲井にひゞくらん、

新年の歌

中山幸子

元旦

あけそめて先づけふよりは怠らず
　文のはやしのをしへ草見む

初鶏

つねよりも聲あらたなるにはつとり
　人よりさきにうたひそめけり

門松

かど松にみはたをたてゝ新玉の
　としのはじめをことほぎにけり

春遊

春ごとに老のこゝろも若やぎて
　をさな遊びにたちまじりけり

旭鶴

天つ日のゝぼりそめたる海ばらの
　浪かと見れば鶴のひとむら

松上鶴

見わたれば千代田のみやの松の上に
　數もかぎらずつるのこゑ〳〵

子日松

子の日する野邊の小松もなか〳〵に
　今はおい木となりにけるかな

年の暮と元旦をひとつに
　よめる

ひとゝせはたちまちくれて翌る日は
　門まつたてゝいはふひと〳〵

女流の俳諧

戸川殘花

俳諧も一時は世潮と共に退歩し、明治廿六、七年までは讀書社會の一瞥をも受けず、所謂業俳家が辛く小社會を維持し殘喘をなす姿なりき、然るに廿八、九年より俄然生色を發し業俳家外の文學者が鼓吹に由りてか其革新の極すさまじく、今は都下に數萬の俳客を生ぜしと聞く、玆に聊か女子の俳句を紹介し斯道の陳奐を以て自任せんも益なしと云ふ可からざらん。

ゆづり葉の茎も紅さすあした哉　園女

初春の朝の景色見るが如し、たゞ数葉のゆづり葉を捉え來り、其茎の紅に新玉の旭の目出度さまを聯想せしめたり、

鍬や手もと休めんながしもと　智月

水仕業に餘念なき時、フト法華經の床しき音は鍋洗ふ手をとゞめさせたり、如何に可憐の態ならずや、

雉の尾のやさしくさはる菫哉　秋色

畫ならば玉章翁の筆ならん、この句やさしくさはるの七字にて鷄も唱ひ菫も匂ふなり、

花にわかぬ浮世男の憎さかな　千子

温柔の裏に凛乎たる所あり、浮世男と云はるゝ者は、都下至る處にあり、

筆の鞘焼て待夜の蚊やり哉　芳樹

芳樹は尼なれば、誰をや待つならん、筆の鞘をてまかにいぶす夕べの客か碁客か茶伴か、念佛の友か、

戀死なば我塚でなけ郭公　奥州

奥州は遊女なり、今の代の賣女と同一視す可からず、社會道德の低さに依れば其業を見ずして、其情思の綿々として盡きざる所を味はふ可し

わのなかへまろびて見たき春田哉　たつ

子供らしき所が、この句の價値なり、渺々たる千町田は誰もこの感あり

螢火やこゝ恐ろしき八鬼尾谷　田上尼

熊野路の夜色悽然たる所なり、八鬼尾の三字に鬼

氣の逼り來る感あり、

　くらべあふ股の太さや庭涼み　辰下

これは少し尾籠なる姿なれど、袴めさぬ頃はかゝる無邪氣な痴態もありしなり、

　凉風や餘所の鉦皷に南無阿彌陀　園女

園女は芭蕉翁が白菊に譬へし程の者なれば、其句に禪味あり、到底他の女子の及ぶ所にあらず、この句を解しこの句を味はふ者は男子にも女子にも稀ならん、

　おふた子に髮なぶらるゝ暑哉　園女

禪宗の坊さんらしく、向上の一味を云ふかと思ふとオンブシタ子に結たての髮をなぶらるゝ女房の暑を云ふ、如何に自在ならずや、

　たそかれのものとや團扇ひとへ帶　なか

新形の浴衣の、三井の腕をふるひし好みに、白ちりの結び目寛く例の榛原のを片手にもちし嬌姿覩るが如し、

　朝夕に見る子見たがる踊哉　りん

お隣のお梅さんとか、道チャンとかの踊も今更めかしく盆踊の夜景面白し〳〵、

　名月や青うさし入蚊幮の中　せん

月色の青きは、絽か紗か、はた麻か、木綿蚊屋にはあるまじきぞ、

　加茂貴舟夜べ時雨けり川の音　速女

昨夜の雨に、鴨川の瀬々の早きを云ひしなり、上品なれど時雨には少し感吟せられず、

　兒の親の手笠いとはぬしくれ哉　夕霧

時雨の寒く淋しきに、我が子ぬらさじとて、手もて笠とするあはれさは、覺えず袖のしぐる、ぞかし、宗盛が淨衣の袖を宗清の肩にかけしも偲ばるゝならん、

　霜やけの手をふいてやる雪丸け　羽江

霜やけの手をふくは、姉か母か、『オナカヨシ』か幼童の戯をよくも寫したり

右に抄き出しゝは玉藻集の一二なれど、女流の俳句はさすがに優美にて男子の云ひ得ぬ所多し、智月、

園女、千代、秋色、の女史等は天才なれば評するまでもなけれど、尋常の女子も學べば俳句もて其詩趣をもらす事を得らるゝなり、和歌に比較して難き所は社會一般の事物にわたると、用語の廣きと着想が世想を穿ちし所あると、一語、一字に推敲を要する事などなる可し、されば此の文運繁盛の期に女流の俳句も盛んならざる可からず、

アルバムの利用に就て

齋藤松洲

松園女史談の豫告までされて、それを怠つて居る埋合せとして、新年の事であるから、年賀葉書を基本として、アルバムの利用法を述べやう、即ち葉書を元朝より着到順に挿入する事である、たとへ文字はがきにても、繪はがき計りの所に、チヨイ〳〵文字はがきの在るのも佳いもので、櫻の中を通つて松の一本に眼を安んぜしむる樣なもの、この頃の樣に繪はがきが多くては、寧ろ文字計りのものが際立つて見えるから、頗る妙だ、取り合せや、配色などを考へるは別の事である、而して、この着到順を實踐すれば、それが其人の歷史の一斑になり、他日とて變更が出來なからう、自分たちの歷史に止まらず、明治の歷史、世界の歷史も朧げながらに解るであらうし、且はそれに依りて記憶を呼び出し、種々なる事を聯想し得て、大に趣味を深からしむるである、

何にしろアルバムは、上等を選ぶ必要がない、一年中幾冊か形を一定せしめ置く方が善い、竪であらうが横であらうが、着到順にズン〳〵挿入する、若し自分が旅行でもすれば、家内の者に着到順に挿入せしめ置き、歸つて第一にアルバムを見る、頗る興味があることであらう、そして旅行先にて受取つたものは（これも着到順）不在中のものをはづして間に組み込む、

繪はがきが流行して自然立派なものを好み、印刷

の粗末なもの、圖案のいかゞはしきもの、及び文字はがきなどを輕んずる癖が起らぬでもない、善くない事である、孰れも情誼に於て深淺のあらう筈がない、

　繪はがきの交換を望む、しかし情誼の伴はない交換は駄目である、物と物との交換は、未開の民の遺物である、交換を望むに入つて情誼を求む、これはよくない事である、さりとて返事くれなかつたがどうのと愚痴をこぼすものは、繪はがきを談ずる資格が無い、極端に云へば、この者に返事をして、若し交際せねばならぬ事になれば、五月蠅と判斷せられたと見て、諦めても差支がない、要するに一度や二度は瀬踏の如きものである、繪はがきの一枚や二枚を云々するのは、島國根性で甚だ以て淺間しい、交換を望むの廣告を出して取りつ放し（まさか左樣の輩もなからうが、假りにありとして）のみを行ひ、只取り山のアルバムを積み重ねた所で、それは甚だ見つともよくない物である、

　繪はがきの交換を望む其中には、繪はがきにより て交際を望むの意味があらねばならぬが、實際交際よりも繪はがきのみの交換を主とするものがないでもない樣である、それもいゝではないか、人各々心ありで、

　上等繪はがきの交換を望む、これは少々解釋に苦しむ、それでも多少交際を望むといふ意氣があるのであらうが、趣味ある繪はがきの交換を望むの間違なのである、と見れば差支はない、

　五錢以下の繪はがきを謝絶す、これも聊か困る、併し趣味が白銅以下では困ると見れば會得が行く、

　そこで先づアルバムに着到順とすれば、自然同じ圖の繪はがきが飛んで來るであらう、紀念繪はがきなどは尚更である、けれども幾枚同じでも構はない、贈つて吳れる人の情誼で、何れ何か一筆あらう、又無いのもあらう、並べて見ても文字の配りが面白いとか、何も書かない所が洒落て居るとか、逸早く送つて吳れたのはこの仁で、遲れたのがこの男だ、早きも遲るゝも情誼は同じだ、身常に繁忙なる仁は（

或は何かの差支とかで）ツイ遅れたなども有り難いではないか、逸早いこれも結構には相違ないが、遊んで居る男なら當然である、繁忙の身にして最も早き、是れ最も感謝に堪へない、遊んで居る男、それが六菖十菊にアタフタ寄越す、情誼には深淺ないが、唯だチヨット間が抜けて居る計である、感謝に堪へぬは無論の事で、孰れにしても情誼が伴ふて欲しい、

心なき事を書いて萬遍なく愛嬌を振り蒔く世辭的繪はがきが來るよりも、心あつて無沙汰に打ち過ぐる知人朋友が寧ろ尊いのである、

自分も兎角心あつて無沙汰に過ぎ行く一族であるが、餘り心ばかりではと思ひ出した樣に、一時に百枚も二百枚も飛ばす事がある、けれどもその百枚二百枚出した繪はがきに、唯だの一枚の返事がなくても苦にならぬ、それは返事を煩はす樣では、知人友人に對して既に情誼を缺ぎ、禮を失ふて居るからである、ア、餘りの無沙汰だと繪はがきに一筆宛でも書く、それで済なかつたといふ心を安んずる、それが既に報ひなのである、

故に要件の無き繪はがき若しくは文字はがきは、辱なく頂戴をして、アルバムに挿入するか、直に返事をせねばならぬといふそんな水臭い考は、不幸にして何處を押しても出ない、偶々飛ばした繪はがきをキチヨーメンに返事をよこされると冷々する、其仁は多忙中ではなかつたらうかと、

姫小松

浪華山人

其の一　嵯峨の枯野

柳に伸びる春の日も花の暮るゝを惜みつゝ、世は月ありてこそ雪ありてこそと、大宮人のゆうにやさしとのみ見え玉ひし頃にやあらん、按察使大納言藤原の時世と云ふ人お在しけり、朝廷の御覺えもめでたく世にときめき玉ひけり、北の方の御腹に姫君一

方ありて、今歳二八の春を迎へ玉ひ、霞に匂ふ顔の色、緑のお髪美しく、十二一襲の振もよくて、華やかに生ひたち玉ふうへに、才賢くて學文はさらなり、諸藝にわたりて巧みなるが、殊に琴にすぐれて搔合せの爪音得も云はれず、聞く人皆耳を傾けたり、かかりければ父母君の寵愛はさらにもいはず、今の世の美人とてもてはやす程に、上達部殿上人の若人達は、知るも知らぬも此君得てしがなと、われがちに心を惱ましけり、されば大納言も北の方もよき婿がねを定めんと、あれこれいひ入るゝ方もありけれど、容易はゆるさで擇び玉ひけり、其頃兵部卿の宮と聞え給ひしは、當今上の御從弟にて御許せも重く、御容清らかに心はへいとやさしき君なりければ、いかで此宮に配せ奉らんと、北の方は殊に願ひ玉ひけるが、右馬助仲持といふは、彼宮の殿へも大納言の家へも行かふ男なれば、物多くとらせて私語あひ玉ひしが、右馬助は宮に參りて、何くれの物語の序に、大納言の姫君こそ紫の上のゆかりの色に、玉鬘の光りを添へたるやうなれ、琴とり玉ふけはひなどは、天津乙女も如かじと思はれ候ふと、口にまかして譽めそやしければ、宮も御心動きて、いかで其娘一たび垣目見たしと微笑み玉ひけり、大納言は或日の徒然に、姫君に琴かなでさせて聞きゐ玉ひしが、つく〴〵姫君の顔をうち守りて、何か思ほす事やありけん、うちほれて見え玉ふに、姫君は調べ終りて、前栽の植木を心ともなくうち詠め給ふに、美しき二羽の小鳥、長閑に鳴きかはしてむつれゐたりければ、傍への硯をとりませて

　友鳥のうたひあはする聲きけば、
　　むかしの遊びおもほゆるかな

と走りがきし玉ふを、大納言はうち見てそゞろに歎息し玉ふ折から、衣の音しければ袂に歌をおし隱し玉ふ、北の方は大納言にむかひて、此頃は嵯峨野の景色いと面白しときゝ侍れば、明日は姫を伴ひて逍遙せんと思ひたちて侍るを、いかで御許しをと乞ひ玉ひければ、そはいと宜しからんといらへ玉ひし

かば、北の方は喜びて、姫君に例よりも綺羅をつくさせ、一つ車にうち乘り侍女數多從へて、嵯峨野をさして軋らせける、宮ゝ御馬にて右馬助御供に侍はせて、ひとしく彼野に至り給ひしが、御車の近くを見て木陰に隱れ玉へり、北の方は程よき所に車を停めさせて、姫君を進めて車より下り賜ふ、姫君はうす色に萠黄の綾のうちきを着玉へるが、さし歩み玉へるさまあてやかに、髮は繩ノ裾に等しかりけり、姫君は待つ人ありと知らで遊び玉ふを、宮は松の下より出で玉ふを姫君は見つけて、顏うち赤めて急ぎ車に乘り玉ひければ、宮はなほあかず思ほしてか、其方を見送り玉ひしは、本意なくやありけん、

其の二　住吉の月

松吹く風も住吉の、海士の苫屋のそれならで、面白う住みなしたる家あり、柴垣まばらに結び回らして、草の花多く植えたり、あるじは如何なる人にや、夕月の明きに琵琶の音の松風に調べあひたるいと心にくし、兵部卿の宮は年頃住吉の神を信じ玉へは、式部丞友方召連れて參詣ありし序に、松原のあたりに御車を巡らし玉ふに、彼爪音を聞きつけて牀しさの餘り、下りて垣をさし覗き玉ふに、夜目にて色は定かならねど、なよなかなる乙女の、さし入る月影に映りあひたる容貌は、匂ひ濃やかに氣高くて此世の人とも覺えず、かゝる淋しき浦邊にかゝる人も住みけるか、彼の大納言の姫はあでやかに賑しきさま、櫻の眞盛りとも云ふべく、これは淸らに品あがりたるけしき、梅の仄に薰るに譬へつべし、と思ほして友方に私語玉ふに、友方心得へて柴の戸をほと〳〵と叩けば、内より女の童いで來れり、主人の君に對面玉はんと乞へば、暫くして主人出あふに、友方がしれる尼なりければ、互に驚きて是は是はとばかりに、絕えて久しき情をのべたりけり、友方は尼君にさるにても今がた琵琶ひかせ玉ひしはいかなる人やらんと問ふに、尼君は袖もて目をおし拭ひ、あれこそ按察使大納言が宮腹の一の姫君に侍れ、母宮は姫君を生み玉ひて後、程なく果敢なく成らせ給ひし故

に、御乳人として尼の娘辨が育て參らせしが、今の北の方入らせ給ひて、二の姫君うまれさせ給ひしより、一の姫君をやう〳〵惡みて、父君にさま〳〵讒言ひ給ひしが、父君も初めのほどはきゝいれ給はざりしも、終はむくつけき法師の姫君の許へ通ふと誣ひて、姫君の住み給ふ西の對より、曉方にあやしき法師の忍び歸るさまをこしらへて、父君に見せ奉つりしかば、大に驚き歎き腹立しうあさましく思ひて、夫よりは御動靜も詞も姫君につらく當らせ給ひしほどに、今は世に頼もしげなく、故母宮の御事を思ひ出で懷かしうもこひしきにつけて、容を換へばやとおぼしたちて、或夜に辨と共に此所に逃れ來給ひしが、お髮おろさんとの御心を、尼がいたく止めていたはり參らせ侍る程に、辨も其後間もなくなき人の數に入りたれば、姫君は歎きに歎きを重ねて、とく佛門に入らんとし給ふを今日までいさめて過し侍るなり、都にては姫君辨と共に失せしかば、大納言も二の姫君も一方ならず物思ひをなし給ひしかど北の方のみは心に喜びて彼の法師と走りしならんといひ給ひし故、父君もげに然らん、さる不孝不貞の姫何かせんとて、跡をことさらに尋ねさせもし玉はず、姫君を見棄てたるやうにもてなし給へど、御心の中はいかなるやらん、二の姫君は折にふれて姉君を慕ひ給ふと人づてに聞侍るなりと、語るも涙にくれたりけり、友方は聞毎にわが身のやうに思ひて悲しく、宮に云々と聞え上げゝれば、さらば今夜は此所に宿からん、友方よく計ふべしと命するにぞ、又入りて其の由をいふに、尼は宮と承りて驚き迷ひ推辭申せど、おして入らせ給ひぬ、昔の殿ならばいづれへか逃げも入るべきなれど、間少き家なれば、古几帳の蔭に隠れ玉へり、宮はしひて姫君を誘はせて尼友方と諸共に、歌よみかはしなどに一夜を明させ給ひ、姫君は麿に任せよ、都に伴ひ行きてよきに計らはんとせちにの給ひしかば、尼は御意に從ひまつりし故に、御副車に姫君をのせて住吉をたち給ふに、姫君と尼はさすがに名殘をしまれて、暫しがほどの

別れと思へど、互に袂ぞそぼちける、

其の三　子の日の宴

過ぎにし嵯峨の遊びに姫君を見せまゐらせて後、北の方は宮の御意いかにと右馬助にきくに、宮はいたく賞め玉ひぬとのことなれば必ず宮より御使あるべしと、日に夜に待ち給へど音づれもなき上に、宮は御物詣の序に田舎娘召連れ歸り玉ひしと、噂に聞くさへ妬ましう、またさる事はあらじと思ひ返して過ぎ給ふに、新玉の年の初となりぬ、宮より大納言に今日は子の日なれば、千代の例しに宴せんに、ふりはへて來給へかしとの御文ありければ、いなみもあへず出行かんとし給ふを、北の方は袖ひき給ひて、誠や人のいふは、宮の田舎娘をめで給ふときけば、今日參りて其さまを窺ひ給へと、心づけらるゝを聞、流して宮へ參り給ふに、待うけ給ひて御饗應ねんごろなり、盃の數度重りて興に入ると見えし程に、宮は大納言に、麿近頃住吉にて引き歸りたる姫小松を、殊に養ひおきつるを、今日の折に見せ候はんと、侍女に何か命ずるに、暫くして美しき裝ひしたる姫君徐かに出來給ふを、大納言は一目見てはそも夢かと呆れ給ふに、姫君も父君の僅かなる程に老給ひたるは、物思ひの故にやと有がたうも悲しうも、懷しさに取交せて物だに得の給はざりけり、宮は微笑みて、此小松の浪風の荒さに堪えかぬるを、いとをしみてかくは計ひしなり、我許にすゑ置きて千歳を契らんと思ふを、いかで許し給ひなんやとの給ひ出て、姫君の濡衣着給ひし自一至十を語りきこえ給ひければ、大納言は或は恥ぢ或は歎きて、宮の御志の淺からぬを感じ、姫君を宮にたてまつる御請をし給ひぬ、かくて日ならず婚姻の儀式取行ひ給ひければ、一の姫君の御榮は世に似るものなく、人皆羨みて其めでたきをいひはやすにぞ、北の方はなほさがなく其ことを毀り給ふを二の姫君は心うく思ひてよい〳〵に諫め給ひしかば、大納言も心解けてゆるし給ひし程に、二人の姫君はうち喜びてうき事なくなりにけり、宮の御仲立にて右大臣の公達小將に、この姫君を

合せ給ひ、又住吉の厄を都へと迎え給ひしかども姫君の御行末定まりたる上は、辨が後生の吊ひなど心任せにしたしと願ふほどに、住吉に住ませおきて祿あまた賜ひけるとぞ

二弦琴の話

坂本靜子

こゝにお話しします二弦琴とは、その字に示すが如く二筋の糸の琴でありまして、かの日本最古の樂器八雲琴を造り變へた、極めて優美な音色をもつた琴であります、八雲琴とは形こそ殆んど同じでありますが、その音色歌曲に至りては、素より別でありまして、此方が後に出來ましたゞけそれだけ、當時の世の中に適するやうに出來てをります、

既に世間に識らるゝ如く、八雲琴は多く神前にて奏づるものとて、昔は若し八雲琴で俗曲を彈くものがあれば、師匠は直に破門をしたと申します、それ故あたら優美な琴も、世の中に一般に用ひられなかつたものであらうと思はれます、そこでこの變形の二絃琴をば、始めて造つた人が現はれたのは、自然の理でありませう、二絃琴の創作者は藤舍蘆船と云ふ人で、前述のやうに勝手に俗曲を彈いたゝめに、八雲琴の師匠より破門された結果、自ら工夫して今日の二絃琴を拵へて、多くの人々に敎たのが、そも〳〵の始めであります、時は明治十六七年頃だと申します、

今日では相當に世の中に擴まりまして、中には隨分熱心な人も出來たやうで、現に師匠として多くの人々に敎へて居る人が、東京だけにて四五十人もありませう、元來この琴はたゞ音色の優美なばかりでなく、形もさほど大きい方ではないこぢんまりと出來てをりますために、若い令孃たちのみならず、世帶ざかりの奧様、さては隱居せる身分の方々までにも多く愛されるやうであります、この琴についての歌は百ほども出來て居りまして、大方は右の蘆船と云ふ人の造つたものを、今日で用ひてをるやうです

が、初許から奥許などに至りますればなか〳〵に面白い賑かな手のついた曲がありまして、これを二挺も三挺も合しますと、それは〳〵なか〳〵派手な合奏ができます福羽子爵はこの二弦琴に就て左の歌をよまれました、

天地のみちもこもるかふたすぢの
　琴ははやくも世にひゞきけり

唯殘念なことには、蘆船師匠の歿くなりましたのちは、これと云ふ確なる家元のないために、今日にては新しい曲でも作つて世の中へ進むで擴めやうと云ふ人がないことであります、

わが一月

佛國　スーペルトル作
淺岡　一譯

大晦日の夢が覺めますと直ぐに、サア今日は一月一日だといふ觀念が起る、之に次いで、實におめでた

い、好い新年じやと斯う云うて、世の中の人は皆莞爾して飛廻る、之は何う云ふ理屈であらう、何故一月一日がおめでたい、吾々人間の壽命の鎖が一つ缺けて去年といふ年は、昨夜經帷子を着て葬られたばかりである、此葬られる年のために、弔をすべき日である、去年と云ふものは、再び來ないと云つて、弔ふべきである、何がおめでたいのであると云ふことが、さつぱり分らない、既往の事がその通りである、前途の事は明日明後日の天氣が分らない、三日の後四日の後は猶分らないと同じことで、一月から十二月までに、如何なる禍が來るか、丸で分ることでない、して見れば昨日の事も明日の事も、目出たいと云ふべき譯はないとの疑問が起つて來た、これには何か目出たいと云ふべき理由のない譯は無い筈じや、自分は無學文盲ではない、能く自分の記臆を喚び起したならば、何か理由が出て來さうなものと思つて、稍暫らく考へて見た、はてある、ある、漸く思ひ出した、

試に云ふて見やう、古昔羅馬に『ニマー、ホンピリュース』と云うた王があつた、此王以前には一年を十ケ月に分つてあつた、十二ケ月に分つたのは、此王の時からである、即ち二ケ月を增し加へて、其一番先の月に王の信ずる神の『ジアニユース』の名を與へた、其謂と申すは、此有難い神樣が眞先に幸福を持つて來る、これに續いて、二月の神も三月の神も、矢張幸福を授け賜はると斯う云ふやうな譯で祝うたのである、其時の年玉といふのは、干無花果や、干棗や、凝結蜂蜜や、又は今の世に見ることの出來ぬ貨幣などであつて、世上一般に此等の年玉を以て、向ふ三軒兩隣り、其他親戚朋友を訪れた者であつた、夫が例となつて、今の世にまでおめでたい〳〵と云ふて飛廻るのである、所が自分はマア、斯う云ふ有樣であつて、行くべき處もない、又自分の所に來べき人もない、と云ふて何時迄も寢ても居られんから、先づ起き上つた、それから昨夜の中に貰つて置た水で顏を洗つた、どうも寒くつてたまらんので、火を焚かうと思つて、燐寸を摺つて火を付けやうとしたが、濕めつて居つて付かない、之は困つたものだと思つたけれども仕方がない、それから牛乳を飲まうと思つて例の處に行つた見たけれども、御年始騷ぎて忘れたのか、其所に配られてない、何か食べやうと思つて、菓子壺の中を探つて見た、何も指に觸れない、戸棚の戸を開けて見た所が何もない、昨日食べ殘しの麪包の皮が少しあつた丈けだ、今日は一月一日だと云ふに、麪包の皮しか無い境界とは抔と思つたけれども、仕方が無いから、お湯もなく、水も無い所で麪包の皮をカリ〳〵と食べた、之はつまらない事を仕た、日外英國の歷史を讀だ時に『カウヒ』を捧る時、砂糖を加ふることを忘れて殺された僕があつた、ツイ聊な過で非常な大害に出會ふてとも有る、自分も今耐へられぬ程の空腹といふでもなし、何も個程の堅い麪包を食べぬからとて濟まされぬ事はないに、これが爲に腹でも惡くすると飛んでも無い事になると思つて、其れを手で以て叩き碎

いて窓の所から棄て仕舞つた、而うすると云ふと戸の外で、『御免下さい』といふ、不思議な事であ る、此の家には、尋ねて來る人は無い筈だが、と思つて『何誰で御座います』と問ふた、『私で御座います』といふ、ハテナ私といふのは、何誰で御座りますと重ねて問ひつゝ自分が出て、戸を開けて見ると、見た事も無い人が來て『先生御忘れなさいましたか、私でございます、どうも久しく御無沙汰を致しまして相濟ません』と慣れ〳〵しく云ふ、けれども自分は少しも知らないが、先方は能く知つて居る人だからと思つて、お入りなさいましと云つ



て入れると『誠につまりません物で御座いますけれども』と云つて何か差し出した、それを見ると、年玉の心持であらう、紫菫花がつまらぬ素焼の鉢に植ゑてある、夫れを小間物屋抔の襟飾やら釵やらを入れて來る、箱の樣な厚紙で覆うてある、そして夫れに小供らしい繪が畫いてあつて、其上に彩色までして有る、品物は兎も角も心盡しの程は、言の葉の外にも溢れて見えた、

其娘は、年は十二か三か、容貌は美しく愛らしいけれども、衣服や髮飾は誠に見すぼらしい、はて、これは何人の娘であるかとしばし躊躇した、其内に思ひ出した、三年程以前の事で有つたか、田舍の花祭りか何かの時、花火見に行つた事があるが、其折に花火の火の粉が麥藁の積重ねて有つた上に落て、其麥藁が燃え出したことが有つた、丸で火事の樣で殊に不意の出來事で有つたから、見物人が右往左往に一生懸命かけ出して、其場合に小さな娘が人に踐まれて立つ事が出來なくつて困つて居つたのを助けて遣つた事があつた、確かにそれであらうと思つて、『なる程考へて見れば、何年前の何月何日、斯う云ふ御災難に遇つた方ではありませんか』と斯う申した、すると其娘が『ハイ左樣で御座います、其節に先生のお蔭樣で命を拾ひました、誠に有りがたう御座いました』『飛んだ事でございました、けれども、お怪我もなさらなくつて結好でした』『彼の時は先生のお蔭で助かつたと始終思つて居ります』『多分の力を入れた譯でもないのに、夫を救ひ出して呉れたと云つて忘れずに斯うして來て下さるとはどうも誠に……失禮ながら貴女の御親父は何處に御住居なさる』ときくと『父親は御座いません』『それなら阿母さんは』『母も御座いません、兩親共現世には御座いませんで……』『夫れなら誰とお暮しになるので御座いますか』『私は祖母と暮して居ります』『それなら御兄弟は』『私が一番首で、其次に弟も御座います、妹も御座います』『其弟さんは……』『誠にお話申すも御恥しい事で御座いますが、活版所へ參つて……』『御妹は』

仕立屋へ參つて糸卷抔を……『それから貴女は』『私は婆と二人で、小間物屋へ箱貼に參ります』『年も往かないのに兄弟三人ながら働いて御祖母樣の手助を成さるとは……』『今日も之から往くので御座いますが、餘り御無沙汰をしてすみませんから、一寸出ました』『何と云ふ所の何處にお住ひで御座います』『ハイ何か斯う申すと如何はしう御座いますけれども、恰度先生の樣な高い所に居ます』『夫れはさぞ御不自由で御座りませう、何に別に不自由とも思ひません春も夏も秋も宜しうございますが、冬だけが誠に困ります、老人が寒むがつて、ストーブを燃きますといふと、高い所に居ますゆゑ烟出しの上の口が近う御座いますから、風の吹くときは烟が外から皆内へ這入つて參りますし、又雨か雪か降る時分には『火が直ぐ消えて仕舞ふと云ふ樣な事であるから、寒い樣な日には祖母の寒がるのを察しますと、私共の骨身が痛む樣な心持が致します、それ故置ストーブが一つ欲しいと思ひますけれども、品の善くないのでも七フランク程かゝりますので、祖母も力の及ばぬことは仕方ないといふてあきらめて居ります、誠に祖母が痛はしう御座います』自分は此等の物語りを聞いて、嗚呼誠に憐むべき老人小兒である、自分も困窮はして居るが、未だ個樣な艱難はした事が無い、此の十二か三を頭で働いて今日を送つて往くと云ふ事は、實に可愛さうなものであると云ふ事を感じた、夫から此娘に『其内にお尋ね申す事もありませうが、何所へお尋ねしたら宜しいのです』『斯樣々々な所へ御出下されば直ぐお分りになります、私共は夕方でなければ歸りませんけれども、錠は下の家主に預けてありますから私共の歸らぬ間にお尋ね下すつたら、家主の主婦は何時でもお通し申すに違ひありませんから、右樣な時は恐れ入りますが暫くお待ち下さる樣に願ひます、若し御序がありなさいましたら……』スーベストルは自分も艱難した人だけあつて、大に同情を表した、夫から其娘も『之から亦仕事に往かなければなりませんから、お暇を申上

げませう、朝からお邪魔を申上げました」と暇乞をする、イヤ此方は大變徒然の折であるから、種々お話を聞いて悲しくはあつたけれども、慰められた樣な心持も致しました、マア緩くりと遊んで』と云つたが、遂々歸つて仕舞つた、スルト庭の方で雀が騷ぐから、不圖外面を見ると先刻捨てた麵麭の粉を雀が許多來て食べてチユウ〳〵云つて居るので有つた、ハア世の中は廣い、自分にお年玉を貰つて嬉んで居る者もある、是れで喜ばすことが出來れば澤山喜ばしてやらう、といひつゝ、又も麵麭の皮を撒てやつた、それから其日の夕方、ストーブ屋へ出掛けて往つて、置ストーブをと云つて持て來させた、價が娘の云つた通り七フランクで有つた、夫から之を買つてストーブ屋の小僧に持たせて、其留守宅へ行つて、而して先刻娘に敎はつた通りに云つた所が、鍵を貸して呉れたから、夫から五階目の或一室へ往つて戶を開けて這入つて見た所が、何にも無い、只机の上に白い布が掛けてあるので、其外には何にも見えないそれから戶棚を開けて見た所が、妖怪邸と同じ事で何も無い、人の宅へ始めて往つて留守に戶棚を開けて見るなどゝ云ふのは、甚だ失禮であるけれども、夫は哲學者風とでも申しましやうか、夫から其邊を能く見廻したが流石女であるから、男書生の樣に乱雜に取り散らしては無い、ちやんと整頓して居る、雜巾なども善くかゝつて居る、夫から又側の方の押入の樣な所を見た、そこに洋燈がある、油注もある、見た所が中に油は有りさうもない、之で以て考へると云ふと、彼老人子供が歸つて來て、夫から油は買つて燈をつけるのと見える、隨分貧しい暮しであるといふ思ひ遣りが起つた、夫から先づストーブを据付けて、油屋へも而う云つて油を取り寄せて留守の間にちやんと、ランプへも油差へも一杯に入れて、そこで先づ餘り美味物には及ばないが、五人で澤山食べられるものを取寄せて、留守の間にちやんと戶棚の中へ入れて、何時でも彼等が歸へて、來たら一所に食べられる樣に用意して俟つて居ると、段々日が

暮れ方に成つて來たけれども、歸つて來ない、それで試に新ストーブに火を付けて前にあたりながら、茫然として待つて居つた、やがて外の方から誰か這入つて來る樣子であるから、誰だらうと思つて居ると七十計りのお婆さんが、とこ〳〵と這入つ來て非常に驚いた、何誰樣かのお座敷へ飛び込んだと思つて『之は〳〵失禮いたしました、年を寄ると朦碌を致しまして、飛んだ失禮を』、『イヤ之は何誰樣の座敷でもない、貴婦の宅で御座いますよ』と云はれたから能く〳〵見た、所が中々置ストーブなどがある筈は無いのだから、什麼した事かと思つて吃驚して居る所へ、後から這入つて來たのは、今朝の娘で『之は先生善くお入來下さつた、此の方が私を助けて下すつた方で御座いますから、能よ〳〵お禮を申上げて下さい』とお婆さんに云ふと『これは〳〵先生、始めて御目に懸ります、此の子をお助け下すつたのは貴君で御座いますか、お蔭樣で……今日は誰も居らんで失禮をいたしましたなど〻云ふと、娘も『先生善くお尋ね下さいました、時に此ストーブは什麼した事で御座いませう』、『イヤナニ一寸何んで、イヤ何うい ふ譯でもないほんの……』『マアどうも夫は恐入ります』など云ひつ〻何かと思つて馳せ廻るけれども、素より何もないことは分つて居る、しかしそこが愛嬌であるから、娘が戸棚を開ければ御馳走がちやんと殊に澤山這入つて居る『コレはマア先生什麼いふわけで』『イヤナニ其は此所で晩餐を一所に食べやうと思つて、一寸命じて置きましたので』などといつて居た、其内に日が暮れかゝりましたから、ランプを點てと云ふことになつた、所がサア困つた油を買つて來ければ、點ける事が出來ない、けれども仕方がない、ランプの所へ行つて見ると又驚いた、ランプの中にちやんと油が這入つて居る、そこでランプを點けて机の周りに皆一所になつて、三年以前の事など語り出して老婆は其身の不幸談話、何時々〳〵々子息に死なれて、夫から亦引續いて嫁に死なれてなど打解けて物語り、問ひもせぬ事を答へたり、喜

び悲しみつ泣きつ笑ひつ、美味といふ程の物ではないが、此一團の人々の爲には、此上も無い饗應で、皆悅び合つて居りまする間に、いつか時も立ちましたと心付ましたから、又其内にお尋ね申さうと云つて、歸つて來て玄關まで來ると、十時の時計が鳴つた、其時がら〳〵と音がして、四頭立の馬車が來た、見ると家主の主婦で、此の家の一番下層の廣い所に住んで居る人で、馬車から出て玄關に上ると『アノ……今日のお勤も之で濟んだ』と一つ太息を吐いた、夫で見ると、一月一日のお目出度い時であるけれどもしかも金滿家で、大きな家を持て、四頭立の馬車であるく自分であるけれども、餘程の痛苦を今日は感じたものと見える、大息吐いて大變おほきな荷物は下す樣な樣子であつた、

吾々は娛しく、今日を過した爲に、何時か知らぬ間に十時になつて仕舞つた、して見ると娛樂といふものは、決して貧富には依らぬものと見える、貧乏であるから娛樂が少ない、富貴であるから、愉快だと云ふ樣な事でもない、歡樂といふものは富貴の外にあるものだからモウ〳〵決して、富貴を以てたのしみとすべきものでない、と云ふ事をスーペストル先生が感じた、

●芝の風流老媼

芝區三田一丁目八番地北川吉平の祖母富子と云ふは九十四の高齢に達しながらも尙娛樂として厨房の手助けをなし、此頃では炬燵と竈との間を往來して薪を割つたり火を焚いたり、疲るればまた炬燵の中に滑り込みて、專ら和歌の研究に餘念もなく娘や孫やがお婆さん〳〵と勸はる毎に『おいぼれをいたはりてこそ難有や お禮は胸にたゝみ置きます』など、洒落こみ或はまた其長命を目出たがる客に向ひては『老ぼれて冥土の道も忘れしかうか〳〵送る九十四つ歟』暢氣なことを饒舌り、お婆さん幾歳まで生きる積なのと揶揄ふ孫を捉へては『冥土より扨も迎ひが來たならば屹度ゆかぬと申しきかせよ』と答へ更に又『指折りて九十四では足らぬ故ならば兩手を合はせ見たさよ』など唯三十一文字を列べるばかりにて眞の和歌とは云ひ難けれど老いて却つて小兒のやうな心になれる富子は是れを又なき娛みとし酒と煙草とは甞て飲みし事なく如何に心持の惡しき時なりとも三度の食事を缺かせし事なしとか



和服の審美的價値

文學博士　大塚保治

風俗改良の一着手

近來風俗改良といふことが、大層やかましくなつて來た、而して風俗改良といふ問題は、餘程範圍が廣い、隨つて色々の方面から着手せられるであらうが、先づ其内で一番改良の必要に迫つて、また實行がし易いのから、手を着けて行くといふが自然の順序である、即ち衣服改良の問題が、非常に喧ましくなつたのである、

衣服の批評點

それで色々の人が、種々の方面から、從來の衣服に付て觀察し、また種々の批評を下した、或は經濟上から考へて、日本服は不經濟であるといふ論者もあり、或は便利上から考へて、袖があつて邪魔になるとか、裾が絡つて不自由であるとか、といふやうに非難するものもある、又衛生上から考へて日本服は健康によくないといふ論者もあれば、又風儀の上から、どうしても歩く時分に裾が開いて、足の見えるのが不都合であるといふやうな議論をする教育家もある、色々の點から批評して來たが、歸する所從來の日本服は、別して婦人服、これはどうしても改良しなければならぬといふ、世間一般の考になつて來たやうである、

併し色々の點から觀察して、色々の批評も出たが不思議の事には、美術の方面からの批評といふものがまだ出て居らない、少くとも私の知つて居る限り

では、美術上から日本服の價値を、充分批評したものはないやうである、全體衣服は寒暑を凌ぎ、身體を覆ふといふことが、第一の目的ではあらうけれど、併し唯そればかりでは濟まない、矢張り衣服は身の飾りで、一の裝飾品である、此點は中々大切に考へねばならぬ、それ故裝飾として日本服がどういふ價値を持つて居るかといふことを議論しないのは、改良論者の大變なぬかりであらうと思ふ、それであるから私は便利だとか、經濟だとか、或は衛生上風儀上といふやうな點からの觀察はやめて、單に美術として、日本服にはどういふ價値があるか、或は價値がないかといふことを批評して見たいと思ふ、



衣服の和洋比較

それに就ては、自然の順序として、先づ一般に衣服といふものが美術上にドンナ性質を有つて居るかと云ふ、大體の理屈から述べねばならぬ、而してまた日本服の善惡を批評するならば、それと對して居る西洋の服を持つて來て、兩方較べて利害得失を考へたなら

ば、一層日本服の良い點も、惡い點もハッキリ分つて來ると思ふ、それ故まづ初に衣服といふものゝ一般の理屈を述べ、それから西洋服を比較にとつて、日本服の價値を批論して見やうと思ふ、

衣服の美術的二要素

一般に衣服を美術的に觀察する時には、二つの注意すべき點がある、第一は衣服の恰好で、今一つは衣服の色模樣、此二つが衣服の美術的二要素と謂つてもよからうと思ふ、この外衣服の地質の考も必要であるが、地質は直接にそれが美術上の價値とならぬのであるから、唯其地質が衣服の美に影響するとか、また色模樣に差響を與へるとかいふ所から、間接に必要があるので、直接に衣服の美術的要素といへば、前述の如く恰好と色模樣との二つである、その二つの中で、こゝでは別して恰好のことを述べたいと思ふ、何故なれば、日本服が西洋服と違ふ點は勿論色模樣の上にもあるけれども、重に著しい違ひのあるのは恰好にあるので、若し日本服に良い所が

あるとすれば、矢張恰好になければならぬ、また惡い所も恰好で、良かれ惡かれ、日本服の日本服たる精神の籠つて居る所は、恰好にあるであらうと思ふ今日改良論者が色々非難をするのも、色模樣に就て言ふのでなく、恰好を攻擊するのであるから、日本服の恰好のことを第一に批評して見やうと思ふ、

衣服の恰好

衣服の恰好は、大體二通りに別れる、一は身體にピッタリとついて、體格をハッキリ見せる、襯衣とか股引とか、また西洋の男子服、などが此種類に入るのである、もう一つの方は、廣く寬くりとして、フウワリ身體を覆ふ、さうして體格を見せるではなく身體の運動を重に見せるものである、一般に言つたならば、日本服は總て運動を見せる方の部類に入るか、或はそれに極近いのである、

それでこの二通りの衣服は、餘程性質が違つて居つて、身體に密着して體格を見せる方であると、衣服を着た上で、姿の善惡が分れるのは、第一着る人

の生來の體格に依るのである、男の洋服のやうなものであると、其恰好が良いといふのは、それを着て居る人の體格のよいのであつて、その人の體格が惡ければ、いくら好い仕立屋に拵へさせても、いくら上手に着こなしても、矢張り生得の缺點が見えて來る、つまり自然の生れ付の體格が一番肝腎なのである、其次にまた仕立工合が大に關係する、勿論生れ付の形を作り直す事は出來ぬけれども、少しの缺點や醜い所は隱すことが出來る、又體格の立派な所も餘計引立つやうに見せることが出來る、多少仕立屋の方寸で恰好を矯正して行くことが出來るのである仕立屋が格好をキチンと極めて仕舞ひ、チャンと着物を縫上げて仕舞へば、もうそれからは着る人の方では唯それを自分の身體に被せつけるだけで、形を變へることは出來ない、多少着やうの巧拙といふともあるけれども、着やうの上手で仕立の缺點を隱すといふことは、實際極狭い範圍内にしか出來ぬことである、それであるから男の洋服のやうな體格を見せるが主眼の衣服であると、其姿の善惡、恰好の美醜といふことは、着る人にはよくない、まづ仕立屋に依る、併し仕立屋に依るのも些細な點だけで、重な所は銘々天賦の體格によつて定まるのである、然るに第二種の衣服即ち身體の運動を重に見せるといふ方では、それとは大に關係が違つて來る、勿論體格が惡いと、衣服の着やうが良くても姿が惡くなるといふこともあらう、又仕立が惡いと、着やうが上手でも、立派に見えないといふ事情もあらうけれど、併し生れ付の體格や仕立の善惡といふとは、第二の考であつて、姿の善惡を極める第一の要件は何かと云ふと、着る人に在るので、即ち着方の巧拙に在るのである、

衣服の兩種類は、かういふ工合に餘程性質が違つて居るが、どうしてさう云ふ區別が出來て來たか、それについても色々理由がある、兎に角體に密着して、體格を見せるが主になつて居るものと、ユツタりとして身體の運動を見せるが主になつて居るもの

と、衣服にこの二通りの區別が出來たとして、其の上兩方の美術上の價値は、どうであるかと云ふことに論議を進めやう、

衣服と姿勢

美術上から考へて見ると、兩方とも長所もあり短所もあつて、一口にどちらが良いと斷言することは出來ぬ、併し能々雙方の善い所惡い所を算へたて、綜括つて見せるといふ方が、美術上の價値が多いと私は考へる、先づ第一身體の立派な所を見せるといふ點から考へて見ると、無論第一種の方、即ち男の洋服のやうなものが、第二種即ち日本服のやうなものに勝つて居るに違ひない、けれども此點に就て微々たるものであらうと思はれる、其理由は一體人間の身體は無數の美しい曲線が集つて、全體の輪廓を形造つて居ると云つても宜しい、微妙な曲線が少しづゝ始終方向をかへて走つて、稜立つて折れもせずまた眞直に伸びもしない、婉曲にうねつて此優美な恰好が出來て居るのである、それに衣服を着せると、縱令男の洋服のやうでも、自然の恰好に從つて拵へたものを着せた所で、五十歩百歩、體格の立派な點は、大部分はもう見えなくなつて仕舞ふ、勿論身體の大體の恰好は殘つて居る、手がある足がある、而して其手足が左右キチンと對になつて居る、又頭と胴と四肢の比例や腿と脚、前腕と上手の寸法など、何れも好い釣合になつて居る事も分る、さう云ふやうな粗大の形式美は、衣服を着ても矢張り殘つて居るであらう、けれども裸體にした所で、人間の身體の立派と云ふ事は、中々さう云ふ大體の比例とか、整對とか云ふ一般の關係にばかりあるのではなくして、重な所は矢張前に言つた曲線配合の優美な所に在るのである、そうしてそれは衣服を着れば全く無くなつて仕舞ふのである、少くとも餘程恰好を崩して仕舞はねばならない、輪廓を畧して仕舞はなければならないのである、夫故既に衣服を着た以上は、縱令洋服であらうが和服であらうが、五十歩百歩の相違で、自然の體格の美を現はすと云ふ事は、甚だ

不十分になるのである、それであるから此點では第一の恰好を見せると云ふ方の衣服が、多少は第二種より勝つて居るかも知れないけれども、其利益は思つた程に少いかも知れぬと云はれる、それに反して第二種の運動を實に見せ、衣服と身體の和服の様な者であると種類を示す方の男の洋服などには、餘程勝つた所がある、第一に主張へ、所謂キチンと極りきつて動かない時の姿勢へ、例へば立つて居るとか、坐つて居ることが[illegible]居るとか云ふやうな、固定の姿勢は十分其美を見せる事が出來るが、身體が終始運動して居る姿を現はすことが出來ない、然るに和服のやうな極く緩いユツタリした衣服であると、運動を十分に見せる事が出來る、從つて固定せる姿勢の美點[illegible]、運動の上に現はれて來る種々の美をも發揮することが出來る、それから又[illegible]の關係が[illegible]、それと少し離れて居ることと[illegible]見せる[illegible]姿勢が[illegible]に[illegible]なることが[illegible]

あつて、優美な態度が非常に豊富である、尤もさう言ふと、讀者諸君から質問が起るかも知れぬ、衣服が動くと云ふのは、衣服が自分で動くのではなくして、必竟着て居る人が動くのである、それならば着て居る人さへ動けば、洋服のやうな身體に密着した衣服であらうが、又和服のやうなユツタリした衣服であらうが、ドツチでも同じ様に身體の動くに連れて、動いて行く筈である、手を動かす時は、洋服でも手の動く所が見える、長い袖を着て居つて手を動した所で、矢張動き方は同じである、そうして見れば運動の美を見せるとか、或は種々雜多の恰好の變化を見せると云ふやうな事は、洋服であらうが和服であらうが違ひはない、ドツチでも全く同じであると云ふ早合點をなさるかも知れぬが能く〳〵考へて見ると大きにさうでない、一體物の動くのを認めるには、是非とも動く物がなければならぬ、其動く物が僅く目に着かないといかないのである、假りに私が極細い絲を持つて其を非常に振動はすとすれば、

見る方では餘程能く注意して居ないと、其棒の動いて行く痕方を見失つて仕舞ふ、けれども若し棒の先に旗を附けて振つたならば、其棒の動いた跡が明かに見える、さう云ふ工合であるから、運動の美と云ふものも唯動くと云ふ事實があるばかりではいかない、動くものがよく目に着くものであれば、運動もまたよく目に着くのである、唯の棒を動かすより旗を附けて動かす方が非常に目に着き易い、それであるから、洋服と和服を較べて見ると、手足の運動は勿論洋服でも分ることはわかるけれども、和服ほど著しくハッキリ分らない、餘程注意しないと手足の素早い、また細かい運動はツイ見落して仕舞ふ、然るに和服のやうに手にからまつたり足にまとふものであると、手足の動く度に大きな衣服の布片が動く、それ故運動を見せる事が非常に明瞭であつて、從つて運動の上の美を一々よく現はす事が出來るのである、それと同じ理由でモウ一ツの和服の長所も説明される、手足が運動する間に折々靜止して休む事があるが、其時洋服であると、靜止する瞬間が少し長くなれば、兎角其刹那の姿勢を見落すやうになる、けれども大きな袖を持つて居るとか、廣い裾をつけて居れば、極僅の間でも運動さへ止まれば、其時々刻々の態度が直ぐに心に印象する、さう云ふ理由で和服の方が洋服よりも、遙かに恰好の變化に富んで居ると言はれる、それであるから、洋服と和服とを較べると、第一運動の上の美をもよく見せる事が出來ると云ふ點、第二姿勢の變化極まりないと云ふ點で和服が洋服に勝つて居る、

衣服と表情

けれどもまた其上に和服の方の勝つて居る點がある、元來我々の心持を見せるのは、第一面相である是は和服でも洋服でも同樣にむぎ出しにして置くのであるから、しばらく除け物として、身體の他の部分に附て考へると、いくらか體格でも心持の見せられる塲合もあるが、通例人の心持の表示になるのは姿勢と擧動の二つである、別して擧動即ち運動にあ

る、勿論人の心持は種々雜多であつて、ある種類のものは、例へば非常に激發した感情などで、優美な衣服を着て居ては見せにくい、洋服出立か、但しは腕を捲くつたり、裾を端折つけ、手足の構方をよく見せる方が、却つて表情の都合の好い場合もあらうけれども夫は例外の場合であつて、普通我々の日々生活の上に起る樣々の心持は、大抵寬濶な衣服を着て居ても、ハッキリ分る姿勢や運動の中に顯はれるのである、そうして此運動を見せるといふ一點では、前述の如く和服が洋服に勝つて居るのであるから、從つて人の心持を顯はすといふ事も、矢張和服が幾分か、洋服に立優つて居ると言はれる、其上和服であると、着る人の働き次第で、同じ衣服でも色々に着こなして、色々の心持を見せる事が出來るのであるから、ツマリ心持を表はすと云ふ點では、遙かに和服の方が洋服に勝つて居ると言つて差支はない、簡單に形容して云へば、洋服(男子)の中には身體が籠つて居る、日本服の中には魂が籠つて居ると謂つても宜いであらう、

さう云ふ工合に、先づ一般に考へて見ると、體格を重に見せる衣服、即ち男子の洋服のやうなものと身體の動運を重に見せる衣服、即ち和服のやうなものと、二通りあるが、夫を較べて見ると、第二種の方がドウも美術的には價値が勝つて居る、併し是れは餘り大袈裟の議論であつて、實際に當つて見ると、中々體格ばかり見せると云ふやうな衣服もない又運動ばかり見せると云ふ衣服もない、さういふ區別は唯理屈の上の話である、實際になると、體格を見せる衣服も、一部は運動を見せる樣になつて居る又運動を重に見せる衣服であつても、體格を見せる所もある、双方混つて折衷になつて居るのが、實際衣服の有樣である、それであるから、日本服を批評するとか、或は西洋服を批評すると云ふ時には、男子服とか婦人服とか一々區別をつけて、別々に研究して見て、さうして利害得失を考へなければならぬ、

(未完)

魚河岸の名物女

日本橋區は箔屋町、四番地にては一寸分り惡くき通四丁目春陽室の横丁を入りて、左側女髮結の看板を右に見て、溝板を踏み、中將湯の隱居所近く進まば、狹ッ苦るしき、長屋の端に、三村タカ(廿八)と標札打ッたる家あり、魚河岸の煙草屋お高として、近所界隈に名うての女なり、此女何で名高きやと問て見れば、早く父を亡ひ母タミ(五十三)と弟銀雄(十一)との三人の間へ唐物を行商する、庸一と云へるを養子に迎へて、何不自由なく暮し居りしが、庸一は不幸病の爲に、おタカが二十二歲の春果敢なくなりしにぞ、殘る三人は碌と糊口に窮し、二進も三進も足搔がつかず、悲境に沈みたるより、一家を背負つて立つおタカは、取り敢へず花月樓に女中に住み込み、眞面目に勤めたれど、如何せん母と弟の二人へ仕送る程の餘裕は中々にあらざるより、所詮末の見込が立たず、一先づ日本橋檜物町二十二番地針醫岸寶林方の一室を借り、此に母子三人を塒めて、途方に暮れ居る矢先、名古屋生れのお久(五十)と云へるが、小供を背負ひながら、魚河岸にて毎日煙草の行商をなし居るあり、那れを眞似て行つて見ては何うだと勸むる人ありて、おタカも今は選り好みする場合にあらずと、忽ち意を決し、翌朝より取懸りしが、扮裝は蜜柑箱のやうなものを紐にて前に吊り下げ、是に八十錢ほどの紙卷煙草を容れて、「煙草は宜しう」と朝疾く魚河岸に現はれたり、茶屋の女中をする程の女、夫れ美人が來たと、其日大歡迎を受け、瞬たく間に八十錢の煙草を賣盡したり、おタカの初陣は此の如くにして、此ぞ今より三四年前の事なりしが、忽ち「煙草屋お高」の名は魚河岸一面に擴がり、氣の毒にも前のお久は影さへ見えずなり、此に同街輕子社會の煙草は悉くお高の手一つにて、引き受くる事となり、一日に八圓乃至九圓も捌く程に至り、月に三十圓以上の純益あるに到りしより、此に始めて母子とも安心し、箔屋町四番地なる今の處に一戶を構ゆるに至りたり、此く記せば順風に船を遣る樣なれども、若心は十分に在るものにて何にしろ人氣の荒い所とて、始めは氣を吞まれ、片隅に小さくなつて、呼聲も出さざりしも、姐さん煙草を賣るなら、ドン〳〵人混の中を歩かねば駄目だと注意されし位、又或時は男を騙ましに入り込んだの淫賣婦だのと下すまれ、又或時は必定夫だと呑込んで、蕎麥屋より呼び出しをかける人もあり、態々住家を訪れて來る人もあり、五月蠅いことども程よく待遇ひ、眞面目に働き來りたる甲斐ありて、今は人並に暮らせる身となり、昨今お高を見習ひて魚河岸に煙草を賣る婦人十五六名あるに至しと、お高の父は天野清成といつて明治廿三年頃まで、福井縣の判事を勤めて、一時は衆議院議員の候補者に推された程の人だが、お高が十一歲の年病死した爲忽ち悲運に見舞はれて、相當の敎育を受ける事も出來ず、爾來困難に困難を重ね、到頭今の如き賤業に成下つた樣な次第で、父に別れて以來、今日に至るまで、實に有とあらゆる困苦に苛まれたとか、而も自分は此上立身せぬまでも、一人の弟だけは何とか立派な者にしてやりたいまゝに、苦しい中にも學校へ通はして居くとの事である。

女の眼に映ずる此上なき物

文學士　上田　敏

この世にありて、女の眼に映づるこよなきものは、そのはじめてのうみ子なるべし、神、全能の批准もて眺め、完全なる祝福くだし給ふすぐれて聖なるけしきは、いちはやく母子の間に燃えいづる愛情にして、その一方は默然として、涙、くちづけ、眺のほか、何の言葉なし、美なるかな、かの明智よ、それ此愛を生ひたつる種々の過程に連りたる思想・情熱に基きたればなり、先づはじめに來るものは、戀愛の大活劇にして、時を歷るに隨ひて、益々清淨を加へ汚濁の質を失ひゆけど、其性に必須なる結果として有限無限の間に搖動す、

女性が自尊のたかぶりは、げにあてに貴なれど、動もすれば、迷誤の染習を免かれず、物語めく心情の哀もけだかくはあれど、これまたいつも〳〵女性に適ひたりといはず、明けそむる情操の曙光も、皆その指させる理想にえとゞかで、又久しくは保ち難かり、思へ萬人の女性が妙齡にして自ら閱する胸さわぎ、恐、望の大暴風を、造化の大法を踐み守るにほかならねど、そはおのづから清濁を併せたる自己の體質に基けるなり、涯なく肉ならぬかたへのぼりゆけど、終にこれも肉ある生物ぞ、人間のむすめなれば心弱く瑕多く、また神のむすめなれば、直立して天を仰ぎぬ、つぎに兩性の柔思風流に、此世の春の踰越の大節會はてぬれば、位高まさりたる性欲の玄奧より、靈鳥の焚けてまた甦へる如く、更になほ深く、更になほ心ときめく、更になほ聖なる一大玄秘こそは現はるゝなれ、これはた、歡喜にあらず寧ろ安息の樂しき靜寧、さきの泯び易き閱歷を嚥み盡しぬべし、女人の深厚なる情を促がして、向上の程に就かしめ、心の神の變形を學びて、燦爛たる紫摩金色の狀態より、之を牽てかの翼あるものたらしめ曙の玄奧に雜り、無際上天の神壇にのぼらしむ、

この思相の情はもとより、神の嘉みし給ふところ、殊に基督のみをしへによりて、自ら淨めらるゝなれば、光明の階といふべくや、更に進みては、露ばかりも淨洗を要せざる相思の聖愛に至らむ、これは地上のいと聖きもの、神、人間の性を通じて、みづからをいとさはに現はし給ふものなり、

抑も女性の大多數、とこしへにかゝる變化を經過すとは、人生の光榮なにものかこれに若かむ、神またこの聖情の萌芽を、女人の妙齡に近く置きて、夙に此至聖なる訓練を授け給ひ、豫め貪婪なる墳墓の呑噬に備へ給ひしこと、天意の靈妙また讃むべきかな、年若くして白玉樓上の人となり、この榮ある特權を返上したるもの、悲い哉、多し、而も母子親愛の樂園に効果を味ひしもの少からじ、

此事につきて自家觀察の一端を述べ、女性の願を得むと欲す、人々心せよ、

即ち斯の如し、吾が見聞に上ぼりし二拾のうち拾九までは、おのが兒と絕えず親むこと難しとばかり

上つ方ならぬかぎりの女にとりては、眞の天國は、求婚の歲月にあらず、雙棲の初期にあらず心神の練磨せらるゝ人げなき小室にこそあれ、ひねもす母は家に殘りて、僕婢おほかた邸宅の隔りたる所にあるべく、あるはさるものゝたえて無かりせば、更によし、傍にある者は唯一人の俗のみ、をさなきはつの兒といふ天人は、裳裾にすがりて、歩もたどたどしく、喃々として罪なき言の葉は更に覺束なし、影の形に隨ふ如く、母に縋り、母を追ひて、其慈眼よりはためく稚心の養をとりて楓なす指の觸るゝ所みそかなる樂の顫動を母に送らむ、朝夕に此一人を友として、若しくは、同じ木の生立等しからぬひこばえ、また幼年の美を帶びたる三人の兒に圍まれてかゝる樂園の榮耀に近づきうる多幸の女人は、自らはしば〱識らざるも、一生のいと聖き世を送るなりけり、夕されば、上、最高の顯職を帶ぶる人より下は、かいなでの日がせぎに至るまで、種々の階級を通じて、夫は家に歸り、男の廣き智力にふさはし

き思想を傳へ、事業を論じて、妻の心をや慰めむ、この時小兒は(小兒等)はちいさき床にうまいしつべし、さて翌朝も、常の如く日華やかにさしのぼれば夜のもてくる團欒を前にひかへて、長々しひねもすの樂をおもひめぐらせば、これまた心情の經緯を織り交へたり、げに音靜なるこの愛のありさまこそはよろづをこえて、神の惠み給ひ笑は給ふものなりけれ。

さゝら賣孝行娘

此頃の寒空を雨の日も風の日もサヽラやサヽラやと、魚河岸界隈を賣歩く十七八の娘あり、紺飛白の單衣一枚に、袷羽織を重つゝ、頭髮さへ亂るに任せ、見すぼらしき態、見る人の涙の種ならぬはなし、娘は深野お鐵(十七と)云、本所區綠町一の三鰻屋富岡の隣横丁を衝當て、同町稻荷大明神の門前に堂守とも紛ふべき、九尺二間の陋せき廢屋こそ、父深野太吉(六八)の住居なるが、太吉は元埼玉縣越ヶ谷大江町の生にて、相應に暮せし者なれども、吹き荒ぶ憂世の木枯しに、凋落の身となりて、妻お林(四五)と共に初て上京せしは、今より十五年前の事なり、されど幸に太吉は其前十三歳の頃日本橋區本船町蠟燭業丹波屋方へ奉公して、明治十一二年頃本所中鄕元町に同業を營み、尙市内の蠟燭店に職工として鍛へ上げし腕に覺えあれば年六十までは一心に蠟燭製造業を營み居たれ共、寄る年波に齒元危くなりて、糸心は兎も角、普通の蠟燭は竹串をだに齒を以て採取る事を得ず、剩へ長男六大郎(二九)は、お鐵とは似ても似附かぬ放蕩者にて、車夫となりて諸所方々と流れ渡り居れりと聞けど、更に行衞分らず、次男倉吉(二六)は秤賣りを本業とし居りしが、是も今より四年以前、彼の大坂博覽會に出掛けし儘、行衞不明となりしにぞ、さらでも老の身に頼りを失ひし父太吉は、何とかして一家を支へんものと、茲に不淨箒とサヽラとの製造販賣を思ひ立ち、朝は早くより夜は夜の更る迄、妻が仕入來れる原料の竹片をもて製らへ方に從事すれば、妻はまた諸方に賣り歩き、微かな利得にて、二個の屋賃を仕拂ひし上に、辛くも親子四人の糊口を過ごせる程に、此頃は太吉兩足不自由の身となり、妻の外出も自在ならねば、娘お鐵は妹お赤(十三)と共に兩親を勵りつ、入替に神田淺草さては下谷魚河岸を常得意に、各所を賣歩き『不淨箒の太吉』『サヽラ屋の孝行娘』とて行く先々に顧客多く、母が電車にも乘ず、荷車をも曳ず、仕入先より竹片を背負て歸る哀れさに、仕入先の同情も日増に深く、お鐵は各所の料理屋に馴染深くなりて、種々に勵はられ、孝行をせよ、體を大切にせよと、袂の下より料理の品々惠み吳るゝ女中も少からねば、貧こそ迫れ、一家四人、娘の孝行に和氣藹々として、一向忰共が身の非を悔ひ、早く歸宅する日を待居れりといふ、さるにても日増に募る此頃の寒空にも臆せぬお鐵が固き孝心いぢらしき限なり。

バナヽの話

伯爵　酒井忠興

バナヽ、これを文字では甘蕉と書きまして、芭蕉科の植物です、産地は熱帶地方で、日本では小笠原島及び臺灣、外國で有名なのは濠洲或はハワイ香港等です、世に此バナヽを芭蕉と同一のもの、樣に思つて居る人も少くないやうです、チヨツト同じ樣に見えますが、其葉のミヽが淡紅色なのと、新芽に白い粉を吹て指で觸れると眞白に著く程なのがバナヽの特徴で、芭蕉はこれがありません、其成長は極めて迅速で、當温室では發芽してから結實するまで二年若くは二年半、假令遲くなつても三年目には必ず結實を見ることが出來ますが、原産地では所に依つて長短があります、併し一旦結實すれば、それには再び結實することがありません、其澤は、芭蕉科の植物の事ですから、その植物の眞に花を著けて實を結ぶので、幹の中途から芽を出すといふやうなことがないので、止むを得ませんから一度結實した上は、それを伐つてしまふより外はないのです、其代り親の幹が結實する頃には、根から發芽した子が、既に親の高さの半ばほどに成長して居て、續いてあとから實を結ぶ順序になつて居ります、

バナヽの種類は甚だ多く、食料として最も味のよいのは、マニラで出來るラカタンといふのです、これは一番味がよく、さうして實が小さい種類であります、是等は日本へ來ないのみならず、マニラでも極く少い種類で、バナヽの中の王と呼ばれて居ります、稀にはラカタンと稱して來たのもありましたが、眞のそれではありませんでした、只今内地へ來て居る種類の中で最も味のよいのは二種、其一種は三間乃至四間位の高さに成長するもので、他の一種は俗に三尺バナヽと稱へて、三尺位より成長しない、それでも立派に結實する種類であります、其味の優劣は、人によつて評を異にして、何れとも斷言し兼ねます、つまり、人々の嗜好に依るのでせう。

栽培の方法は、元來が熱帶の植物ですから、寒氣を恐れますが、溫度が華氏五十度より下らなければ、冬でも結實するものです、肥料は人糞若くは油粕、其害虫はレッドスパイダーといふ赤い小さい蜘蛛で被害の甚だしきに至つては、葉の全面が赤色を以て被はれる程になります、驅除の方法としては、上から水を灑ぐのです、それから此植物の輸送の方法ですが、大きな植物ですから其儘輸送することは困難です、それには誠に都合のよい方法があつて、幹を根の際から截つてしまつて、根ばかりにして送るのです、斯うするときは、一個の石炭箱に十株も容れることが出來るのです、

バナヽの實を採收するに適當な時期は、氣候の關係もあるが、先花が咲き初めてから七十日乃至九十日の間にもぎ取るのです、其頃合は、バナヽの實が熟せぬ間は稜のあるものですが、熟するに從つて追々それがとれて來ます、その稜がなくなつたか、なくならない時が適度なのです、それをもぎ取つた上は、新聞紙で全部を包んで、纏に成つて居た時と稍同一の溫度の所に吊して置くのです、それから四十日乃至五十日も經過して、黄色になりましてから食用とすることが出來るのです、一般の果實は、樹で十分熟さして直ぐ喰することが出來ますのに、バナヽに限つて何故もいでから四五十日も待なければならないかと云ふに、バナヽは熟して黄色になるまでもがずに置くと、自然水分がなくなつて味を損じますし猶其時期を過しますと、はぜてしまいます、で此もぐ時期の見計ひは、餘程注意を要することです食べるには、生食してもメリケン粉にくるんで油で揚げてもよし、菓子や飴の中へ入れて、香を附けて食用に供するも妙でせう

◎本派本願寺設立の女學校　本願寺裏方大谷籌子は、夙に女子教育に心を注ぎつゝありしが、今回毛利公爵母堂、木戸侯爵夫人、棚橋絢子其他數多の貴族、紳士の夫人等と語ひ築地本願寺内に事務所を設置し、後藤環爾、三松永成等の同山役員其中心となり、奔走中なるが、已に多額の寄附金を得たるを以て工事に着手し、麹町中六番町に校舍を新築し、來る四月學期より開校すと云ふ、

ベルリンの圍

ドーテー作
野村傳四譯

吾等はV醫師と共にシャンゼリゼーの並樹道を進で行つた。途上パリーの圍みの談話を聞かんと破裂彈に裂けた壁衞榴彈の的となつて滅茶々々になつた横丁の事などを尋ねた。恰もロンポアン、ツ、レトアーレに達せんとする時醫師は歩を停めた。而して凱旋門の邊りに嚴かに群れる大伽藍の中の一つを指しつゝ余に話る樣、

「あの家のバルコンの上に閉め切つた窓が四つ丈見えませふ?、八月初旬……あの畏ろしい去年の八月ですよ……嵐は吹きまき、災難は多い頃でしたが、私は卒中患者の診察に彼所に往つたんですが、あすこにはヂユーヴ大佐が住むで居ました。大佐は一世ナポレオン帝の頃には騎馬兵の一人で、年は取つて居ても名譽とか愛國とか云ふ問題になると一歩も退かぬ人でした。今度の軍が初まると大佐はシャンゼリゼーに居を卜して、バルコン附きの一間に住つて居たのです。何故だと思ひます? 吾佛國の凱旋軍が歸るのを彼處から見物し樣と云ふんです。考へると可哀相な老翁さんです。ヴイスセンブルヒからの知らせを手にしたのは、恰かも彼が椅子を離れ樣とする時でしたが、ナポレオン敗軍、佛軍潰亂の報知を見るや大佐は枯木の如く倒れました。

私は往つて見た所が當年の騎兵は毛氈の上にのさばり返つて、顏一杯に血がついて、丁度戰斧で頭を打たれた人の樣です、丸で生きた人の樣でなくてね。大佐は立つたら餘程高い人に相違ない。横になつてる所も驚く位でした、恰好は好く、齒並みは美しく、髭は羊の毛の樣に白くて、年は八十と云ひますが、打見た所六十としか思はれませぬ。大佐の脇には孫娘と云ふのが一人居ましたが、膝をついて涙に浴びて居ました。が、祖父さんそつくりな娘です。二人を並べて見ると、誰でも同じ鑄型で鑄た美しい二個のギリシヤ賞牌と思ふに違ひない、只其一は古く土色を帶び、縁が僅かに朽く出來て他は奇麗に刻むで光輝を放ち、つやゝかに滑かにして爽かな感じを遺憾なく與へると云ふ違ひが有る丈です。

可哀相なのは其娘でしたよ。娘の父と云ふのも矢張り武人で、當時マクマホンの本營に勤めて居ましたが、今祖父樣が自分の前に仆れてるのを見ると娘の心には之れよりも畏いお父さんの面影が見えて耐りませぬ。私は一生懸命に娘を慰めて見ましたが、別に其甲斐が有つたとも思ひませぬ。私と娘二人は半身丈全く麻痺した人にも手を附けるんだが、八十と云ふ年になつちや快復する人は殆んど有りませぬよ。三日間と云ふ者病人は人事不省と云ふ狀態でズツト通しました。其時でしたライヒショーフエンの知らせがパリーに來たのは。今でも御記憶でせうが其時の知らせは誠に妙な方法で來たのでね。つい夕方迄は誰一人佛軍の全勝プラシヤ軍二萬の死者、向ふの親王は虜になつたと云ふ事を信ぜぬ者は無かつたのです。所が不思議ぢや有りませぬか。如何云ふ磁石の作用か知らぬが、この佛國民大觀喜の反響が、人事不省の底迄沈むでるこの老人に響いたのですよ。其夕方に起つた事ですが、私が老人の床に近づいて見ました

ら、丸で別人ですね。眼は殆んど明かになり、舌も以前より輕くなつて居ました。而して私を見て笑ふ力迄出てるんです。二度丈吃つて大佐は云ひました。

「勝――利」

而してマクマホンが赫々たる武勳の逐一を病人に説明しましたら、病人の體が悠然となつて、沈むだ顏が浮いて來ましたよ。

室を辭して外に出樣とすると、娘は死人の樣に青ざめて、戸口に待つてるんです。すゝり泣きして居ました。

「病人は快くなつたのに!」と云つて、私は娘の手を取りました。

不幸にも娘は、私に返事する勇氣も出なかつたです。と云ふのはワイヒシヨーフエンの正確な報知がこの前に掲示して有つたのです。則ちマクマホンは敗れて全軍潰滅と云ふ報告。二人は目と目を見合せて口も開けなかつた。娘は父の上を心配して失望に沈み、私は老人を案じて戰慄しました。今度の報知を聞いたら老人は助からないに决つてるけれども、如何したら宜いか?誤りを信じさして喜ばして置くか?けれども左樣すれば虚言をつかねばならぬ。

「宜う御坐んす、虚言でも!」と娘は速に涙を拭き取つて大膽に云ひ放ちました。而して嬉々たる顏してお祖父さんの室に入りました。

娘の企てた仕事は中々困難でした。始め二三日は大した故障も有りませぬ。老人の神經は弱う御坐いましたから、欺せば小供の樣に欺されて居ました。ですけれども健康が恢復するにつけ頭も段々明瞭に成つて來ました。夫で軍隊の運動に就て聞かれると、私共は彼の爲に進擊の報告を草しなくちやなりませぬでしたが、いたいけな娘が、夜となく晝となく、獨逸聯邦の地圖を擴げ、其上に小な旗を突き立てゝ、目ざましい攻擊を案出仕樣と心配するのは、見て居ても實際可哀相でしたよ。攻擊と云ふとバゼーン將軍がベルリンを圍むでるとか、フロアッサーは今バヴアリヤに居るとか、マクマホンがバルチック海に廻つたとか云ふんです。斯んな事になると娘は皆私に相談しましたから、私は出來る丈助けて遣りました。併し斯る想像的の侵略を作るに當つて、特別の必要なのはお祖父さんでした。彼は以前ナポレオン一世の陛下に屬して、幾度となく獨逸を征服しましたから有らゆる攻擊を前から知つて居ます。「此處が今佛軍の行進する所だ、今佛軍はこんな計略を仕なくちや可かぬ」と云ふと其先見は常に實現されました。左樣すると老人は何時も上機嫌でした。

不幸な事には町を採り、戰に勝つと云ふ事は吾々に取つては何の福利もない事でした。病人から觀ると幾ら早く進擊しても决して早いとは思はれませぬで何時も不滿足でしたよ君、夫で病人の内に往くど、私は毎日幾つかの新らしい軍隊の功勞を聞くのでした。

「先生。只今マイエンが落ちましたの」娘は心も裂くる樣な苦みを笑に隱して、室から出て來て申すでせう?すると私は窓起しに懸命の嬉しさで、叫ぶのを聞き了。

「今進擊中です!今進擊中です!我軍がベルリンに入るのは一週間以内です!」

其時はと云ふと獨進軍は、パリーから一週間行程の地點迄來て居るのです。夫で初めは病人を田舍に連れてつた方が得策か知らと話

しも致しましたが、何しろ市外に一歩踏み出せば、何もかも病人に分る事で有り、又病人は猶も衰弱して、先達ての驚きで精神は其時迄も痲痺してるんだから、眞實を知らしちや迚も駄目だと云ふので矢張り元の處に止まる事に致しました。

パリー包圍の第一日、私は二人の室に昇つて行きました。今でも覺えて居ますが非常に心が落ち着きませぬ。胸に苦悶が蟠まつて居る。其苦悶と云ふのは閉ち籠めた窓、城壁の下の戰爭、外堡と變つた郭外等の爲めに私共凡てに起つたのです。何も知らぬ老人は寢臺の上に坐つて居ました。が、さも自慢相に、又嬉し相に見えました

「さて」と彼は云ひました「愈々圍みが初まりましたよ!」

ハツと驚いて私は病人を見つめました。

「え? 大佐殿は御存じですか?」

孫娘は私の方に向き直り「左様ですよ、先生」大變な知らせです、ベルリンの圍みが始まりました。」と云ひ餘程穩和なる態度で、自分の針をセツセと使つて居ました。病人の胸中には一點の疑もないのものです。砦の銃聲も彼には聞えず、見るも畏ろしい程混雜極つた吾がパリー全市の慘憺たる光景も彼には見えないのです。自分の寢床から見ゆる者は凱旋門の一角と、夫から室の中に彼を圍むでは一世ナポレオン帝時代の古物を集めた者が有る丈ですが、此等は何れも彼の妄想を助くる計りです。身邊の者と云へば諸元帥の寫眞幾多の戰爭や或は赤坊の裝をして、ローマ王(即ナポレオン一世)の彫り板、無數の賞牌、青銅の類、帝政時代の遺物、銅の戰利品を以て裝飾を施したる高きコンソール、一個の地球儀の下なるセントヘレナの縮圖、及び捲髮に結び、羊足型の袖をつけたる黄色の舞踏服を着て、パツチリとした眼付の婦人を書いた繪畫等です。而して此等は凡て千八百六年の人心を魅した者です。勇敢な大佐は今申した樣に勝利、征服と云ふ大氣の中に居た者ですから、彼が無邪氣にもベルリンの圍みを信じて欺はなかつたのは、私共が彼に告げた千萬言よりも斯る大氣を呼吸した故だと思ひます。

其日から我軍の行動は大變單純にされました。ベルリンを取るのは、只忍ぶより外は無くなりました。老人が餘り苦しむと見れば、私共は折々令息から來た手紙を讀む事にして居ました。無論私共がこさへた手紙です。何故つて申すと何物もパリーに入るを許しませんでしたから。而してセダンの敗軍以來マリマホンの副將軍は敵陣に送られました。其折の娘の心中を察して御覽なさい。音沙汰もない父は、今頃捕虜の身と爲て、不足な物計りに違ない。事に依ると病氣かも知れぬと案じ煩らひ乍らも、祖父さんには大變に面白い手紙を書いてる樣に見せなくちやならず、其手紙は少し短くは有つても、戰陣に臨むだ兵士が侵略した、山河を前へ〳〵と進軍して行く時の心持ちを書き表はさればなりませぬから中々ですよ。時には子供の元氣が阻喪する事が有りますと、數週間も便りが來なくなる。左樣なると老人は心配を始めて、夜も寢られなくなります。そこで獨逸からの手紙が直に着する事になります。夫れを病人の枕元に持つてつて、涙を抑へて嬉しげに讀むのが常でした。大佐は娘のよむのを嚴かに聞きながら、成程と云ふ風に微笑をもらし首肯し、批評し、少し込み入つたと見ゆる文章になると說明の勞を採られま

した。けれども殊に見上げた者だと思ひましたのは、老大佐が其令息に送つた返簡でせふ。「御前は佛蘭西人だと云ふ事を決して忘れるな」と書いて其次ぎは下の如き者でした「哀れむべき敵國民には寛大なれ。餘り慘酷な征伐をしてはならぬ。」其他無數の推稱、身分相應と云ふ事に關して稱贊すべき説教、婦人に對して男の盡すべき身嗜み、戰勝武人の守るべき名譽に關する個條など殘らず認めて有りました、猶又政治上に關する一二の普通なる管見や、戰敗國に申し込む平和條件などの事やなども所々に散見しました。そこで申しますが彼は決して强奪主義の人では無かつた。

「戰爭の費用丈償はすれば宜しい其他は何も要らぬ。土地を取つて何になります？獨逸を佛蘭西化する事が出來ますか」

彼は之を斷乎たる聲で云ひました。而して彼れの言葉の中にかく公平無私にして、しかも高尙なる愛國的精神が籠つてるのを思ふと、誰人も傾聽する間は彼に感動されざるを得ませぬ。

其間に包圍は續行されます。ベルリンの包圍では有りませぬ。時は嚴寒、砲擊、傳染病、饑饉の候で有りましたが、私共の看護・勞力及び、增す計りなる心盡しの爲め、老人のさつぱりした心は寸刻も亂されませぬでした。最後迄も私は白パンと新しい肉を得て病人に供給する事が出來ました。併し病人以外の人は全く食ふや食はずの有樣でしたが、彼がこんな食事をする時は誠に傷ましい者でしたよ。丸で小供見たいに我儘ですからね。先づ申すと老人はニコ〳〵笑つて寢床の上に坐つて、あごにナフキンを當てゝると、孫娘は若勞に顏色も少し靑ざめて、傍に侍しつゝ、老人に手を貸したりいろんな者を飲ましにり。又御上から食ふなと禁じて有る甘い者などを食はしたり致して居ります。すると御馳走で以て上機嫌になります木枯は外の面に吹き立ち、雪は窓のそばに渦を卷く時も、室の中は暖かい者ですから、以前の騎馬兵は其中で壯時の北方侵略を想ひ起すんでせふ。而して百度も二百度もロシアから退軍する時の畏かつた事を話して聞かせました。其時は氷りつめたビスケツトと馬肉より外に食ふ者はなかつたとの事です。

「御前分つたかい？馬の肉だよ」

馬の肉を食ふと云ふ事が娘に分らない者ですか、自分だつて二ヶ月の間は馬肉より外の者は食はなかつたんです者。併し其時から全快の期が近づいて來た者ですから。病人の手當も以前より困難に成つて來ました。老人の有ゆる感覺、身體の凡ての部分が痲痺して居たので今日迄は見とりも容易でしたが夫も無くなりかけました。二度三度ボルト、コイヨーから、續け樣に發した畏ろしい銃聲が聞えた所が病人は飛び上つて獵犬の如く聞耳を立てた。そこで私共は仕方なくバーゼン將軍がベルリンに乘り込むで遂に城下の盟をさした、其祝砲をアンヴアリデーで發するのだと云つて欺しました。あけの日……ピユーゼンヴアールの土曜日だつたと思ひますが……、寢床を窓近くに持て行つた所が、國民軍の大部隊がグランダーメの並樹に集

合して居るのが病人の目に入りました。

「あの大樂隊は何だろう？」と老人は尋れましてから口の内で呟いてるのが聞えます。

「拙い陣立だ、拙い陣立てだ！」

云つた言葉は其切りでした。併し私共は以後大に警戒しなくちやならぬと考へました。けれども充分の事が出來なかつたのは殘念でした。

一夕私が參りましたら娘は大に心配して出て來て

「軍隊は明日町に攻め入る相です」と申しました。

病室の戸が明いて居た者か、後から考へれば考へる程其夜病人の顏が何時もより畏ろしく變つて居たのです。病人は屹度私達の話を聞いたんでせふ。私共は獨逸軍の事を話して居ましたのに、老人は佛軍の事と思ひちがへ、永く待て居た凱旋軍の入城を心頭に置いて居る……、マクマホンが花映を乘り越て、樂の音に包まれて、並樹を降て來ると、自分の息子は將軍の脇に居る。自分は…老大佐は…あのバルゴンから昔ルッツエンに於ける如く大禮服を着て。千切れ果た聯隊旗や、彈藥に黑く焦けた鷲の旗印に敬意を表するなど〻思つて居たのです。

可哀相ら可哀相！老大佐は私共が折角直りかけた病氣の、斯んな騷ぎを見せたら、又ぞろ惡くなると氣遣つて見せないのだと思つて居ました。老人は此事を誰にも話相と仕ませぬ、所が、次の日、丁度敵の歩兵隊が躊躇の體でポルト、アイヨーからロイレリーに通ずる長い道路に乘り込むだ時、あそこの窓が靜に明いて、大佐はバルコンの上に表はれました。甲を頂き、長劍を提げ、何もかも昔ミローの將軍殿下の騎兵の一員としての出立ちですからすばらしい者です。如何です人間の意志の力が突然物に感激した時の畏ろしい事は。今迄れて計り居た人がちやんと立て軍服を着けるんだもの。思へば今でも不思議です。老人は確にバルコンに居ました、欄杆を前にして而してビックリした目付きです。左樣でせうよ廣い並樹はシンとして音もせず、家々の簾は下して有る、パリー全市は避病院か何ぞの樣に陰鬱に見える、軍旗は至る處に見えるが、白に少さな十文字の有る見慣ぬ奴だ。而して一人も我軍に逢ひに行く者はないと云ふ有樣です。

一寸の間は自分の眼が狂つたとも思つたでせう。

所が、遙か凱旋門の彼方は亂軍の有樣で、黑い線が昇る旭の中に近づいて來ます。すると甲の星が段々輝いて、エーナの少さな大鼓の音が聞え出す。而して凱旋門の下では各聯隊の重苦しい足音やサーベルのカチャ〳〵云ふのが耳に入る間にシューベルトの凱旋進行の曲が鳴り出しました。

そこで町は死人の如く靜かなる中に、叫び聲が聞えた。畏ろしい叫び聲です「劍をとれ！劍をとれ！敵だ！」先鋒の四人の槍騎兵はスット、あのバルコンを見上げたが、其處には一老人が兩手を擴り、よろめいて倒れました。其時チューグ大佐は實際死で居ました。

昆蟲の話

深井龍蝿

動物の壽命

秦の始皇は、不老不死の薬を探ねさせましたが、遂に死んで仕いました、すべて動物でも、植物でも生命のある物は、皆な死を免れる事は出來ないのであります、併ながら生物が個體的死滅は致しますが系統的死滅はする物でないのであります、何故と申せば、生物各個は死にますが、其の子孫は續いて居るからです、で吾人科學を研究して居る者は、宗教によらなくても、安心立命されるのであります、昔武内宿禰は、三百歳まで生きたと申されますが、之も一年の長さで、或は左様であつたかも知れないので、西洋でもギリシヤ、ローマ時代までは、一年は十ヶ月であつたのですから、日本の昔時もし一年が六ヶ月位でもありましたなら、三百歳位までは生きられぬ事もないのであります、動物の中で、最も長命なのは、恐らくは象でありませう、ランケスター教授の研究によりますと、クリーランドの近海に住んでゐる鯨には、四百年を經たのがあると申されます、猶、象は四足獸中での長命者の一で、凡二百年駱駝は百年、馬は三十年、豚は二十年、大羊は十年から二十年、兎は十年であると申されたのですが、自からも不正確であると云つて居ります、鳥類で長命なのは、鸚鵡でして凡百年『鶴は千年龜は萬年』など謳はれますが、鶴は五、六拾年位の生命しかないと云はれます、鵝鳥は貳拾五年生きてゐた者、烏では拾參年生きて居たのもありました、家鷄は拾年、雀は、五六年であります、龜は萬年は生ぬとしても確に五百年は生きて居ると申されるのですから、龜が動物中の最も長命な者かも知れない、蟇は昔から噺の種子でありますが凡、百年は生命があるさうです、鯉は千年經つと天へ昇るとか申して居りますが鯉は千年などは生きない、西紀千四百九十七年にスピヤ湖で捕獲した梭魚は、長さが一丈九尺、重量が

五十一貫目もあつたさうですが、其魚に一つの環が附けてあつて、其の環に『我こそは宇宙の主宰者フレデリック二世の手により、此湖に放たれし最初の魚なり、千二百三年十月五日』と銘されてあつたと云ふ事ですから、其の梭魚は二百六十七年以上を經てゐるが、魚類中でも亦生命の極めて短いのがあります、それは僅か一年しか生きぬ香魚であります、昆蟲類で最も長命なのは、吉丁虫の幼虫でありまして三十年、次が十七年、蟬の幼虫で十七年でありますが、之らは羽化（或虫になる事）すると幾何もなく死ぬのでして『蟪蛄不知春秋』春秋どころでなく生命は一週間位しかないのです、英國の蟻學者ラボック氏は、蟻の女王を拾五年まで飼ふたと申し、哲學の祖とも申すべきギリシヤのアリストートルは、蜜蜂の女王は七年まで生きると申してあります、實際も亦左樣なのであります、鳳蝶は一ケ月、蝴蛉も亦一ケ月、若しくは貳ケ月、衣魚も貳ケ月位生きて居ますが、最も短命なのは蜉蝣で、數時間であるのです、總じて動物は生殖が主な目的で生存するのでありまして、子孫さへ殘せば、我身は如何なるとも關しないのである、でありますから、蜉蝣は數時間中に産卵して死滅しますが、鶴は十年以上も經なければ産卵する事ができず、又其の卵の數も少ないので子孫を繁殖するには、どうしても長く生きて居らねばならいのです、ファラデーの言によると、動物の生命は發情期の五倍であると云ふ事ですから、日本人は少くも七拾年以上生きねばならぬのです、然るに昔から七十は古來稀なりなど云つて、古稀の祝をすると云ふ風でありますが、それは生物學から申せば當然の事なのです、日本人の平均死亡年齡を見ますと、拾歳から拾五六歳で死んで仕まふ譯ですが、何と情ない話ではありませんか、衞生や生理の道が開けた今日吾人は自然の天命を全うして、七十も八十年もの長命をせねばならぬ、人類は動物には相違なけれど、決してデカルトの自動機ではないのであるからして、猶々長命をせねばならぬのであります

▽附記　昆蟲の話以外なれど、全く無關係でもありませんので、仮に此の所へ書きました、其の心にて

新案蟲合せ遊び

家族合せと申す遊びが、大分流行して居る様に見受けるので、昔は草合せ、虫撰みなんど云ふ遊びもありましたので、茲に私は蟲合せを工夫しましたが未だ完全にはできないのですけれども、之を家族合せの方法で行つたら、多少の興味もあるでせうし、且つ昆蟲學上からも利する所がありませうから、一寸披露して見ませう、何卒皆さんの御改作や、御訂正を願ひます、又之を實地行つて頂きたいのであります、

兜むし・緋威蝶・軍配虫・劔かめむし

帝王蛾・女王蟻・大将虫・兵卒蟻

ナポレオン蝶・秀吉蟹・正雪とんぼ・實盛むし

滿州揚羽・アメリカ滑虫・英吉利蟹・伊太利蜜蜂

大和小灰蝶・蠶神ばつた・蝦夷白蝶・琉球みすぢ

菊虎・百合化ずへ・薔薇鋸蜂・菽象虫

天狗蝶・福女こほろぎ・河伯虫・狐蜂

蟻地獄・極樂とんぼ・鬼やんま・閻魔蟋蟀

三井寺斑猫・埋葬虫・骸骨てふ・幽霊よこばへ

天蠶・地蠶・星吉丁虫・日陰蝶

夏あかね・春蟬・秋つばめ・冬蟬

黒雲蛾・雷はむし・稲妻よこばへ・大水青蛾

鍪むし・編笠はごろも・鎌きり・鍬形むし

背巻もどき・糸引葉捲虫・筬むし・促織

天鵞絨こがね・印花布紋蛾・縞よこばへ・縮布軍配虫

糸とんぼ・針かめむし・鋏むし・物指とんぼ

紅天牛・麝香揚羽・油虫・齣黒とんぼ

金花虫・銀やんま・銅筬虫・鐵砲虫

赤すぢかめ・白はんめう・黒あげは・紫てふ

菱ばつた・圓かめむし・三かくこほろぎ・角胸穀象

鈴むし・鐘たゝき・大鼓打ち・鼓みのむし

舞々振頭・踊子てふ・跳虫・撥虫

粉むし・菓子蛾・飴蜂・團子蜂

象鼻虫・駱駝虫・馬追虫・虎斑天牛

孔雀てふ・烏羽あげは・雀蜂・木兎よこばへ

▽附記　以上百種を撰ぶに大分苦心しましたし

訪外日記

愛氷散士

人生の快事は、語るに多くの友を有することであらう、如何に平凡にても、世を渡るほどの人であらば、其言ふ所悉く捨てたものでもなく、却つてその智惠を上流の人にせしめられることもある、予は多年鉛槧の事に從ひ、あらゆる階級の人に面談するの機會を得、否進んでその機會をつくり、いさゝか社會の耳目たるべく、論の高きもの、説の新しきもの、事の奇なるもの、行の美なるものを紹介するの勞を執來つた、この日記はその副産物である、これを一年に通じ、三百六十五人の片影を映出して、予の智惠袋の種子をさらけ出さんとするは、予が語るに多くの友を得つゝある幸福を喜ぶのみではない、

第一月

明治三十九年十一月十六日より、同年十二月十五日迄の日記帳より抄錄したるもので、この間に訪問したる邸宅二百餘、筆よりは、先づ足と舌とを疲らさねばならぬ仕合せである、

芝の種と鷄の卵

◎その一日　午後二時、この月の十日菊見の宴に招かれたる禮を兼て、伯爵酒井忠興君を訪問した、君は瀟洒たる春服にスリッパを履かれ、身輕に而して氣輕に庭園を案内せられ、例によつて園藝談、次に養鷄談があつた、

君、此種子は何か當て、見給へ、御存知ない、そうであらう、これはそこ此處の邸園を美裝する芝の種である、この芝を植付けるのは、兎角枯れるのなどがあつて面倒なものである、然るに此種子を蒔きさへすれば、無造作に生へる、さて如何にしてこの種を得るかと云へば富士の裾野などでは、盛んに繁茂して居る、その穗についた實を米麥のやうにこいで取るのであるが、とても邸園の芝に實をならせるやうな事をしては、庭でなく野になつて終ふから、これは別に空いた土地に作るがよからう、この芝はいつ蒔いても五月でなければ生へぬのであるから、その前にあまり早く蒔くと、雀に食はれる憂があるから、生へる時期の間際に蒔くがよい、五月に蒔いても五月に生へるのであるから

鷄の方は漸く始めたばかり、これを思付いたのは、食料にする爲で、

兎角買ふのには、形は玉子でも、食物のよくないのが生んだのは、豆腐を食ふやうで、一向滋養どころの沙汰でなく、却つて胃を迷惑がらすに止まるのである、　そこで一つ道樂を擴張して鷄を畜ふことにした、今の所種類は名古屋コーチン、褐色レグホーン、アンダルシヤン、黑色シノルカ、黑色レグホーンの五種で、黑色ミノルカの卵は一個二十五匁以上のがある、飼育するには、一坪の地所に三羽位の割で、日當りのよい所に置き、別に運動場があれば至極よろしい、一年中梅雨の候に病鷄の多いのは、　雨の爲に土地が濕潤して充分の運動が出來ぬからである、　食料は魚のアラ、、腸なども一しよに釜の中で煮つめ、下等なスープをつくり、　麥の搗いた小さい碎けたもの（即ち麥の麩袋）それに糠、菜の刻んだのを交ぜて食はせ、　間食には小麥、米の掃寄せ、小米等で、寐る前には胃一ぱいに食はすやうにせねばならぬ、卵を生み初めて罷めた時などは、小量の唐辛か燒酎を興奮劑として與へるやうにして居る、そこでこれは私の慰み半分であるが、三百羽も飼へば、通常の人の生活は出來るであらうと思ふ、

學者の見識

◎その二日　午後四時文學博士那珂通世君を訪うた、刺を通ずると、先生奧から飛んで出で、奧は取込んで居るから、話はこゝで承らうかと、云はるゝのが、いかにさも取込のありさうであるから、匆々、お暇申した、この有様で思ひだしたのは此春、鳥居龍藏君の送別會の時の事であつた、君が蒙古談に就ての雜話があつたので、

榎本子爵は、君に蒙古語は誰にお學びになつたかといふ質問、君は獨りで覺えたといふ、子爵は獨りで覺える筈はない、誰か師匠があるであらう、と問直すと、君は譯書を見ても解る、と無愛嬌に云つた實にその媚びぬ所が、君の玄關に複寫されて、更に一つの裝飾もない、實に氣骨ある學者とは見えるが、これで自轉車を乘廻はすハイカラ博士であるから不思議である、

物の眞相

◎その三日　午後一時福岡秀猪君を訪問し、約半日の雜話があつて、學校の評判談に移つた、君は曰く、視學が學校を巡觀するのを見て居ると、豫め學校へ通知して置くか、突然なれば、名刺が玄關から巾を利かして居るから、學校では改まつた、不自然な教授振を見せる、生徒は固くなつて、流石にその時

ばかりは、あまり行儀の惡いものはない、そんなものを見て、何で學校の樣子が解るであらうか、塀の穴からでも、教場の窓からでも見るか、左もなくば何の誰やら解らぬ位にして參觀したのでなければ、その平生を知ることは出來ぬ、そこで自分の奉職せる外國語學校などでは、態と教場を外から覗かれるやうにしてある、

實に君の説の通りで、あまり近よりたる觀察や、さりとては遠くに評判位を聞いたのでは、物の價値を知り得られるものではない、であるから兎角に教育家からも意外な襤褸が出るのである、

能書なしの家庭

◎その四日　午前八時地震學で有名なる理學博士大森房吉君を訪うて、家庭談を叩いた、

私に家庭談は恐入つた、それは教育家の方に廻して貰いたい、女子と云ふ事に就て考へた事もなければ、家庭について心配したこともない地震の話なら、叩けば幾らでも出るが、それは困つた、

これは誰でもの言草と違つて、蒼蝿くていも、氣取つたのでもないのが、温厚なる君の顔に證明せられて、一時間ばかりの雜談中に映したる家庭、なるほど和氣に滿され、これが當然たる趣見えて、改めて家庭談のない所に奥床みを感じた、遠からず本誌に於て、君の科學談を掲ぐるやうになるであらう、實に學者臭くない學者であるに感じたのである、

五分で二百圓

◎その五日　この日電話交換手五名判任官に出世をした、その一人は長倉とみ子とて、予の和歌の門人で、交換局出勤の餘暇淺草待乳山下より二里餘の道を徒歩で、通學したが、品行其他に於て多少見るべき所がある、その談話の一節を紹介しやう、

浪花交換局管内には、蠣賣町、兜町などいふ、電話の最も頻繁にかゝる所が固つて在りますから、隨分繋ぎ切れぬ位忙がしい事があります、そこでお前たちが五分間繋ぎやうが遲いから、二百圓損したなといふやうな小言さへ聞くことがあります、

その五分間にても、もし東京に於ける電話とその事實とを映じ出さば、社會の百面は遺憾なく現はるゝであらう、さるにてもこの文明的職業に従事する女子の長倉子らの如きは稀にて、自重心薄きものゝ多きは、甚喜ばしからぬ事である、

煩悶の無價値

◎その六日午前十一時旭銀行の支配人で、東洋女藝學校の校長たる高橋菊太郎君を訪ふ、昨日は袴、今日は前垂、されど敎育の事が念頭に離れぬと見え、

私は女鑑が一字も不潔の文字がないので、當代の



珍として、學生にも皆讀まし、女鑑の論說は、時々敎場で借用して居ります、却說近來は煩悶といふ事が流行して、學生の中で人生不如意を難ずるものが少くないと云ふ事でありますから私は人生は意の如くなるものである、されどそれには成るやうにせねばならぬ第一自分に瑾があると思へば、玉になるやう勵んで磨くであらうが、自分を玉として居るから、兎もすれば瑾がつくやうに思うて、價のない煩悶をして居る、煩悶は怠惰から來

雜錄

るものであるから、勉强に忙かしくて煩悶などいふ事は、思ひも出さぬやうにするがよいと諭しましたが何とさうではありませんか、

予曰く實に其通りで、下らぬ事を煩悶して無用の人となるのは、社會の粟を食倒したもので、あはれむべきより、寧ろ憎むべきである、

女子敎育に就て

◎その七日　午前八時子爵秋元興朝君を訪ふ、君は多方面に趣味を有てる、話の多い方で、いつでも君の邸へさへ行けば、話の材料は恰も沸く如くに感じられる、人を見て法を説くといふ如く、君は女子談をせられた、

日本の女子に對しての考は、支那主義にて、之に依り、之に親むべからずとして、女は男の目から見て、極めて價値の乏しいものとしたのである、藤原氏時代德川氏時代を除くの外は、大方軍ばかりであつたから、必要上男に勢力があつて、女子には大は一國の政治上、小は一家の經濟上の事に至るまで、關係せしめぬのであつた、それでも困るが近時のやうに、女子が巾を利かし過ぎても困る、敎育はいつも中庸を得るやうにしたいものであるが、兎角に夫が得られぬは、まだ女子敎育が進歩しないからである

月の模樣

◎その八日　午後一時半東銀行常務取締役池谷徹君を訪ふ、君は垂壞の保險會社を引受け、東京中脫利の勸誘家二百名を富士見樓に招待し、一場の演説にこの多人數を買收し、一年に滿たずして利益ある大會社としたる才物である、君の雜話中に、

月の模樣は、地球の映じたものである、であるから、日本で月の模樣を見れば、日本を中心としたる世界半分の地圖が映り、英吉利で見れば、英吉利を中心として世界の圖が模樣となつて居る、

いつか海事工業家山科禮藏君より、これと同じ意見を聞き、めづらしき事に思うて本誌に掲げたが、池谷君のは各國に於て見た實驗談に、佛典の一節を以て、それを證明したるなどは念の入つた事で、所

閑話の種に記述して置かう、

一人は利足

◎その九日　午後九時法學博士寺尾亨君を訪問した君の家庭談はなか〳〵面白い

どうしても人は子供を三人育てねばならぬ、自分等夫婦の數と、これに一人は利足をつけるのである、それで自分は一人も實子はないが、貰ひ子をして三人、去年も一人貰い、其外子とはせぬが、絶えず他人の子を世話して居る、なか〳〵子供を育てるといふことは、むつかしいもので、それが三四人もあれば、女は充分廻り切れぬほどの仕事がある、であるから外へ飛出して社交界に奔走するなど〻云ふことは、まづわれ〳〵の家では出來ぬ、耻を云はねば理が解からぬが、自分の親戚に甲の會乙と會と云うて、盛んに奔走する妻がある、事のないうちは默つて見て居つたが、その中子供に一人申分あるのが出來たから、國家の爲もよいが、一家がこれでは仕方がないではないかと詰責して、それから外交を中止し、家庭の中心となつて注意せしめるやうにしたから、申分のある子を何うにか申分のない所まで物にしたそれで自分の家に、彼へ出よ、此へ出でよと、引張り出しに來るものがあるが、イヤハヤ恐れ入つたのが多いので、すべて御免蒙つて居る、

實に君の話は穿ち得たもので、自分の頭上の蠅さへ覺束ないのが、兎角國家や社會をふりまはして、夫の汗水を、虛榮心に入揚げるなどは實に苦々しいことである、

品格は職業に關係なし

◎その十日　夕刻戸根愛子君に逢ふ、君は即ち新橋の髪結お愛さんである、その心事の美は近時諸新聞雜誌で傳へられたが、予は十年以前拱手時代からの舊識で、その事實の確かなることを證明することが出來る、

予は時々君を途上に於て見るに、いつも世の中を油斷せずに渡つて居ることが、腦裡に浸入るやうに映ずる、而もいつもにこやかに、その職業を樂んで

普通の勞働者に超然たる所がある、君は失禮ながら髮結としては、身を過り易き美人に生れて居る、併し君に敬服するのは、貞操の點である、その貞操の美は、藝妓に於ける靜御前を推選すると同時に、髮結にはお愛さんあることを推選したい、

予はそれより君の家を訪ふ、あまり狹しといふ家にはあらねど、家族十三人、和氣に滿され、殊に感じたるは君が職業に忙がしく、家事に暇のないので一人の子供には乳母をつけ、教育に拔目なきやうにし、聞けば今一人のは、妹なる人に預けて大森の別莊に置き、そこから學校に通はして居るとの事である、髮結さんが別莊をつくつて、俗塵をさけたる所に亡夫の紀念を教育するなどは、甚だ快心なる事どもである、

かくて談話すること一時間、翌日の髮をとて賴みに來るもの二十餘人を算したが、君は咄嗟の間に時刻を定めて、それ〳〵挨拶したるが、その腦の明斷なる驚くの外はない、

その翌日日東通信の栗岩君來訪し、誰か人格の高き、エラキ人あれば紹介しくれとの事で、予は直に愛子君を紹可したことであつた、

人氣といふもの

◎その十一日　午前十一時、東京控訴院に檢事松本重敏君を訪ひ、君の裁判談を聞いた、

人氣といふものは面白いもので、時三郎事件などは、殺人犯として別に珍らしい事はない、慘酷の點も通例である、予の關係した事件で、西條淺次郎と云ふ男が、小石川柳町の藥屋に忍入り折ふし臥せる八人にコロヽホルムを嗅がせ、死人同樣にして、金品を盜ひ、酒をあほり、飯をくひ、立退く際放火して家とゝもに八人を黑焼にした事がある、この犯人放火八十ヶ所に及び、捕れて豫審中東京地方裁判所を逃出し、その足でツイ日の前の内幸町にて放火竊盜を働き靜岡に逃亡し、遂に昨年死刑となつたが、世の中にこれ以上慘酷な惡黨があらうか、然も時三郎の十分の一の人氣もなかつた、かゝることにも人氣の有無があるかと思ふと、其奇異に感じられる、

人氣の當にならぬことの一例として頗る面白く感じた、景氣、評判、すべてその圏内に入るべきものである、故に世に立つては、人氣、景氣、評判など

に醉はされて、自分を無視してはならぬ、實に世の中には眉毛に唾をつけてかゝらねばならぬことに滿されて居るのである、

音樂家の屑

◎その十二日　午後六時女子音樂學校長山田源一郎君を訪ふ、折ふし北村季晴君も來會せられて、種々音樂談があつた、山田君は曰く、

音樂家には兎角毛ぎらひがあつて困る、何か催したいと思ふても、甲の人が出るのならば、乙から御免蒙られ、乙が出れば丙は苦情を持出すといふ風になつて、誠に大同團結することがむつかしい、そして音樂學校の側でも、甲に許して乙に許さぬといふことがある、

北村君曰く、折角歌舞伎座に於て文士劇を演じらるゝ如き機會があつてゝ、それに出ても音樂學校ではやかましく云ふ、何の爲に音樂を敎へるのか解らぬ、

予曰く、音樂は人の心をひねくらせる爲でも、劇場に耻をさらす爲でもない、音樂を演ずるは、心を優雅にし、如上の如き消息を洩らさぬにある、然るに音樂によつて近時甚しく風儀を紊されて居るのは敎へる目的も、習ふ目的も、卑劣の心が主となつて居るのが多いからである、樂器曰く、我より鄭聲を發せしむるのは、我にあらずして、人であらうと、實にそれに相違ない、

旅行中の服裝

◎その十三日　男爵徳川厚君を訪うて、例の寫眞談より服裝談に及ぶ、

日本人が日本の服裝をするのは當然の事で、至極よろしいが、旅行などの時は、何か服裝を工夫せねばなるまい、滊車滊船などでは、永い道中眠ることもあらう、その時婦人の衣服がしだらなくなり、それに髪が亂れかゝつて居る所などは、あまり見よきものでない、慌てゝ襟かき合すといふ如きことのなきやうな服裝と、旅行中は略服で大底は濟まされるといふことにしたいものである、

貧士の春仕度

◎その十四日　午後四時俳諧の名人齋藤松洲君を訪ふ、折ふし星野麥人君來會、短冊色紙に揮毫をせまる所であつた、予は他の提灯で道を照らすべく、その一枚を申受けて、艶麗なる圖をと注文し、梅に鶯を描かれて、それに君が意匠の當用日記を添へてくれた、それで新春の仕度中二品揃ひたり、三つならでは數わるしと御幣を擔ぎつゝ歸れば、職業學校の金子教授より、新年のにと美しき造花を贈られた所であつた、數わるしとて二つを一つにせぬ所などは、我ながらその慾の深からぬに感服した、

軟骨と演劇

◎その十五日　午前十時伯爵柳原義光君を訪ふ、某伯來會、文藝談は例になく花が咲きて、近時の女學校問題に及んだ、某伯曰く、

女學校の本領は運動會や遊戲會にあるのかしらぬが、大仕掛にして、かゝる時のみ人を集めて盛んにそれを見せて居る、少しは門戸を開放して、學藝の教授振でも見せた方が宜からう、實に本末を過つた事をするものである、

暗に某女學校が人の子を驕奢に導くことを憤慨せられた、柳原伯は女子大學に演劇の催されたのを賛成者の一人であるから、一場の議論が始まつた、併し予は今日の如き學生の骨次第に軟らかくなり行ける時、學校に於て演劇の催さるゝなどはよろしくない事として、當分柳原伯の說に理あるを信じて、而もそれに贊成することは出來ぬ、

女子の參政權に就て

◎その十六日　午後五時柳澤伯を訪問したる歸途、電車中高木益太郎君に逢うた、君は予に向つて、

近來女子に參政權を得たしなど騷いで居るものがあるが、君等の意見はどうであるかと云ふ問題を提出せられた、

予は、女子が赤い襦袢を著、白粉を塗り、髮を結び、手に指環あるを誇り、電車に席を讓つて貰いたき間は、まづ出來ぬ相談である、又それほどにせずとも、女子にとて限られた仕事でも、今の所では、

之を全くして居るものは少いと思ふ、故に斯の如き主唱は、女子以下の男によつて始まつたことであらうと答へた、

過度時代を振廻はすこと

◎その十七日　午前八時理學博士田中正平君を訪問した、折ふし君は衣服を更めて外出する所であつたが、今一時間位はよろしいといふので上り込み、夫から九段まで電車に同乗し、途中演劇談があつた、

近來少し藝が出來るといふので、芝居もやれば、音樂をやると云ふことが流行して居るが、それは樂みの一つであつて、美術的ではない、たゞ此人にして此藝が出來る位なことをして喜んで居るのは、寧ろ美術の發達を妨げるものである、すべて不自然なのは藝の末で、女が義太夫で辨慶上使を語つたり、女が劇を演じて、股をひろげ、胸の所に握り拳を擁へるなどは、見て不快の感を起さずには居られない、それから近來過度時代といふことを振舞はして、兎角生煮を食はされるがこれには閉口せざるを得ない

君の說の如く過度時代を振廻す、生煮物が多く、その生煮中の人となつて居るのは、實に氣の毒なものである、

家事と歌文

◎その十八日　午後二時阿部夫人優子君を訪問して君の家事實驗談を徵した、君は曰く、

もし雜誌にでも書いて下さるのなら、慾い家事談などいふものより、私ども家事の餘暇に樂まれる文や歌のおもしろいのを出していたゞきたい、それに私どもは、その任ではない、それに家事に關してはその境遇によつて色々でありますから、あまり整頓したことでも、又あまり簡略に過ぎた事でも、見る人によつては益にもなり、不利益にもなります、常識を養うてさへ置けば、それでその時次第に家事は治められるものでありますから、精神の修養になるやうな論說、精神の娛樂になるやうな歌文を、專ら掲載していたゞきたいと思ひます、

予は君の說を極めて理由あるものと信ずる、然も

粥を焦す如き家庭も少からねば、まづ歌文よりは臺所に重きを置かねばならぬ、さるにても家事のよく治まつて、歌文を談ずる餘裕ある同家の如きは、甚羨ましき事である、

職業に於ける特色

◎その十九日　夕刻靑木成子君を訪ふ、君は舊友靑木偃橋といふ畫家の令孃である、昨年獨立寫眞業を創め、その評判が近時の東京諸新聞に現はれたので、始めて十年以前の幼女の面影を偲んだ次第である、偶然にも戸根長倉の如き知れる人の頻々新聞紙に歌はるゝに、これも如何に成切せるかとて訪問したのである、佐山綠子といへる人と共同にて營業して居るのであるが、これはまたあまりに不整頓で、新聞の噂の甚だ當にならぬに驚いた、併しその日を女ながら腕一つで過せるは事實で、その嚴君とは舊友の關係もあれば、その日の土産として予は一策を呈した、

寫眞を撮ることを面倒がるのは、多くはすぐにその撮り工合を見ることが出來ぬからである、何時でも間に合ふ顏を、一週二週後れたればとて差支ない筈であるが、それが人情で、百枚の名刺はいかに盛んに用うる人でも一月はある、されど名刺を誂へて、一週間かゝられねば出來ぬといふので不自由する人が多い、それで三十分で出來ますといふ名刺屋が近頃出來たが非常に繁昌する、寫眞もその日に寫せば、翌日は天氣次第で出來、プロマイトなれば、その夜にでも出來る、それで當分現像の數の少い爲に、現像液を無駄にすることもあらうが、次第にそれが順よくなつて、今日撮つて翌日寫眞が出來ることになれば、夫で優に一特色として繁昌する樣になるであらう、都合のよき時に仕上げをするといふことは、その日に現像し、修正し、翌日燒付けるといふよりは困難であらうが、馴れてはその方が順序よくなりそれが一特色といふことになるのであるから、多少の困難はあつてもそれに打勝たねばならぬ、

そこで仕事に就いての役割はと聞けば、一人は外

出、一人は内勤・人數はそれ切であるから、遊び半分にはなつても、職業としては價がない、予は更にかよわき婦人の營業であるからといふて同情を求むる如きは、甚だ卑しむべきことで、さなきだに職業に就いては、世間は兎角の惡聲を放ちたがる者なれば、一層注意して少くも本氣でやつて居る如く見ゆるやうにせねばならぬ、と忠告した事であつた、

本氣で働き本氣で遊べ

◎その二十日　夜八時法學博士江木衷君を訪ふ、例に依つて抔盤繁き應接所、即ち酒間に導かれた、君が夜間の應接所は常にそれである、君は謠ひ、令夫人は舞ひ、かくて一日の勞を慰め、併せて來訪者が一日の勞をも忘れしめるのである



君は曰く、今年の高等文官試驗に及第したものは、盛んに拙宅にウヰスキーを飲みに來た連中で、一人中途で江木の家へ行けば勉强の妨げとなると云ふので來なかつたのが落第して、あと九人は悉く及第し、それ等でウヰスキー會をつくり去る十一月廿

日星ヶ岡茶寮で、我輩夫婦を招待された珍談がある、何でも遊ぶ時に責任を以て面白く遊ぶほどでなければ、勉強する時もだらしがない、

予は時にとつて甚愉快に感じた、而してウキスキーは極端なる一例であらうが、働いて居るかと見れば遊んで居る、遊んで居るかと見れば、さうでもないと云ふ如き、所謂宙ぶらりと云ふのが、多く人間の屑となつて終るやうである、

料理は日本作法は西洋

◎その廿一日　夜五時日比翁助君より招かれて、新橋花月樓に開かれたる、君が歸朝の祝宴に列した、

君は三越呉服店の大番頭たるに似ず、極めて質素の服裝で、西洋の匂ひなど少しも振まかぬ所、尤も我意を得たものである、

料理は日本式で、しかも西洋流に二三品づゝ順次に取かへて、たゞ見るのみの馳走を飾り、又殘骸を膳頭に溜く等の事をせず、一定の時間に達せば、飯を出し、客は同じく歡をつくして、同じ刻限に歸り行くといふのである、斯の如きことは疾くより始められた事であるが、この夜の如く調子よく行つたのはない、兎角宴會には初め靜肅、後混亂、就中醜體を演ずるものもあるが、すべてこの方寸に行きたいと思ふた、

不見識な學問

◎その廿二日　午前九時樺山愛輔君を訪問した、君は樺山大將の令嗣で、多年英國に留學せられ、優に英文學者として誇るに足るべき人である、然るに其說に曰く、

日本で、小會社や小銀行の社員位が、英語を知らねば恥のやうに思うて、却つて日本の手紙一本滿足に書けぬのがある、殊に看版でも、引札でも、何でもかでも横文字が書いてないと物に成つて居らぬやうに考へて居る、實に輕薄な不見識な話で、世の中が輕薄になるのも、世の人が不見識になるのもそれらから割出されたもので、甚だ苦々しく思ふ、それよりは孔孟の書でも讀んで、人たる性格を硏くこと

が急務である、しかし大に必要を感ずる人は素より別問題で、普通の世渡りに英語の聞かぢりなどは、寧ろ有害で、西洋などでは、決してそんな不見識なことをするものはないのである、

君にしてこの説ある、甚快心の事である、

顏の造作

◎その廿三日　午後三時司法記者懇話會に出席した長谷川控訴院長、花井辯護士、呉博士等、無慮五十餘名參會し、餘興として、極めて風變りに、石龍子の骨相觀、西川某氏の催眠術があつた、

石龍子は骨相で名高いが、初めは誰も見て貰ふものがない、そのうち一人、二人と段々見て貰ふに從つて、初めは横柄に我輩もなど云ふてその前に行くが、觀て仕舞ふと、よく合ひましたと頭を下げる、忽ち評判よくなつて我も〳〵と先を爭ふやうになつた、その前に行くと男三郎を取しらべた清水檢事の如きも、殆んど勝手放題に、顏の造作を批評せられ、少くも恐れ入つたらしかつた、

隣席の呉博士は、隨分薄氣味のわるいものである併し大勢の中であるから、よく云ふてもらはねば困る、然るに法官に辯護士、新聞雜誌記者といふ、少くも一癖あるのを觀るのであるから、觀榮がする、なか〳〵英語や、新熟語を使うて、一見愚なる如き顏から警句を出すのである、さし障りのない予の骨相觀は斯うである、

君は耳が一番で、その次は鼻である、隨分華美に世を渡つて行く相がある、併し腰に申分がある、どうも氣が多い、兎角あれにもこれにも手を出し、轉宅などは無造作にやつてのける風がある、目の下からは癇癖が噴出しさうで、極めて氣の短かい方である、眼より眉にかけて、一旦物に怒つても穩かにそれを濟すといふ影がある、ただ見たところでは一點の苦勞もなく、極めて平和の相を示して居るが、數年苦勞した證蹟を偲ぶ事が出來る、されど顏全體に亙つて開花の趣があるから、その證蹟のそれに打けさるる時は、大に運のひらく時で、勇往邁進する方がよいと云ふのであつた、

なか〳〵云ふことに念が入つて居る、或人は云はく、これが惡くのみ言はれたのならば、まさか日記帖にも記すまい、予曰く實にその通りである、

人ごゝろ

◉その廿四日　午後一時松平直亮伯を訪ふ、その邸の下にて圖らず、二葉幼稚園の看板を見、つゞいて廣やかなる庭園に幼兒の嬉遊するを見て、一時間ばかり參觀を乞ふべく刺を通じた、

この幼稚園は實に我理想に合したもので、貧民兒一百餘名を收容して居る、同園は華族女學校幼稚園の敎授として有名なる野口幽香子君の苦心經營に成るものである、履物の如きは園より與へたもので、合計五組、その一組づゝは同じ物を誰彼の差別なく履かし、湯も土曜日にはわかして一々入浴せしめるその入浴談には耳を傾ける價がある、

此邊の子供はめつたにお湯にもはいらず、不潔不衛生極まつて居りますので、衛生上お湯に入れてやるのも必要ですが、又清潔を愛する心を養ふのも、最大切な事と思ひまして、浴場も建てました、水道を引きまして、給水料は四分の一に減じて戴きましたので、誠に結構でございますが、たく事が今では六時からたけば九時にわきます、さてお湯に入れるのにどうしたらよいかと、だん〳〵考へまして、親を徵發する事になりました、なか〳〵好意で來てくれまして、毎回三人ときめまして、其前日に札（此札をあげたらおゆのてつだいにきてくださいとかいたもの）を子供にもたせてかへしますとちやんと參ります、そして一組廿人の内眼の惡い者をあとへまはして、十二三より十六七人位一度に入れます、あとで親自分もはいりまして、湯殿の掃除からおまけに廊下迄ふいて歸つて行きます、皆喜んで、それはいゝ心持に働いてくれます、最初お金をやらうと申し、御飯でも御馳走しやうとも申合せましたが、何しろ忙しい中であるから、お金を拾錢づゝ包んでやりましたのに、どうしても取りません、逃げる樣にして受け取りませんでした、隨分美しいぢやございませんか、人の物でもひつたくる樣かと思へば、どう致してこちらが親切に出れば、あちらも善の方面をむけて、其間にいはれぬうるはしい處があります、併しとう〳〵說諭して此頃では一回拾錢づゝやる事になりました、

寫眞術の利益

◎その廿五日　伯爵正親町實正君を訪ふ、君が寫眞の利益談を叩いた、

私は松平乘長君や、井伊直方君のやうに、熱心にやつて居ることが出來ぬので、利益談といふほどのものもないが、私の目的は、身體の運動と心の樂みにして居る、少し繁忙の頭腦を休めたいと思ふても

唯目的なしでも出られぬから、松島の景色を寫して見たいとか、伊香保の或景色を工夫して見やうとか、既に寫眞機を擔ぎ出す時から愉快、でなか〳〵不潔な心念などは浮んで來ぬ、それであるから、少しは足の疲れるも平氣になつて景色を撰び歩き、知らず識らず、心は淸しくなり、身體は健康になる、まづ利益といへばこんなものであらう、

餘技で身體を健康にし、心思を愉快にせしむる、他にこれ以上の利益はあるまい、予は酒井伯の園藝の如きと共に、殊に就中醉生夢死の評ある貴族間に奬勵して、更に大に活動せんことを望ましく思ふのである、

長所を用ひよ

◎その廿六日　午前八時小川直子君を訪問す、君の家事談を聞かんと思ふたからである、

お尋ねで恐入る、私は家事經濟の事は頗る下手で、何うか斯うか、借金せずにその日を過して居る丈のことである、それは棚橋絢子さんに限る、私の所は歌か文章位で御免蒙りたい、それから道德上の話は三輪田眞佐子さんと云ふやうに、それ〲に長所があります から、その長じた所を見付ければなりません、私は家事談などは大分見當が違うて居ります、いつか貯蓄と云ふ事に就て、塾生に談話をしたことがありましたが、それからは入用の場合にも出し惜みをして、困つた事がありました、なか〳〵その中庸がむつかしいものであります、家事に關しては、斯うもすればと思ふことはありましても、それは疊の上の話で、その方に經驗がないものでありますから、まづ役に立つまいと思ひます、

婦人間では面と向つては互ひに謙讓して居るが、蔭になればそれを嫉んで居るのが多い、然るに君は決して人を惡評せず、その長所々々を吹聽して、自分を敵視して居る人に向つても、更に惡感情を以て居らぬ、この點に於ては、阿部優子君なども、常に噂して其美德を賞讃して居る、

女學生の風紀

◎その廿七日　午前八時文相秘書官赤司鷹一郎君を官邸に訪ひ、女學生風紀問題を提出した、君は曰く

近時女學生の風紀をやかましく云ふが、これは昨今の話ではないまづ學生の數から割合をつけて見ればならぬ、然るに其聲の高くな

つたのは、新聞などで盛んに書き立てるからであつて、書き立てぬ昔決してなかつたのではない、併し何とかその惡弊を根絕したい物であるが、それは容易な事ではない、先頃の訓令は地方に於ては大分利目があるやうであるから、追々注意すればよくならぬ事はあるまい、又女學校などで盛んに演じらる〻やうな餘興問題も、或る一部の學校であるが、それが早いから惡いからうと云うて、文部省から差とめる譯にも行かぬ、或程度までは見て居られねばならぬが、實を申せば我儕等はあまりよい事とは思はぬ、併しわれ〳〵があまり意見をのべて、それが文部省の方針のやうに思はれても困るから、差さわりのない事の外は御免蒙りたい、

製作品と人情

◎その廿八日 午前八時中山幸子君を訪ふ、種々雜話の末、學校の運動會の事に及んだ、

あまり歩き馴れない、東京の學生を、無暗に遠方へ引張つて行くのはよくない、信重（令嗣）なども今年は富士へ行きたい、滿韓旅行がしたいといふ希望であつたが、不用意に大旅行をさせる事はよくないから、箱根へ同伴して、それで得心をさせた、然る處圖らず箱根山中で炭燒の勞苦を目擊し、人の拵へたものは、人情をかけて見ると云ふ學問が出來たそれから稻の穗の實つたのを見せて、これが米になつて人の口に入るまでには、四十八度手を掛けねばならぬ、故に物を麁末にしてはならぬと云ふ觀念を起させた、これは物品の上にばかりでなく、時間の如きは殊更に大切に使はねばならぬなど〻語り聞かせる機會を得たのであつた、

君の語らる〻所甚だ味ふべきものがある、如何に幼兒は無邪氣がよければとて、世間の辛酸の少しをも味はしめぬは、その兒をして遂に愚物たらしむるものである、

言實相伴ふ

◎その廿九日 午前八時安達安子君を訪ふ、例の京都式辯で、時々あなた樣をはさんで、徐々に氣焔を擧げられた、

近頃の女學校の教育を受けた人は、英語も出來れば、科學も出來る、これから旅順まで幾里かと云へば、パチ〳〵と算盤をはじいて、何哩、これを三十

六町一里にすると何里何町になると云ふ工合に、中々わざやかなものである、しかし女子の職分といふことに對しては、どうも缺けて居るやうに思ふのが多く、隨分エライ女教育家でも、甚だ貞操のあやしいのがある、私は子供を教育するにはその點に於て注意したつもりで、三人の娘を嫁入させた條件は、姑小姑等の少くも八人や十人はある家で、しかも貧乏なと云ふ位のがよい、それを苦情なく仕上げる程のでなくば、安達の娘として育てた甲斐がない、面倒な家ほど働き榮がするのであるから、その積りで緣を求め、どうにか斯うにか目的通りに行つたのである、

一人は失念したが、一人は石本前陸軍次官夫人で、一人は櫻井機關大監夫人として、いづれも内助の功によつて、今日あるを致したのである、斯くまで言が實と伴ふといふに至つて、初めて君は女子教育として、重きを成される所以を明かにする事が出來る、

末わるし

◎その三十日　午前東伏見宮、伏見宮、北白川宮、閑院宮、梨本宮の諸邸に參邸し、御近狀をうかがひ奉り、東伏見宮邸にては美事なる御菓子をさへ戴いた、午後　皇孫殿下仮御殿に丸尾御教育主任に面謁し、面謁所を拜觀し、それより毛利公爵邸を訪ひ、廣やかなる邸園の冬景色を賞觀するを得た、

歸途は電車にて一走りといふ所を、薄穢い辻車夫にせまられ、鐵砲洲までの價はといへば、二十錢といふ、頗る廉なり、されどあまりに見苦しき車に、老さらばひたる車夫なれば、乘らぬつもりにて、出來ぬ相談の十二錢に負けよと云つた、すると宜しいと二つ返事で乘せたのはよいが、二足三足ひき出すと、且那鐵砲洲と云ふ所は知りませぬから、二錢だけまけますから、車上で敎へてくれと云はれたのには閉口して、いよ〳〵乘つて居る勇氣なく、十二錢投出して、そこから電車に乘つた、予は程なく我家に歸つて、夕餉の膳にこの事を語り出でたが、彼は今頃如何なる客を迎えて居るか、



元旦の記

東京　神田けい子

年立つ朝こそ又なくめたできものなれ。戶每に立てならべたる日の御旗の朝風にひるがへりたる、門の松竹のうら〳〵と昇る初日にかゞやきあへるめでたさは何時の朝がかゝらむ。都大路は各門每に注連引張りて松たてゝ、年賀の客絶えず行きかへり、走る車かけ來る馬轍の音、蹄の音打交りてものさわがしく、少女はつき交す羽子に餘念なく男兒は空飛ぶ凧に時の移るも覺えず、ゆたけき御代の姿、こゝ彼處に滿々たり、曉告ぐる鷄の聲に驚かされて起き出づれは、程なう東の空白み渡りて、見渡す品海の波もおだやかに、やがてもかゝやき出づる初日の影の長閑けさ何時の折にかかゝらむ。昨夜迄あわてまどひて縫ひつくろひし晴衣のどやかに打着て、人々集まりて例の祝ごとしたる、誰かは心より嬉しからさらむ。初ずりの新聞見る程、知人數多年賀にきましつ。晝過ぐる迄いと賑はし。吾は友の誘ひにおはしたるまゝ、打つれて師の君許行きて、加留多の群に入る。夕さりかへりて夜は再家の人々と加留多に興じつゝ、噫めでたき年の始や、あはれ一年の計は元旦にありとかや。例の繰り言なれど、今年こそ心して學はじや

評　さるにさう歌留多にふけり玉ひては

元日朝

播磨　横田春江

百八の鐘の響に年新まりぬれば、事の始にも若水汲むなる釣瓶の音も、いと静に聞え、灯火明るき神のみ前も、けさはわけておごそかに拜されて目出度く物の種々飾り立てたる大廣間に屠蘇の香ゆかしく、雑煮のかをりたかく和氣みち渡る團欒のまとゐに、たがひに目出度き言云ひ交ふる折しもあかつき告る鷄の聲に、明けそむる元旦の空、一點の雲もなくて、軒端に歌ふ雀の聲ほがらかに聞え、新らしき障子にうつる老松の描きしやうなるに、とびくる小鳥の姿さへ長閑に見えて、福壽草のあたり、げに春らしき心地ぞすなる、

初雪の朝　（十一月某日々記の一節）

能登　粟倉菫子

『馬鹿にゆふべは寒かッたのも道理だ、此麼に白い物が降ッたんだもの』と、障子の外に兄様の御聲がしたので、私は未だ床の中にいたがさては雪が降つたんだらうかと思ひながら起きて椽側へ出た『まア綺麗だこと!!!』といきなりかう叫んで兄様に笑われた併し其時は是れより外の言葉は出なかつたのである、見渡す限り山も田も畑も一面に白くなつて、枯木は皆んな同じい花を咲かせてゐる所なんか、何んとも形容の出來ない程美しい景色である。自分は丁度パノラマでも見る樣にうツとりとしてゐたのを、『歌も出來ない、見物はあと廻しにして、早う顔を洗うておいで』と、お人の惡い兄様に肩を打たれて始めて我にかへツた。勝手の方へ行くと、二三人の下男共が『まだ大根も取らんし人參も掘らにやならんに今からかう冬がきては困ッちまうなア』など、話しながら焚き火にあたつてゐる、自分の樣な遊んでゐる者と仕事をする者との初雪の感がこれだけ違ふのかとつく〴〵感じた。優しい下女がお湯を汲んで呉れたので、冷たい思ひもせずに手水をつかッた。今迄こゝに居た飼犬の『チヨン』が見えんと思ふ間もなく、けたゝましう門前に吼えたので吃驚して出て見ると、三十前後の見知らん男が羊羹色の洋服に七ツ下りの臺灣帽子冠つて、時代附きのづゝくのかばんを携へながら這入ッて來たのであッた、何處の何君だらうと心中いぶかりながら、元關に兩手を仕へ『どなた樣でございます』とうや〳〵しく頭を下ぐれば、豈計らんや、長

いく前口上のあとは千金丹のたし取りとわかッた、何のことやら朝飯前から縁起でもない。

松の枝白砂糖かけてうまそうな

是は六才になる弟の今朝の句だそうな。

新しき蓆（みそかと元旦との日記）

越後　松永しげ子

三十一日

五つ六つ咲きたる梅を室より取り出でゝ床の間に据ゑられ、新しき莚もしかれたり妹弟等は洗濯着をきつゝ、いつになくさわぎ合へば吾ながら歳暮の思ひぞする、

朝よりの母上おのれらの働きにより今日の料理もなしはてたり父上は神の御前へそれ／＼のそなへ物なし給ふを、弟は天神様にと蜜柑乞ひてかざる日もまたく暮れにけり、いざよと湯に入り垢を落せばさすがに心地よう、はぢらひつゝ鏡に向へば、頰の塵は落ちたれど、日にやけし銅色は落つべくもあらねど、これ反つておのれのほこりとする所、姿しらずほゝゑめばうつりし姿も一入嬉しげなり、

燭火はらからを照す膳の上は畑の物海の物あるは山の物堆ういつれかと目うつりす、父は酒めしあがらる妹弟は心地よげに笑ひたのしみて箸をとる……次ぎて妾も母も父も、

やがて終れば爐邊のまどゐ、いくつなど問はれしもはづかしされど去年よりは機の音もなだらかに、運ぶ針の目もめでたしよとほめられしは吾ながら嬉しきかよろしかるべき口もあらば嫁ぐ可しとの父上の言葉いとはづかしう頰のあたりいたく熱しぬ、かたへの母上口さし入れ給ひて、なほ早し裁縫料理の道をだに覚えずばと姿をさとし給ふも嬉し夜もいたくふけぬ、されば歓樂つきれどいざよと美しの夢を見むとやがて定めの床の中に入る、されどおのれの思ひはこしかた行末をかけめぐる、花の都には百里もかけ隔つこの越路しかも草深き農家に生ひ立ちし妾が身の春またうら若う薄氷のはる田に下り立ちてすき取り、夏はくろがねもとけむ許りの暑さにも畑に立ちて草を取る、秋霜しげきあしたもとくおき、夕風寒う澄みたる月かげをふみてかへる、冬は雪深き窓にて終日糸をくり機をおる、思へばつらしとはたま／＼の思ひ出、されど亦樂しみなくてやは、それ雪の荒野の狐の聲、落葉しげき夜半の雁の音、何れもあはれなれ、霞がくれになく鶯の初音雲雀にはたれしも耳を傾けざるはなく、さはれ春の花秋の虫、心なき鶯さへ友なり、さるにても温き父母のなさけにあびて嬉しくも、亦一年を過したるは、實に喜しき極みにこそ、まして開けゆく御代の有りがたさ、賤の女の吾等まで、文まなび歌など詠じて、心なぐさむる窓のうちは、げにこよなきたのしみなれと、はてしもなく思ひはめぐる、百八の鐘の響打ちたえて、室より取り出したる梅の香、いと高う通ひ來て、さながら吾は天國に在るおもひをぞなしぬる、

元旦

龍銅の鶴に水あぶせ、餌などやりて初日のさしたる丸窓に掛けやれば、いと心地よげにまひてなく、心からにや、一夜明けし許りなるを、そは／＼せし心もいつしか靜かにして、何となく昨日にかはりたる天地のさま、朝めし終りたるも、はや二時程のさき父上は親戚へほきごとに、弟は學校へ、妹は隣間のあたりにて歌留うるはしう羽根つく、母上は客の應接、妾は一年の計をなさばやと部屋へぞ入る、年毎に企圖せし事おほかれど、春の夢短く、時間なさ、やがては秋の紅葉、花よりもと賞するに、峯のおろし身にしみ、白雪四方を埋め、為す事少くて年もくれぬ、幾度か今年こそは來む年こそはと思ひ定むれど、歳の暮には同じなげきなり

さはい　年の内になすべき業の表を記し終れば、初日もいたく昇り、道行く人々の歡樂の聲手にとる如、學校にても式や始まりけむ、君が代の歌聲清う流れて、心進むまゝに、筆とりかきつけたるは腹つゞみの長詩、心つけば梅の香の高きを覺ゆるに、亦しても鳴く鶯の聲

嗚呼たのしきかなめでたきかな四十年の元旦

小説　可憐兒

山口　柳井滋子

お小夜は七ッである、鈴を張つたやうな眼、小じんまりした鼻殊に彼女が生命とも云ふべき、笑へば渦まく笑靨がかう限りもなく可愛らしいのだどんなに怒つた人でも彼女の笑靨を見ては、つい引こまれずには居られない程、彼女の顏は生來の笑ひに適して居るのであるか、どう云ふものか彼女はちつとも笑はぬ、否むしろよく泣く兒である「小夜ちやんお出で鬼ごつこしよう、お手玉取ろう」と他の兒が勸めるのも、かぶりふつて一人離れて見て居る、鎭守のお祭りにも他の兒は美しい着物を着て、お小夜を誘ひに來ても、いやと云ふて行かぬ、淋しい夕暮、柳の蔭に立つたお小夜の姿のどんなに少さいことであろう、

「温飩華の花とお小夜さんの笑顔、滅多に見られたものじやない」里の子守が歌ふて歩くのを聞いて、私は密に其所以を尋ねて見た、

一體子供と云ふものは生來よく笑ふものである喜怒哀樂を尤も眞面目に表はすものは子供であつて嬉しければ笑ひ、悲しければ泣く、何處を尋ねて泣きばかりする兒があろうぞまして女の兒の何事にも愛らしかるべきを、單純な時代、心の滿足以外に望むもの多き天眞の幼兒、そのよく泣く所以のものには、必す基因する處がなくてはならぬ、果してある、聞くも悲慘の極、可憐のお小夜には左の如き悲哀史があるのである、

彼女の父、名は兼吉と云ふて大工なのである、母は田舍に稀れな色白の人で、まだ嫁入らぬ處女時代には村の若者の噂の種であつたが、緣あつて當時村中での稼き手と云はれた兼吉の元へ嫁いだ

時は恰度十八、花ならば盛りの年頃を、初めの中は他の見る眼も羨しい位、二年の後ちにはお小夜と云ふ可愛いゝものまで出來たのであつたが、變るに早い男心は、つい近頃朝鮮とかから歸つたお春と云ふ女と關係して以來、內を外での放蕩三昧、稼いで喰ふ身にはその日の糊口にも困ると云ふ始末、僅かな針仕事も親兒二人を糊するには餘りに苦しかッた、それでも妻は子までである間を何事も因緣と諦めて、わづかにその日を過して行つたのであるが

或夜したゝかに醉つて歸つた兼吉、それでもたまの歸宅を妻は懇ろに慰つたのであつたが、熟柿臭い息を一ふき、ひとしきり邊りを見廻して「コリヤッと喝――一聲」

いくら自分の望を遂げる爲めとは云へ、斯程迄やさしい妻を、一思ひによくも／＼離緣れたものだと人は樣々に云ふた、眞あるにもあらぬ姦通の名の元に、お小夜の母は離緣せられたのであつた

當時四ッのお小夜、母が思ひの何時迄彼れに殘つた事であろう、子故の暗夜を密に垣根ごしに忍んで來たのも幾度であつたろう、使の道々待ち受けては人目を避けて他所ながらの心づくし、引かれひかれて、女心の狹く淺ましさに彼女の母は遂に、狂はしくなつた、

三月……四月あらぬ事口走る樣になつた頃は、お小夜はもう淚を知る人となつて居た、妻を出してお春を入れた兼吉は、何事も女の指圖次第、一日仕事の留守にどんな事があつたとも知らぬ、父の留守に窘めぬかれて幾度、お小夜は生の母戀しく泣いたのであらう、

恰度三年を過ぎた秋の初めであつた、村をはなれて半町餘り、保田川と云ふては人も知る鮎の產出所、夏から秋へ掛けては鮎つりの人の絶え間もない程であるが、流石に秋の夕暮れを、冷たい風に吹かれて堤に立つ人もない頃を、裾もあらはの狂女、水底目掛けて投身つたのを誰も知る人はな

かつた、

こは云ふ迄もなくお小夜の母であつたが翌日保田川の下流木梨に死體の引上げられた時は、平素からやさしくして下さるお隣の婆さまに連れられて、お小夜は行つて見た、永刧歸らぬ母の亡體は冷たき白布に蔽はれて野中の一軒小屋に寢せられてあつた

亂れた髮、凄く笑つた顏、子供心にも悲しくなりて、これが我が母かと、縁しもなき婆さまの胸に顏埋めて泣盡したのであつた、

死體は實家に引とられて懇ろに吊はれたが、それから後を保田川にお小夜の影の見えぬ事は一日もなかつた、枝を垂れた柳の蔭にしよんぼり立つて永しへに千古の波を疊んだ川の流れに、小さな懷舊を繰返すのを、せめてもの心遣りとするのであろう、

斯くして彼女は遂に淋しい兒となつたのである、

貴族院議員 文學士 男爵 千秋季隆君選

和歌兼題 若水

天

新玉のとしの若水汲上げて
にごりなき世をまづあふぐかな
奈良 菅とし子

地

門松のかげもうつりて若水の
きよきはけさの心なりけり
秋田 古瀬りく子

人

何となくすがすがしきは若水の
かゞみに向ふこゝろなりけり
松山 田村多豆子

秀逸

〇〇 長野 北澤千枝子
五十鈴河清きながれの若水を
くみてさゝげん年のはじめに

、、〇 山口 村上操子

にごりなき年のはじめの若水に
むかふこゝろをこゝろともがな

東京　吉岡繼子

、、〇

くみとればひかけうつりてよろづよも
すむべくみゆる年の若水

東京　土田八重子

、、〇

若水をすゞりにくめばことの葉も
花にや咲きてにほふなるらむ

薩摩　松原岑子

、、〇

くみあぐる車のおともあらたなり
としたちかへるけさの若みづ

、〇

としたちてかめにくみとる若水によろづよすまむ影ぞうつれる　東京　高野もと子

〇

ほの〳〵とあくるなきちて若水をくみて祝はむちよのためしに　東京　三ツ橋千代子

〇

わか水を汲むおときよし風井のとしのはしめそゆたけかりける　陸前　前田河千年子

、、、

老が身もわかぞへらむとわか水をくみてよろづの神にさゝげん　陸前　前田河みさを子

〇

けさはとてくむわか水のかゞみにはうつる姿もあらたまりけり　山梨　名取正代子

〇

とくおくて千代の若水汲みそむる今日のこゝろぞ嬉しかりける　越後　岩本よし子

〇

玉まりにくみとるとしの若水にはつひのかけそふみてうつれる　東京　河合清子

〇

あけそめて星影うつるわか水をことしもくみてかみまつりける　東京　五十嵐清子

〇

朝またき星影うつるくるまゐにとしのわかみつくむぞうれしき　東京、松本まつ子

〇

初ひ影うつる若水とくおきてひとよりさきにくまむとぞおもふ　東京　山口琴子

、〇

岸の梅にほひこほれて流るらしいさくみ入れんとしのわかみつ　下野　井上倘子

〇

あたらしき年のはしめのはつひゝき若水くまむちからなりけり　岩代　菅野和子

〇

今こそはめくりくるらしくるま井の春の若みついさやくまなむ　名古屋　木下鶴子

、、、

めてたしとみ井のわか水むすふ手のしつくよりこそ年波はよれ　大坂　木村春江子

、、

紅葉落ちさくら散りたる筒井よりくむもうれしきとしのわか水　越後　松永しげ子

〇

何となうあらたまりつゝ背戸にてゝとしの若水くみてきしかな　伊勢　田中睦子

〇

なか〳〵に麺もけさはわかやきてとしのわか水くみてきしかな　東京　田中千賀子

〇

あたらしき年をむかへてわか水のわかがへりぬる心地こそすれ　和歌山　植木撫子

〇

はつひかけ池のこほりのけさとけて棒かすかたをやとす若みつ　伊豫　益田春子

〇

しつのめがくむ若水も大きみのめくみのつゆのしつくなりけり　陸前　末永寂恵子

みな人のきのふに似ぬは若水をむすふやけさのこゝろなるらむ　陸前　大槻初音子

むすふ手にあまるしつくも匂ふかな千代をことほくけさの若水　宮城　大槻慶子

わか水を汲まゝしものと打出てゝ先つあふき見る富士のかみ山　東京　和田千代子

とくおきてくむ若水にうつりけり空ものとけきみいつのひかり　岡山　小山松枝子

初日かけまたさしいてぬあさまたきくむもうれしきちよの若水　佐賀　尾方綾子

さちあれといのるこゝろを岩清水くみてことほく星のわかみつ　佐賀　尾方やゑ子

うら〳〵と出つる初日の影まちてくむもうれしき千代の若みつ　大坂　福原菫子

若水をくみて老をやかさねらむきのふにかはるこゝちこそすれ　東京　矢竹光子

なさまれる御代のためしはわか水の底あたゝかき心地こそすれ　相模　柚木とよ子

あらたまの年のわか水いく千たひくみあけられし古井なるらん　神奈川　岩谷淺子

むすふ手にあまれるけさの若水はみよのめくみの露とこそしれ　神奈川　中島茂子

あらたまる年のはつ日のかけさしてくむもうれしき千代の若水　東京　青木たま子

わかみつをむすへはまろふ玉まりの雫もたとくおもほゆるかな　東京　加藤桂子

立返へる年のためしとくむ水に松のわか葉のかけそうつれる　伊豫　加藤初子

たちかへるとしの若水くむ袖にかゝるしつくもうれしかりけり　愛知　永井さい子

あらたまの年をいはひてとし老いし翁汲むらんはるのわかみつ　北海道　牧倫子

ゆら〳〵とのほるはつ日に新玉のとしのわか水くみにけるかな　北海道　牧淑子

汲上けてむすへる水に千代やへむ井筒も今朝は注連かさりして　常陸　岡田薫子

谷川もけさよくすみてかきりなきとしのわか水くむそうれしき　東京　牛山紫子

注連はへし庭の井筒のわかみつを汲みつゝあふく初日かけかな　神戸　足立あさ子

若水のきよきか上に咲きそむるうめのかけさへうかふうれしさ　神戸　足立ゑい子

ちりはみな去年にあらひてあたらしくくむ若水にこゝろきよめむ　岐阜　豊田冬子

こそよりもとしあたらしき若水はそこすみてなほ清くもある哉　岐阜　山田ふさ子

賤の女も今日をはれ着の玉たすきわかまつ水にかけうつし見ん　常陸　堀みつ子

あら玉の年のわか水くみあけて御代やすかれとまついはふなり　美濃　曾我みとり子

やまの井をけふ若水に汲みそめてはるをみやことすむ里もかな　磐城　木幡きよ子

初日影まはゆきさとのわかみつをくむや賤女のもすそぬらして　東京　牧野久美枝子

初日かけさし出にけりとくおくてわかみつくみていさ祝はなん　岩代　吉田千佐登子

若水をくまんと女のほゝゑみやつる瓶おもけに愛らしきかな　長野　關谷己子

ヽ○ 君が代もわがよも千代のまつかけもうつかへてむすふ門のわか水　清國　富成　樺子

ヽ○ 若水に映れるかけはふけぬともこゝろはかりは名にあやからむ　土佐　廣江　子

ヽ○ ありあけの月もかよへる清川にすかたうつりしわか水そくむ　秋田　齋藤　たけよ

ヽヽヽ みかは水よるへの水もわきかへるとしなみきよき春のわかみつ　廣島　石田　松子

ヽ○ 世はなれし老のこゝろもわか水にわかかへりたる春やたつらむ　埼玉　横田　政子

○ くみなれし庭の板井のはれつる瓶水のこゝろもはるやたつらん　埼玉　横田　秋子

○ はつひかげのほらぬさきにおきいてゝ老のみもくむけさの若水　秋田　齋藤　とめの子

○ わか水のわかきこゝろにくみあけて千代の影みん庭のいさらゐ　埼玉　横田　やな子

ヽヽヽ 千代までとにごりなき世を祝ひつゝまつ汲みそむるけさの若水　播磨　横田　春枝子

○ 年にますかしらの霜と顔のしはうつして見たり今日のわかみつ　千島　相本　ふみ子

ヽ○ 新玉のとしのひかりのかけそへてくむそうれしきけさのわか水　秋田　長田　せつ子

ヽヽヽ としなみのよりかさなりし老のみもわかやきてくむけさの若水　秋田　細矢　はる子

○ 結ひつるこゝろもことに澄みぬらむとしたちかへる今朝の若水　東京　神田　けい子

○ あたらしくけさくみあくる若水にのとけき年のすかたみえけり　東京　碓井　のぶ子

福井　岩橋　花子

ヽ○ あらたまの年もしつかによる波のみきはに汲むやけさのつか水　松山　上原　のふ子

ヽヽヽ 若水は汲おくれしとおもふかなつれはあさいをする身なれとも　奈良　栗山　高子

○ 老ぬれはをさなこゝろにかへるなりよろこはしけにむすふ若水　秋田　古瀬　惟子

ヽヽヽ 祝ひつゝくむ若みつにきみかよのちとせをまつの影もみるかな　奈良　栗山　俊子

ヽヽ 祝ひつるしめ縄の影うつりけりとしたつけさの井戸のわかみづ　群馬　吉田　露子

○ このつるべ苔むすまてといのりのゝまづつゝかなくゝむや若水　長野　岡田　千穂子

ヽヽヽ つけわたる鳥のやこゑにおきいてゝまつ若水をくみにけるかな　能登　栗倉　董子

ヽヽヽ わか水をむすへはこその夢とけて嬉れしきゑみのうつる朝かな　山梨　風間　千代子

くもりなきみ代のすかたを若水にうつしてあふくはつ日影かな

和歌兼題　雪中梅

天

うぐひすのふる巣は雪にうもれども年のたち枝に匂ふ梅かな　東京　河合　清子

地

歌會いま終へて笛ふく小簾の外にふる雪よそに匂ふ梅かな　下野　井上　倘子

人

秋田　長田せつ子

雪ふりて母などさめんたまづさにそへておくりし梅のひともと

秀逸

山口　村上操子

白雪にうもれてさけとおのか香をけさぬそ梅のみさをなりける

奈良　栗山高子

さき出し梅の匂ひをしみてかゆきも深くはつもらさりけり

埼玉　横田須磨子

梅みんと蒲田のさとにきてみればまた咲やらぬゆきのはつはな

秋田　齋藤とめの

うくひすのなみたのつらゝとけれとも雪のふる枝にほふ梅か香

神奈川　中島茂子

かせさそふ匂ひのなくは雪のうちにさけりと梅を誰かしらまし

神奈川　岩谷逸子

こすゑより春しりそむるものなれや雪のふる枝に梅か香そする

東京　美矢竹光子

雪ふりて白たへにけるうめか枝にかほりゆかしく花さきにける

東京　小林芳子

花のいろは雪のたもとにかくるともいかゝはすへきにほふ梅か香

播磨　横田春枝子

ふる雪にさけるすかたは見えれともたちよる袖にかよふ梅か香

東京　碓井のぶ子

ふりつもる雪にこすゑは見えれともにほひしるけく梅は咲けり

秋田　細矢はる子

あさすゝめこすゑの雪をふり落し梅ほころひてかほりけるかな

東京　神田けい子

降りかゝる雪さへにほふこゝちして咲きこそまされ庭の梅か枝

福井　岩橋花子

うくひすのこゑにぎはしく聞ゆなり雪よりにほふ梅のはつはな

松山　上原のぶ子

しらゆきはふりつもれともわか庭を春にしてさく梅はありけり

松山　田村多豆子

ふる雪のなかより匂ふ梅見れはさくらはよわき花にそありける

秋田　古瀬惟子

咲いてしゆきのふるえのむめの花わかなつむこになられける哉

奈良　栗山俊子

なかめても眺めつきせぬこのけしき梅のはやしにふれるしら雪

東京　加藤桂子

香を送る風のなさけそいのちなれ雪をかたへのうめのはつはな

東京　土田八重子

ふる雪を笠にすかたそくらふやまいづれを花とさすよしもなき

東京　青木たま子

ふるゆきに花は見えれとあさ風のみにしむはかりにほふ梅か香

秋田　古瀬りく子

降ゆきにありと見えれとその原やふせやあたりににほふ梅が香

岩代　吉田ちさと子

うぐひすもまたつけやらぬ雪の中におのが春べとにほふ梅か香

東京　吉岡龜子

ふりつもる雪の白妙きぬにきてたちえのうめはゑみそめにけり
〇　佐賀　尾方やゑ工

木々はみな雪のはなさく庭の面にひときわしろくにほふしら梅
〇　長野　岡田千穂子

香とゝもにゑにうつしなはいかならむ雪のなかなる紅梅のはな
〇　埼玉　横田秋子

降雪はかつ〳〵とけて梅はやしはなもかつ〳〵咲きそめにけり
〇　薩摩　松原岑子

しら梅のはなにまがひてふる雪も香りはかりはうつめさりけり
ゝ〇　濟國　富成梓子

降雪のこゝろのまゝに梅のはなうつまぬ香こそみさをなりけれ
ゝ〇　土佐　廣江子

うくひすのこほれる聲もきかなくに雪にほはして梅咲きにけり
〇　秋田　齋藤たけよ子

まなびやのまとをひらけはふりつもる雪さへにほふ梅の花かせ
ゝゝゝ　埼玉　横田政子

うめみんとおもひし物をさえかへり朝東風ふきて雪こほれきぬ
〇　埼玉　横田やな子

咲くうめのにほひこほしてふりつもるゆきも花なす月の瀬の山
ゝゝゝ　東京　牛山棠子

朝ほらけふりわたしたるしら雪の袖のまがきにうめが香ぞする
ゝ〇　神戸　足立ゑい子

園の梅咲くにまがひて降りつもる雪さへはなの香ににほひけり
〇　神戸　足立あさ子

色まがふ雪にしあれど吹くかぜに香もいちしるき梅のはつはな
〇　岐阜　山田ふさ子

ふりつもるゆきに梢はかくるらんした枝のうめの花ぞにほへる
〇　岐阜　豐田ふゆ子

梅がえにけさふりつもる白ゆきはさながらにほふ花とこそ見れ

〇　大阪　福原董子

ふり積るみゆきに花はうづめともかんばしきかな梅のにほひは
〇　佐賀　尾方綾子

新玉のとしたちかへるめてたさに雪間のうめもゑみそめにけり
ゝ〇　岡山　小山松枝子

ふたつみつほころひそめし梅が枝もなべてにほへり花のしら雪
〇　伊豫　加藤初子

いつれなか花とはわきて手折らまし雪にゝほへるしら梅のはな
〇　常陸　堀みつ子

きのふけふかほりゆかしき梅が枝にさと降かゝるしらゆきの花
〇　美濃　曾我みとり子

ふる雪に色こそ見えねなか〳〵にかをりゆかしきうめのひと枝
ゝ〇　磐城　木幡きよ子

花の香につもるしら雪ふりわけて身にしむまでもにほふ梅かな
ゝ〇　岩代　菅野和子

ふりつもる雪にかほりをゆづりおきてこの花ありと咲やしら梅
ゝゝゝ　群馬　吉田露子

屋根白くつらゝさかれるをばしまにおもげにたれし梅のひと枝
ゝゝゝ　宮城　大槻慶子

ふりかゝるみぎりの雪に香をこめてわらふもあはれ窓の梅が枝
ゝゝゝ　陸前　大槻初音子

うづもれて花は見えねと咲きぬらん雪のたもとをもるゝ梅が香
〇　東京　和田千代子

初日さす御園のうめのつたふみつ雪のなかよりゑみそめにけり
〇　長野　北澤千枝子

雪のうちにゝほひ初めたるうめの花春ふく風やまちわたるらん
ゝ〇　越後　大石ます子

雪みちしえだにかほりのなかりせば誰かはしらむにはのしら梅
〇　陸前　末永きえ子

ふたもとの花かとまかふくれなゐの老木のうめにふれるしら雪
ヽ○　大阪　木村春江子
さきそめてめつらしと見ししら梅に猶色そふる今朝のはつゆき
ヽヽヽ　越後　松永しげ子
しら雪のつもる垣根にけたかくもにほふしら梅わかすかたとも
ヽ○　名古屋　木下　鶴子
雪間よりほゝ笑みそめてくれなゐの
うめのはつ花めつらしきかな
ヽ○　東　京　松本まつ子
ふりつもる雪のなかにもかほるなり
こそめのうめの花のたちえは
ヽ○　陸前　前田河みさを
降る雪を見はやとおもひまのと戸を
あくればにほふ梅のはつはな
○　山　梨　名取正代子
降る雪に花はうもれてなかなかに
かをるや梅のさみをなるらむ
○　北海道　牧　尚子
わかやとの梅のはつ花さきそめて
ふる雪さへもにほひけるかな
○　北海道　牧　淑子
降る雪に花のすがたはわかれども
にほひに梅のありかをそしる
ヽ○　東　京　平塚白百合
ふる雪に色はうもれど白うめの
香のみはさらにかくれさりけり
○
うぐひすのさゝなく聲も寒けなりあわゆきふれる梅のこずえに
常陸　岡田萬子



なかなかにたかきみさをのうめの花雪降る中に咲まさるなり
ヽヽヽ　山梨　風岡千代子
ゆき花のけじめはそれとみわかれど香にぞしらるゝ庭の梅か枝
ヽヽヽ　越後　岩本芳子
○　東　京　高野もと子
降雪に花は何れとわかれとも
かほり床しき梅のはなその
○　東　京　三橋千代子
降雪の中にめにたつ紅ゐの梅
はけさとく咲いてにけり
○　東　京　山口　琴子
降雪の中に忍みたるしら梅は
知られと袖に薫りきにけり
ヽ○　東　京　五十嵐済子
白妙の雪のきぬきて紅ゐの
こそめの梅の笑てたちたる
○　能　登　栗倉　菫子
ふりしきる雪の中より綻びて
匂へる梅のいともけだかき
○　東　京　田中千賀子
ろうたけき姫の みゆきこみてし哉
うすきぬかむろにはの紅梅
ヽヽヽ　和歌山　植木撫子
降雪は木々も一つに埋めとも
香は　かくろゝ梅の初はな
陸　前　前田河　千年子
○
草も木もみなしろたへにうつもれてひとり匂へる梅のはなかな

短文

天賞

汲若水　東京　加藤桂子

若水は殿方の御役目よといはれ、詮方なくて、つとに起き出で給へる春の君、水桶もて困じ顔なるそれの、いと可笑しうて家ぬち打興ずるに、其の笑聲は、千代呼ぶ鳥の音よりも、まづ先きにあふれぬ、



地賞

妾が理想　大阪　小野はつ枝子

妾が理想は克己の二字なり「已に克つは敵に克つより難し」とかやげに完全に已に克つ者は聖人なり、君子なり、釋迦と基督とは、最もよく已に克ちし人ならずや　多くの缺點と短所を有する婦女子の、能く克己の二字を忘れず、已を忍ぶ事を守りなば、淑女となり、賢女として、以て人の儀表となり、世の愛敬と幸福は、求ずして來る可き、

人賞

寒月　播磨　横田春枝子

袷かき合して、埋火にも、櫻炭差しそゆる折しも、梢を弄ぶ風一渡り、夜氣を破りて落葉カラ〳〵と、霜に凍れる地を走る音に、板戸押あくれば、サッと差入る寒月の光り、仰げば清く澄みたる大空に、爛たる星、斑に冴えて氣愈冷かな

○○田舍の夕　　東京　平塚　白百合子

夕日は今紅にはへた楓にてつて、此處ばかりは夕くれとも思へぬ、鎭守の森かげに、沈まうとしてその絶え〳〵な微光は、丘をこえ、村をこえ、黄ばめる楢山をこえて、最後に音無川の鏡のやうな清い〳〵流れに閃めいて居る、折しもバタ〳〵と向ふの杉山から、鳥が四五羽森をさして飛んだ。すると川下の方から、のびやかな聲自慢の太郎作の歌こゑが聞えると、やがて夜の幕は次第に下りて、鎭守の楓も今まで見えた、茅屋の白壁もうすれて、川向ひの一軒屋から、燈が淡くともされて水に映つた、

○○紅葉　　紀伊　と　く　子

降りみ降らずみ定なき、此の頃の村時雨に、木々もいや色づきぬ、朝な〳〵おく霜に染められて、遠近の楓はなほ一しほの色まさり「露霜は隔てぬものを紅葉はの、など濃き淡き色にそむらん」、あゝそが鏡なす池水にうつりたる樣々、まいて紅葉せぬ葉の所々に交れる、げにほむる言の葉もあらじかし、四面緑ばかりなる木立の中に、たゞ一と本あはく染みなせるもあやしく、山里の草の庵のかたへに、今を盛りの楓の、夕霧の晴間より見ゆるも又なくうるはし

、○勞働　　能登　栗　倉　菫　子

働くてふ事の如何に神聖なることよ、天下の絶景奇觀は、汽車の窓や人力車の上よりは見るあたはざるなり、險を攀ぢ難路を越へ、初めて見るを得るなり、實に眞正なる幸福は、勞働の結果なり。心に誓ひぬ、我も今後は宜しく活動せむと。

、○未來のねい樣　　下野　里　の　子

御年始に叔母さん處へ行つた時、御庭の細道を築山の方へゆくお方、お召は小豆色、髮は高島田、帶の〆樣があまり好い風なので、障子の硝子越に伸び上りのび上り見て居ました、かへる時叔母さんが、近い中にねい樣ができるよと云ひました、兄樣は笑つて居りました、妾は嬉く思ひました。

、○平和の村　　下野　井　上　侚　子

靜けきゆめは鷄聲にさめ、東の空彩雲の扉をひらき、初日の神照りませば光に榮ゆる松の緑、千歲の色みえていと深し、ゆるう吹くこちにみ旗なび

き立ち昇る煙も何となうゆたけし、しはし初日に向ふまは、吾が世を得たる心地する。

○元旦　越後　松永しげ子

九尺の藁縄の釣瓶にて汲み上たる水もて手水し眺むれば初日、紫の幕をおげて昇り給ふ、六尺の爐邊に坐して、豆がらを以て汁を煮、餅をあぶれば其の香高し、老父母と猫とはぬくとげにゐませば窓外には雀千代となき、犬わんと鳴く

○雪の朝　松山　田村多豆子

ふれ〳〵とさけびし、蛬の聲の、いつしかにうち絶えて、睡れる夜もすから、閨の内の寒さも身にしみて、足のひえにししるしを、さながら朝の庭に積れる、雪の上に見せたるも、身の毛のよだつ思ひはすれど、其景色はなにとも言ひがたくてなむ、

○初日出　東京　神田けい子

鶏鳴いて東天既に白みぬ。見渡す海面穏やかに立返る年浪の長閑けさ何時の折にかかゝらむ。空は淡紅となり、深紅となり、初日の光は海の彼方より湧き出てゝ、水を離れむとして離れす、波に映

して漂ふか如く、其瞬間神代の昔も偲れて、又大御代の行末そ思ひよそへらるゝ、

○初夢　東京　關　貞子

峯の横雲は排きたり。一群の紫雲は髯長く白き翁と金毛の羊をのせて、妾が室に降りぬ。髯長く白き翁は、金毛の羊の背に乘らん事を、妾に勸めたり。妾は喜悦し、勸めに順ふて峯へと登りぬ。遠く見ゆる新領樺太の半島日の御旗ぞ美しかりき。夢はさめたり。初日の大御神は窓を輝して、梅のかげのうつるのみ。机上に妹が自筆の試筆一枚のりてあり。

○初鴈聞る朝友に　東京　豊田とよ子

いさとよ、鴈の初音聞き給ひつるや、昨夜も紅葉のおかしきに、端居し侍りしを、月を翅にかけて鳴き渡り侍るか、數さへ見えて面白うてなむ、いまた聞きつけ給はすとならは、今宵共にと思ひ侍べるを、御車枉させたまはゝ、うれしうなむ

○○林　葬　（橘嘉智子に代りて）　越後　大石ますこ

嵯峨帝の后橘嘉智子、麗質絶代と稱す、其崩するや

遺詔して己の屍を西郊に捨てしむ、林葬の端也、游宮の麗色誰か爲に粧ふ者ぞ、我れ毛嬙西施の美を併せて天下の至姣たり、我今正に死す、林中我腐骸を見ずや、野犬來りて腸を爭ひ、鷙鳥來りて腸を啄む、惘殺す、貪淫飽くなき男の子等、未だ我冷えたる肉を抱かず。

〇〇小春の日　相模　柚木とよ子

木の間隠れに色づきしいてふを、栞になといと欲しき事に思ほひて、関水寺に詣でつ、時し新嘗の祭、小春の日和とや云はまし、彼岸櫻の一つ二つ返り咲も見えつ、妹がり珍しなと自働車のいと早く去にしあとは、銀杏の風の一としきり。

、、〇海邊の初日出　東京　土田八重子

夜の衣は次第に剝がれて、東天漸く曙光動き、橙色を呈す、青黑より蒼白と變りたる浪の、又更に綠の腹、紅の背に染むるよと見る程もなく、海端遙に浮び出たる初日の、一搖して波上を離るゝ其の瞬時、萬斛の黃金滴り落つるかの如く、

、、〇新年の河　韓國　原野みき子

流れ行く水は變れど、變らぬ色は水の色、千古に縹々として、水波は青空に連り、金波銀波は千代をさゝやき、遙に見ゆる白帆は、春風を孕みてはしり、新年を呼ぶ千鳥は、水鏡を掠むる折柄近くに聞ゆる玉を轉すが如き幼き聲の歌は。年の初めの…………、

、、郵便　日向　岸上はる子

今朝の郵便には、何が來るだらうと、一人ほゝ笑んで居ると、聲がしたので、二階からころがる樣にして下りて、取って見れば、こはいかに、高等師範入學の願書が返戻されたのであった、どうしてこんなものをと郵便屋がうらめしい。

、、、あゝ妹　長野　青嵐女史

私は泣きます、此目出たい新年に、妾は三年前のお正月、唯一人の妹を喪ひました、この羽子板、これも妹の形見です、妾はこれを見る毎に、胸の中から突き出す樣な冷たい涙にくれます、いつそ、此羽子板、燒いてしまをうかしら、

、、、新年の鎭守社　長野　關谷已子

初日を拜して、鎭守の御社に詣でぬ。注連は朽ちて屋根危ふげなり。森々として人氣なき拜殿に合唱すれば、崇厳の氣宇宙に滿つ、夜半の嵐の強かりけん、神樂殿に吹きよせられたる雪は、散り重れる落花の如し、

〇入船　千島　相本ふみゆ子

朝寢の夢をさますかーの汽笛、ソラ來タゾー、ヤア來マシタネ、村人は大騷動、吉さん早く艀を、何承知だよ、常には人心ともに靜かな此の港も、月に二回の定期船入港の時は、中々浮き立つのである、役塲では筆生が皆さんと呼出す郵便待ちかれし如く受取り、直ちに封切りて讀む、人々の顔は笑めるあり亦眉ひそむるもあり、

○神の苑　　群馬　吉田露子

古松に霧の幕垂れて、天地自然にかなづる音曲、しらべ合するは松ふく風、巖の間苔の上を流るゝ清水なり、杖曳く雅客の跡絶えて岩にとまれる鳥一羽、白き翅に斑紋あり、御苑を守る神の使と見えけり、さても崇嚴の神の御苑よ。

○福壽草　　能登　粟倉菫子

血潮の枯れ果てたみ手ではあるが、温かき祖父君のみ情けが通ふたか、元日の朝早くも鉢の福壽草は美しうほころびた。祖父君の嚴格なるお顔には、笑みさへたゝえて「去年手を懸けたわしの仕事も、芽出度年暮迄にすんだ」と。いかにも嬉しさうに見えた。

、、、冬の夜　　和歌山　植木撫子

吹きすさぶ風に、木の葉は大方散り、秋もいつしか吳竹の冬とはなりぬ。夕つかたより降る雪、このさまにては必らずや、積らんと思ひつゝ、臥床に入れば、夜のふくるまゝに、いとゞ降りそふと覺えて、竹の下折の音のみぞ高くなりぬる、

、、御正月　　東京　碓井のぶ子

上下の區別なく、をさな子は指をりて幾つゝいぬれば、御正月と母に姉に尋ねたりし樂しき御正月は來れり、されど夫なく父なく、寫眞と共に年をむかへたまふ家もありつらんと思へば、同情いや深し、

○眠られぬ夜　　東京　槇野久美枝子

人足繁き街道は絕ちさひれて電車の響さえとだへ、かすかに聞ゆるうどんやの聲、哀れ物淋しきに今し遠ぼえの音夜の寂寞を破りぬ、あゝ眠られぬ今宵、耳をそばだつれば、窓近く秋風颯々として梧葉をゆする折しも、天井にねずみの音けたゝまし。

新體詩

天賞

新年の快　　下野　井上佝子

年の若水くむせ戸の　清き流のみづの譜は
天つ乙女がおらたまの　年をことほく樂の音か、
溢るゝ屠蘇の香は高き　朱のはげたる盃に
よろこび祝ふはつ春の　嬉しきかけは浮びけり、
雀に千代をうたはせて　手まり羽子つく村の子の
袖ふく風はかどまつの　深きみどりにかをるなり、
軒毎なびく日の丸の　み旗に見ゆるそれの如
平和の村の人々は　希望の光かゞやけり。

地賞

孤園の歎　　伊豫　加藤秋月

思ひぞ長き秋の夜の　寝さめがちなる手枕も
淋しき夢の浮橋や　あはれむなしき小夜衣
しぼる軒端の村雨も　いとど身にし無情さに
憂世を秋と鳴く虫の　聲はまさりて追懐も
みだれ亂るゝわが胸の　鏡にうつる夫のかげ
それもおぼろに影淡く　秋の燈ぞ更け渡る

入賞

貯金せよ　相模　柚木とよ子

春の日昇る陽炎は　薄く微かに見ゆれども
積れば滋き五月雨の　長きに人は倦なまし
照る日は强き夏の日も　高き深山の大杉は
萎るゝ様もあらなきは　狭霧を積みし溜り水
昔賢き松下の　雫は永久に温く
其敎へ草伸にけり　今に變らぬ美しさ
いとし草葉を惠みつゝ　清き流れに堰留めて
黄金の花や淀まさば　など濁れりと耳やかん

あはれいさゝの比喩草　さゝやかなど、笑はずて
よく身にしめて積み行ば　塵に名高き富士の山

〇歌留多會　常陸　岡田萬子

しるもしらぬも打よりて　むべ山風と亂れとる
少女の姿かにゝほひ　夜ぞ更にけるかるた會

〇天の橋　三重　吉田仲子

秋のむら雲かゝりなば　西のみ山は時雨らし
はゝその森のさゞめきに　錦の葉袖ぬるゝなり
自然よ友と立ち出でゝ　久遠の空に耕せる
鍬を執る手をそとめゝて　小手をかざして眺むれば
朧に見ゆる小松原　山の端かけて七彩の
虹のそり橋天そるゝ　璧はゞ善美莊嚴の
星の花咲く高欄に　惱みの里を打捨てゝ
いでやと光る天津空　渡れど神は宣るに似ぬ

〇早春　神戸　足立あさ子

「萬代盡ぬ君が住む。　雲井にちかき飛鳥の
あすかの山の初霞。　花のおもかげ立にけり」
「開け行く世は鶯の。　住む谷の戸に立つゞく。

軒端の梅は咲かねども　告し初音に春ぞ來る」

、、〇早春　　神戸　足立ゑい子

「生田の小野の風寒み。猶返かへり降る雪の。
晴間を待はおのづから。みどりの若葉老やせむ」
「君が齢を野邊」に出で。小松引くなり諸人の。
袂に匂ふ千代の香は。幾世盡くせし初子の日

、〇銃の畑　　松山　上原のぶ子

思ひいづれば一昨年の、秋よりかけて冬寒き、
彼の満州のはてもなき、あら野の雪をふみしだき、
戰ひ進みてうてばかち、せむればよりて敵軍の、
塵とりひしき大なる、功勳たてしをうつ銃の、
畑となりてとる太刀の、霜とはかなく消果し、
益荒武士のありし世を、思ひ出ればなにとなく、
たもとのぬれてひたすらに、なみだのかはく時ぞなき。

〇腹つゞみ　　越後　松永しげ子

あけの冠かろらかに　恰もみ神呼ぶか如
にはとり清くたかなけば　物皆さめぬくらきより
さしくる光のどかにて　二本松にむれゐつゝ
君をことほく歌の音を　空にひゞけと雀子が
人もろ共に喜びぬ　年立ちかへるめでたさを
今し熟睡を呑いてゝ　たとへば海老の腰なして
美し雲のたなびける　み空を高うおろがめば
あまれき波みめぐみに　涙さゝげぬはからずも
和樂つきせぬ里にして　かやぶき低き軒毎に
み旗はゆたかにとほなびく　煙もしけし今年亦
とり入れだかの多かれや　積れる雪の吉兆と
ほゝそ笑みては新酒の　おまきをほめて舌ならし
七十路こえし父親が　あげし盃手はなして
ためしもあらぬ豊年と　亦打ちならせ腹づゝみ

〇元日　　佐賀　阿世知房子

明けぬれば、四方の浮雲ふきはらひ、光り輝く久方の、
都の春の朝風に、
旭の御影さばゆくも、千代をこめにし呉竹や
枝からはぬ松が枝に、映らふさまの長閑さは
君が千歳を祝ふらん、
谷より出づる鶯の、初音つたふる軒の端に、
ゆかしく薫る梅の花、人待ち顔の心地して、
竪井遊に諸むれば、童の飛ばすいかのぼり、
吹く春風に空高く、音もさやかに響くなり、
羽子追ふさまの乙女子は、園生の花にひら／＼と、
たはむる蝶にさも似たり、
惠みあまれき神風に、よもの民草打靡き、
都も鄙もおしなへて、豊けき年のしるしとて、
げに長閑なる春は來にけり

、〇妙高山　　越後　大石ます子

天そゝり立つ妙高山、山姿は千古渝らずして、
背伸びてそゞろにも、仰げば高きすがたかな、
春紫のあけぼのゝ、白雲峰をめぐりては、
徂き彿ふ影の悠々と、平和みてるさまにして、
冬は奇しき銀の、衣まとひて屹然と、
蒼空突ける其姿、神の業かとあふがるゝ、

春ゆきかへり幾千載、　斯くして遠く永劫に、
峯はいよ／＼高くして、　地はいよ／＼に低きかな、
雲晴れわたる妙高山、　峰ほの／＼と紫の、
棚曳く雲の絶間より、　年の初日はのぼりけり、
上ッ越野を見渡せば、　日路指す限り曠くして、
遙かに見ゆる信州の、　群巒我れに朝しつゝ、
斯くして永久にどことはに、　高く聳ゆる妙高山、
峰寂寞にしづまりて、　太古のさまぞしのばるゝ、

、、生死不明者の妻をしのびて

日向　岸上はる子

御國のために必すと　勇みて出でしせの君は
今はいづこに居ますらむ　となり近所の誰かれが
みほうびあまた戴きて　よろこび勇む聲きけば
思はず涙こぼるゝよ　第六師團の其中に
我せの君が只一人　生死不明となりにきと
きくも悲しさなさけなや　必ず御國の御ために
失せにしものと思へども　もしながらへて居ましなば
今日此頃の寒さをば　しのぎわびてや居ますらむ
必ず死して居給へと　心の中にれぎつゝも
なほしのばるゝ夜半のゆめ
君がみ聲とおどろきて　首もたぐるも幾度ぞ

○追懐

長野　關谷己子

常世を渡る雁の音も、はや二とせとなりぬれば、思ぞいづる兄君が、枯れしみたまのそが行衞。堅き城よと外くにの、人みな稱ふ旅順口。かたき守りのけふとけて、影さへ雄々し日章旗。さらでも目出たき新玉の、年たちかへるけふの日を、城落ちしとて人は皆、狂せんばかり悦ぶを。くりかへされし電報を、抱きて泣きし春いく日、しめりがちなる我むねは、亂れ／＼て糸のごと。攻せては屍の山をなし、退いては血潮の河をなす、平和の神の御いくさは、けふ敗れての御つかひ。北滿州の月影に、いとし兄君其むくろ、安く眠れや永久に。安くねむれや永久に。君の御爲國の爲、そがいけにへとなりてこそ、いとし兄君御たまも、安く樂土に眠るらむ。

、、、感偶

土佐　廣江子

よべ重ねたる振り袖の　艶なる模様かへりみて
春の行衞のかなしさを　何人かよく思ふべき
ふくむ杯そとなげて　春を何處ととふ勿れ
初日の光てらす處　そこに笑なき子有んや

○新年松

福井　岩橋花子

まづひんがしのみ空より　かゞやき出づる初日影
かしこき御代に春たちぬ　松もちとせの色そへて

○無常

佐賀　阿世知房子

生者必滅の世とは云ひながら、　人の命は朝日の前の露ぞかし、
春はよろづの種をまき、　秋のみのりを待つ程の、
遠き覺悟をなすものゝ、　いまをも知れぬ後の世の、
永き大事をうち忘れ、　空しくすごすは何事ぞ、
見よ／＼浮世の有樣を、　老若貴賤もろともに、
此世はしばしのかりのやど、　諸行はすべて無常なり、
去歳は榮えてこの年は、　おとろへ果てゝ影もなし、
たのみ難きは浮世なり、
昨日見し人今日はなし、　朝に生れて夕べ死す、

我身もあすはいかならん、
朝夕なでし黒髪も、
やがて野原の塵となる、
あだにはかなき露の身は、
つまや子供のかたらひも、
出入の息のたえぬれば、
鳥部の煙と消ゆるべし、
定め難きはいのちなり、
玉をあざむく顔せも、
親兄弟のしたしみも、
しばし浮世の夢にして、
老ひも若いもおしなべて、
あゝ〳〵浮世は無情なり。

、〇慰めの辞　東京　槙野久枝美子

秋風寒き城山の
黄ばむいてふを拾ひ上げ
深き思ひに沈む時
よべの手枕夢やぶれ
かすかに送る笛きゝて
想ひは走る都地に
亡き父母君をこふるらむ
まだうら若き十七を
世の常ならば物のうき
心おかしき君なるべきに
すさぶ嵐にはかなくも
そこのもくずとなりはてゝ
されど此夜はかりの宿
さこそなげきそ又世には
木の下陰に佇みて
一葉二葉を眺めては
風のすさびに耳立てゝ
軒をもりくる月の影
あつき涙にくるゝ時
秋の哀れをかこちつゝ
君の心ぞかなしきや
花の香うせし君哀れ
世の悲しきもしらぬ
あゝ世は詮ない仇の海
命とたのむ親舟は
行くへに迷ふ舟二つ
まゝならぬ事多からめ
君をたすけん友あらん。

〇早梅　奈良　栗原高子

雪消のころ山里の、
いつつの間にかは綻ひて、
ことしも来鳴く鶯の、
木つたひて鳴こゑきけば、
賤が軒端に梅の花、
香にこそ春ぞしられける、
なみだは未た氷れども
心ぞまつはのとかなる、

短歌

天賞

歳暮　能登　栗倉菫子

うれしさは日記の上につゝがなくてひとりほゝゑむ歳のくれかな

地賞

爐邊閑談　東京　土田八重子

さくら炭にほふあたりに翁おうなむかしがたりののどかなるかな

人賞

新年松　大阪　稲原すみれ子

君が代のとし立つけふはかどまつの色にも千代の影は見えけり

秀逸

〇〇追羽子　大阪　木村春江子

追ひ羽子のなかにましれるをと女子がはしるたもとに春風ぞふく

〇竹上の露　　東京　平塚いと子

わが袖におきあまりてやこほれけむ
うきふししげき竹の葉の露

、〇新年松　能登　粟倉菫子

新玉のとしをむかへてときはなる
まつもみとりの色そへにけり

、〇同　北海道　牧　淑子

君か代をいはふはつ日に色そふる
大内やまのまつのみとり葉

〇同　神戸　足立あさ子

岩みとり春立のほるたまゝつは
くものうへにや千代をさゝけむ

〇同　神戸　足立ゑい子

よろつ代も何かたからむ春ことに
みどりいろ添ふ和歌のうら松

〇同　福井　岩橋花子

あまの原初日ゆたかに春立ちて
ちとせのまつもいろそゝへぬる

、、、同　越後　松永しげ子

あら玉のみ雪におこる姫松の
かたきこゝろにわれならはまし

、、、同　東京　美矢竹光子

ほの〳〵と明けゆくとしの初日かけとことにむかふかとの姫松

〇新年　長野　北澤千枝子

あたらしき年をむかへて門ことにをさまる御代を祝ふけふかな

〇同　岡山　小山松枝子

きゝなれし寄も千代を祝ひつゝうれしかりけりとしのはしめは



〇新年風　東京　加藤桂子

大八洲のとかにすきてわたるらむ千代吹きそゆるとしのはつ風

〇新年香鶴　奈良　栗山高子

あけ渡るのとけき空にこゑたかくちよをいはひて田鶴まひ遊ふ

〇新年酒　名古屋　木下鶴子

年立て祝ふまとゐにうなゐ子も
嬉しけにもつけふのさかつき

〇初春　東京　関　貞子

鳥追かひく糸竹にとし立ちて
をちの山の端旗手六つ四つ

〇初春見鶴　東京　碓井のぶ子

朝霞み空にたつの聲するは
千代の初めのすかたなるらん

、、、初春鶯　常陸　堀　みつ子

さし昇る朝日に匂ふうめか枝に
春をことほくうくひすの聲

〇立春　播磨　横田春枝子

初霞たかくら山にたなひきて
雲井よりたつ春のとかなり

〇一月春氣　埼玉　横田須磨子

隅田川綾瀬石はまうら〳〵と
かすみにつゝくをつく波の山

〇春風春水一時來　埼玉　横田やな子

山川のこほりのはしもかつとけてけさはろ風のわたりそむらん

〇春風來海上　埼玉　横田秋子

ふれの帆に朝東風みえてむさしの海羽根田の沖に春は來にけり

、、鶯　日向　岸上はる子

ふりゆけはいとにくらしと云ふめれと猶めてたきは鶯のこゑ

詞友

○雪中椿　愛知　永井さい子
ふりつもるゆきにひかりをあらそひてさくや国生のしらたま椿

○雪中の鶯　東京　美矢竹光子
雪ふれどいろかにまさる梅が枝にけさもきなくうぐひすのこゑ

○擣衣　北海道　牧　角子
小夜更けて小鹿鳴くなる佐保山のふもとの里にきぬた擣つなり

○寒月　薩摩　松原岑子
ときは山松吹くかせのおとさえてこすゑにかゝる月のさむけさ

ヽ○雪朝遠望　越後　大石ます子
今朝見れば佐渡が島山かけもなし浪間にうかふゆきのみにして

○枯野　東京　槙野久美枝子
吹くかぜにいよいよつきのかげ冴えて枯野にさびし小狐のなく

ヽヽヽ冬の夜　和歌山　植木操子
冬がれの木の葉うちしく庭の面に秋のかたみかきくのひともと

○千鳥　北海道　牧　角子
磯ちかくあそふ千鳥のこゑすなり清見のうみやしほみちぬらん

ヽヽ○除夜　常陸　岡田芃子
うきふしを嘆くあひだにくれたけの一よばかりになれる年かな

○除夜鐘　東京　神田けい子
かれの音の一つ一つに夜は更けていつしか年もさらむとすらむ

ヽヽ○折にふれて　下野　井上角子
うめの花にほふあさ日をみに浴びて年のことほきかく小窓かな

ヽ○同　越後　松永繁子
蝶の墓つくりしあたり落葉しておくしもしけき朝にもあるかな

ヽ○同　神戸　足立あさ子
執り初る筆のはやしにこの春のこと葉のはなを咲かせてしかな

○同　土佐　廣江子
ありとあるうつし世の花あつめきて母のみ前にさゝけてしかな

○同　長野　關谷巳子

寒き夜にかけひの水の凍りけりいたつきませるはゝきみ如何に

ヽヽ羊　東京　美矢竹光子
あし引のやまにすむてふ小羊をむかへていはふあらたなるとし

○夜讀書　岡山　小山松枝子
さえわたる時計のをとを友として書みる夜半そたのしかりけり

ヽヽヽ述懐　宮城　大槻慶子
世の人をおのがこゝろと思はすにみなかはりある顔にこそしれ

俳句

天賞

初日影　能登　栗倉菫子
嬉しさや破れし障子にはつ日影

地賞

火桶　東京　渡邊しん子
たはむれの話もちよる火鉢かな

人賞

越後　岩本芳子
すゝはきや柱時計は庭の松

○松青く梅白し歌の發表[illegible]　越後　大石ます子
○岩高き後の山に寒や鳴く
○初冬やめッきりやせし浦の山　同　岩本芳子
○起されて初夢ふいと忘れけり

ヽ○嬉れしさや破れし障子に初日影　能登　栗倉菫子
○淋しさや硝子にうつる冬の月
○戸をたゝく音と聞けり下駄の雪
○香み聞いて仰ぐ垣根や梅の花
ヽ○つれ〴〵に玉章あさる夜長かな
ヽ○梅白し汲みし釣瓶に星一つ　相摸　柚木とよ子
○乳母がりの神拜げけり紫初め
○水仙の鉢洗ひけり年のくれ
○夕げたく賤が伏家に秋の風　下總　鵜川初江子
ヽヽヽ賤が家のかきれに香ふ菊の花
ヽヽヽ豐なる千代田の松に初日影
ヽヽヽ疾める母家にや待たむ納豆賣
ヽヽヽ福壽草黄金の色に咲にけり　常陸　岡田萬子
ヽヽヽ白魚や京の美人の肌をかこつ
ヽ○松立てゝ春の心となりにけり
ヽ○水仙に机の塵の立ちにけり
○淋しさや女同士の歌留多會
ヽヽヽ門松を舞ふて潜るや御萬歳　神戸　足立ゑい子
ヽヽヽ年玉や嘉例に乳母が芹薺
○新しき衣着て春の寒さかな
○一輪に三分の春や臥龍梅
○初鶏ふた聲目には起て聞く
ヽ○芹生まで阿波の内侍の若菜摘み
○春寒を笑ひ消しけり女客
○椎の實のたもとにたまる嵐かな　松山　上原のぶ子
○天地はしろき物なり雪の朝
○すみかまの畑にくるゝやせの里
ヽヽヽ君に見せん今日の初潟の初姿
ヽヽヽ新潮に新船おろす初日の出　東京　關　貞子

○氷ふむ黑龍江や初日の出　土佐　廣汀
ヽヽヽ門松に千代をうつすや鏡餅　神戸　足立あさ子
ヽヽヽ早起やさきがけに來る嫁の親
○難波津の梅や幾代に香の殘る
ヽヽヽ舞初や水吹きかくる足袋の底
ヽヽヽはやされて春の匂ひや芹薺
ヽヽヽ式臺に御慶受けゝり太郎冠者
ヽ○猿ほどの着替は持たず猿まわし
ヽ○屠蘇の醉のせてこぎけり渡し船　大阪　木村彝江子
○新年や合奏の曲何々ぞ　下野　井上尚子
○節省して雜煮はうまき物の數
○元日やとその香高き五月の村
ヽ○元旦や羽織きてくる村の人
○待つ人は來ずて香りぬ床の梅
○明け渡る空靜かなり初日出　下總　川奈部琴柱子
ヽ○元日や人皆神の心なり
ヽヽヽ靜かなる世を猶祈る四方拜
ヽ○起さるゝ妻や夜寒のひとりごと　東京　渡邊　しん子
ヽ○春風にくすぐられたり膝がしら
ヽ○露もなかせて見たし梅のはな
ヽ○放す手も珠數は放さず籠の鳥
ヽ○流るゝが如き月日や浮寢鳥
ヽ○人にして見たき柳のこゝろかな
○初日影うつるゝや清き五十鈴川
ヽヽヽ萬歳を醉はして送る日暮哉　橫須賀　高橋つね子
○元日の神代めきたる山家哉
ヽヽヽ弱手に威儀を正して御慶哉
ヽヽヽ福引や有封に入りたる年女房
ヽヽヽ初冬や野狐鳴いて月の照る　橫須賀　中御園かしは

ノ○水痩せて枯蘆月にそよぐかな　同
ゝゝゝ凩や珊瑚の森に月冴ゆる
ゝ○一俵を傾け盡す火鉢かな
ゝゝゝ世を避けし深山も鹿の聲でする
ゝゝ則月や谷間を流る水の音　東京　本橋　つや子
○鐘の音や尾花野を行く琵琶法師
ゝゝゝ雀寒う鳴くや鴨巣の冬木立
ゝゝゝ凩や風見鶏の止む間なく　相州　中郡國　かしは女
○木からし冬となりけり納豆賣
ゝゝゝ初時雨たゞ松の香のすがすがし
ゝ○あるだけの船かぞへけり小春凪
○歐府にこゝろの散るや冬ごもり
○動くべきすゝきは枯れて冬の月

◎今回の投書にての歌文の側に姓名を記入せざりしものにて、掲載するを得ざるもの少からず、以來封皮には兎に角に、原稿の側には一々姓名を記入せられたきものである、實を申せば、大に見るに足るべき投書の、止むを得ず机底に納めて居るのがあるので、猶毎々記述する如く投稿は成るべく半紙にせられたく、或は考へられた積りで、短冊の如き形をしたるものゝ如きもあれど、却つて取扱に困る、

女鑑投稿規定

和歌兼題二、兼題外和歌、新體詩、短文、俳句、小説、隨筆、日記、及家事に關すること何にても投稿を歡迎す、

投稿は毎月十日着迄の分にて締切る、字體は成るべく鮮明に願ひたし、

賞品は天賞一圓、地賞五十錢、人賞三十錢、特に選逸なる作品に對しては、それ以上五圓以下の賞金を呈すまた入選の作にて特に佳作と認むるものには繪書を挿入し、錦上更に花を點すべし、

和歌兼題

二月（鶯、月前柳）	三月（春風、春雨）	四月（山花、落花）	
五月（更衣、小野小町）	六月（梅雨、撰蛍）	七月（池納涼、）	
八月（初秋、常盤御前）	九月（秋夕、行路霧）	十月（海上雁、女子讀書）	
十一月（水鳥、香爐峰）	十二月（落葉、歳暮）		

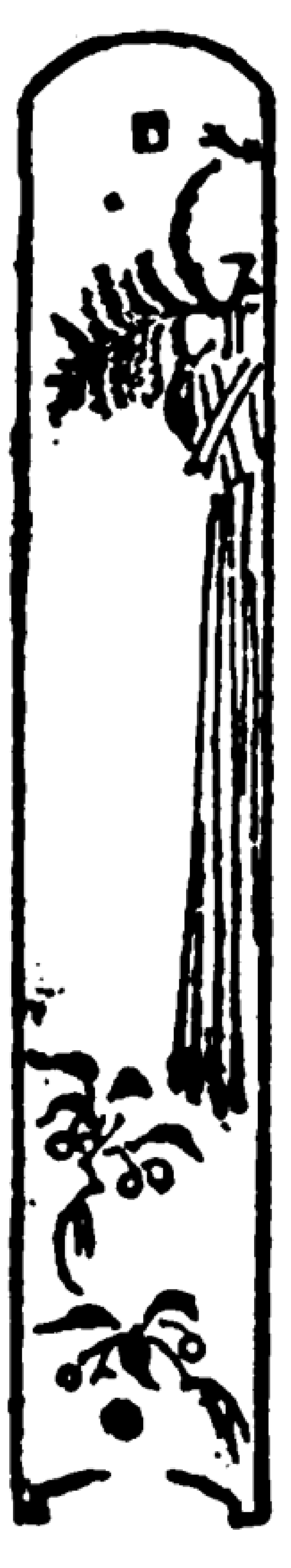
新刊紹介

日本家庭百科事彙　芳賀下田両氏編纂　冨山房發行

家庭といふ文字、近來非常に流行して、家庭の名を冠したる刊行物は決して少くない、甚しきは風俗に關係する如き卑猥なる文字を並べて、之に銘するに家庭小説としたるなどもある、見掛は立派で、内容は不立派なる家庭の多きと同樣、家庭の名づくるものにも、却つて家庭に入れて不都合なるものなしとせず、よし不都合はなくとも、これはと云ふものは事實甚少くないのである、此時に際して、家庭の二字を冠したる尨大なる大著が出た即ち本書である、芳賀博士、下田學士監修の下に、長谷川文學士主任となつて編輯されたもので、中々の苦心を經られた事は、云ふまでもなく、よくも斯く方面廣く材料を收集せられたるかと感ずるを禁じ得ない、而も記事頗る如才なく、新聞の事を記するに、東京各新聞の短評をなし、いづれも惡く云はぬ所など、頗る妙である、之を社會事業に比するに家庭に讀んで甚だ重寶に出來て居る、併し俗受につとめて、發音的假名遣によるなど稱して、水藤水をミズ、藤をフジ、火事をカジなどは甚だ不見識千萬である、クヮをカとの如きは土州の人を除くの外は、大抵ズと發音すれども、いふは、東京に於ける一部の無學者の發音で、これを以て直ちに日本現時の發音など〻思はれては困る、而して項目の排列は五十音順による、イロハ順の排列法は舊式に屬し、早晩其跡を滅むべきものとの理由を付して居る、然るに直接又間接に幇助を與へられたと稱する人の姓名を見るとイロハ順にして居る所などは、頗る滑稽である、以上の如きことは社會事業の方にはない、隨つて其記事にも信用を措くことが出來る、されはとて此家庭百科事彙の記事を不信用といふのではない、が甚だ右の如き不見識を遺憾に思ふのである、要するに本書は、その評判の如く、家庭に於ける古來無比の重寶書で、恐い下らぬ學校に入れ、下らぬ書籍雜誌を見せるより、此一册にて相當の常識を養ふことが出來るのである、何にして結構な刊行本なり、裝釘頗る美にして、定價金拾圓とは廉といはざるを得ない、

農村の幸福法　手島益雄著　新公論社發行

冒頭第一『讀んでこの書を自治協會に呈す』といふ、人の提灯で道を照らす流に、出版者に一頁を齋發させて、自分の義理をする、それもよく〳〵大切な人で、その人の恩澤によつて此書が出來たといふ位のなら未だしも、隨分思ひ付放題に、寧ろそれをせれば損の如く心得らる〻如き癖あるを苦々しく思ふのであるが、自治協會といふので、これは我意を得たものとして、流石に手島君たるやり方である本文項目を家庭、教育、宗教、自治、產業、公共、慈善、衞生、會合娛樂に分ち、親切叮嚀に、世間より割に合はぬ、一本調子の勞働者と目せられたる農者に、至大の幸福を說いたものである、故に本書は單に農村と限らず、すべて勞働者は一讀すべき價値がある、定價金三十錢、



新刊紹介

定價

一冊	前金貳拾錢
三冊	前金五拾七錢
六冊	前金壹圓拾錢
拾貳冊	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行		金三拾錢
半頁	三十二行	金八圓
一頁	六十四行	金拾貳圓
表紙一頁		金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割増の事）◎前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし◎領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御添附ありたし◎總て受取人は東京市京橋區築地二丁目貳拾壹番地國光社と御認めありたし◎振込局は東京築地郵便受取所へ◎御照會の件は返信料御添附あるべし

明治三十九年十二月廿八日印刷
明治四十年一月一日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社國光社
右代表者　東京市京橋區築地二丁目二十番地　橋本忠次郎
印刷人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　河本龜之助

發行所　株式會社 國光社
（電話新橋二六九五番）
（電話新橋特八八番）

明治四十年一月改正

出版圖書目錄

東京
株式會社
國光社

謹賀新年

明治四十一年一月元旦

株式會社國光社

社員一同

女鑑編輯局

一同

理學博士　坪井正五郎先生講述

人類學講義

總クロース製　菊判
全一冊
正價金壹圓拾錢
送料拾錢

坪井博士が人類學の泰斗たるは普く世人の知る所本書は同先生が極めて平易なる言文一致にて講述せられたるものにして創世紀の人類説、人類一種論と人類多種論諸種族系統探り方、人類の大別小別、日本種族論等あらゆる人類に關する要件を網羅せられたれば歴史及人類を研究する人には勿論普通人士も之れを一讀せば無限の趣味を感ずべき座右必須の良書たるを疑はず

農商務省水産局長　牧朴眞君序
水産講習所長　松原新之助君閲
水産講習所技手　石田鐵郎君著

水産製造論

菊判總クロース製　全一冊

定價一圓廿錢　送料十錢

本書は嶄新なる學説を根底とし實地と經濟を花實とし極めて多岐に渉れる水産製造法を統一的に分類したる良書なり○我國は四面海を環らし水産の利益は實に無限なるにも拘はらず未だ十分の發展を見ざるは頗る遺憾に屬す況んや樺太及沿海州の漁業權將さに本邦の掌底に歸するの秋に際し水産業の發展を講ずるは實に急中の急務たれば世の實業諸君は必らず購讀研究せざるべからざるの必要あり

共立女子職業學校編物主任敎授　金京縈尾子女史編

編物敎科書

全一冊　近刊　正價及送料未定

同校造花主任敎授　金子支江女子史編

造花敎科書

全一冊　近刊　正價及送料未定

前共立女子職業學校刺繡主任敎授
學習院女學部敎授　木郁仲子女史編

刺繡敎科書

全一冊　近刊　正價　未定

女子職業に關する問題は世間既に定評あり上に列記する編物、造花、刺繡の如きは女子職業中の最も適應なるものにして復た現在及び將來に於て最も必要多きものたるは論を待たず從來此等の技藝に關する書籍少なからずと雖も未だ敎科書として完全なるもなきは眞に遺憾なき能はず此に於て本社は前記專門敎授に完全なる敎科書の編纂を請ひ既に脫稿したれば不日之を世に公にせんとす乞ふ發刊の曉之を繙いて其の必須缺ぐべからざる敎科書たるの價値を知られよ

東京美術學校長　正木直彦先生序文
同　校敎授　島田佳矣
同校卒業生　野口駿尾　兩先生共著

技藝 女子編物模樣圖按

全五冊　石版極彩色　大和綴美本

正價
●松の巻　金四拾錢　櫻の巻　●藤巻各金　五拾錢
●菊の巻　●梅の巻　各金五拾五錢　送料各金四錢

本書は毛糸、絹糸、木綿糸等にて諸模樣を編み或は刺繡するに必要なる圖案即ち下繪を集めたるものなり從來此種の書籍歐米各國にて出版されしものなれども其意匠圖案の樣式風味は直ちに之を我が工藝に適應する事能はざるのみならず價格の點に於て不廉にして一般に普及すること能はず●本書は著者が專門獨特の意匠を以て多年歐米の圖案を研究參考し前項の欠點を補ひしものなり●編物は貴賤都鄙の別なく本邦女子適當の手藝にして漸次發展しつゝありて將來大に海外輸出の望ありと雖も從來の意匠圖案は幼稚拙劣を免かれず●本書著作の順序は片假名、平假名、歐文字等の簡易なるものに始まり横模樣、連續模樣、角模樣、圓模樣、隅模樣、單獨模樣等の順序を經て漸次高尚優美なる繪畫的下繪に進み花卉、虫、魚、風景、人物を蒐集したり●本書は獨り斯道修學者の好敎科書なるのみならず技藝家の好參考書にして亦た麥稈細工織物等各種技藝の參考書たるの價値を有す

農商務省御編纂

清國染織刺繍意匠圖按

全一冊　菊倍判　大和綴美本

正價　金五圓　送料　東京市内五錢　内地　二十五錢　清、韓、臺灣　四十五錢

●紋様、色彩、幅員とも毫も實物に違はざる様鮮明美麗に描寫したる石版圖書四十九枚挿入

●支那は我が製品の一大販賣地にして將來益々有望なりとす歐米各國競ふて之に着目し着々其の地歩を占めんと努めつゝあり此時に當りて我が實業家は宜しく常に先鞭を着け人後に落ちざるの氣概なかるべからず

●支那は僅に一葦帶水を隔て運輸の便よりするも勞銀の低廉なる點よりするも決して歐米品に驅逐せらるべきにあらず然るに事實は之に反し往々後へに瞠若たるは何んぞや蓋し彼れの嗜好慣習に通曉せざるもの亦た其一因たらん

●本書は獨り染織刺繍業者の好參考書たるのみならず漆器七寶彫刻家等にも亦た應用することを得べきものなり

前新潟縣高田師範學校長 阿多廣介
長野縣師範學校教諭 原田長松
兩先生共著（文部省檢定濟）

● 高等小學教師用 **理科教授書** 全四册 正價 各五十五錢 送料 一、二、各六錢 三、四、各八錢

● 生徒筆記代用 **理科摘要** 全四册 正價 各拾錢 送料 各貳錢

理科教授書は著者が多年教職に在りて親しく實驗せる結果に基き高等小學校理科の教授に資せん爲め編述せられたるものにして專ら實地の應用を旨とし簡易の材料によりて適切の教授方法を親切丁寧に說示して遺憾なく現今小學校理科教授用として最も適當の良書なるは世間既に定評あり全國各府縣に於て採用せられたる學校今や其半に垂んとせり之に伴ふて理科摘要は生徒用として共に採用せられ居るは外に說明を要せず

國光社編輯局編纂

● **理科掛圖** 全四卷 正價 一、二、各貳圓七拾錢 三、貳圓四拾錢 四、壹圓五拾錢 送料一組五拾錢

實科教授に圖畫の缺くべからざるは贅言を要せず本圖は理科教授書及理科摘要中の圖畫を一々擴大し之れに各々自然の色彩を施しあり教授上必須の要書なり

●少年武士道叢書

文學士 大町桂月先生著
●山中鹿之助
正價 金拾九錢
送料 金四錢

文學士 三好物外先生著
●上杉謙信
定價 金拾九錢
送料 金四錢

文學士 笹川臨風先生著
●本多平八
定價 金拾九錢
送料 金四錢

田岡嶺雲先生著
●小早川隆景
正價 金拾九錢
送料 金四錢

文學士 白河鯉洋先生著
●立花宗茂
定價 金拾九錢
送料 金四錢

法學士 太田斧濱先生著
●木村重成
定價 金拾九錢
送料 金四錢

文學士 中内蝶二先生著
●大石良雄
定價 金拾九錢
送料 金四錢

法學士 工藤景文先生著
●藤田東湖
定價 金拾九錢
送料 金四錢

敷島の大和心を人問はゞ朝日に匂ふ山櫻花。大和心は即ち大和魂にして又之れを武士道と稱す其源遠く神代に根ざし歴代發展して今日の精華を致す今や皇威宇内に光被し聖德六合に顯揚するもの素より陛下の御稜威に憑ると雖も抑も亦た臣民忠君愛國の至誠に藉るもの與りて力なしとせず其發展の最も顯著なるものは多く戰國時代に見るべしとす本叢書は諸先生各々犀利の筆、炬光の眼を以て其面目を紙上に躍如たらしめ讀み去り讀み來りて肉動き骨鳴るを覺ふ將來大國民たるの責任を負ふ少年に取りては啻に其趣味の津々たるのみならず他日の素養に益すること蓋し尠少に非ざるべし

井上頼圀先生校訂　小澤政胤先生著

慶長以來 國學家略傳

慶長以來明治昭代に至る三百年間に於ける有職故實家神道家語學者文人歌人等五百四十名の略傳と其著作に係る書目を載せ且つ引用書目を明示しあれば之れを國學家人名辭書と稱するも不可なく又た列傳體國學史とも稱するを得べき斯學者及び一般學生の爲め好參考書たりと云ふべし

全

正價　壹圓五拾錢
送料　拾　錢

故伯爵副島種臣君
故男爵尾崎忠治君　題辭

鹿川宮内默藏先生著

王學指掌

陽明王守仁は明朝の鴻儒にして其學說の吾人心身の修養に大益あるは既に天下の認むる處なり從來王學に志すもの專ら三宅執齋考定の傳習錄に據り講究するも奈何せん該書は雜錄體にして初學者の統緒を釋ぬるに便ならず本書は講究の材料を古傳習錄及び文錄等より採り系統的に編纂部門を道體學術の二類に分ち更らに各目を種別し之れが義解と評語とを施したれば一讀の下直ちに其要領と下手の方法を理會するを得べし且つ王氏の本傳を擧げ其の人と爲りと其事功を記して詳なり實に王學を修むる者の一大好書なり

全

正價　壹　圓
送料　拾　錢

細川十洲翁序　三輪田眞佐子刀自著
第廿五版 **女子の本分**　全　正價 貳拾五錢　送料 六錢

西村茂樹翁序　三輪田眞佐子刀自著
第十八版 **女子處世論**　全　正價 貳拾錢　送料 四錢

棚橋絢子女史著
女道叢話　全　正價 三拾錢　送料 六錢

故伯爵副島種臣先生題字　堀内新泉先生編
家庭の鑑　全　正價 拾八錢　送料 四錢

現今諸名家撰述　女鑑編輯局編纂
新編 **ひめかゞみ**　全　正價 貳拾五錢　送料 四錢

子爵福羽美靜君序　下田義天類先生校定　指原乙子先生編
女子文章軌範　全　正價 三拾錢　送料 四錢

伯爵東久世通禧君題字　杉谷正隆先生編
家庭教訓 **修身百首**　全　正價 貳拾錢　送料 四錢

伯爵東久世通禧君題字　湯本武比古先生序　高瀬眞卿先生講述
學校家庭 **修身一夕話**　全　上製（正價 六拾錢　送料 八錢）　並製（正價 三拾八錢　送料 六錢）

生田目經德先生編
標註 **雅文消息集**　全　正價 貳拾五錢　送料 四錢

前東京師範學校教諭 樋口勘次郎先生

教育者と 國家社會主義

全

正價八十錢

送料六錢

著者歐洲に留學する事數年或は碩學大儒に親炙して國家社會學の研鑽に努め或は各種の官設事業、公共團體に就きて國家社會組織の實況を考査し遂に斷定して曰く文明の因、開化の源主として玆に在り富國の本、强兵の基亦之に外ならずと歸朝後敎育當局者の參考に資し併せて國民の警醒を求めんとし此書を著作せり蓋し社會主義中尤も嶄新健全なる學說を根據とし社會の利益を目的とし國家の權力を方法として現社會の缺點改良の方策を示したるものなれば世の徒らに社會主義の名義に酔ひ好んで急激の議論を弄ぶもの及び社會主義の題目を嫌ひて其眞面目の如何に通曉せざる者共に本書を一讀せば思ひ半に過ぐるものあらん政治家、經世家、敎育家、實業家及び一般學生の必ず一讀すべき傑作なり

島田三郎先生序　小畠幾次郎先生著

腦力増進論

全　正價三拾五錢　送料六錢

沼南島田三郎先生本書の冒頭に序して曰く心身の二者を保養して人始めて其發育を完全にするを得べし、心性を措ひて偏へに身體を說き身體を外にして専ら心性を論ず二者各其半面を語るものにして全局を蓋ふの見解に非ずと、著者夙に玆に見るあり世の靑年學生の腦病に罹る者多きを慨し研究を積み推考を重ね汎く専門諸大家を歴訪し其所說を叩き大に悟る處あり遂に此書を作せり、賀古耳科院長、井上眼科院長、中濱回生院長、此木ドクトル、三浦大學敎授、岩佐吿成病院長、鈴木胃腸病院長等の卓說高論は著者の實驗及び古今に涉れる實地談と共に輕妙快活なる文章に由りて描寫され一讀の下頓に精神の壯快なるを覺ふ蓋し心身の二者を保養するに於て極めて必要なるのみならず一般學生の爲めに無上の淸凉劑たるべし

小畠幾次郎先生著

體力増進論

全　正價四拾錢　送料八錢

著者前に腦力増進論を著し世に裨益せしもの少なしとせず更に本書を公にし相俟て心身の完全なる發達に資せんとす由來體質の軟弱なるは我が國民の一大缺點殊に一般學生の通患なり希くは此書に據り研究鍛錬して軀幹長大體力剛健の人と爲り以て戰捷國の民たるに負かざれ

●中學校用教科書

日高秩父先生書
●中等習字帖　全三冊（文部省檢定濟）
正價　上、中、下各拾三錢　送料　貳錢

國光社編纂
●中等國語讀本　全十冊（同）
正價　各貳拾貳錢　送料　各六錢

内堀維文先生著　國光社編纂
●中等漢文讀本　全五冊（同）
正價　一、二、貳拾五錢　三、四、參拾錢　五、四拾錢　送料　各六錢

大林弘一郎先生著
●中等國文學史　全（同）
正價　六拾錢　送料　八錢

大宮兵馬先生著
●中等日本文典　全（同）
正價　五拾五錢　送料　八錢

小林萬吾先生編
●中等習畫帖　全八冊（同）
正價　一、二、各貳拾錢　五、六、各貳拾四錢　三、四、各貳拾貳錢　七、八、各參拾錢　送料　一册　貳錢

松本雅邦先生編
●中等科習畫帖　全八冊（同）
正價　一、二、各拾七錢　五、六、各拾九錢　三、四、各拾八錢　七、貳拾錢　八、貳拾貳錢　送料　一册　貳錢

松本敬之、高橋正熊兩先生共著
●法制教科書　全
●經濟教科書　全
（同）　正價　各六拾錢　送料　各六錢

宮森麻太郎先生著
●イージー、レッスンズ、イン、グランマー、アンド、コンポジション　全（同）
正價　五拾五錢　送料　六錢

同
●モーア、レッスンズ、イン、グランマー、アンド、コンポジシヨン　全二冊（同）
正價　一、五拾五錢　二、六拾錢　送料　各六錢

女鑑

明治四十年一月一日發行　毎月一回一日發行　第拾七年第壹號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可



東京築地株式會社國光社印刷